

外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡

1 9 8 7

平 和 農 産 工 業 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島東京湾岸の中央部に位置する市原市は、自然環境に恵まれ、県下でも有数の遺跡が残されており、特に古代においては上総国の中心地として国府、国分僧寺・尼寺がこの地に置かれました。このことはこの地域が古くから生活の場、歴史の舞台として人々に受け継がれ発展してきたことを物語っております。これらの文化財を保存・活用し後世に継承してゆくことは、我々市民に課せられた課題であり、切望するところであります。しかし一方では首都圏に位置し、東京のベッドタウン、あるいはゴルフ場に代表されるレジャーの場として、昭和30年代後半における京葉工業地帯の造成を契機として地域開発が急速に進み、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回ここに報告する「外迎山遺跡」「唐沢遺跡」「山見塚遺跡」の3遺跡は、姉崎カントリークラブゴルフ場増設工事に先立ち、関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施いたしました。その結果「外迎山遺跡」においては、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての墳墓、「唐沢遺跡」においては、縄文時代早期、炉穴群と縄文時代晩期の集落跡、「山見塚遺跡」においては、縄文時代後期の貝塚を伴う環状集落跡と古墳時代後期から奈良時代にかけての墳墓、というようにそれぞれの遺跡を特徴づける良好な資料を検出することができました。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆さまにも活用していただけるならば幸いです。

本書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただいた、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、平和農産株式会社の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月25日

財団法人 市原市文化財センター

理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市風戸字入口ノ沢1163番地他に所在する外迎山遺跡と、同市立野字唐沢295-1番地他に所在する唐沢遺跡、及び同市立野字山見塚301-1番地他に所在する山見塚遺跡の調査報告書である。

2. 調査はゴルフ場増設工事に伴い実施したものである。

3. 発掘調査・整理作業は以下のとおり行った。

発掘調査	外迎山遺跡	昭和60年4月29日～6月20日（確認調査） 昭和60年7月1日～11月30日（本調査）
	唐沢遺跡	昭和60年4月18日～8月31日（確認調査）
	山見塚遺跡	昭和60年4月18日～7月31日（確認調査）
整理作業	担当 山口直樹 木對和紀	
	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日 担当 木對和紀	

4. 本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。

5. 本書に使用した方位は、座標北である。

6. 外迎山遺跡における遺構平面図作成にあたっては、中央航業株式会社による航空写真測量（1/40）を採用した。

7. 発掘調査から整理作業の課程で、平和農産工業株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、の諸機関から御指導・御協力を賜った。

このほか石質鑑定には、東京都立上野高等学校教諭である柴田徹氏に、魚貝・獣骨類については早稲田大学講師である金子浩昌氏に、山見塚遺跡A地点検出縄文土器実測については、菅谷通保氏にそれぞれ御指導・御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

(財)市原市文化財センター組織表

昭和60年度（発掘調査）

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)
常務理事	内藤 隆(専任)
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)
理事	松崎良一(市企画部長)
理事	斎藤栄亮(市総務部長)
理事	中島英夫(市都市部長)
理事	松下 隆(市総務部財政課長)
監事	白鳥一夫(市会計課長)
監事	松本辰之助(教育委員会総務課長)

職員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事補	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	藤澤ひとみ
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所 真
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	事務員 (嘱託)	高浦貞子

昭和61年度（整理作業）

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長	横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)
常務理事	岩見一民(専任)
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)
理事	松崎良一(市企画部長)
理事	斎藤栄亮(市総務部長)
理事	地引希壺(市都市部長)
理事	松下 隆(市総務部財政課長)
監事	斎藤崇雄(教育委員会総務課長)
監事	白鳥一夫(市会計課長)

職員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事補	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
	調査課	課長
	主幹	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	主任調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所 真
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員 (嘱託)	高浦貞子
	事務員 (嘱託)	長谷川いづみ

本文目次

序 文

例 言

(財)市原市文化財センター組織表 (昭和60年度・昭和61年度)

第1章 序説	1	1 野馬堀状遺構	103
I 調査に至る経緯と経過	1	2 道路状遺構	107
II 遺跡の位置と歴史的環境	1	3 鎌倉街道	110
III 調査の方法	7	IV その他時期不明	113
第2章 外迎山遺跡	9	1 概要	113
概要	9	2 遺構と遺物	113
I 縄文時代	13	1 土壌	113
1 概要	13	3 遺構外出土遺物	121
2 遺構と遺物	14	第3章 唐沢遺跡	123
1 住居跡	14	1 概要	123
2 炉穴	14	2 遺構と遺物	125
3 土壌	18	3 包含層遺物	126
3 遺物包含層	22	第4章 山見塚遺跡	151
1 縄文土器	22	1 概要	151
2 石器	29	2 遺構と遺物 (A地点)	155
II 古墳時代終末～奈良・平安時代	34	貝ブロック	204
1 概要	34	(B地点)	216
2 遺構と遺物	34	第5章 まとめ	218
1 古墳	34		
2 改葬系区画墓	47		
3 火葬墓 (蔵骨器)	94		
4 土壌	101		
III 中～近世	103		
1 概要	103		
2 遺構と遺物	103		

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	2	第51図	外迎山遺跡27号遺構実測図2……………	76
第2図	外迎山・唐沢・山見塚遺跡周辺地形図……………	5	第52図	外迎山遺跡27号遺構出土遺物実測図……………	76
第3図	外迎山遺跡グリッド設定図……………	7	第53図	外迎山遺跡28号遺構実測図……………	77
第4図	外迎山遺跡グリッド配置図……………	10	第54図	外迎山遺跡29号遺構実測図1……………	79
第5図	外迎山遺跡遺構配置図……………	11	第55図	外迎山遺跡29号遺構実測図2……………	80
第6図	外迎山遺跡1号遺構実測図……………	15	第56図	外迎山遺跡29号遺構出土遺物実測図……………	80
第7図	外迎山遺跡2・3号遺構実測図……………	16	第57図	外迎山遺跡30号遺構実測図……………	81
第8図	外迎山遺跡1・2・3号遺構出土遺物実測図……………	17	第58図	外迎山遺跡31号遺構実測図……………	82
第9図	外迎山遺跡4号遺構実測図……………	19	第59図	外迎山遺跡32号遺構実測図……………	83
第10図	外迎山遺跡5・6号遺構実測図……………	20	第60図	外迎山遺跡33号遺構実測図……………	84
第11図	外迎山遺跡7・8・9号遺構実測図……………	21	第61図	外迎山遺跡34号遺構実測図……………	85
第12図	外迎山遺跡グリッド出土縄文式土器分布図……………	23	第62図	外迎山遺跡35号遺構実測図……………	86
第13図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図1……………	24	第63図	外迎山遺跡36号遺構実測図1……………	88
第14図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図2……………	25	第64図	外迎山遺跡36号遺構実測図2……………	89
第15図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図3……………	26	第65図	外迎山遺跡37号遺構実測図1……………	90
第16図	外迎山遺跡グリッド出土石器・礫分布図……………	28	第66図	外迎山遺跡37号遺構実測図2……………	91
第17図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図4……………	29	第67図	外迎山遺跡38号遺構実測図……………	92
第18図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図5……………	30	第68図	外迎山遺跡39号遺構実測図……………	93
第19図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図6……………	31	第69図	外迎山遺跡40号遺構実測図……………	95
第20図	外迎山遺跡包含層出土遺物実測図7……………	32	第70図	外迎山遺跡40号遺構出土遺物実測図……………	96
第21図	外迎山遺跡I 8—55グリッド付近礫分布図……………	33	第71図	外迎山遺跡41・42号遺構実測図……………	97
第22図	外迎山遺跡10号遺構実測図1……………	35・36	第72図	外迎山遺跡41・42・43号遺構出土遺物実測図……………	98
第23図	外迎山遺跡10号遺構実測図2……………	37・38	第73図	外迎山遺跡44・45号遺構実測図……………	100
第24図	外迎山遺跡11号遺構実測図1……………	41	第74図	外迎山遺跡44号遺構出土遺物実測図……………	101
第25図	外迎山遺跡11号遺構実測図2……………	42	第75図	外迎山遺跡46号遺構実測図1……………	104
第26図	外迎山遺跡11号遺構実測図3……………	44	第76図	外迎山遺跡46号遺構実測図2……………	105
第27図	外迎山遺跡11号遺構内第1・第2土壌実測図……………	46	第77図	外迎山遺跡46号遺構出土遺物実測図……………	106
第28図	外迎山遺跡12号遺構実測図1……………	48	第78図	外迎山遺跡47号遺構実測図……………	108
第29図	外迎山遺跡12号遺構実測図2……………	49	第79図	外迎山遺跡47号遺構出土遺物実測図……………	109
第30図	外迎山遺跡12号遺構実測図3……………	50	第80図	外迎山遺跡調査区西側Na1トレンチ実測図……………	110
第31図	外迎山遺跡13号遺構実測図1……………	52	第81図	外迎山遺跡周辺地番図及び鎌倉街道推定図……………	111
第32図	外迎山遺跡13号遺構実測図2……………	53	第82図	鎌倉街道及び古代道路と付近の遺跡……………	112
第33図	外迎山遺跡10・11・12・13号遺構 出土遺物実測図……………	55	第83図	外迎山遺跡48・49・50・51・52・53号遺構 実測図……………	117
第34図	外迎山遺跡14号遺構実測図1……………	57	第84図	外迎山遺跡54・55・56・57・58号遺構実測図……………	118
第35図	外迎山遺跡14号遺構実測図2……………	58	第85図	外迎山遺跡59・60・61・62号遺構実測図……………	119
第36図	外迎山遺跡15号遺構実測図……………	59	第86図	外迎山遺跡63・64・65・66号遺構実測図……………	120
第37図	外迎山遺跡16号遺構実測図……………	60	第87図	外迎山遺跡遺構外出土遺物実測図……………	122
第38図	外迎山遺跡17号遺構実測図……………	61	第88図	唐沢遺跡トレンチ配置図……………	124
第39図	外迎山遺跡18号遺構実測図……………	62	第89図	唐沢遺跡出土遺物実測図1……………	127
第40図	外迎山遺跡19号遺構実測図……………	63	第90図	唐沢遺跡出土遺物実測図2……………	128
第41図	外迎山遺跡20号遺構実測図……………	64	第91図	唐沢遺跡出土遺物実測図3……………	129
第42図	外迎山遺跡21号遺構実測図……………	65	第92図	唐沢遺跡出土遺物実測図4……………	130
第43図	外迎山遺跡22号遺構実測図……………	66	第93図	唐沢遺跡出土遺物実測図5……………	131
第44図	外迎山遺跡23号遺構実測図1……………	68	第94図	唐沢遺跡出土遺物実測図6……………	132
第45図	外迎山遺跡23号遺構実測図2……………	69	第95図	唐沢遺跡出土遺物実測図7……………	133
第46図	外迎山遺跡24号遺構実測図……………	70	第96図	唐沢遺跡出土遺物実測図8……………	134
第47図	外迎山遺跡25号遺構実測図……………	72	第97図	唐沢遺跡出土遺物実測図9……………	135
第48図	外迎山遺跡26号遺構実測図1……………	73	第98図	唐沢遺跡出土遺物実測図10……………	136
第49図	外迎山遺跡26号遺構実測図2……………	74	第99図	山見塚遺跡グリッド設定図……………	151
第50図	外迎山遺跡27号遺構実測図1……………	75	第100図	山見塚遺跡A地点全体図……………	152

第101図	山見塚遺跡B地点全体図	153	第122図	山見塚遺跡53トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	176
第102図	山見塚遺跡1トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	156	第123図	山見塚遺跡63トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	177
第103図	山見塚遺跡2トレンチ実測図 及び出土遺物実測図	157	第124図	山見塚遺跡66トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	178
第104図	山見塚遺跡2トレンチ出土遺物実測図	158	第125図	山見塚遺跡66トレンチ出土遺物実測図	179
第106図	山見塚遺跡2トレンチ出土遺物実測図	159	第126図	山見塚遺跡71トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	180
第106図	山見塚遺跡4トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	160	第127図	山見塚遺跡出土遺物実測図1	181
第107図	山見塚遺跡5トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	161	第128図	山見塚遺跡出土遺物実測図2	182
第108図	山見塚遺跡5トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	162	第129図	山見塚遺跡出土遺物実測図3	183
第109図	山見塚遺跡5トレンチ出土遺物実測図	163	第130図	山見塚遺跡出土遺物実測図4	184
第110図	山見塚遺跡5トレンチ出土遺物実測図	164	第131図	山見塚遺跡出土遺物実測図5	185
第111図	山見塚遺跡18トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	165	第132図	山見塚遺跡出土遺物実測図6	186
第112図	山見塚遺跡25トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	166	第133図	山見塚遺跡出土遺物実測図7	187
第113図	山見塚遺跡27トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	167	第134図	山見塚遺跡出土遺物実測図8	188
第114図	山見塚遺跡27トレンチ出土遺物実測図	168	第135図	山見塚遺跡出土遺物実測図9	189
第115図	山見塚遺跡28トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	169	第136図	山見塚遺跡出土遺物実測図10	190
第116図	山見塚遺跡29トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	170	第137図	山見塚遺跡出土遺物実測図11	191
第117図	山見塚遺跡31トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	171	第138図	山見塚遺跡出土遺物実測図12	192
第118図	山見塚遺跡39トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	172	第139図	山見塚遺跡出土遺物実測図13	193
第119図	山見塚遺跡49トレンチ出土遺物実測図	173	第140図	山見塚遺跡出土遺物実測図14	194
第120図	山見塚遺跡49トレンチ出土遺物実測図	174	第141図	山見塚遺跡出土遺物実測図15	195
第121図	山見塚遺跡52トレンチ実測図及び 出土遺物実測図	175	第142図	山見塚遺跡出土遺物実測図16	196
			第143図	山見塚遺跡出土遺物実測図17	197
			第144図	山見塚遺跡出土遺物実測図18	198
			第145図	山見塚遺跡出土遺物実測図19	199
			第146図	山見塚遺跡出土遺物実測図20	200
			第147図	山見塚遺跡出土遺物実測図21	201
			第148図	山見塚遺跡出土遺物実測図22	202
			第149図	山見塚遺跡A地点検出貝ブロック実測図	203
			第150図	山見塚遺跡B地点133トレンチ付近 出土遺物実測図	216
			第151図	山見塚遺跡B地点133トレンチ実測図	217

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	3	第16表	A地点検出海水・淡水貝割合表	206
第2表	外迎山遺跡検出遺構一覧表	12	第17表	A地点検出魚骨表	207
第3表	外迎山遺跡石材一覧表	33	第18表	A地点検出獣骨表	208
第4表	10・11・12・13号遺構出土遺物観察表	54	第19表	A地点検出貝種割合表	209
第5表	27号遺構出土遺物観察表	76	第20表	A地点検出貝類とその生息環境	211
第6表	29号遺構出土遺物観察表	80	第21表	山見塚遺跡出土遺物一覧表	212
第7表	40・41・42・43号遺構出土遺物観察表	99	第22表	B地点133トレンチ付近出土遺物観察表	216
第8表	44号遺構出土遺物観察表	101			
第9表	46号遺構出土遺物観察表	106			
第10表	47号遺構出土遺物観察表	109			
第11表	唐沢遺跡出土遺物一覧表	137			
第12表	山見塚遺跡A・B地点検出遺構一覧表	154			
第13表	山見塚A地点検出石器一覧表	195			
第14表	A地点検出貝ブロック分析表	204			
第15表	A地点検出正貝・破砕貝割合表	205			

図 版 目 次

図版 1 外迎山・唐沢・山見塚遺跡全景
図版 2 外迎山遺跡全景
図版 3 外迎山遺跡全景、1号遺構
図版 4 外迎山遺跡2～9号遺構
図版 5 外迎山遺跡10号遺構
図版 6 外迎山遺跡11号遺構
図版 7 外迎山遺跡12号遺構
図版 8 外迎山遺跡13号遺構
図版 9 外迎山遺跡14～16号遺構
図版10 外迎山遺跡17・18号遺構
図版11 外迎山遺跡19・20号遺構
図版12 外迎山遺跡21・22号遺構
図版13 外迎山遺跡23・24号遺構
図版14 外迎山遺跡25・26号遺構
図版15 外迎山遺跡26・27号遺構
図版16 外迎山遺跡27・28号遺構
図版17 外迎山遺跡29・30号遺構
図版18 外迎山遺跡31～33号遺構
図版19 外迎山遺跡34～36号遺構
図版20 外迎山遺跡37～39号遺構

図版21 外迎山遺跡40・41号遺構
図版22 外迎山遺跡42・44～46号遺構
図版23 外迎山遺跡47号遺構、No.1 トレンチ
図版24 外迎山遺跡出土遺物 1
図版25 外迎山遺跡出土遺物 2
図版26 唐沢遺跡近景 9・10・101・109号遺構
図版27 唐沢遺跡出土遺物 1
図版28 唐沢遺跡出土遺物 2
図版29 山見塚遺跡 A・B 地点近景
図版30 山見塚遺跡 A 地点 2・4・5・6・18 トレンチ
図版31 山見塚遺跡 6・16・19・53号遺構出土遺物 1
図版32 山見塚遺跡出土遺物 2
図版33 山見塚遺跡出土遺物 3
図版34 山見塚遺跡出土遺物 4
図版35 山見塚遺跡出土遺物 5
図版36 山見塚遺跡出土遺物 6
図版37 山見塚遺跡出土遺物 7
図版38 山見塚遺跡出土遺物 8
図版39 山見塚遺跡出土遺物 9
図版40 山見塚遺跡出土遺物10

第1章 序 説

I 調査に至る経緯と経過

姉崎カントリークラブ増設工事に伴い、平和農産株式会社取締役社長菅浦一は、事業地域内における「埋蔵文化財の存在の有無及びその取扱い」についての照会を市原市教育委員会教育指導部文化課に提出し、これを受けた千葉県教育庁文化課及び市原市教育委員会教育指導部文化課の三者によって協議が行われた結果、「外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡」の3遺跡について次の様な方針が決定された。

1. 外迎山遺跡 遺構確認調査の結果に基づき協議を行ない、本調査の範囲を決定し記録保存とする。

2. 唐沢遺跡 遺構確認調査の結果に基づき、盛土保存をする。

3. 山見塚遺跡 遺構確認調査の結果に基づき、盛土保存をする。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として行ない、下記の日程をもって終了した。

外迎山遺跡 昭和60年4月18日～6月20日（確認調査）

昭和60年7月1日～11月30日（本調査）

唐沢遺跡 昭和60年4月18日～8月31日（確認調査）

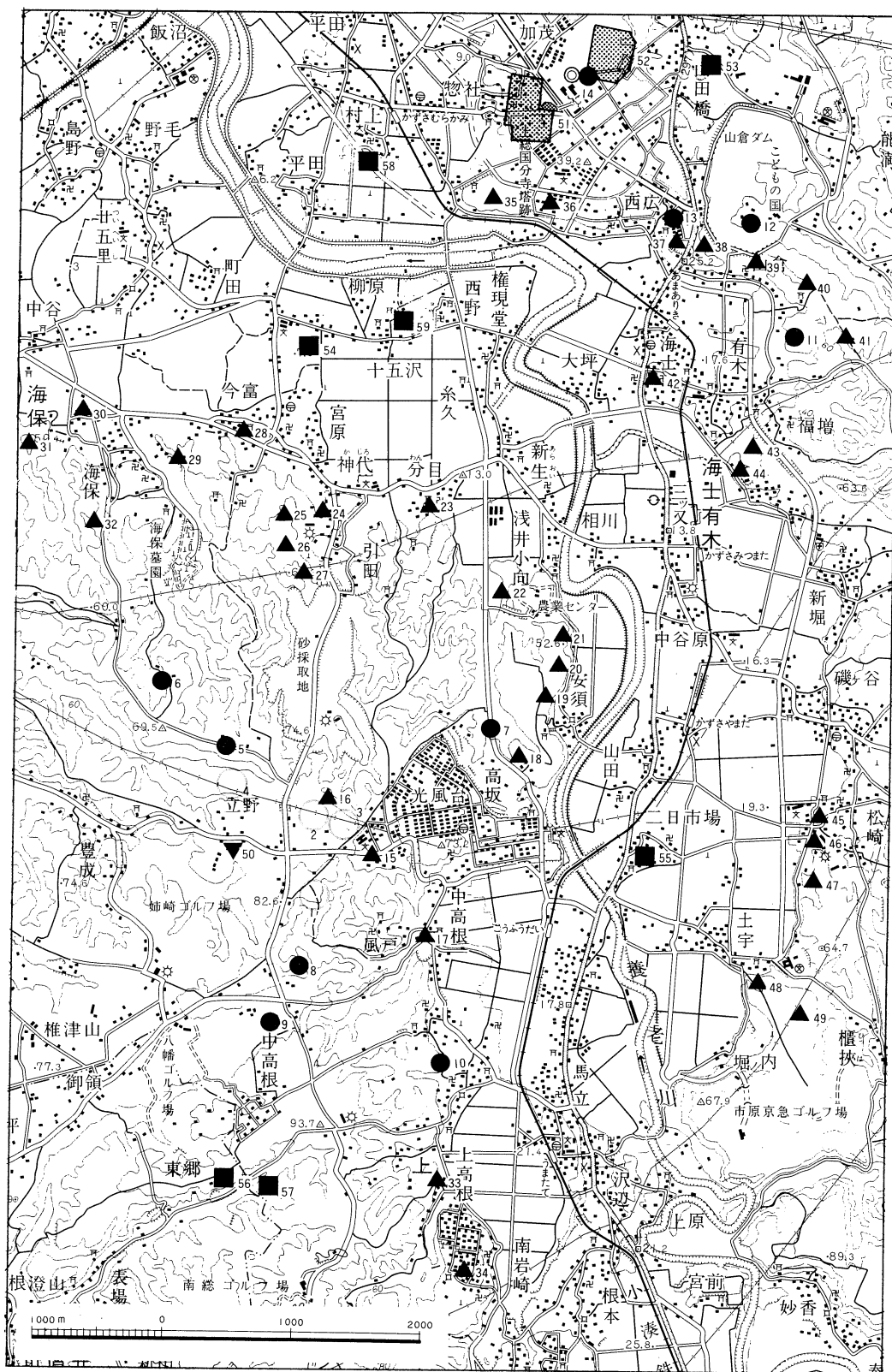
山見塚遺跡 昭和60年4月18日～7月31日（確認調査）

II 遺跡の位置と歴史的環境

市原市のほぼ中央を流れる養老川中流域左岸の台地上に、光風台団地が造成されたのは、近年のことであるが、この光風台団地の東約5～600mの台地平坦面に通称「立野交差点」が存在する。同交差点は、東西南北をほぼ4分割しており、おおむね北・西方面は椎津川流域に属し、姉崎方面に開ける支谷を形成しているのに対し、東・南方面は養老川中流域に灌ぐ小河川の形成する支谷によって構成されており、くしくも分水界のほぼ中央に位置している。

この分水界による区分によれば、外迎山遺跡は養老川水系に、唐沢・山見塚遺跡は椎津川水系に位置づけられることができ、また、外迎山遺跡は風戸、唐沢・山見塚遺跡は立野に存在し、前者は市制施行以前の戸田村、後者は姉崎町に存在し、行政区分におけるルーツは近代以降に求めることができる。

さて、この3遺跡が存在する養老川左岸地帯周辺には縄文時代草創期～中世に至る遺跡が点在しており、古くから人々がこの地に生活の基盤をすえていたことが窺われる。まず中高根に



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	遺跡所在地
1	外 迎 山 遺 跡	市原市風戸字入口ノ沢1163番地他
2	山 見 塚 遺 跡 A 地 点	市原市立野字山見塚301－1番地他
3	山 見 塚 遺 跡 B 地 点	市原市立野字山見塚301－8番地他
4	唐 沢 遺 跡	市原市立野字唐沢295－1番地他

No.	遺 跡 名	時期その他	文 献 等
5	大 道 遺 跡	縄文早期	(1)
6	諸 久 蔵 貝 塚	縄文中～後期	(2)
7	瓜 ケ 袋 貝 塚	縄文後期	(2)
8	堀 込 貝 塚	縄文中～後期	(2)
9	南 原 遺 跡	縄文草創期	(3)、(22)
10	上 高 根 貝 塚	縄文中～後期	(2)
11	山 倉 天 王 貝 塚	縄文中～晩期	(2)、(23)
12	山 倉 貝 塚	縄文中期	(2)
13	西 広 貝 塚	縄文中～晩期	(4)
14	祇 園 原 貝 塚	縄文中～晩期	(5)
15	中 高 根 古 墳 群	古墳時代（金比羅台古墳群）	(6)
16	山 見 塚 古 墳	古墳時代	(3)
17	白 幡 台 古 墳 群	古墳時代	(3)
18	高 坂 古 墳 群	古墳時代	(3)
19	安 須 墓 地 古 墳 群	古墳時代	(3)
20	鷹 巢 横 穴 群	古墳時代	(3)
21	安 須 古 墳 群	古墳時代	(3)
22	釜 神 台 古 墳	古墳時代	(3)
23	分 目 古 墳 群	古墳時代	(3)
24	神 代 古 墳 群	古墳時代	(3)
25	浅 間 山 古 墳 群	古墳時代	(3)
26	東 野 古 墳 群	古墳時代	(3)
27	寺 山 古 墳 群	古墳時代	(3)
28	塚 山 古 墳	古墳時代（前方後円墳一部破損）	(7)
29	弥 兵 衛 塚 古 墳	古墳時代	(3)
30	公 家 塚 古 墳	古墳時代	(3)
31	大 塚 山 古 墳 群	古墳時代（海保大塚）	(3)
32	海 保 古 墳 群	古墳時代	(3)
33	報 恩 寺 台 古 墳 群	古墳時代	(7)
34	南 岩 崎 古 墳 群	古墳時代	(7)
35	諏 訪 台 古 墳 群	古墳時代	(8)
36	東 間 部 田 古 墳 群	古墳時代	(9)
37	山 倉 古 墳 群	古墳時代	(10)
38	八 郎 塚 遺 跡	古墳時代	(3)
39	棒 坂 古 墳 群	古墳時代	(3)

40	堂 谷 古 墳 群	古墳時代	(3)
41	福 増 遺 跡	古墳時代	(11)
42	海 士 古 墳 群	古墳時代	(3)
43	有 木 古 墳 群	古墳時代	(3)
44	学 校 塚 古 墳	古墳時代	(3)
45	折 戸 古 墳	古墳時代	(3)
46	的 場 古 墳	古墳時代	(3)
47	新 道 古 墳 群	古墳時代	(3)
48	大 崎 台 古 墳 群	古墳時代	(3)
49	大 崎 台 横 穴 群	古墳時代	(3)
50	金 出 台 遺 跡	歴史時代（火葬墓）	(12)
51	上 総 国 分 寺	歴史時代（奈良・平安）寺院跡	(13)
52	上 総 国 分 尼 寺	歴史時代（奈良・平安）寺院跡	(14)
53	山 田 橋 表 通 遺 跡	歴史時代（平安）道路遺構	(15)他弥生時代住居址等
54	今 富 廃 寺	歴史時代（白鳳・奈良）寺院跡	(16)
55	二 日 市 場 廃 寺	歴史時代（白鳳・奈良）寺院跡	(17)
56	川 原 井 廃 寺	歴史時代（奈良・平安）寺院跡	(18)
57	萩 の 原 廃 寺	歴史時代（平安）寺院跡	(19)
58	上 総 国 府 推 定 他	歴史時代（他に推定地あり）	(20)
59	海 上 郡 衙 推 定 地	歴史時代（奈良・平安）	(21)

- (1) 昭和61年度市原市文化財センター調査
- (2) 「千葉県の貝塚」1983
- (3) 「千葉県埋蔵文化財分布図」1978 千葉県広報協会
- (4) 「西広貝塚」1977他
- (5) 「上総国分寺台発掘調査概要」1978他
- (6) 田中新史「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」『伊知波良』2 1979
- (7) 「上総山王山古墳」1980
- (8) 「諏訪台古墳群調査概要」1975他
- (9) 「東間部田古墳群」1974
- (10) 米田耕之助「上総山倉一号墳の人物埴輪」『古代』59・60併号 1976
- (11) 「池ノ谷・福増遺跡」1985
- (12) 平野元三郎「上総姉ヶ崎町の火葬蔵骨器」『古代』29-30、1958
- (13) 「上総国分寺」1973他
- (14) 「上総国分寺台発掘調査概報」1981他
- (15) 昭和60年度市原市文化財センター調査
- (16) 「今富地区遺跡発掘調査報告書」1982
- (17) 「市原市二日市場廃寺跡確認調査報告」1984
- (18) 昭和59年度君津郡市文化財センター調査
- (19) 「萩の原遺跡」1977
- (20) 須田勉「上総国府の諸問題」『古代』61号、1976
- (21) 小熊吉蔵「西上総における古街道と国府郡家所在地との関係」『千葉県史蹟名勝天然記念物7-4』1933
- (22) 「市原市南原遺跡調査抄報」『伊知波良』1・4、1979、1980
- (23) 米田耕之助「養老川流域の縄文時代遺跡(2)」『伊知波良』2、1979

存在する南原遺跡^(註1)においては縄文時代草創期の細隆起線文土器を検出し、現在のところ市域における最古の遺物が検出されている。縄文時代早期には、唐沢遺跡・大道遺跡^(註2)などにおいて炉穴群が検出されているほか、外迎山遺跡においては、条痕文系の土器を伴う住居跡も検出されている。前期は、外迎山、唐沢、山見塚遺跡において関山～黒浜式土器に比定される遺物が検出されている。中期以降になると諸久蔵、瓜ヶ袋、堀込、上高根貝塚^(註3)などに代表される貝塚が形成されはじめている。晩期は、唐沢遺跡において多量の土器片が検出されているが、確認調査の為全貌は不明である。この他、山見塚遺跡においても若干の該当期遺物が検出されている。弥生時代における集落跡等の遺構は、現在のところの当周辺地域においては検出されていないが、養老川右岸地帯に属する山田大宮遺跡^(註4)においては、当期に比定される方形周溝墓群が検出されていることから、当期の遺構が皆無なのではなく、ひとえに当周辺地域における発掘調査例の稀有に起因するものと思われる。

古墳時代における遺構の調査例も少ない。現在のところ当周辺地域における集落跡等の調査例は、片又木遺跡^(註5)のみであり、全貌は不明瞭であるが、肉眼で観察することができる古墳の分布は顕著なものがある。^(註6)これらの古墳群は姉崎古墳群^(註7)の支群と目されており、養老川を眼下に望む台地の先端部に濃密に分布していることから、周辺にはこれら古墳群の造成に関する集落跡の存在が予想されるものである。

奈良・平安時代は、今富廃寺^(註8)、二日市場廃寺^(註9)、川原井廃寺^(註10)、萩の原廃寺^(註11)、などの古代寺院跡や、海上郡衙推定地^(註12)などの、寺院、官衙関連の遺跡の所在が顕著である。また風戸に存在する日光寺には、平安時代末期に製作されたと考えられる一木造の聖観音像が現存している。像高は3.36mで県内最大の木像であり、これだけの大きさの像を安置した堂は、相当の規模であったであろうと推定されている^(註13)。また、外迎山遺跡、山見塚遺跡においては、奈良、平安時代の墳墓であると考えられている方形周溝状遺構（改葬系区画墓）や火葬墓が検出され、古くから著名である金出台遺跡周辺出土の火葬蔵骨器^(註14)とあわせ、立野周辺一帯に当期の墳墓群の存在が顕著であることも見のがせない。

中世以降は外迎山遺跡近辺に残る字名「鎌倉街道」^(註15)「大街道」、大道遺跡近辺に残る字名「大道」及び道標、またその道標に刻された「たかくら道」等の道路関連の字名が数多く残されており、古くから交通の要所に位置していたことが窺われる。また、外迎山遺跡付近に存在する鶴峯八幡宮に伝承される神楽は、鎌倉の鶴岡八幡宮から伝承したといい^(註16)、一名「鎌倉ばやし」とも呼ばれていることや、立野在住の旧家切替家には、源頼朝が宿泊したという伝説^(註17)があり、この地域における中世「鎌倉」との関連の深さを物語っている。

詳細については発掘調査例に乏しい為、不明瞭な点も多いが、今後この地域の調査が増し、新たな資料が得られることにより、その全貌がより明瞭にされることであろう。

- 註1 大塚達郎他「市原市南遺跡調査抄報」『伊知波良』1・4 1979 1980
 註2 昭和61年度市原市文化財センター調査
 註3 「千葉県の貝塚」千葉県文化財保護協会 1983、「市原のあゆみ」市原市教育委員会 1974
 註4 昭和60年度市原市文化財センター調査
 註5 寺島 博「片又木遺跡」1984
 註6 中村恵次「房総古墳論攻」1978
 註7 滝口 広「上総山王山古墳」1980
 註8 福岡元他「今富地区遺跡発掘調査報告書」1982
 註9 郷堀英司他「市原市二日市場廃寺跡確認調査報告」1984
 註10 昭和59年度君津郡文化財センター調査
 註11 寺門義範「萩の原遺跡」1977
 註12 小熊吉蔵「西上総における古街道と国府郡家所在地との関係」『千葉県史蹟名勝天然記念物7-4』1933
 註13 「市原の指定文化財」市原市教育委員会 1980 同書によれば日光寺の本堂は七間四面の大伽藍であったという
 註14 平野元三郎「上総姉ヶ崎町の火葬蔵骨器」『古代』29-30、1958
 註15 12に同じ
 註16 「市原の指定文化財」市原市教育委員会 1980
 註17 「市原のあゆみ」市原市教育委員会 1974

同書によれば、1180年石橋山の合戦に敗れた頼朝は海路安房国へ逃れ、下総国に北上する途中、上総国立野在中の豪族立野長右衛門宅に数日間滞在した。また長右衛門宅の裏山に洲崎明神の分霊を祀り、安房州神社と号し、剣を奉納して戦勝を祈願した。頼朝は長右衛門宅を発つとき、同家の竹林から竹を切らせて旗ざおの取替を命じたことにより、後年長右衛門に切替の姓を与えたという。なお切替家の裏山に山見塚という古墳があるが、(径30m、高さ5m前後)頼朝はこの塚の上に立ち、上総国府あたりを展望し戦況を伺ったという。また切替家の安房州明神の御神宝は、頼朝から拝領したと伝えられる平安時代の剣であり、なお同家には頼朝が滞在中使用したと伝える茶釜もあるという。

III 調査の方法

外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡における調査区域には公共座標を使用し、20×20mの大グリッドを設定した。大グリッドの下に、さらに2×2mの小グリッドを設定し、これに対し00～99までのNoを与えた。

小グリッドを基準とし、2×4mの遺構確認用グリッドを設定し、外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡の遺構確認調査を行った。

遺構確認用グリッドは状況によって拡張し、3遺跡の調査対象区域のそれぞれ10%（外迎山遺跡は26,300m²のうち2,630m²、唐沢遺跡は42,350m²のうち4,235m²、山見塚遺跡は18,250m²のうち1,825m²）について遺構確認調査を実施した。

ただし唐沢遺跡においては、すでに市文化課による南

	00	1	2	3	4	5	6	7	8	9
10										
20										
30										
40										
50										
60										
70										
80										
90										99

第3図 外迎山遺跡グリッド設定図

北方向へ延びる合計61本の試掘調査トレンチ跡が開口しており、このトレンチの精査面積も確認調査対象面積とした。

また山見塚遺跡においては、遺跡現況状態から、一部の範囲に任意グリッドを設定して調査を進めた。

表土の除去には古墳周辺部を除きバックホウを使用した。ただし山見塚遺跡A地点においては、バックホウの一削りによって極めて多量の遺物が露出してしまったため、バックホウの使用を断念した。

遺構外の遺物の取り上げについては、前述の小グリッド単位を基準としたが、山見塚遺跡においては極めて多量の遺物によって遺構プランがまったくつかめなかったため全点ドッドによる取り上げを基準とした。ただし調査期間との関係から一部断念せざるを得ないグリッドもあった。

遺構確認面は3遺跡とも明瞭に検出される新期テフラ層上面とし、この面での遺構検出のなかったグリッドに対しては、さらにソフトローム層上面まで掘り下げた。

確認調査の結果、外迎山遺跡のみ本調査を実施することになった。対象面積は15,400㎡である。なお外迎山遺跡遺構平面図は、中央航業株式会社による航空写真測量図1/40である。

第2章 外迎山遺跡

概 要

外迎山遺跡は養老川中流域左岸に灌ぐ小河川の形成する支谷と、東京湾に灌ぐ椎津川支流によって形成される支谷との分水界をなす標高81m前後の台地上に位置している。調査はゴルフ場増設工事に先立つものであり、2×4mグリットを基本とする遺構確認調査の結果に基づき、15,400㎡が本調査の対象地域となった。

本調査の結果、下記の遺構が検出された。

縄文時代 住居跡 1、炉穴 3、土壇 6

古墳時代終末～平安時代、方墳 2、改葬系区画墓28、火葬墓（蔵骨器） 4、土壇 2

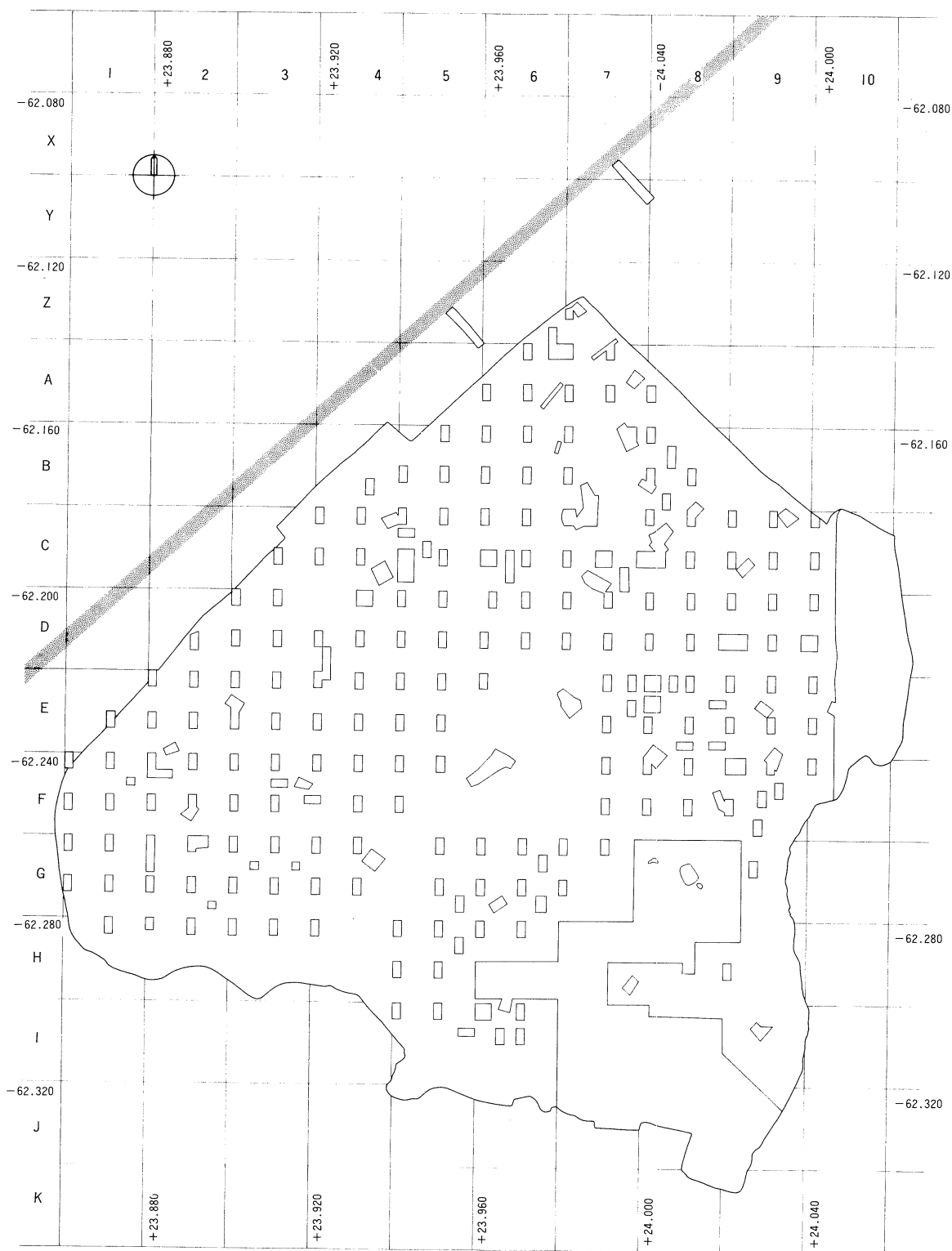
中～近世 野馬堀状遺構 1、道路状遺構 3

時期不明 土壇19

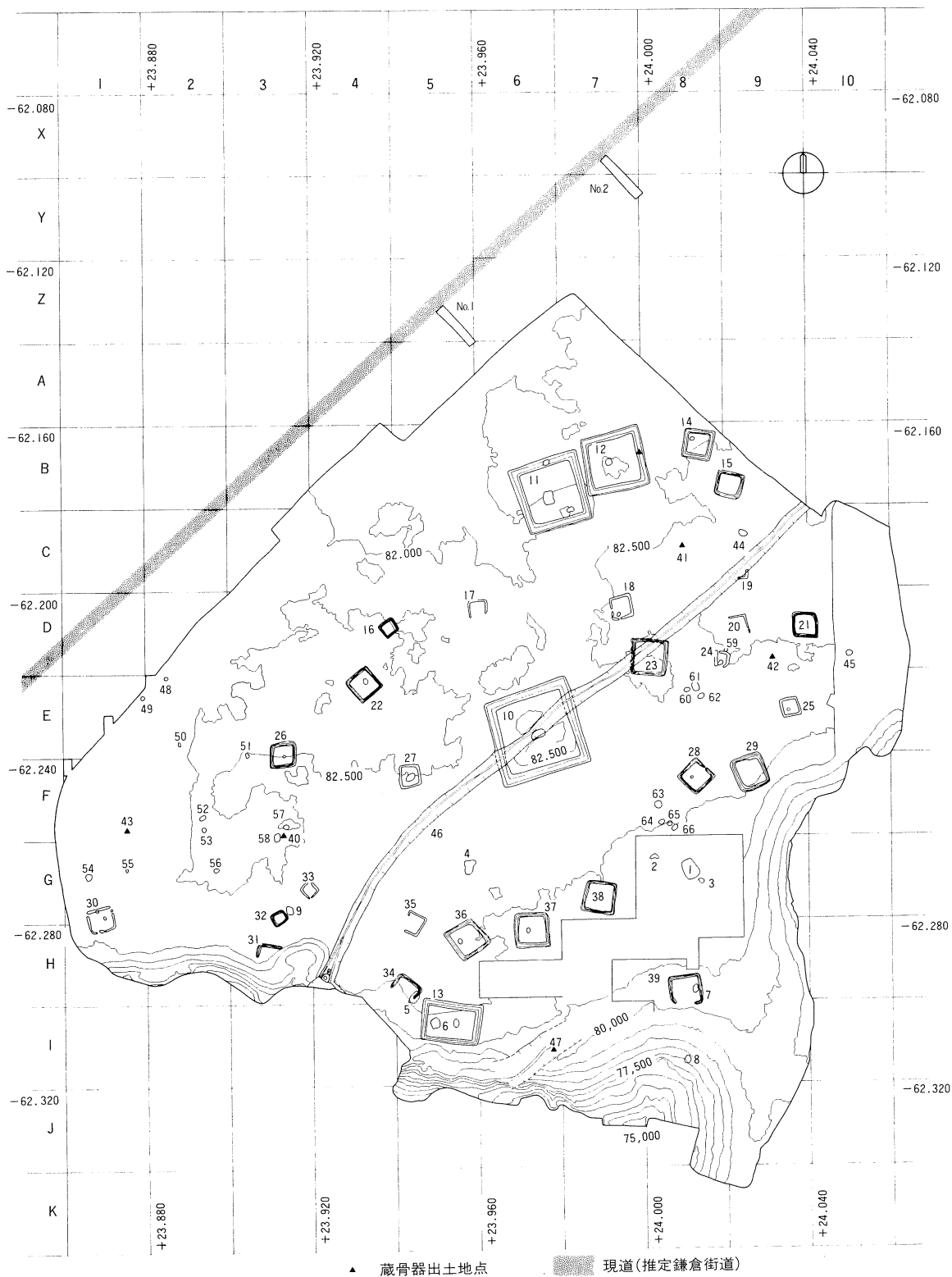
縄文時代の遺物は、早期～後期に比定される土器片が遺跡南側の緩斜面に点在していたが、早期に位置づけられる遺構として住居跡、炉穴が検出された以外は、明瞭な時期決定が困難な土壇 6 基が検出されたのみである。

古墳時代終末～平安時代にかけての遺物は、該当期の遺構数に対して少なく、若干の土師器・須恵器を検出したにすぎない。また検出された遺構のすべてがいわゆる「墳墓」と考えられるものであり、住居跡等の遺構は検出されなかった。

中～近世にかけての遺物は、1707年の噴出と考えられる宝永火山灰が、遺跡のほぼ中央を走る野馬堀状遺構の覆土の最上層付近に、厚い所で10cm前後の堆積が検出されている。また遺跡西側を走る現道が土塁状の高まりを伴うものであり、既知の「鎌倉街道」と考えられる重要候補地であった為、土塁状の高まりに対して 2 本のトレンチを設定して調査を行ったが、中世まで遡る確証は得られなかった。しかしながら、付近の字名に「大街道」「鎌倉街道」という地名が今日まで残されており、現道直下あるいはさらに西側に「鎌倉街道」が存在する可能性が極めて高い。



第4図 外迎山遺跡グリッド配置図 1:1500



第5図 外迎山遺跡遺構配置図 1:1500

第2表 外迎山遺跡検出遺構一覧表

遺構番号	時 期	性 格	調査時遺構番号	備 考
1	縄文時代早期	住居跡	30	
2	縄文時代早期	炉穴	66、67	
3	縄文時代早期	炉穴	68	
4	縄文時代	土壇	52	
5	縄文時代	土壇	73	34号の下層より検出
6	縄文時代	土壇	7	13号確認面の下層
7	縄文時代	土壇	69	39号の下層より検出
8	縄文時代	土壇	70	
9	縄文時代	土壇	72	
10	古墳時代終末	古墳	27	主体部木棺直葬
11	古墳時代終末	古墳	31	主体部木棺直葬
12	奈良・平安	改葬系区画墓	32	主体部火葬の可能性あり
13	奈良・平安	改葬系区画墓	22	主体部火葬址か？
14	奈良・平安	改葬系区画墓	5	主体部周溝内土壇
15	奈良・平安	改葬系区画墓	4	
16	奈良・平安	改葬系区画墓	24	
17	奈良・平安	改葬系区画墓	9	
18	奈良・平安	改葬系区画墓	13	主体部と推察される土壇を伴う
19	奈良・平安	改葬系区画墓	33	
20	奈良・平安	改葬系区画墓	12	
21	奈良・平安	改葬系区画墓	6	
22	奈良・平安	改葬系区画墓	23	主体部と推察される土壇を伴う
23	奈良・平安	改葬系区画墓	34	
24	奈良・平安	改葬系区画墓	58	主体部と推察される土壇を伴う
25	奈良・平安	改葬系区画墓	49	
26	奈良・平安	改葬系区画墓	17	主体部と推察される土壇を伴う
27	奈良・平安	改葬系区画墓	19	主体部より須恵器広口壺出土
28	奈良・平安	改葬系区画墓	10	主体部と推察される土壇を伴う
29	奈良・平安	改葬系区画墓	35	須恵器長頸壺出土
30	奈良・平安	改葬系区画墓	18	主体部に粘土を使用
31	奈良・平安	改葬系区画墓	15	
32	奈良・平安	改葬系区画墓	14	
33	奈良・平安	改葬系区画墓	25	
34	奈良・平安	改葬系区画墓	21	下層に5号土壇
35	奈良・平安	改葬系区画墓	20	
36	奈良・平安	改葬系区画墓	16	主体部と推察される土壇を伴う
37	奈良・平安	改葬系区画墓	11	主体部と推察される土壇を伴う
38	奈良・平安	改葬系区画墓	51	
39	奈良・平安	改葬系区画墓	50	下層に7号土壇
40	奈良・平安	火葬墓	38	蔵骨器
41	奈良・平安	火葬墓	28	蔵骨器
42	奈良・平安	火葬墓	29	蔵骨器
43	奈良・平安	火葬墓	2	蔵骨器
44	奈良・平安	土壇	8	
45	奈良・平安	土壇	3	
46	中～近世	野馬堀状遺構	1	宝永火山灰検出
47	中～近世	道路状遺構	26	宝永火山灰検出
48	時期不明	土壇	40	
49	時期不明	土壇	41	
50	時期不明	土壇	42	
51	時期不明	土壇	39	
52	時期不明	土壇	43	
53	時期不明	土壇	44	
54	時期不明	土壇	47	
55	時期不明	土壇	46	
56	時期不明	土壇	45	
57	時期不明	土壇	36	
58	時期不明	土壇	37	
59	時期不明	土壇	60	
60	時期不明	土壇	56	
61	時期不明	土壇	57	
62	時期不明	土壇	55	
63	時期不明	土壇	64	
64	時期不明	土壇	61	
65	時期不明	土壇	62	
66	時期不明	土壇	63	

I 縄 文 時 代

1 概 要

縄文時代の遺構は住居跡 1、炉穴 2、土壇 6 が検出された。このうち早期に属すると思われる遺構は、住居跡 1 軒と炉穴 2 基である。遺構の所在するグリッドは G-8 であり分布も集中しているといえよう。土壇は合計 6 基検出された。遺構の所在するグリッドはそれぞれ、G-3・5、H-5・8、I-5・8 であり、遺跡南側の緩斜面に多く分布している。これらの多くは基本土層 IIb 層、あるいは IIc 層中より検出されているが、概して遺物に乏しく、いずれも少破片であり、遺構の属する時期はかならずしも明瞭ではない。

調査によって出土した資料は、整理作業の過程で、時期別分類、総量把握に努めた結果、408 点の土器片と、351 点の礫・石器を確認した。出土土器の約 80% は早期条痕文系土器、茅山上層期の資料である。その他早期前葉～後期に至る各時期の資料も出土しているが、いずれも僅少である。

それぞれの内訳は以下の通りである。

縄文土器	第 I 群	早期前葉の撚糸文系土器	35 点
	第 II 群	早期中葉の沈線文系土器	6 点
	第 III 群	早期後葉の条痕文系土器	308 点
	第 IV 群	前期前葉の繊維土器	3 点
	第 V 群	中期中葉の阿玉台式土器	3 点
	第 VI 群	中期後葉の加曽利 E 式土器	21 点
	第 VII 群	後期前葉の堀之内式土器	9 点
	第 VIII 群	後期中葉の加曽利 B 式土器	5 点
	第 IX 群	時期不詳の土器	18 点

石器	有舌尖頭器	1 点	木葉形尖頭器	1 点	磨 石	4 点
	石 鏃	7 点	石 斧	1 点	石 皿	3 点
	敲 き 石	1 点	敲 き 台	1 点	剝 片	32 点

礫	自 然 礫	220 点	焼 礫	80 点
---	-------	-------	-----	------

2 遺構と遺物

1 住居跡

1号遺構 (第6・8図、図版3)

位置 G-8グリッドほぼ中央に位置する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は台形状を呈する。長軸5.2m、短軸3.2m、長軸方位はN-27°-Wを示し、土層断面による深さは20cm前後を測る。pitは遺構内に7ヶ所、遺構外に2ヶ所を検出しており、それぞれ深さ20cm～30cmを測る。床面の中央よりやや北側に地床炉を設けるが、あまり焼けていない。また北コーナー付近に炭化物が薄く堆積していた。床面は炉の付近がやや硬く締るが、他は軟弱である。平面図破線は、土層断面によって復元した上端推定ラインである。覆土は自然堆積の状況を呈し、上面にII b層が覆っている。

遺物 総数21点の遺物が検出され、すべてが床直上からの出土である。第III群土器片は12点、石皿1点、礫8点を検出し、南側コーナー付近に礫の集中が認められた。第8図1～4は表裏とも貝殻条痕が施され、色調は赤褐色を呈し、胎土には繊維を含んでいる。焼成はやや不良で全体的にもろい。第8図13は石皿と考えられるが、石材に房総産の砂岩を使用しており非常にもろい。

2 炉 穴

2号遺構 (第7・8図、図版4)

位置 G-8グリッド北西側に位置する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。

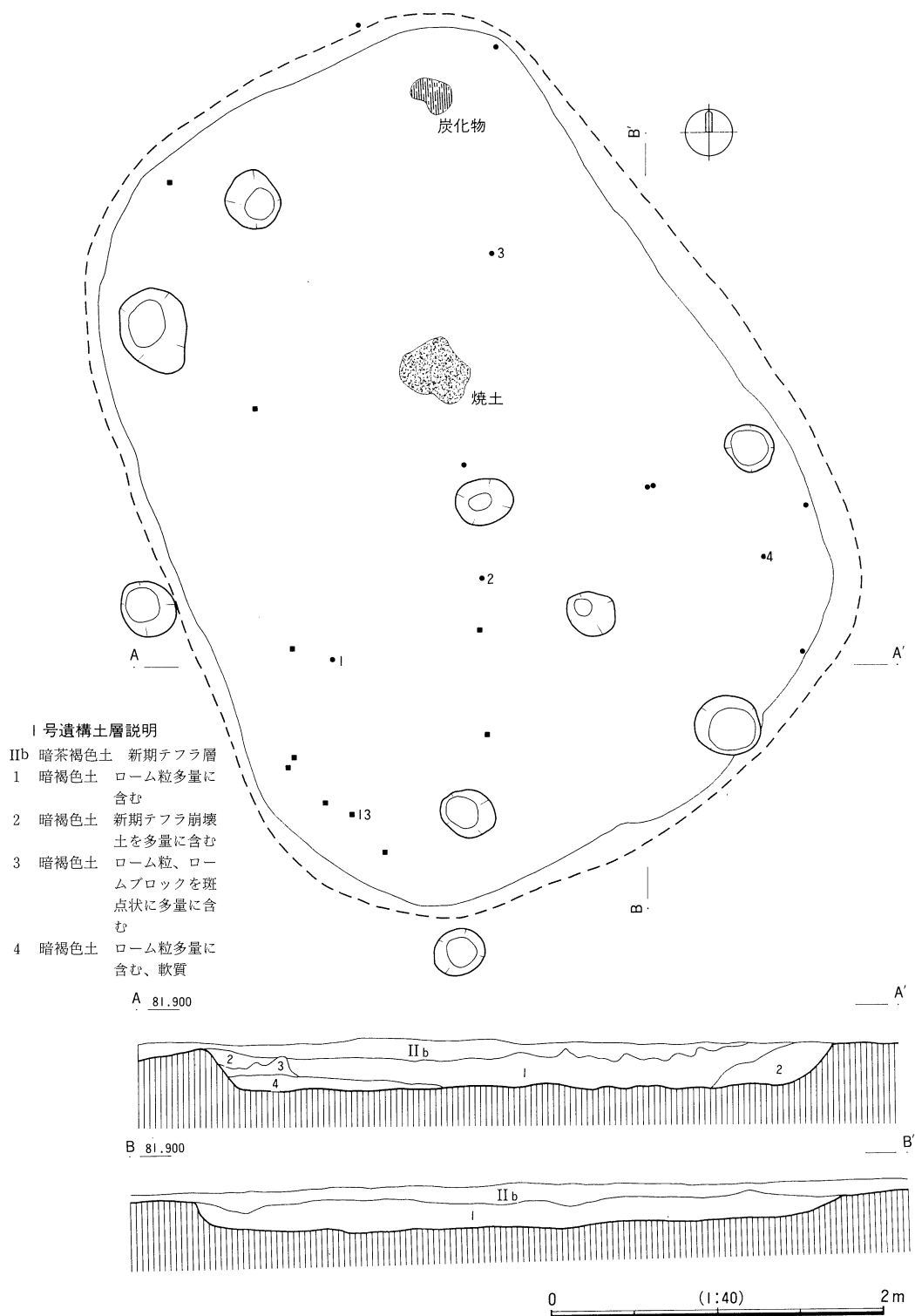
遺構 平面形は「く」の字形を呈する。残存した火床から3基程度の炉穴が切り合っているものと考えられる。北側の炉穴は長楕円形で長径2.08m、短径52cm、深さ24cm程度、南側の炉穴は長径2.1m、短径0.6m、深さ20cm程度の規模をもっていたのであろう。床面は比較的平坦で、壁は全体的になだらかに立ちあがる。

遺物 覆土中より2点の土器片が検出された。いずれも第III群の土器である。第8図5・6は表裏とも貝殻条痕が施され、色調は赤褐色を呈し、胎土には繊維を含んでいる。焼成は比較的良好である。

3号遺構 (第7・8図、図版4)

位置 G-8グリッド中央よりやや東側、1号遺構の東側3mに位置する。立地は台地の平坦面である。

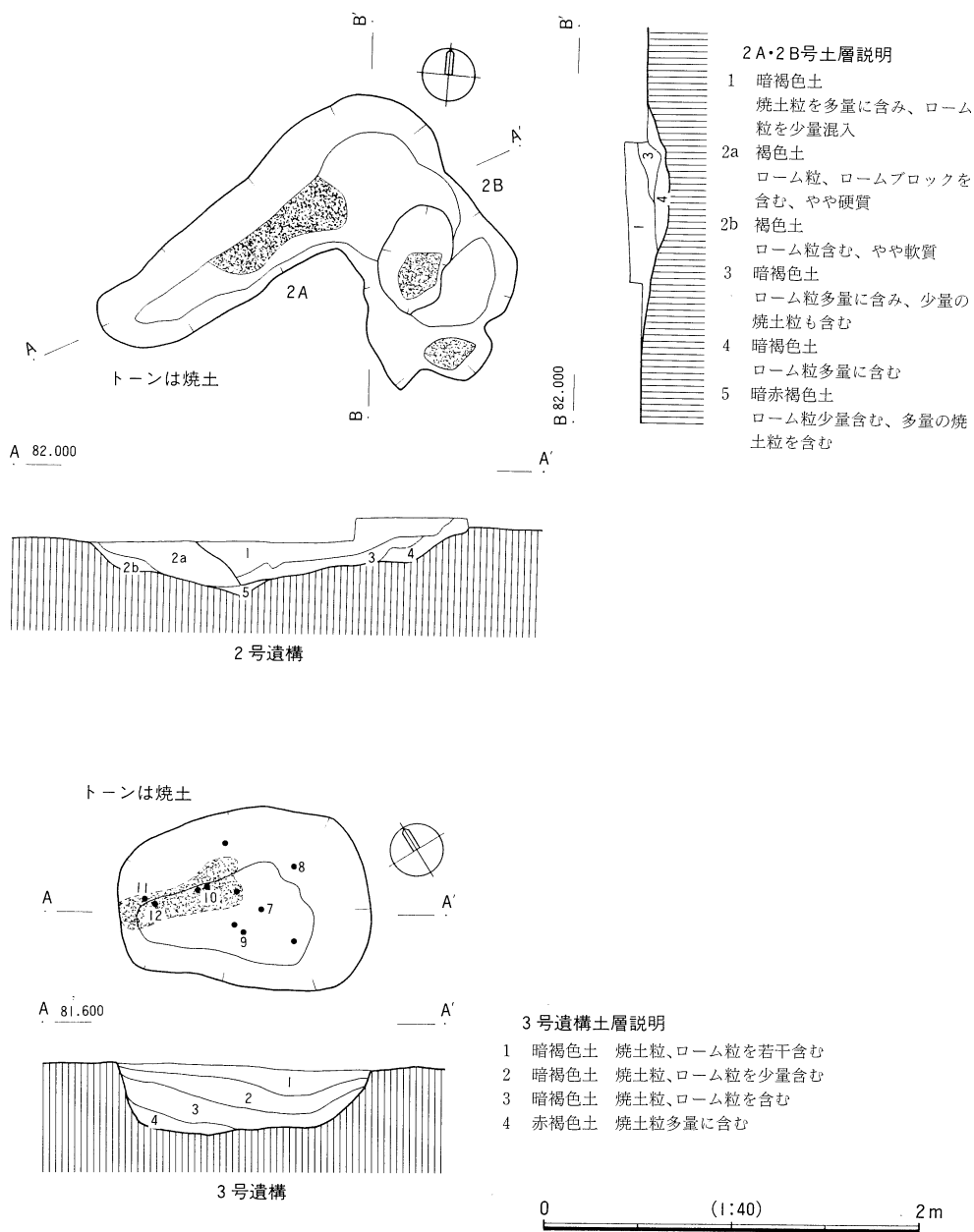
遺構 平面形は楕円形を呈する。規模は長径1.36m、短径0.96m、深さは36cmを測る。床面



I号遺構土層説明

- IIb 暗茶褐色土 新期テフラ層
- 1 暗褐色土 ローム粒多量に含む
- 2 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含む
- 3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを斑点状に多量に含む
- 4 暗褐色土 ローム粒多量に含む、軟質

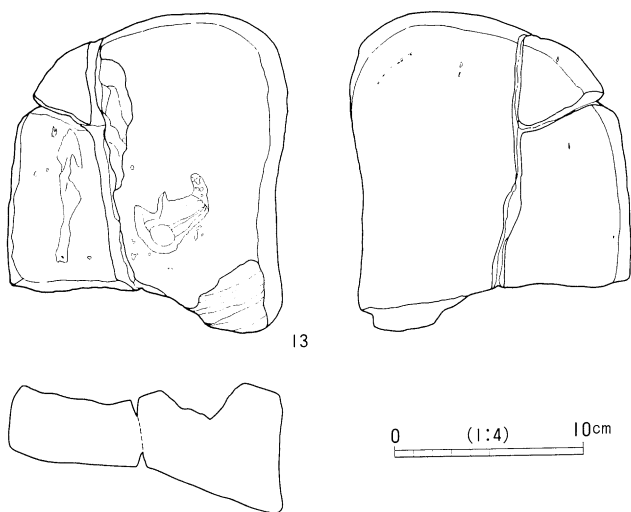
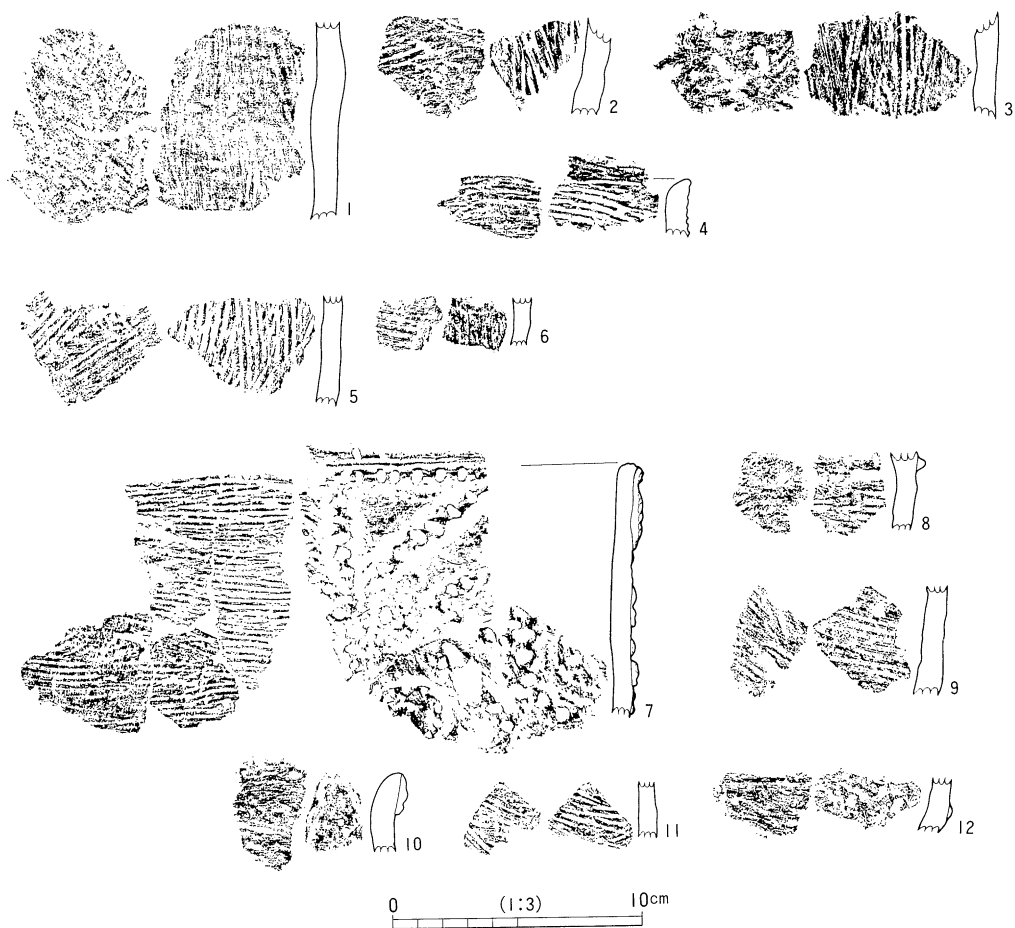
第6図 I号遺構実測図



第7図 2・3号遺構実測図

は比較的平坦で、壁はやや急激に立ちあがり、覆土は自然堆積の状況を呈する。

遺物 11点の土器片が検出された。いずれも第3群の土器である。第8図7は、外面に太い隆帯が縦斜方向に走り、隆帯の上には刻み目がみられる。貝殻条痕は内面のみに施されている。色調は外面茶褐色、内面暗褐色を呈し、胎土には繊維を含み、焼成も良好である。8、10は、



外面にも貝殻条痕が施されているが、7と同一個体と思われる様な近似ぶりである。9・11・12は、内外面とも貝殻条痕が施され、色調は赤褐色を呈し、胎土には繊維を含んでいる。焼成は比較的良好である。

第8図 1・2・3号遺構出土遺物実測図

3 土 壇

4号遺構 (第9図、図版4)

位置 G-5グリッドほぼ中央に位置する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。

遺構 検出面は2b層上面である。確認面でとらえられた遺構の平面形は3方に突出する不整形である。規模はA~A'、B~B'でそれぞれ2.6m、3.8mを測り、深さは最大86cmを測る。土層断面により、本遺構は4基以上の複合遺構と考えられ、2~4層でとらえられる遺構が最も新しく、次いで1層によってとらえられる遺構、14~21層でとらえられる遺構と続き、7~13層でとらえられる遺構が最古である。それぞれの遺構の複合関係以前の平面形態は不明である。

遺物 覆土中より2点の自然礫が検出されているが、図示に致らなかった。

5号遺構 (第10図)

位置 H-5グリッドの西南端に位置する。立地は標高82m前後の台地傾斜変換面である。

遺構 34号遺構によって、覆土最上層の一部を切られている。平面形は楕円形を呈し、主軸はN-40°-Eである。規模は長径3.28m、短径1.88m、深さ最大82cmを測り、底面に2ヶ所のpitが検出されている。

遺物 覆土中から縄文土器小破片1点を検出したが、図示に致らなかった。

6号遺構 (第10図)

位置 I-5グリッド北東部、13号遺構内に位置する。立地は標高81.5m前後の台地緩斜面である。

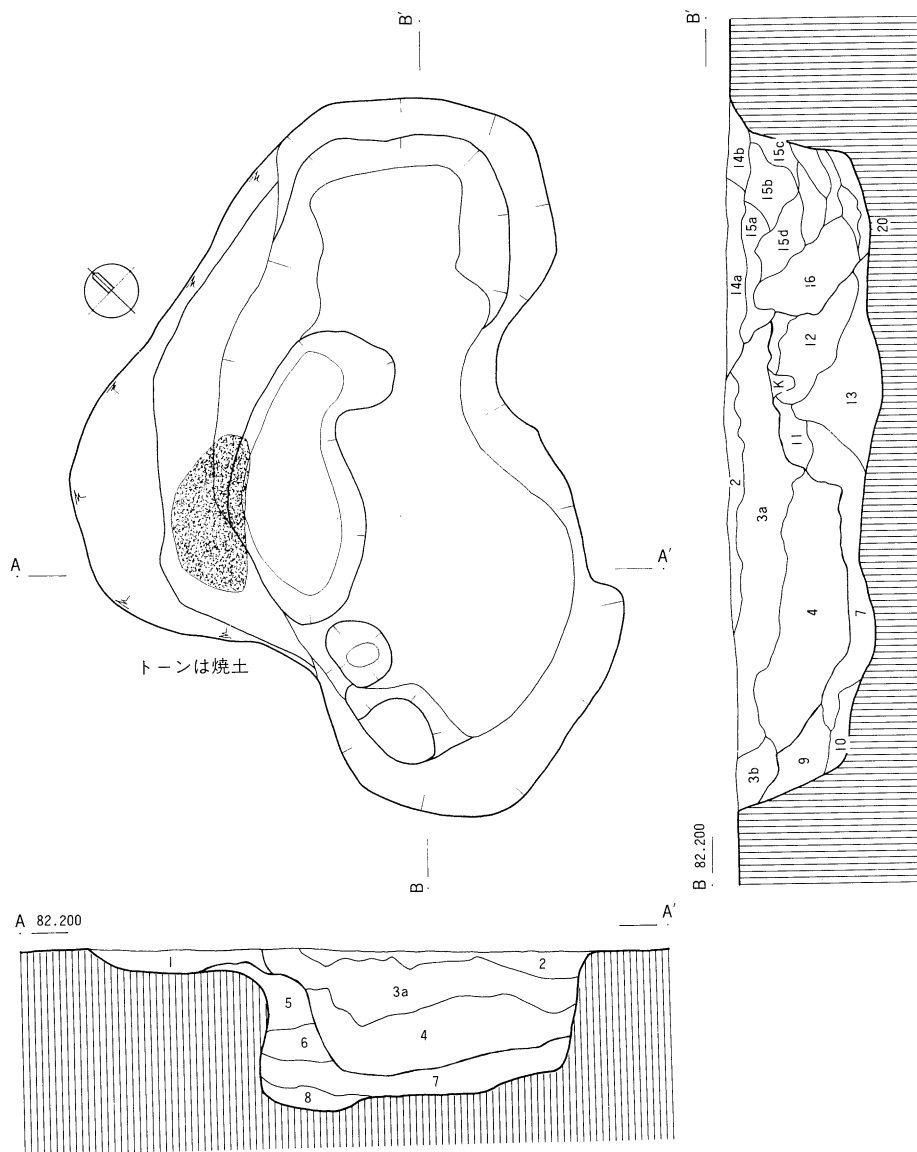
遺構 13号遺構方台部内、基本土層II b層下面より検出している。平面形は楕円形を呈し、主軸はN-6°-Wである。規模は長径1.6m、短径1.3m、深さは36cmを測る。覆土上層に基本土層II b層が自然堆積していることにより、縄文時代の遺構であることは明白である。底面はほぼ平坦で壁はやや急激に立ちあがっている。

遺物 覆土中より縄文土器小破片1点を検出したが、図示に致らなかった。

7号遺構 (第11図)

位置 H-8グリッド東南部、39号遺構内、東側周溝付近に位置する。立地は標高81m前後の台地の緩斜面である。

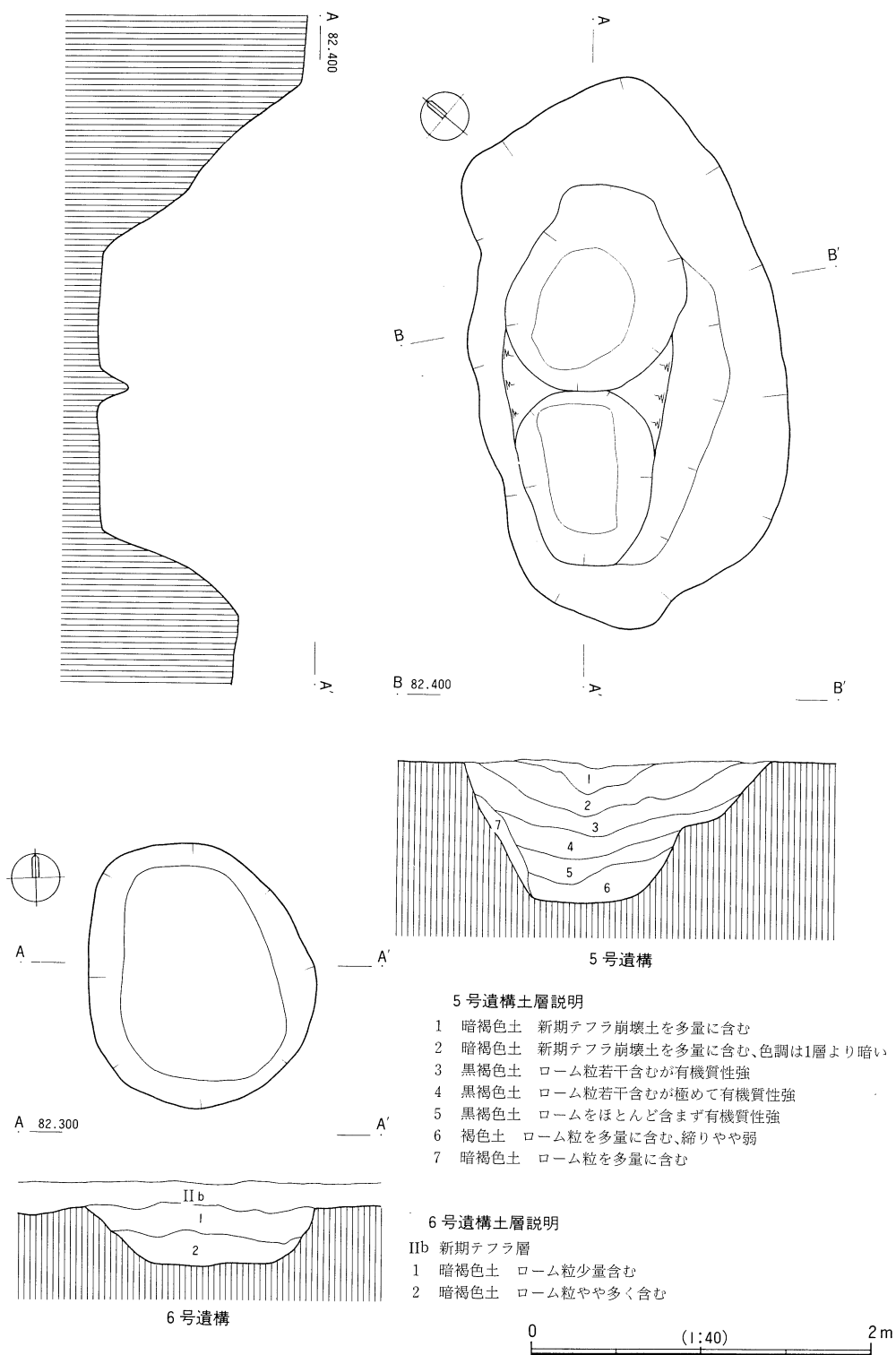
遺構 39号遺構方台部内、基本土層II b層下面より検出している。平面形は不整な楕円形を呈し、主軸はN-2°-Eである。規模は長径1.8m、短径1.3m、深さは88cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ちあがっている。



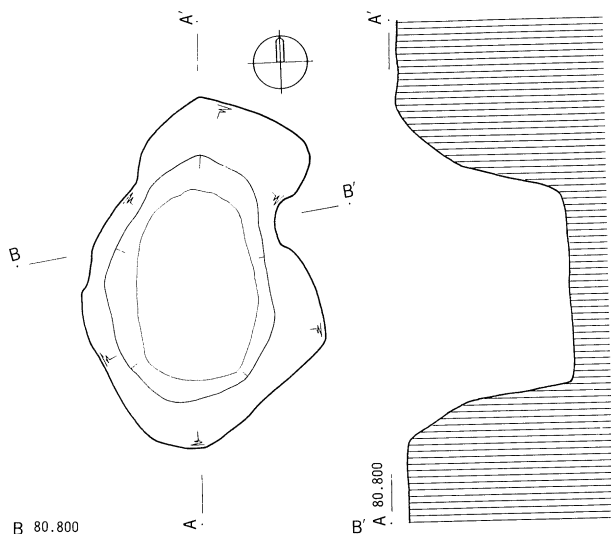
土層説明

- | | | | |
|----------|--------------------------------------|----------|-------------------|
| 1 暗赤褐色土 | 焼土粒を多量に含む、しまりなし | 14a 暗褐色土 | 新期テフラ崩壊土、ローム粒少量含む |
| 2 暗褐色土 | 新期テフラ崩壊土を含む | 14b 暗褐色土 | ローム粒少量含む |
| 3a 黒褐色土 | 有機質性強くローム等をほとんど含まない | 15a 暗褐色土 | ローム粒若干含む |
| 3b 極暗褐色土 | ローム粒若干混入するが有機質性強い | 15b 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロック若干含む |
| 4 暗褐色土 | 茶褐色土を斑点状に含む | 15c 暗褐色土 | ローム粒を多量に含む |
| 5 暗褐色土 | ローム粒を多量に含む | 15d 暗褐色土 | ローム粒若干含む |
| 6 暗褐色土 | ローム粒若干含むや有機質性強い | 16 暗褐色土 | ローム粒をまばらに含む |
| 7 黒褐色土 | ローム粒若干含むが極めて有機質性が強い | 17 黒褐色土 | ローム等をほとんど含まない |
| 8 暗褐色土 | ロームブロック、ローム粒を若干含む | 18 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを少量含む |
| 9 暗褐色土 | ローム粒やや多量に含む | 19 暗褐色土 | ローム粒若干含む |
| 10 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを少量含む | 20 暗褐色土 | 有機質性強い |
| 11 暗褐色土 | 茶褐色土を斑点状に含む、少量のローム混入 | 21 褐色土 | ローム粒を多量に含む |
| 12 暗褐色土 | ローム粒多量に含む | | |
| 13 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多量に含む、しまり弱、ややよごれた色調を呈する | | |

第9図 4号遺構実測図



第10図 5・6号遺構実測図

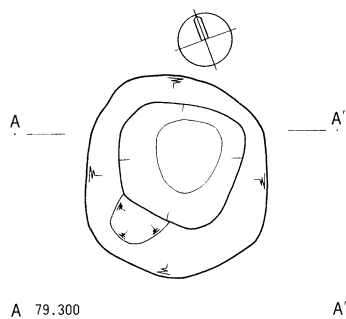


B 80.800

7号遺構

7号遺構土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む、有機質性強
- 2 黒褐色土 ローム粒を1層より多く含むが、有機質性強く色調は1層より暗い
- 3 黒褐色土 ローム粒若干含む、有機質性強
- 4 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まず有機質性も極めて強い
- 5 暗褐色土 ローム粒少量含む、やや締り強い
- 6 暗褐色土 ローム粒少量含む、締り強い
- 7 褐色土 ローム粒多量に含む

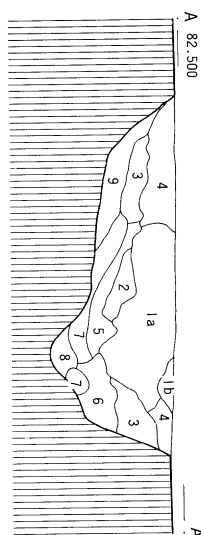


A 79.300

8号遺構

8号遺構土層説明

- 1a 黒褐色土 ローム粒若干含む、有機質性強
- 1b 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 1c 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まない
- 2a 暗褐色土 ローム粒多量に含む
- 2b 暗褐色土 ローム粒多量に含む
- 2c 暗褐色土 ローム粒多量に含む
- 3a 黒褐色土 ローム粒を若干含む
- 3b 黒褐色土 ローム粒を若干含む
- 3c 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
- 4a 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む、やや軟質
- 4b 褐色土 1cm大の硬質ロームブロックを多量に含む
- 5 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 6 褐色土 ロームブロックがぎっしりと詰る
- 7 黒褐色土 淡黄灰色粘土若干含む



B 82.500

9号遺構

9号遺構土層説明

- 1a 褐色土 やや軟質のロームブロックを多量に含む
- 1b 暗褐色土 1a層よりも有機質性が強い
- 2 暗褐色土 5cm前後のロームブロックを多量に含むが、有機質性も強
- 3 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含む
- 4 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を含む、有機質性強
- 5 黒褐色土 ローム粒を若干含む、有機質性強
- 6 黒褐色土 ローム粒少量含む、有機質性強
- 7 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む、締り弱い
- 8 黒褐色土 有機質性強
- 9 褐色土 やや汚れたローム粒を多量に含む

第11図 7・8・9号遺構実測図

遺物 まったく検出されなかった。

8号遺構 (第11図)

位置 I-8 グリッドほぼ中央に位置する。立地は標高78.8m前後の台地の急斜面である。

遺構 平面形は円形を呈し、主軸はN-27°-Eである。規模は長径88cm、短径80cm、深さは1.28mを測る。底面はゆるやかなU字形を呈し、壁の立ちあがりは急激である。

遺物 まったく検出されなかった。

9号遺構 (第11図)

位置 G-3 グリッド南東コーナー付近に位置する。立地は標高80m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な長方形を呈する。主軸はN-6°-Wであり、規模は長径1.92m、短径1.48m、深さは最大64cm、テラス部分においては44cmを測る。底面の北側半分はテラス状を呈しており、ほぼ平坦である。南側半分はピット状を呈し、底面は凹凸している。壁は急激に立ち上がっている。

遺物 まったく検出されなかった。

3 遺物包含層

1 縄文土器

第Ⅰ群 早期前葉の撚糸文系土器 (第13図)

総数35点。口縁部形態、施文手法の差異に従って2類に細別することができる。

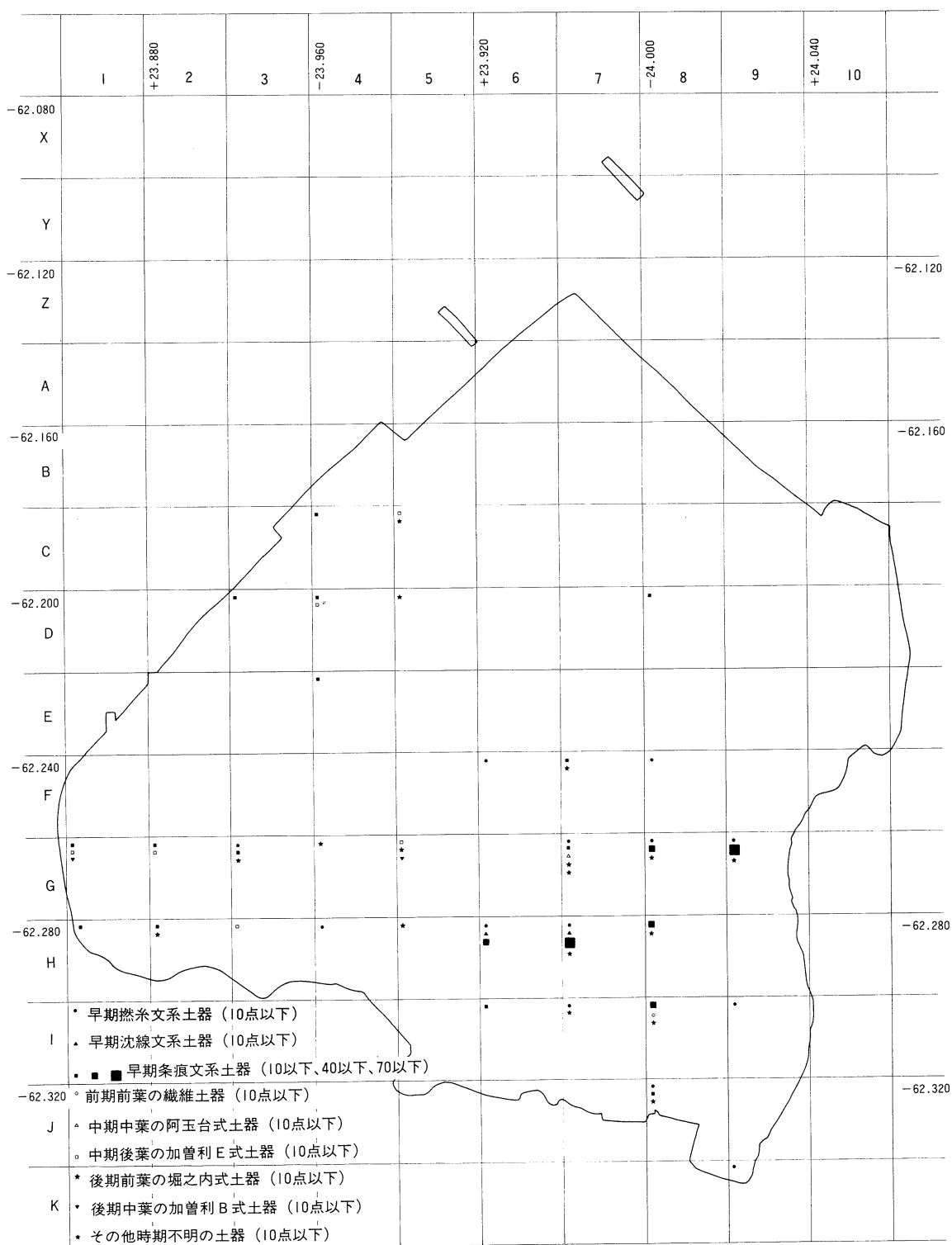
第1類 (1～3) 3個体分の破片がある。口縁部形態は肥厚して外反(1)、外反(2)、角頭気味外反(3)の3種類が認められるが、口唇部直下に縦位に縄文原体の回転圧痕をとどめるという共通性が認められる。夏島式土器に比定される。

第2類 (4) 口縁部形態は軽度の肥厚で、1類に比べ縄文原体の条間も広く、口縁部に無文帯をもち、胴部には縦位の粗い撚糸文が施されている。稻荷台式土器に比定される。

胴部破片 (5～14) 施文原体における撚糸文の条間は、狭いものと広いものの2種類あるようであるが、大多数の帰属はよくわからない。13・14は、底部に近いものである。

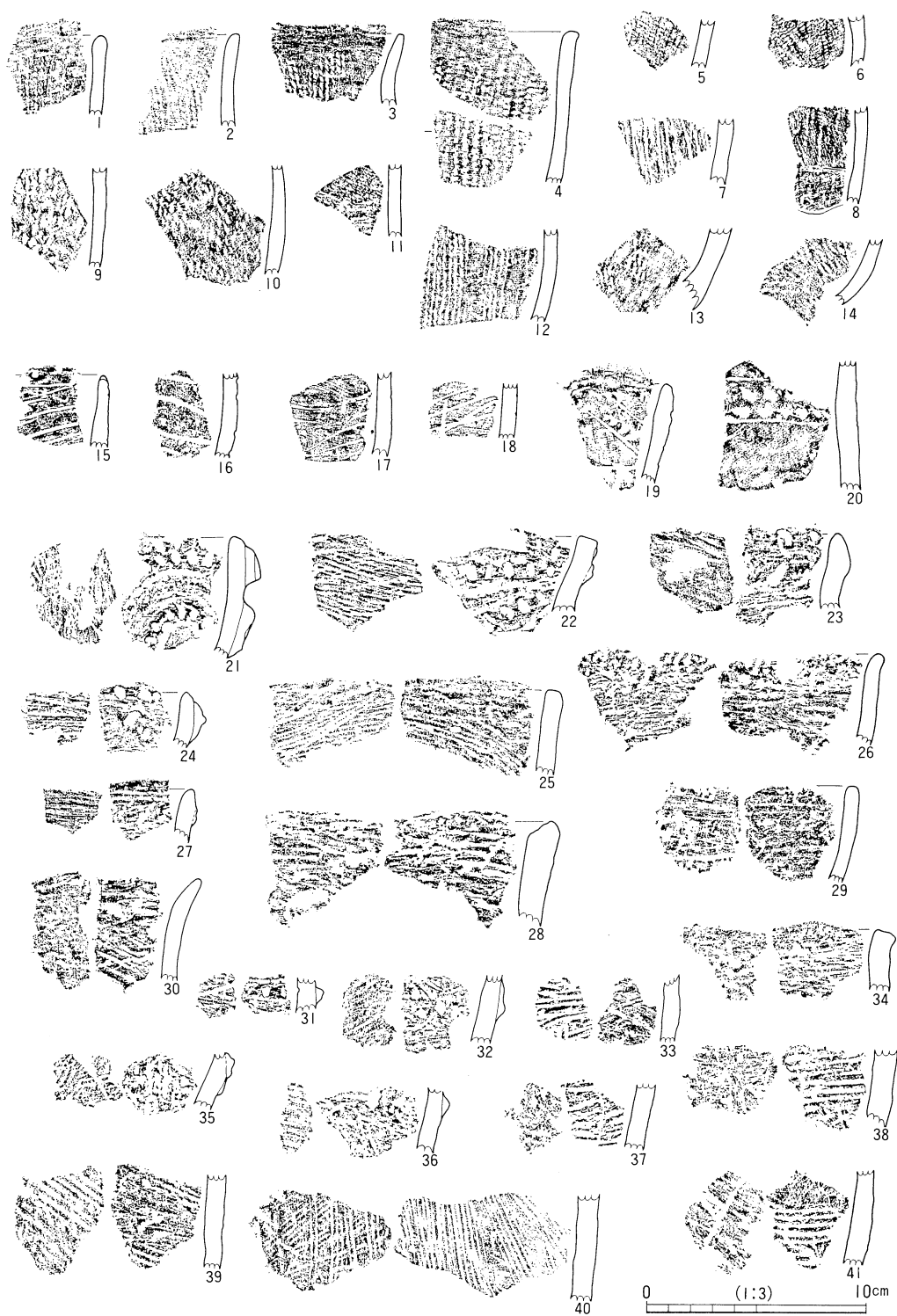
第Ⅱ群 早期中葉の沈線文系土器 (第13図)

総数6点。(15～20) 本遺跡において検出された遺物のすべてを図示した。細分の可能性も

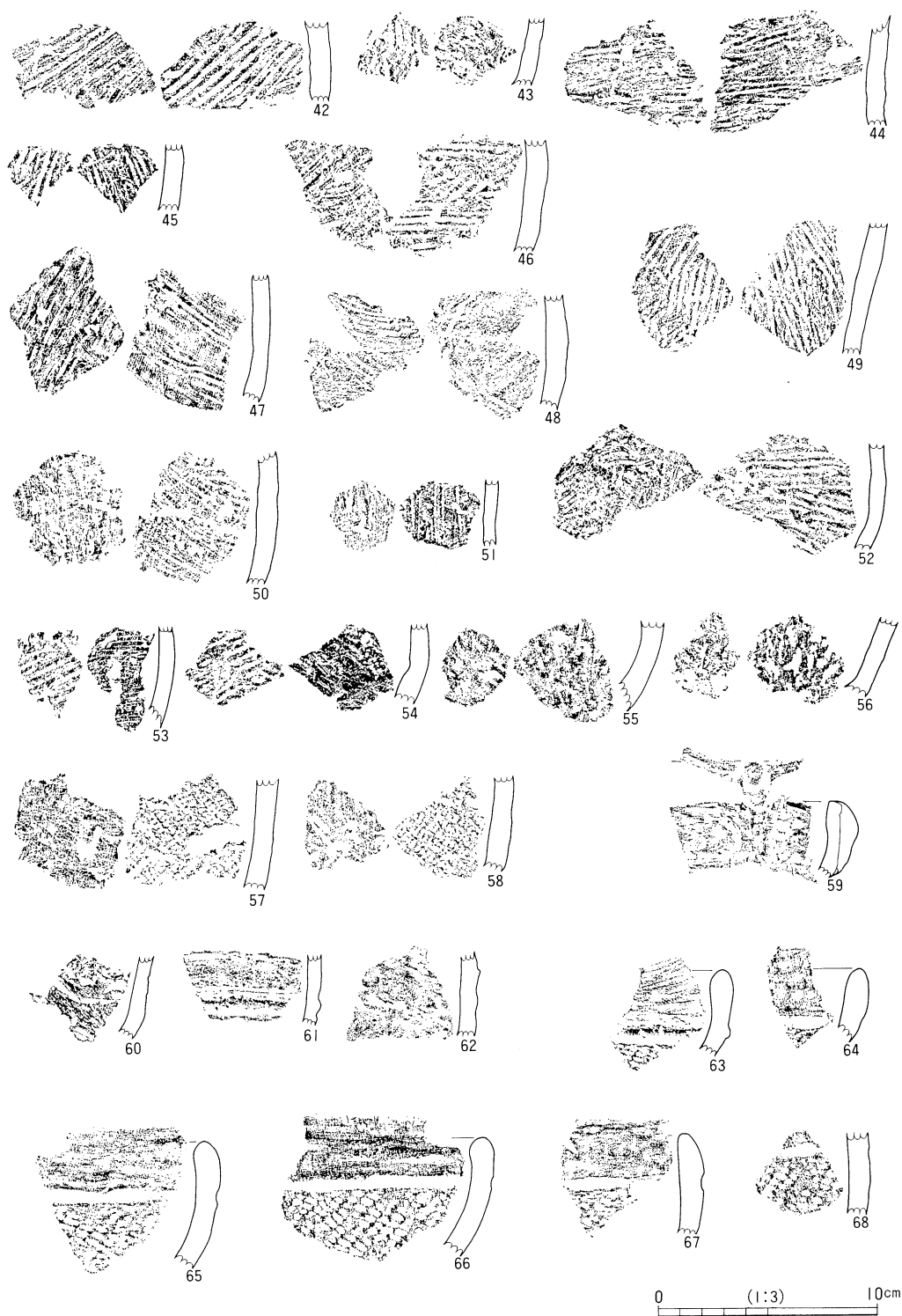


第12図 グリッド出土縄文式土器分布図

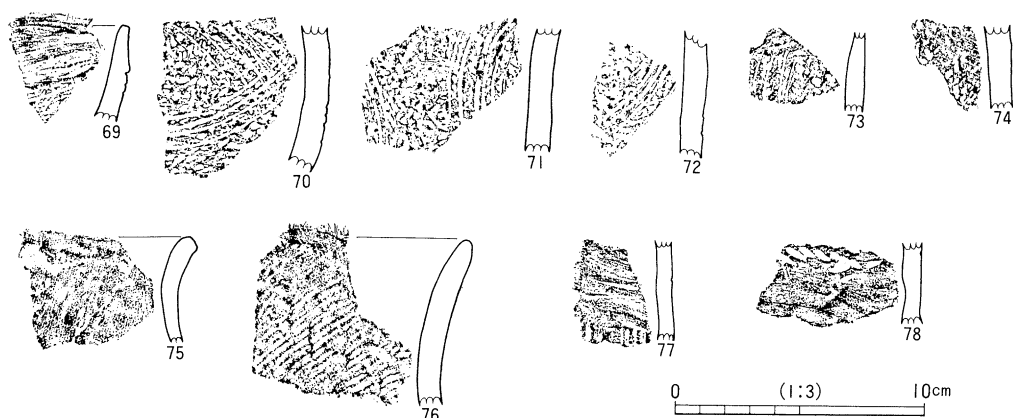
1:1500



第13図 包含層出土遺物実測図 1



第14図 包含層出土遺物実測図 2



第15図 包含層出土遺物実測図3

あるが、胴部少破片も多く、あえて細分しなかった。15・17・18は細沈線、16はやや太目の沈線による文様構成が認められる。19は2条の平行沈線間に半月状の刺痕が、20は2条の平行沈線間に丸棒状工具による2列の刺突が採用されている。19、20は田戸下層式土器に比定される。

第Ⅲ群 早期後葉の条痕文系土器 (第13・14図)

住居跡、炉穴にともない、本遺跡出土の縄文土器の主体を占める一群である。総数308点、このうちの若干を図示した(21～56)。そのほとんどが表裏に貝殻条痕文が施され、胎土に繊維を含んでいる。広義の茅山式土器である。

第1類 (21、22、24、31、32、35、36) 太い隆帯が走り、隆帯には刻み目が認められる。21、22、31、32、35は隆帯が台状に突出しており、刻み目も明瞭である。外面に貝殻条痕文は認められず、内面のみに施されている。23、24は隆帯がくの字状に突出しており、刻み目はあまり明瞭ではない。

第2類 (23、25～30、33～34、37～56) 内外面に貝殻条痕文が施され、胎土には繊維を含んでいる。全体的に胎土が脆く器壁の剝落が激しいものが多い。40は裏面に格子状の条痕が認められる。55、56は底部に近いものである。

第Ⅳ群 前期前葉の繊維土器 (第14図)

総数3点。このうち2点を図示する。(57、58)胎土には繊維を含み、外面は縄文によって装飾されている。57は外面に羽状縄文、58は斜行縄文がそれぞれ施されている。全体的な器形、特徴を示す土器に恵まれず、細かな土器型式は不明である。

第Ⅴ群 中期中葉の阿玉台式土器 (第14図)

総数4点。(59～62)隆帯にそって単列の角押文が施される土器群で、胎土には雲母が混入している。62は、隆帯、角押文のいずれも認められないが、胎土が59～61に非常に似ており、なおかつ雲母が混入していることから、第Ⅴ群の範疇に含めてまちがいないであろう。

第Ⅵ群 中期後葉の加曽利E式土器 (第14図)

総数21点。このうちの若干を図示した。(63～68)いずれも堅緻な焼成で、内面の研磨は顕著であり、色調は褐色～暗褐色を呈する。器形、文様とも全体を知り得るほどの大形土器の出土はない。口縁部は無文化し、その下に1条の沈線を巡らし文様帯を作る。文様帯は極めて単純である。口唇部は内傾する。加曽利E式の範疇でも後半の一群と考えられる。

第Ⅶ群 後期前葉の堀之内式土器 (第15図)

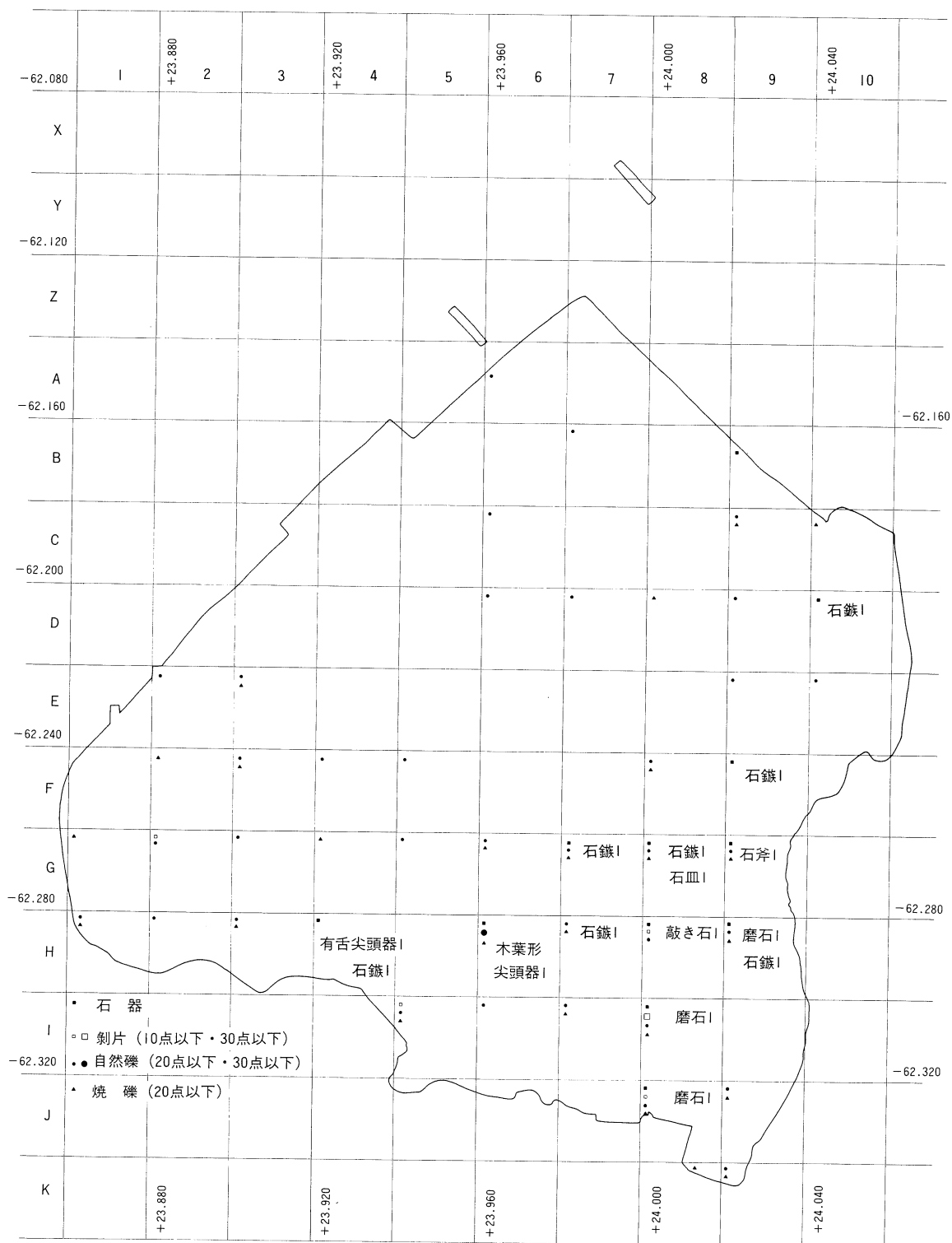
総数9点。このうち6点を図示した。(69～74)いずれも堅緻な焼成で、内面の研磨は顕著であり、色調は褐色～暗褐色を呈する。器形、文様とも全体を知り得る大形品の出土はない。縄文を施した後に、半載竹管による平行沈線が施されている。

第Ⅷ群 後期中葉の加曽利B式土器

総数5点。検出されたすべての土器片は、いわゆる“粗製土器”であり、斜行沈線文を主体としている。あまりの小破片に図示に致るものはなかった。

第Ⅸ群 時期不詳の土器 (第15図75～78)

総数18点。このうち図示するものは4点である(75～78)。75は無文で、強く外反する口縁部に特徴がある。胎土は砂粒を多く含み、あまり精選されていない。色調は褐色を呈する。76は、外反する口縁部に斜行縄文を施している。色調は内外面とも褐色を呈するが、胎土は黒い。繊維は混入されていない。77、78は篋状工具により刺突が施されている。色調は褐色を呈し、胎土には小石を多量に含んでいる。

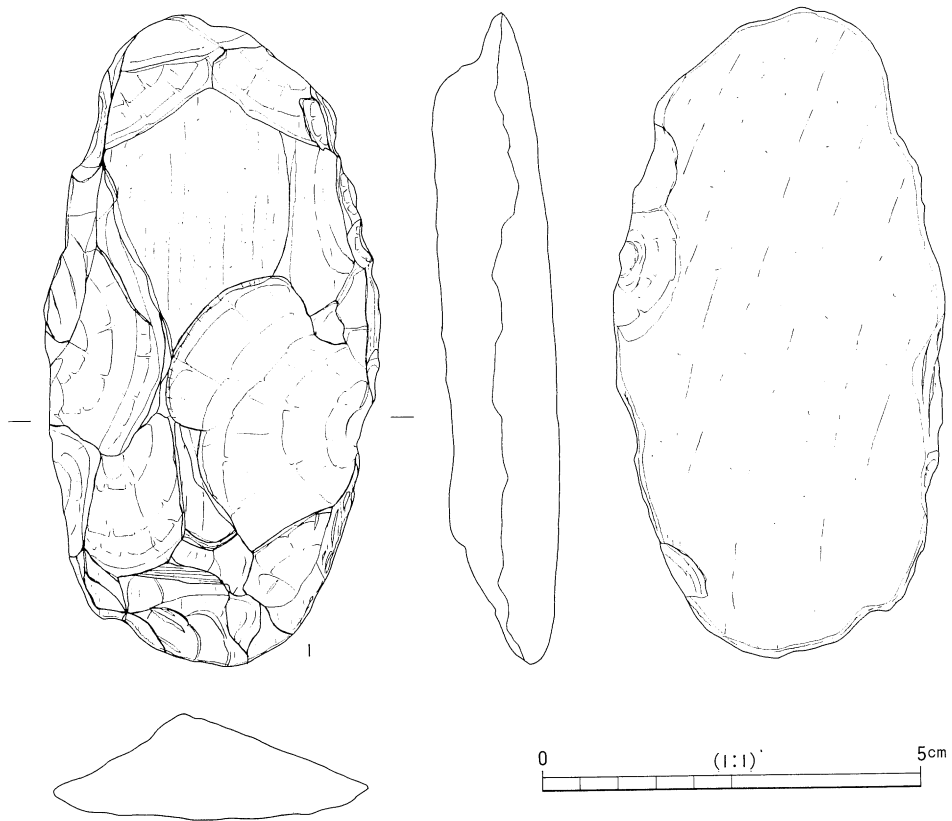


第16図 グリッド出土石器・礫分布図 1:1500

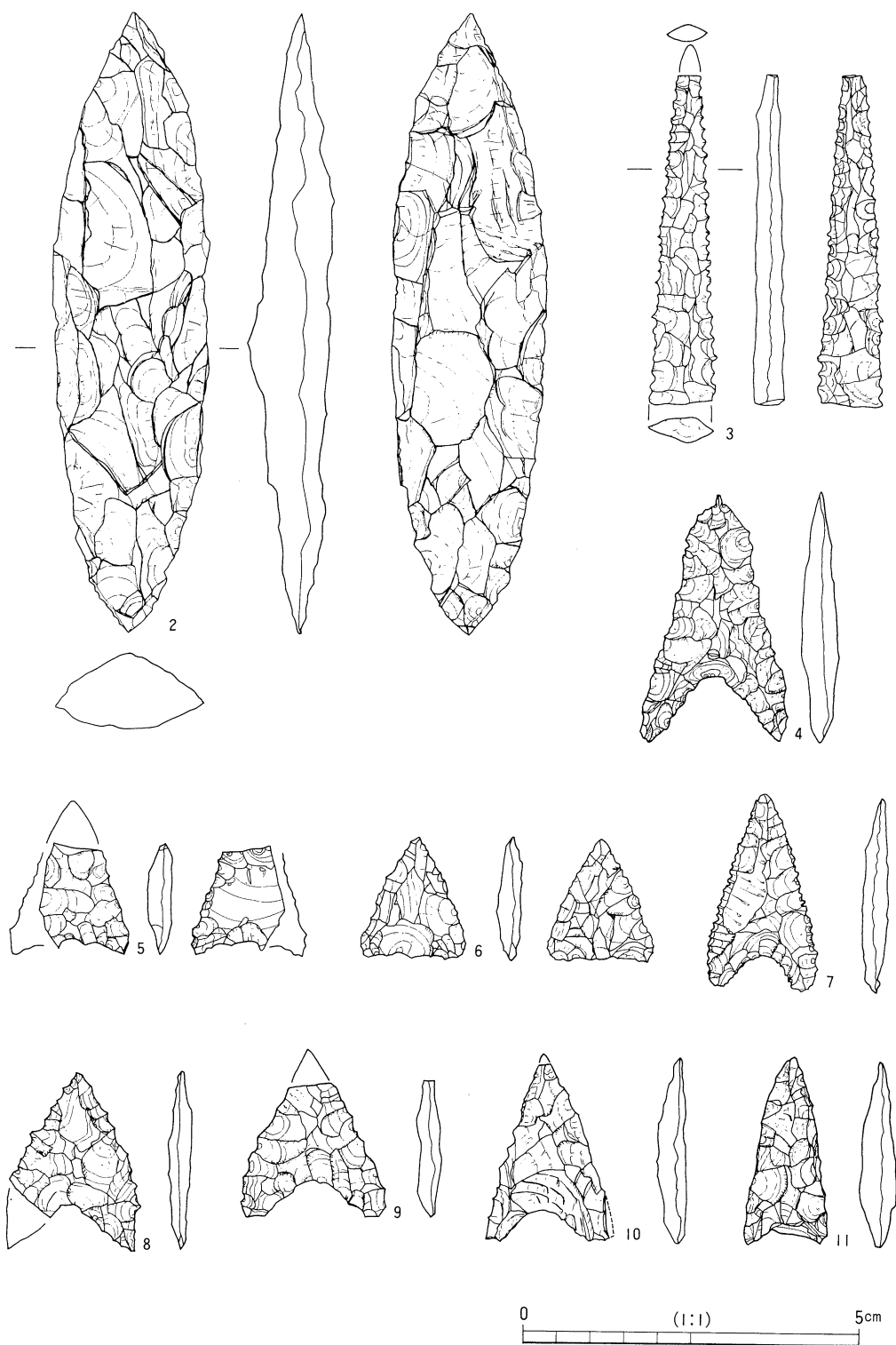
2 石 器 (第17～20図、図版25)

本遺跡出土の礫、石器は総数351点を数えた。このうち220点が自然礫、80点が焼礫であり、石器、剥片は全体の15%弱にすぎない。また、出土した石器、剥片は、遺構に伴うものが少なく、大部分が遺物包含層からの検出である。本遺跡における縄文時代の遺物包含層は、基本土層II b層（新期テフラ層）以下の層位であるが、図示に至った遺物の大部分は基本土層II d層（ローム漸移層）前後に検出されており、第Ⅲ群土器と層位を共伴している。I－8グリッドII c層（自然堆積有機質土層）下面～II d層間には、剥片が集中的に検出されており、接合関係を有するものも少なくない。そのうち6点を図示した。また接合関係に致らなかった剥片についても、母岩が同一個体と思われるものが多く、この付近において石材の加工が行なわれたものと推定される。（第21図）

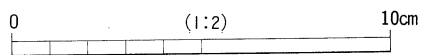
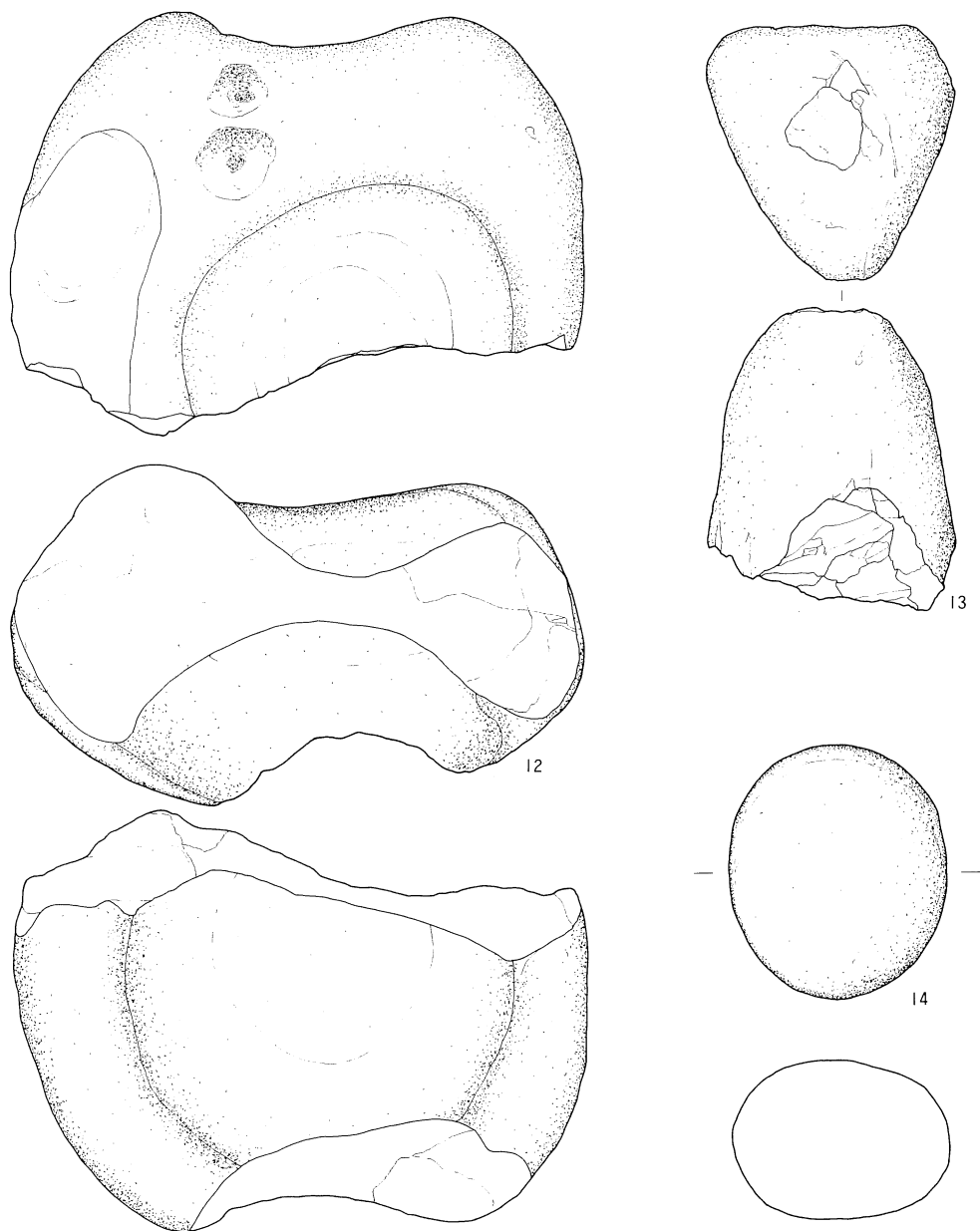
包含層出土の石器のうち、3・4は46号遺構、6は29号遺構の覆土中より検出されており、いずれも遺構に直接伴うものではない。また11は3号遺構覆土最上層からの検出であるが、石鏃という性格と覆土の自然堆積状況から判断して直接遺構に伴うものとは考えられない。



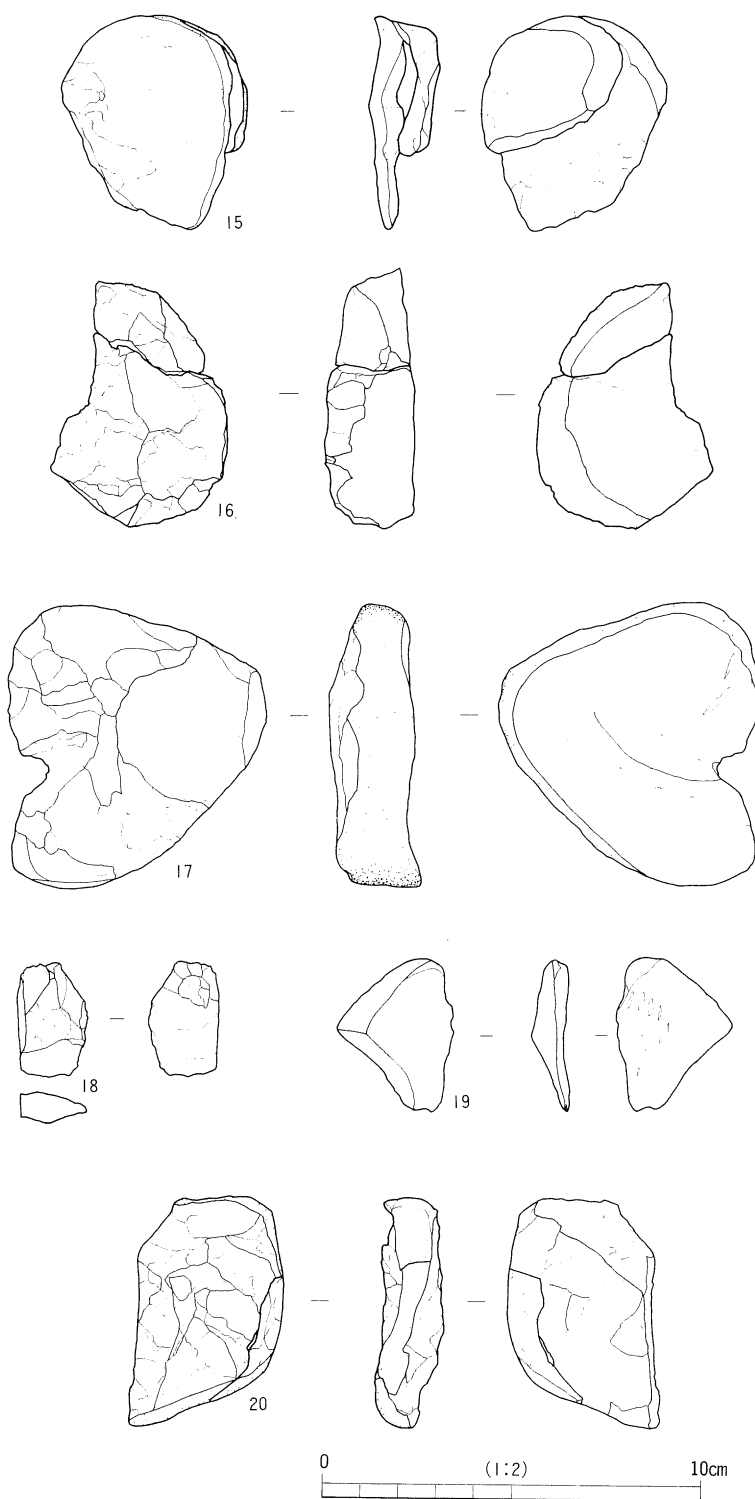
第17図 包含層出土遺物実測図 4



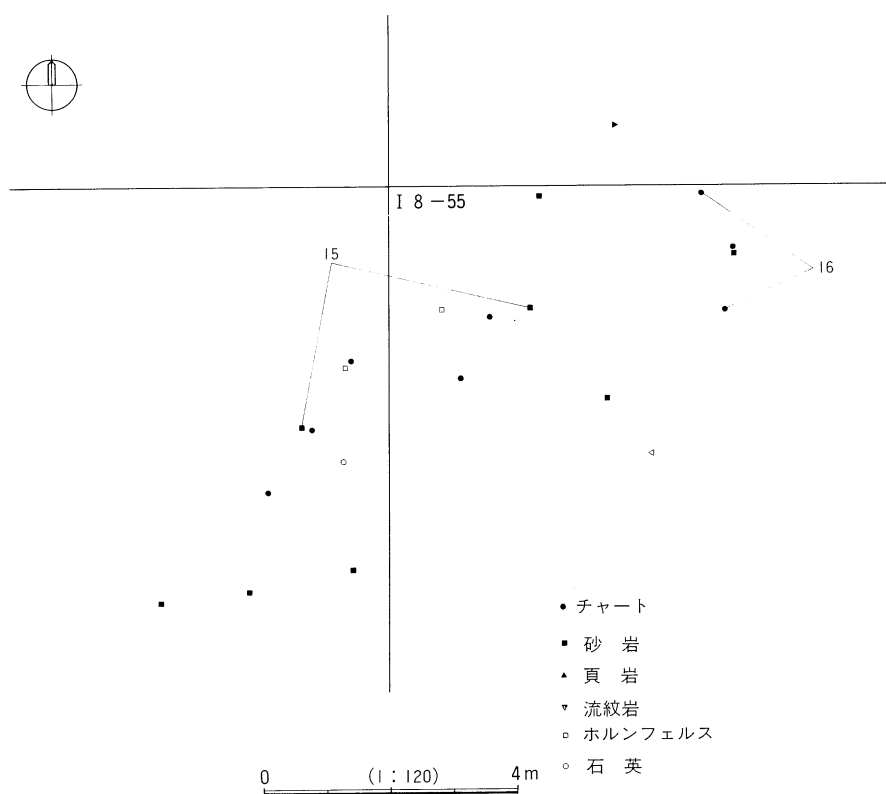
第18図 包含層出土遺物実測図 5



第19図 包含層出土遺物実測図 6



第20図 包含層出土遺物実測図 7



第21図 I 8-55グリッド付近礫分布図

第3表 外迎山遺跡石材一覧表

挿図	No.	器種	形態	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
17	1	石 斧	丹 榎 形	G 9-45	8.6	4.5	15	59.6	ホルンフェルス	
18	2	尖頭器	木 葉 形	H 6-44	9.2	2.3	1.1	18.9	安 山 岩	
18	3	尖頭器	(有舌?)	46号-22	(4.9)	(0.9)	(0.4)	1.9	安 山 岩	細粒、チミツ、サヌカイト状
18	4	石 鏃	凹基無茎	46号-25	3.7	2.2	0.5	2.4	O B	
18	5	石 鏃	凹基無茎	G 8-22	(1.6)	(1.1)	(0.4)	0.5	O B	
18	6	石 鏃	平基無茎	35号-2	1.3	1.5	0.4	0.7	チャート	
18	7	石 鏃	凹基無茎	G 7-83	2.9	1.6	0.4	1.2	チャート	
18	8	石 鏃	凹基無茎	H 9-13	2.7	(1.9)	0.3	1.1	チャート	
18	9	石 鏃	凹基無茎	D10-16	(2.0)	2.2	0.3	1.0	チャート	
18	10	石 鏃	凹基無茎	H 6-77	2.8	(1.8)	0.4	1.1	安 山 岩	細粒、チミツ、サヌカイト状
18	11	石 鏃	凹基無茎	3号-3	2.8	1.3	0.5	1.2	チャート	
19	12	石 皿		B 9-64	15.3	(11.2)	(1.2)最小	1335.0	安 山 岩	
19	13	敲き石		G 1-23	6.8	5.8	4.2	220.1	石 英 斑 岩	
19	14	磨 石		I 8-39	(8.0)	(7.4)	(6.0)	405.0	アブライト	
20	15	剥 片		I 8-54	5.6	4.9	1.7	41.9	砂 岩	I 8-60と接合
20	16	剥 片		I 8-57	6.8	4.6	2.3	66.9	チャート	I 8-67と接合
20	17	剥 片		I 8-61	7.1	6.8	2.2	122.6	砂 岩	
20	18	剥 片		I 8-69	3.0	1.8	1.3	5.0	チャート	
20	19	剥 片		I 8-17	4.0	3.1	0.9	6.1	流 紋 岩	
20	20	剥 片		I 8-73	6.1	3.8	1.6	37.3	頁 岩	

II 古墳時代終末～奈良・平安時代

1 概 要

当該時期に比定される遺構は、古墳 2 基、改葬系区画墓 28 基、火葬墓 4 基、土壇 2 基を検出している。古墳と改葬系区画墓との区別は大きな問題であるが、ここでは主体部構造の差異をもって区別した。すなわち、木棺直葬形態を採用するものを古墳、他の形態を採用、もしくは検出されなかったものを改葬系区画墓と呼ぶ。またこの問題については、最後のまとめでふれる。

2 遺構と遺物

1 古 墳

10号遺構 （第22・23図、図版 ）

位置と現況 遺跡のほぼ中央、6 グリッドを中心とした標高およそ 83.2m、この台地においては最高所に位置する。見かけの墳丘は高さ 1 m 前後であったが、墳丘中央を 46号遺構（溝）が横断しており、現況では墳形の確定はできなかった。

調査の方法 調査に先立つ墳丘測量は、10cm 間隔の標高線をたどる方法で行なった。その結果墳丘南側の標高線は極めて方形に近い形状となり、方墳であろうということが想定された。そこで墳頂部で直交する土層観察用のベルトを設定し、調査を開始した。

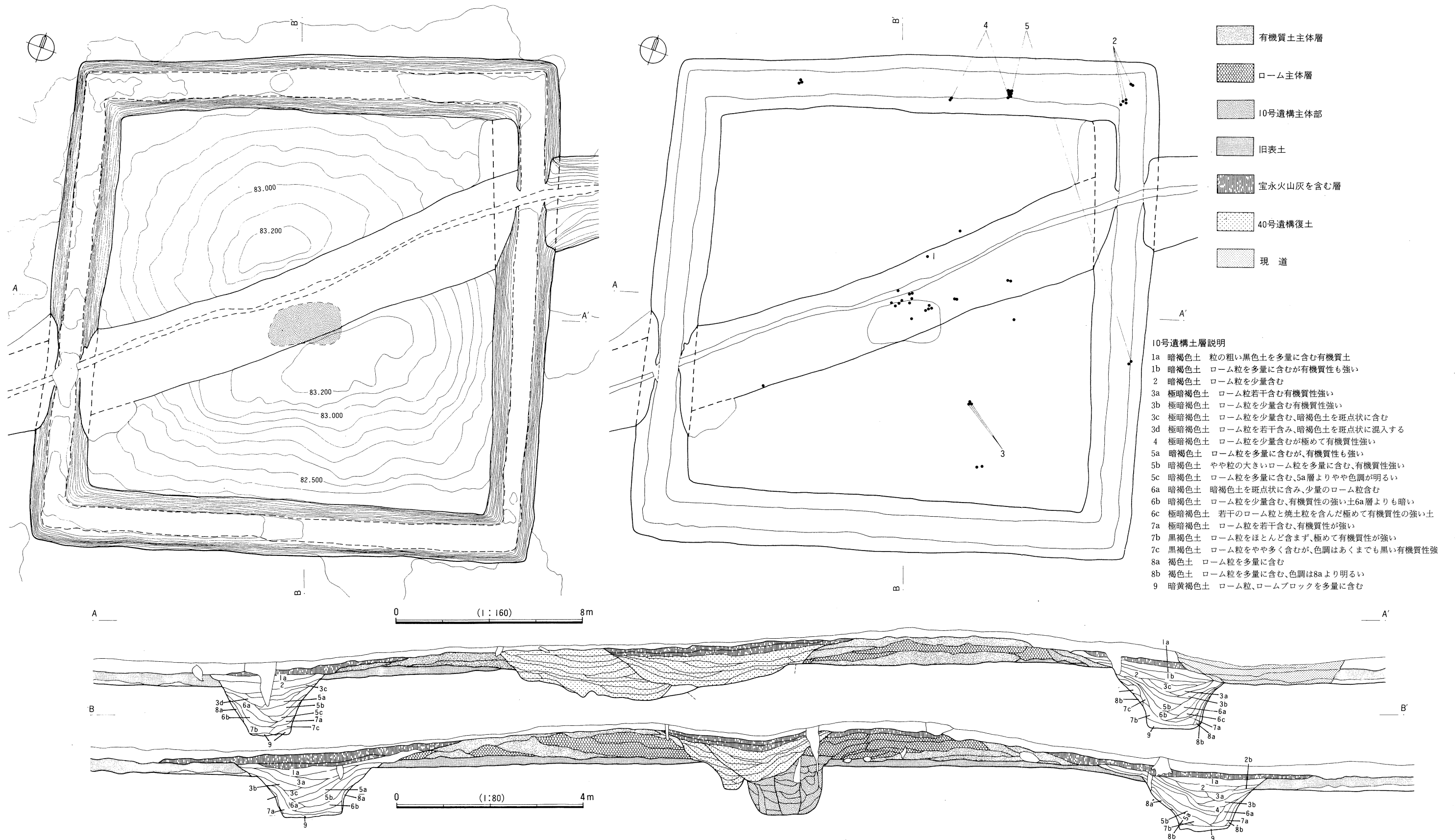
調査は土層観察用のベルトに沿って表土を除去し、墳丘を横断する 46号遺構の記録保存を先行とした。次に 46号遺構の調査と併行して周溝範囲を確認し、これを完掘して再び 10cm コンター図を作成した。

46号遺構の調査の結果、ベルト直交部下に主体部らしい落ち込みが検出された。そこで墳丘から周溝に致る盛土を全面的に除去し、土層断面図を完成させ、主体部の確認を行なった。その結果、ベルト直交部下の落ち込みは主体部であることが確認された。

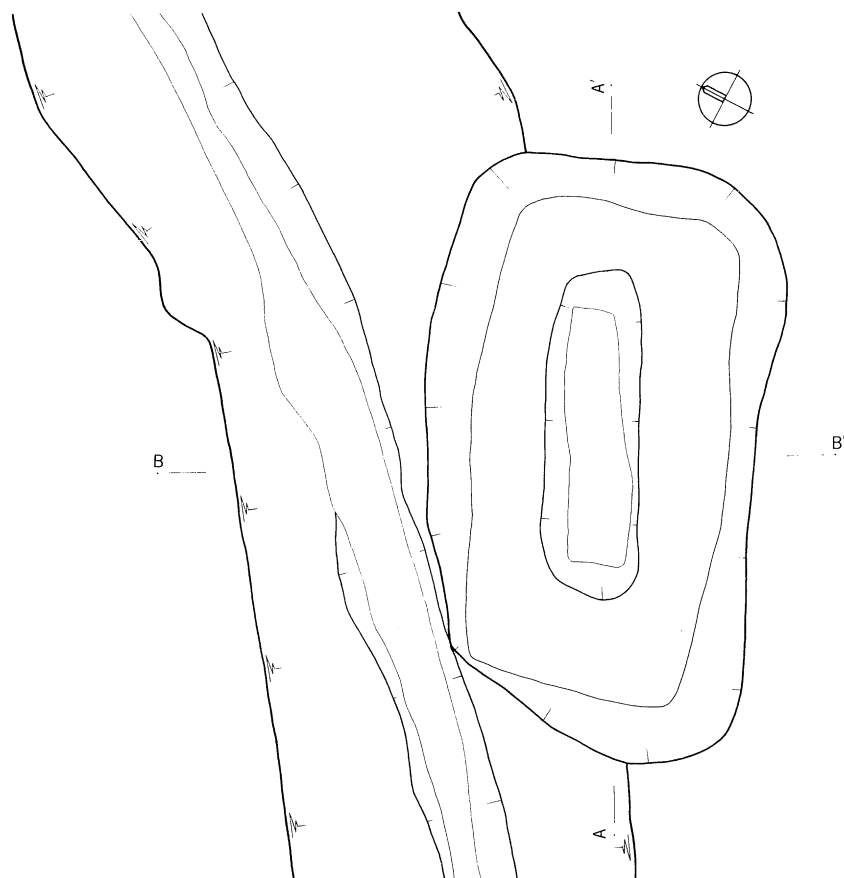
主体部の調査は、木棺痕の検出されるまで 10cm 単位ずつ掘り下げ、断面図を作成しながらこの方法を繰返した。木棺痕が検出されてからは、断面図を作成しながら 5 ～ 10cm 単位ずつ掘り下げ、#10・#4・#2 のメッシュのふるい経過した後に排土とする方法をとった。木棺痕の調査終了後、写真撮影・実測を行ない、主体部の掘り方の様相を観察した。

上記の調査を終了した後、旧表土の除去を行ない、断面図を完了させ全調査を終了した。

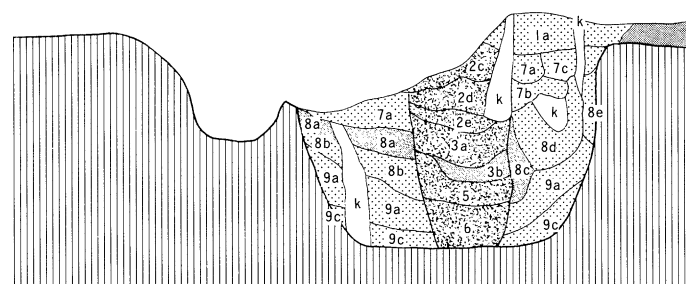
墳丘と周溝 方墳である。墳丘は旧表土である黒色の自然堆積有機質土層（II a 層）の上面に直接盛土によって構築されている。ただし主体部東側の一部においては旧表土を検出できな



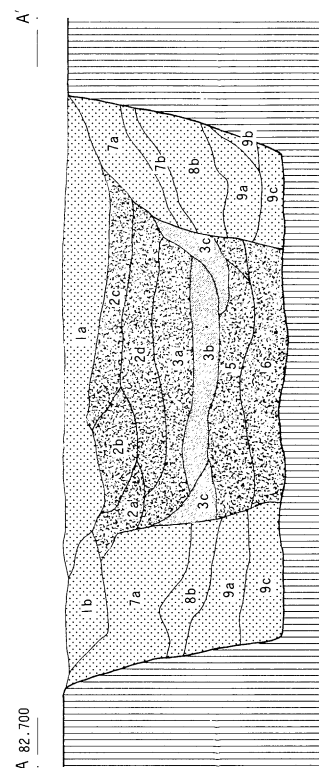
第22図 10号遺構実測図1



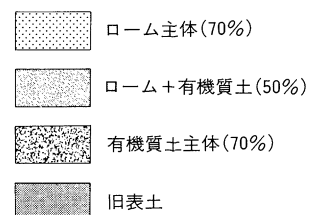
B 83.000



0 (1:40) 2m



A 82.700



土層説明

- 1a 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 1b 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 2a 暗褐色土 有機質性強くローム粒を若干含むややしり弱
- 2b 暗褐色土 有機質性強くローム粒、ロームブロックを少量含む
- 2c 暗褐色土 有機質性強いローム粒、ロームブロック若干含む
- 2d 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含むが、有機質性強いしり弱
- 2e 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含むが有機質性も強い
- 3a 黒褐色土 ローム粒、ブロック若干含む、有機質土の影響が最も強い
- 3b 暗褐色土 ややローム粒の量が多く、色調も若干明るく見える
- 3c 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを3b層よりも多く含む
- 4 暗褐色土 ローム粒をやや多量に含むが有機質性も強い
- 5 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多量に含むが有機質性も強い
- 6 暗褐色土 ローム粒を多量に含むが有機質性も強く5層より色調は暗い
- 7a 褐色土 やや軟質ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 7b 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含むが、7a層よりも色調は暗い
- 7c 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含むが、7a層よりもその含有率が低い
- 8a 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含むが、有機質土も含んでおりやや色調暗い
- 8b 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 8c 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む木根の影響うけやや軟化している
- 8d 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む、木根の影響うけやや硬化している
- 8e 褐色土 壁崩落土のローム粒を多量に含む
- 9a 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 9b 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む、やや色調暗い
- 9c 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む、やや締っている

第23図 10号遺構実測図2

かったので、墳丘の構築に際して若干の整地が行なわれたものと推察される。

封土は、ローム主体層と有機質土主体層を交互に積みあげている。封土が主体部の墓壇掘削によって切られていることから、主体部の構築は封土をある程度盛った後に開始されたことは明らかである。ただしこの封土土層については遺物の出土状況を考えると、墳丘本来の封土の上に46号遺構掘削時において発生した排土が、再び盛土として墳丘に盛られている可能性が極めて高い。

土層断面によれば墳丘と周溝の間は、旧表土の削平が観察される箇所がある。

旧表土下には宝永の火山灰が検出され、明らかに墳丘部からの流れ込みの様相を呈している。また周溝覆土までおよぼ墳丘盛土の流れ込みの様相も観察されるが、概して盛土と流れ込み土との区別が明瞭ではなく、旧表土の削平が検出されなかった箇所についても、この部分はいわゆる「テラス」として意識的に形成されていたものと推察される。

周溝は46号遺構によって東西の一部をカットされているが、全周するものと考えられる。外縁径・内縁径は、北側周溝でそれぞれ東西20.8m・17.6m、東側周溝で南北21.3m・16.6mを測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。周溝上端幅は、2.4m前後の一定の幅で巡る。ハードローム層まで掘り込まれ、深さは1.1～1.3mを測る。底面・側壁とも明瞭に検出され、底面はほぼ平坦である。断面は逆梯形を呈している。覆土は自然堆積の状況を示し、全体的に均一の層序である。

内部施設

墓壇 墳丘のほぼ中央に位置する。46号遺構によって上面のおよそ5/9、深さ最大60cmにわたって削平されており、現存した墓壇の平面形は不整な隅丸長方形を呈する。規模は長径3.3m、短径1.8m、主軸方位をN-71°-Eにとり、深さは1.3mを測る。ハードローム層まで掘り込まれ、底面、側壁とも明瞭に検出された。埋土はローム粒・ロームブロックを主体とする褐色～暗褐色土である。

木棺痕 墓壇埋土をおよそ40cm掘り下げた所で、中央に有機質土を主体とする黒色～暗褐色土が検出された。明らかに木棺等の影響を受けた土層と推察され、慎重に精査を行なったにもかかわらず明瞭な棺底及び遺物の検出ができぬまま墓壇底面に達してしまった。埋土は有機質土を主体とする黒色～暗褐色土であり、墓壇埋土との区別は明瞭である。規模は長径1.8m、短径52cm、主軸はN-65°-Eにとる。土層断面によれば2d～6層までに細分され、深さは88cmを測る。3b～3c層は他層と比較してもローム土の影響のやや強い層で、色調も明るい。木棺崩壊の際に墓壇埋土が流入したものと推察されるが確証はない。仮にそうであった場合、2d～3b層までの範囲が木棺規模としてとらえることができ、これによって推定される使用された木棺の規模は、長さ1.8m、幅52cm、高さ52cm前後であろう。

遺物 (第33図)

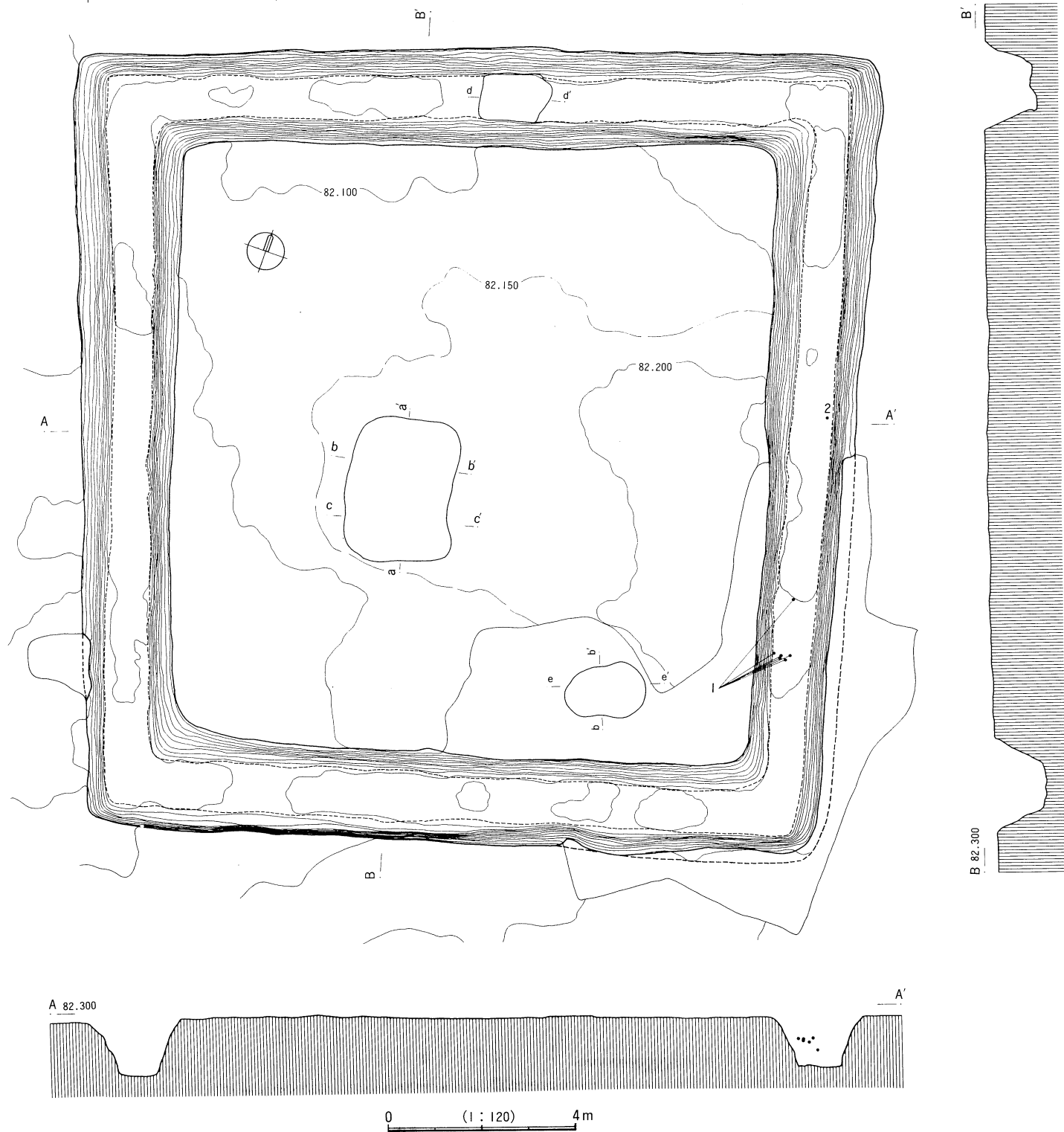
墳丘・周溝内より5点の土師器、須恵器が検出された。10-1は土師器高坏である。46号遺構上端ラインより、若干落下したような状態で検出されている。10-2は土師器甕である。北東周溝コーナー部において、底面よりおよそ30cmほど浮いた状態で検出された。10-3は須恵器蓋である。北側周溝内において、底面より40cmほど浮いた状態で検出されている。10-4は須恵器長頸壺である。北側周溝内では底面より40cm、東側周溝内では、底面より1m以上浮いた状態で検出された。10-5は土師器甕である。墳丘封内土より検出している。また主体部上面(46号遺構底面密着状態)において、10-1、10-3、10-4と同一個体である土師器・須恵器片が検出されているが、いずれも小破片で、接合関係には致らなかった。しかし、これらの遺物はいずれも本遺構に伴うものと考えられ、46号遺構構築の際に主体部上面から移動したものと推定される。

11号遺構 (第24・25・26・27図)

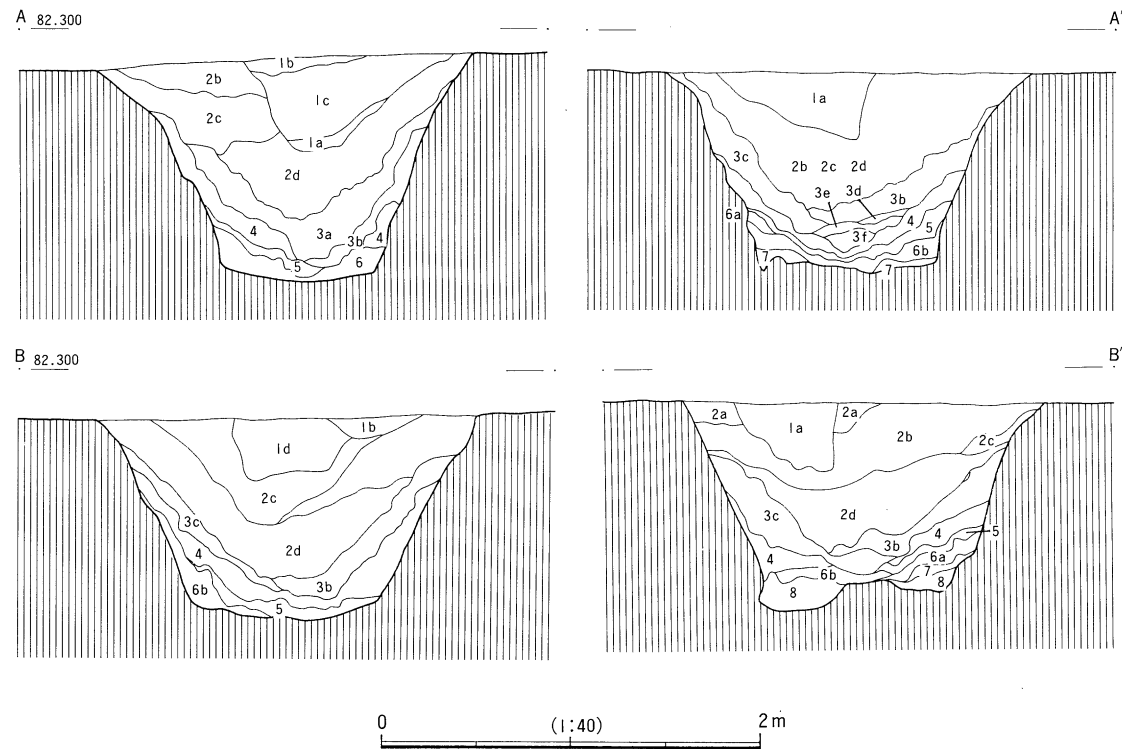
位置と現況 遺跡の北端、B6グリッドを中心とした標高およそ82m前後の台地平坦面に位置する。A6～7、B4～7グリッド周辺は土取りによってハードローム層～新期テフラ層まで削平されている。11号遺構においてはソフトローム層～ローム漸移層まで削平されており、墳丘の存在を認めることができず、遺存状態は極めて悪い。

調査の方法 現況では墳丘の存在が認められなかったので、墳丘測量は行なわなかったが、その他は10号遺構と同様の過程で調査を行なった。

墳丘と周溝 上記のごとく封土及び旧表土はまったく検出されなかったが、仮に周溝掘削時に発生した排土をすべて方台部に盛っていたとすれば、若干の高まりがあったであろう。また、主体部に木棺直葬の葬法を採用していることから、方墳であると推定される。周溝は全周する。確認面がもう少し高い位置ならば、隣接する12号遺構と切り合い関係があったかと思われるほど、東側周溝は接近している。北側周溝における外縁径・内縁径は、それぞれ東西、17.8m・13.2m、西側周溝では南北16.7m・12.4mを測る。北側周溝が南側周溝より若干長く、やや台形ぎみな方形を呈する。東南コーナー付近の攪乱は、土取りによるものであり、ソフトローム層上面まで削平されている。周溝上端幅は、2.0m前後の一定の幅で巡るものと推定される。ハードローム層まで掘り込まれ、深さは1.0～1.2mを測る。底面・側面とも明瞭に検出され、底面はほぼ平坦である。断面は逆梯形を呈している。覆土は自然堆積によって一度埋没した後、幅0.6～1m、深さは30～40cmに渡って掘り返されたと思われる土層が検出されている。この層は他層と比較しても明瞭に区別され、断面はいずれも方台部の方がやや浅く、立ちあがりもなだらかである。



第24図 11号遺構実測図 1



土層説明

- 1a 暗褐色土 南溝と西溝とに検出される。ローム粒を霜降状に含む 2 層との区別が明瞭
- 1b 暗褐色土 ローム崩壊土と暗褐色土との混合土を斑点状に混入しやや明るい。ローム粒は微量
- 1c 暗褐色土 北溝のみに検出。有機質性がやや強くローム粒を若干含む
- 1d 暗褐色土 1 層中で最も有機質性が強く、ローム粒等をほとんど含まない
- 2a 暗褐色土 南溝のみに検出される層。ローム崩壊土と暗褐色土との混合土、やや締り欠く
- 2b 暗褐色土 やや有機質性が強く、ローム崩壊土と暗褐色土の混合土を斑点状に含む
- 2c 暗褐色土 ロームの影響をやや強く受け、やや明るい
- 2d 黒褐色土 2 層中最も有機質性の強い層
- 3a 暗褐色土 東溝のみに検出される層。2 層との漸移的な色調を呈する
- 3b 暗褐色土 ロームブロック、ローム崩壊土を若干含む層。有機質性やや強
- 3c 暗褐色土 3b層と近似するが、ロームブロック、ローム崩壊土を含まない層
- 3d 暗褐色土 3 層中最も有機質性の強い層 西溝のみに検出
- 3e 暗褐色土 ローム土と暗褐色土がよく混合した均一的な層。西溝のみ検出
- 3f 暗褐色土 有機質性の強い層、西溝のみに検出
- 4 暗黄褐色土 ローム崩壊土を主体とした層。壁際はローム崩壊土を主体とするも、中央部に向って有機質土の影響を受け黒味増す
- 5 黒褐色土 有機質土を主体とし、ローム粒、ロームブロックを部分的に含む
- 6a 黄褐色土 ローム崩壊土主体
- 6b 暗黄褐色土 有機質土との混合土
- 7 黒褐色土 有機質性の極めて強い層
- 8 黄褐色土 底部整形埋め戻し土。ロームブロックを主体とし間層として黒色有機質土含む

第25図 11号遺構実測図 2

内部施設

墓壇 方台部中央よりやや西側に位置する。現存する墓壇の平面形は3段階の掘り方を有し、2段のテラス部分をもつ隅丸長方形である。第1段階は主軸を $N-12^{\circ}-W$ にとり、長径3.04m、短径5.74m、深さはテラス部分で30cm前後を測る。ソフトローム層中に掘り込まれ、壁立ちあがりはなだらかである。第2段階は主軸方位を $N-20^{\circ}-W$ にとり、長径2.64m、短径1.68m、深さは第1段階底面から48cmを測る。ハードローム層中まで掘り込まれ、壁は鋭く立ちあがり、掘り込みもしっかりしている。底面はほぼ平坦である。第3段階は主軸を $N-21^{\circ}-W$ にとる。長径2.0m、短径1.3m、深さは第2段階底面より28cmを測る。底面はやや凹凸があり、壁立ちあがり西・南壁は急激であるが、北・東壁は比較的なだらかである。

木棺痕 第1段階の埋土を除去した所で、第2段階の落ち込みの中央に有機質土を主体とする黒色～暗褐色土が検出された。明らかに木棺痕と推定され、慎重に精査を行なったが、明瞭な棺底及び遺物の検出はできなかった。規模は長径1.8m、短径1.08m、第1段階底面から墓壇底面までの深さは60cmを測り、主軸方位は $N-18^{\circ}-W$ にとる。覆土は有機質性の強い土で、ロームを主体とする墓壇埋土とは明瞭に区別される。土層断面に見られる4層は、ローム土と有機質土の割合がほぼ等しく、墓壇埋土の12層に非常によく似ている。木棺崩壊の際に墓壇埋土が流入したものであろう。また墓壇底面には若干の凹凸がみられたので、木棺設置の際には若干の整地を施したものと推定されるが確証はない。木棺は第3段階掘り方の東壁に接して設置されている。当初からこの様な形態で埋葬する計画があったかどうか不明であるが、第1段階と第2・第3段階の掘り方には8度前後も主軸の変化があるうえに、木棺を設置するには最小限と思われる第3段階の掘り方などを有することから、やや変則的な主体部の形態であるといえる。

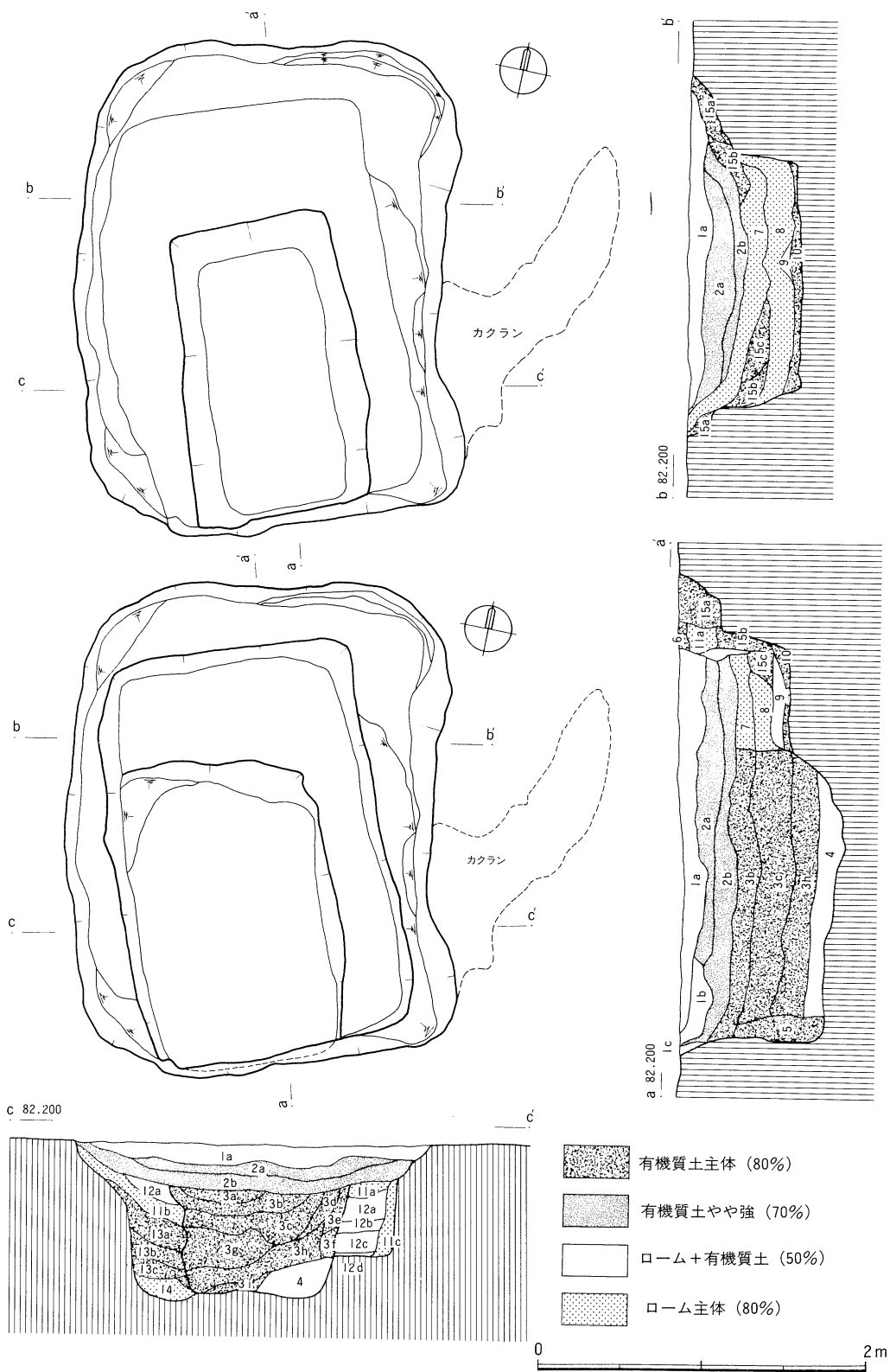
遺物 (第33図)

東側周溝より11-1・11-2が出土している。いずれも土師器甕の底部である。溝底より30cm程浮いた状態で検出されている。詳細な器形については不明である。

土壇

北側周溝内と方台部東南コーナー付近にそれぞれ1基ずつ検出した。北側周溝内に検出した土壇は、周溝内の覆土を完全に除去した後に始めてその存在を確認したものである。また方台部において検出された土壇は、ソフトローム層に達する土取りの為にすでに露出してしまっていたものであるが、いわゆる有天井土壇の形態をとり、両者はいずれも直接本遺構に関係するものと思われる。

第1土壇 北側周溝のほぼ中央に位置する。規模は長軸1.6m、短軸1.3m、深さは周溝底面より20cmを測る。短軸は $N-19^{\circ}-E$ である。形状は不整な長方形で、掘り込みの形は箱形であ



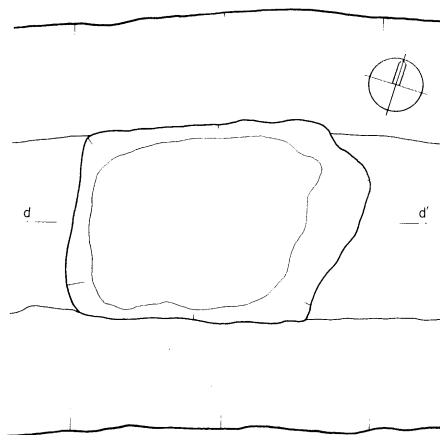
第26図 11号遺構実測図 3

土層説明

1 a	暗褐色土	5～10cm大のロームブロック多量に含む。
1 b	暗褐色土	5 cm大のロームブロック及びローム粒多量に含む。
2 a	極暗褐色土	ローム粒をまばらに含むが有機質性強。
2 b	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック少量含む。
3 a	極暗褐色土	有機質土中にローム粒若干含む。
3 b	極暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック若干含む。
3 c	極暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロックを極めて若干含む。黒色に近い。
3 d	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック少量含む。
3 e	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロックやや多く含む。
3 g	極暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック若干含む。
3 f	暗褐色土	有機質土中にローム粒少量含む。
3 h	黒褐色土	有機質土、ローム等をほとんど含まない。
3 i	暗褐色土	ローム粒、ロームブロックをやや多く含む有機質土。
4	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロックをやや多く含む。
5	極暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック少量含む。
6	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック少量含む。しまる。
7	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック多量に含む。しまる。
8	褐色土	ローム粒、ロームブロック極めて多量に含む。
9	暗褐色土	ローム粒、ロームブロックやや多く含む。
10	極暗褐色土	有機質土中にローム粒やや多く含む。
11 a	褐色土	ローム粒、ロームブロック極めて多量に含む。
11 b	褐色土	ローム粒、ロームブロック多量に含む。
12 a	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロックやや多く含む。
12 b	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック多く含む。しまる。
12 c	暗褐色土	有機質土中にローム粒、ロームブロック散る。ややしまる。
12 d	暗褐色土	有機質土中にローム粒やや多く含む。ややしまる。
13 a	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック若干含む。
13 b	極暗褐色土	ローム粒若干含む。
13 c	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック少量含む。
14	褐色土	ローム粒、ロームブロック多量に含む。
15 a	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック若干含む。
15 b	暗褐色土	ローム粒やや多く含む。
15 c	暗褐色土	ロームブロックやや多く含む。

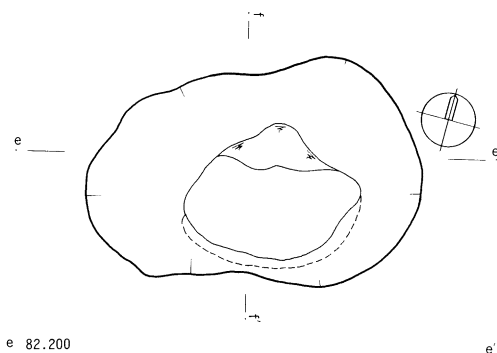
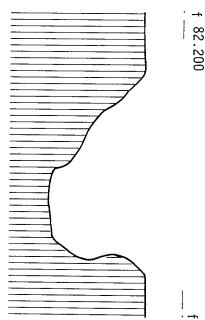
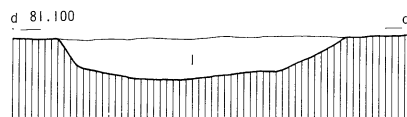
る。覆土はローム粒、ロームブロックを主体とする褐色土で、人為的な埋め戻しが考えられる。遺物はまったく検出しなかった。

第2土壌 方台部南東コーナー付近に位置する。付近は土取りによってソフトローム面まで削平されており、本来の掘り込み面からの検出ではない。残存した遺構の規模は長軸1.84m、短軸88cm、深さは56cmを測る。短軸方位はN-20°-Wである。形状は楕円形を呈する。北側にテラス状のなだらかな面をもち、南側は若干オーバーハングして立ちあがっている。覆土はロ



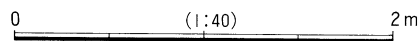
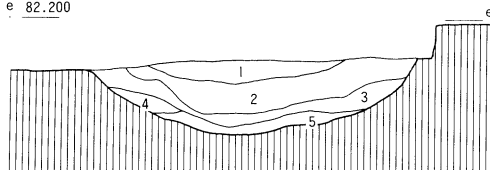
第1土壌土層説明

- 1 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む



第2土壌土層説明

- 1 暗褐色土
有機質土、ローム粒をほとんど含まない
- 2 黒褐色土
ローム粒若干含、有機質性強い
- 3 褐色土
ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 4 褐色土
ローム粒やや多く含む
- 5 暗褐色土
有機質土中にローム粒やや多く含む



第27図 11号遺構内第1・第2土壌実測図

ーム粒を多量に含んでいる。遺物はまったく検出されなかった。

2 改葬系区画墓

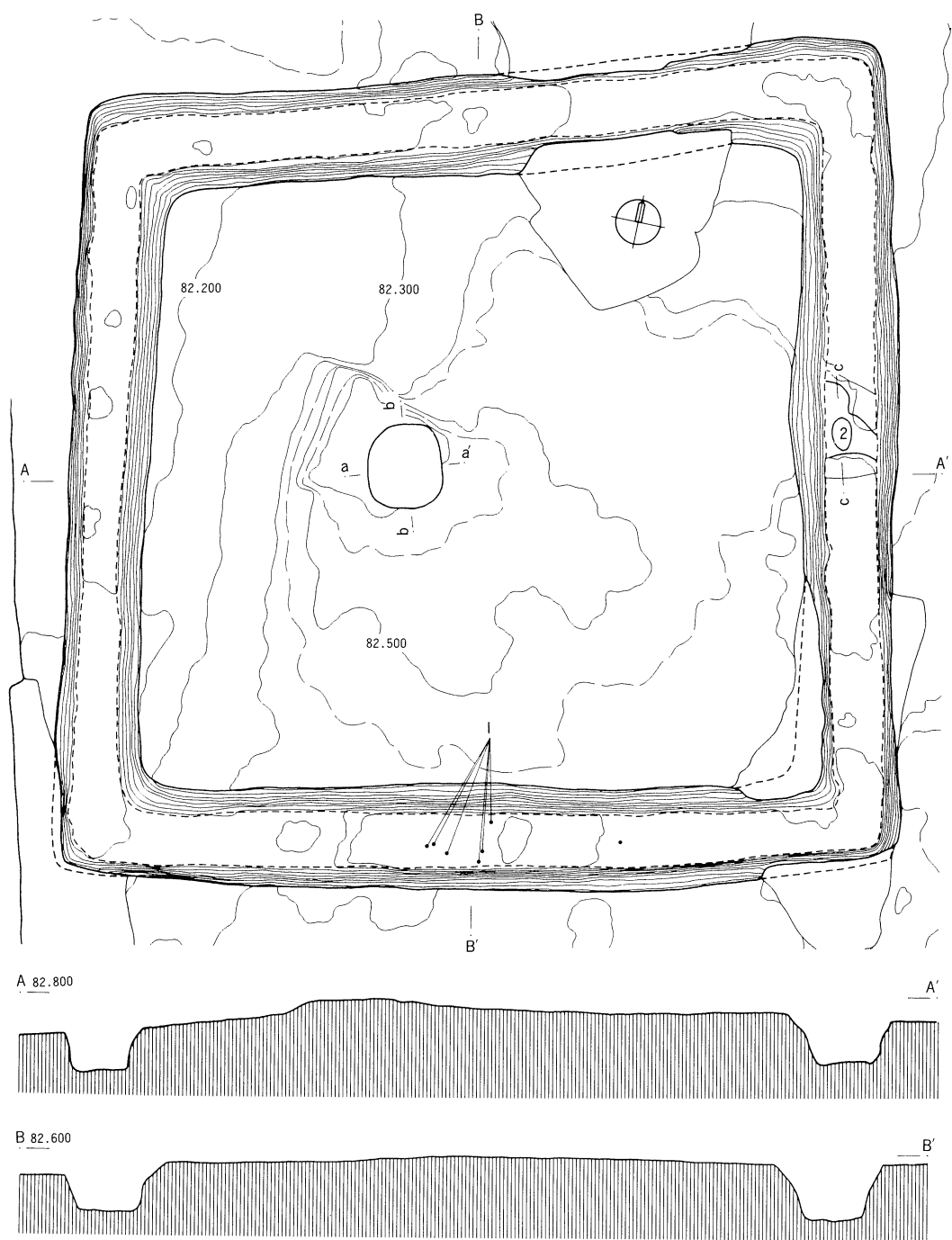
12号遺構 (第28・29・30図、図版7)

位置と現況 11号遺構の東側、B 7 グリッドに位置する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。遺構周辺は土取りによって新期テフラ層 (II b 層) まで削平されており、かろうじて主体部周辺のみ旧表土 (II a 層) をとどめていた。

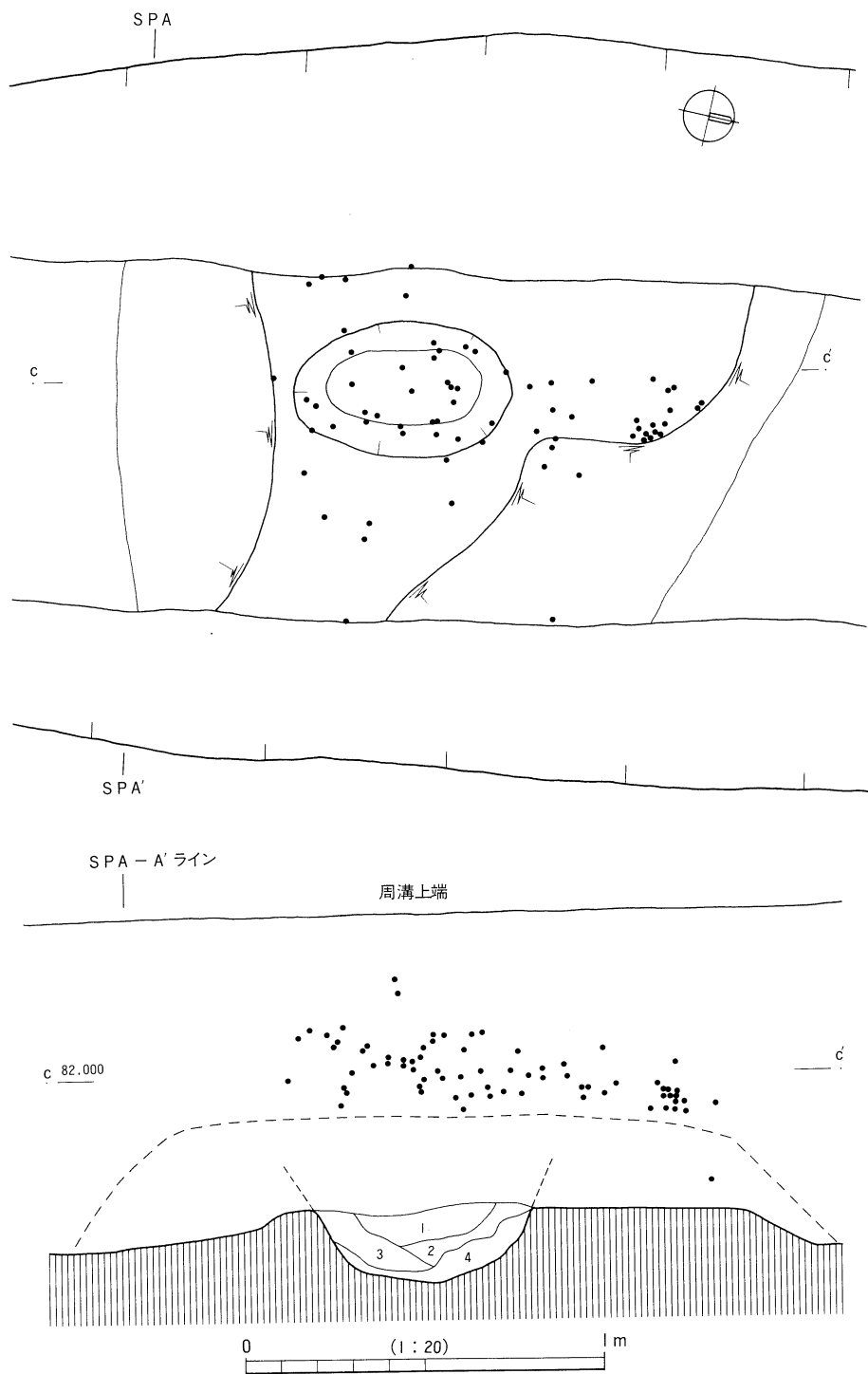
遺構 墳丘の存在については不明であるが、仮に周溝堀削時に発生した排土のすべてを方台部に土盛りしたとすれば、若干の高まりがあったであろう。主体部の形態は、当地域に伝統的な古墳の埋葬施設である木棺直葬の葬法を採用していない。周溝及び方台部の平面形は、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。東南コーナー付近の攪乱は、確認調査時のトレンチも含む。周溝は全周し、北側周溝及び東側周溝を基準とした場合の外縁径・内縁径・規模は、それぞれ東西14.64m・11.64m、南北 (14.6) m・ (11.1) mを測る。検出面での周溝上端幅は、最大1.9m、最小1.4mと多少の幅があるが、概して中央部が広がっており、平均は1.7m前後の幅で巡る。ハードローム層まで掘り込まれ、深さは1m前後を測る。底面、側壁とも明瞭に検出され、底面は東側周溝の中央部に若干の高まりが検出された他は、ほぼ平坦である。断面は逆梯形を呈している。覆土は東側周溝中央部 (S P A' 付近) を除けば、自然堆積の状況を示す。

内部施設 方台部中央よりやや西側、旧表土である黒色有機質土 (II a 層) 中に検出されている。平面形は円に近い楕円形である。長軸1.54m・短軸1.32m、深さは20cm前後を測り、長軸方位をN-18°-Wにとる。中央に茶褐色粘土質土を配し、周囲を黄灰色粘土及び暗黄灰色土で充填している。茶褐色粘土質土、黄灰色粘土の範囲・規模は、a~a'で42cm・112cm、b~b'で44cm・132cmである。最大厚はそれぞれ10cm・20cmであるが、茶褐色粘土質土下の黄灰色粘土は4cm前後と薄い。蔵骨器あるいは火葬骨等の遺物の存在を期待したが、土壌内からは何の遺物も検出されなかった。しかし、木棺直葬の内部施設とは明らかに形態が異なり、木櫃、あるいは蔵骨器等を使用する火葬施設が内部主体に採用されていた可能性が極めて高い。

土壌 東側周溝底面に検出された。土壌の存在する周溝底面のみ他の周溝底面より20cm程高いテラス状になっており、周溝構築時に意識的に構築されたものと考えられる。検出面での土壌の規模は、長軸61cm、短軸39cm、深さ22cmを測り、長軸方位をN-13°-Wにとる。覆土は有機質性の強い黒色土を主体とし、一部に炭化物を含んでいる。周溝土層観察用に残したベルトの断面図 (S P A' 付近) によれば、他の周溝覆土と比べ著しく乱れており、かつ人為的である。この部分については当初から盛土が存在していたものと考えられる。第29図の破線は、盛土構築時の状況を推定復原したものである。



第28図 12号遺構実測図 1



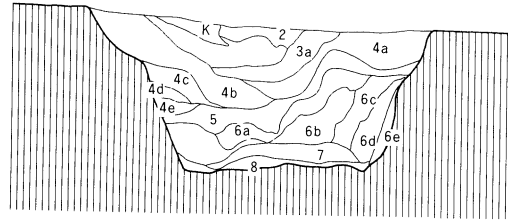
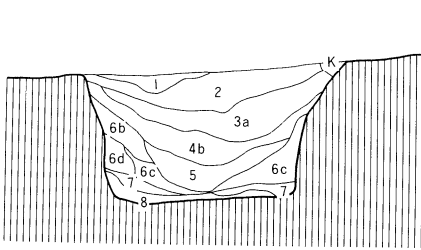
土層説明

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 有機質土中にローム粒を若干含む。また若干の炭化物も含む | 3 黒褐色土 | 有機質土中に若干のローム粒を含む |
| 2 暗褐色土 | 有機質土中にローム粒、ロームブロックを多量に含む | 4 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多量に含む |

第29図 12号遺構実測図2

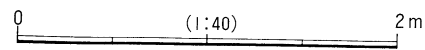
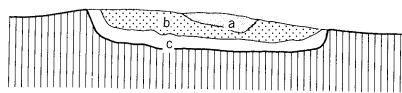
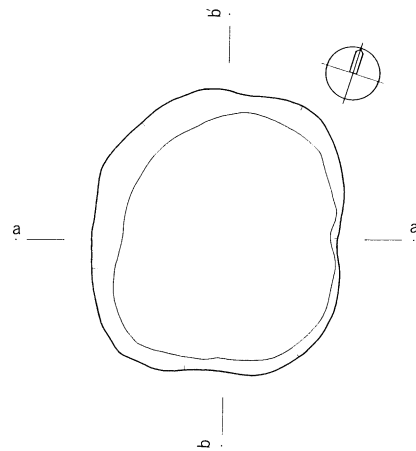
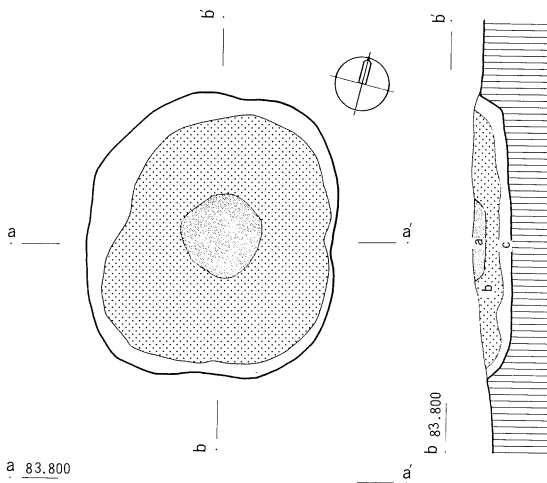
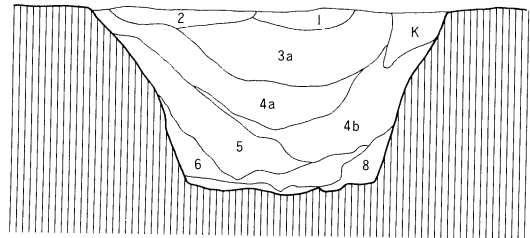
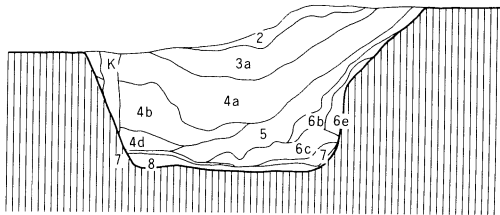
A 82.800

82.800 A'



B 82.600

82.600 B'



土層説明

- 1 黒褐色土 有機質性強、西溝のみに検出される
- 2 暗褐色土 テフラ崩壊土と有機質土がよく混合した層
- 3a 黒褐色土 ローム粒若干含む
- 3b 黒褐色土 4層との漸移的な層で、ローム土の影響を若干うけてやや明るい
- 4a 暗褐色土 有機質土を主体とし、ローム崩壊土の影響を受ける。3b層との漸移的な層でやや暗い
- 4b 暗褐色土 本層の主体となる層で2~4mm大のローム小ブロックを若干含む、全体としてもローム土の影響を受け明るい
- 4c 暗褐色土 有機質性が強く、黒褐色に近い。東溝のみの検出される層で付近に遺物も多い
- 4d 暗褐色土 ロームの影響が強くやや明るい
- 4e 褐色土 ローム崩壊土主体層

第30図 12号遺構実測図 3

- | | | |
|---------|-----------------------|---|
| 5 黒褐色土 | ローム等をほとんど含まない有機質土 | a 茶褐色粘土質土 2mm大の黄灰色粘土粒を少量含む |
| 6a 暗褐色土 | ローム粒を若干含む、有機質性強 | b 黄灰色土 黄灰色粘土を多量に含み若干のローム粒を含む、かなり堅くひき締っている |
| 6b 暗褐色土 | ローム粒をほとんど含まない、有機質性強 | c 暗黄灰色土 黄灰色粘土を多量に含み、締りも強い |
| 6c 暗褐色土 | 6a・6b層との漸移層 | |
| 6d 暗褐色土 | ローム崩壊土を多量に含む有機質土 | |
| 6e 暗褐色土 | ローム崩壊土を多量に含む | |
| 7 黒褐色土 | 有機質土最も有機質性が強い | |
| 8 暗黄褐色土 | ローム小ブロック中に黒色有機質土を混じえる | |

遺物 (第33図)

周溝内より2点の土師器が検出されている。12-1は甕口縁部である。南側周溝の中央部より、溝底から約30cm程浮いた状態で検出されている。12-2は広口短頸壺である。東側周溝内土壌の真上に、細々になった状態で検出されている。溝底からおよそ30cmほど浮いた状態であり、土壌を埋め戻した後に上部に意識的に配置したものであろうか。類例は菊間遺跡の3号遺構に認められる(註1)。

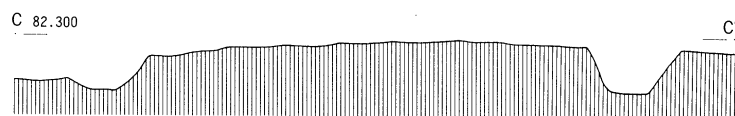
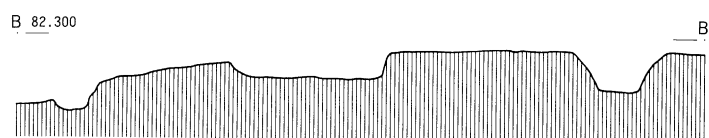
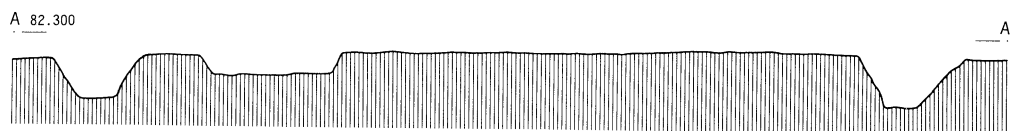
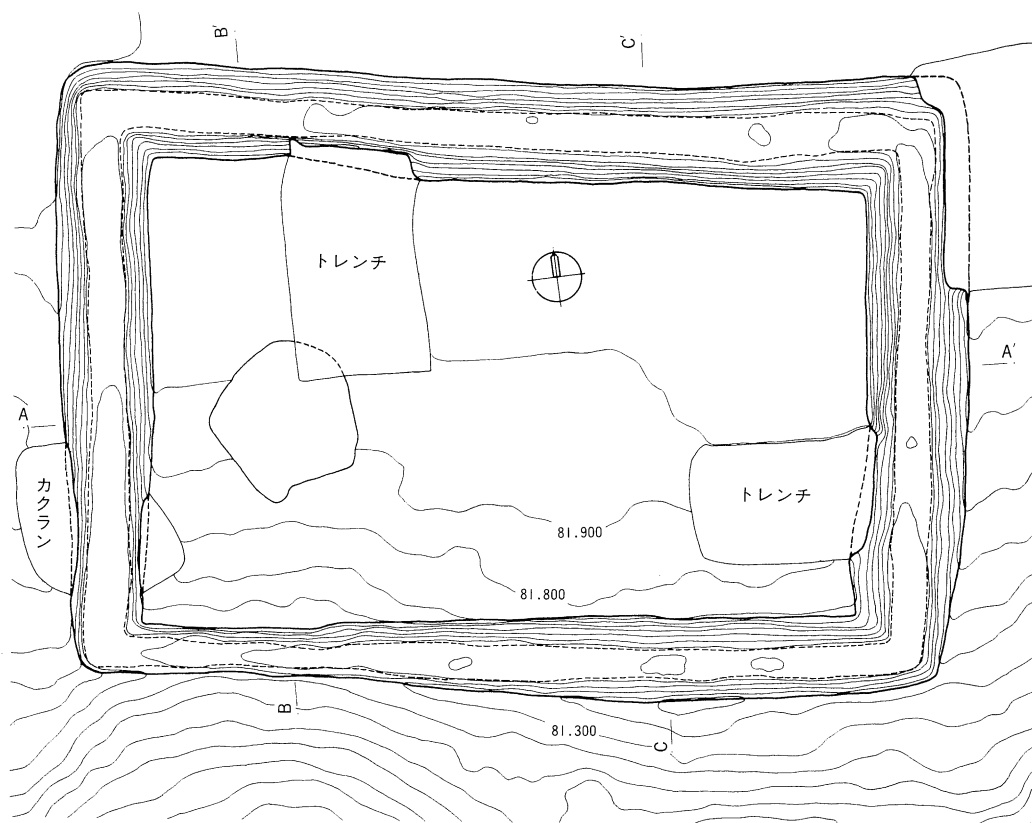
註1 市原市菊間遺跡 1974 千葉県都市公社
第3号周溝 P251～255

13号遺構 (第31、32図、図版8)

位置と現況 遺跡の南端I5グリッドに位置する。立地は標高81.9m前後の台地傾斜変換面である。現状では墳丘の存在は認められなかった。

遺構 周溝及び方台部の平面形は、東西方向に長い長方形を呈する。4ヶ所認められる攪乱のうち、西側周溝以外は確認調査時のトレンチである。周溝は南側の急斜面に至るにしたがい、幅・深さとも減少していくが全周している。北側周溝及び西側周溝の外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西(18.2)m・11.64m、南北9.60m・7.44mを測る。周溝上端幅は、南側周溝以外は1.5m前後で巡る。南側周溝は急斜面に構築されており、地形的な条件も加わってか、0.7～1.3mと他の周溝に比べて一定ではない。ハードローム層(南側周溝は一部ソフトローム層)まで掘り込まれ、深さは東側周溝が80cm前後と最も深く、次いで北側周溝の64cm前後である。西側及び南側周溝は、西南コーナー付近に至るにしたがい浅くなっており、掘り込みも不明瞭である。この西南コーナー付近を除けば、底面・側壁とも明瞭に検出され、断面は逆梯形を呈している。覆土は各周溝とも自然堆積の状況を示す。

内部施設 方台部西側にかなり片寄った状態で検出されている。確認面は基本土層IIb層上面であり、平面形は不整円形を呈する。長軸2.44m、短軸(2.30)m、深さは42cm前後を測り、長軸方位をN-43°-Wにとる。覆土は焼土・炭化物・山砂等を多量に含んでおり、人為的な埋土と考えられる。底面は北側の一部に4cmほど低くなるテラス状の落ち込みがある他は、ほぼ平坦であり、3ヶ所の焼土の集中が認められた。壁はspb'付近がややなだらかに立ちあがる他は、各壁ともやや急激に立ちあがっている。第32図破線は、確認トレンチによって破損した上端ラインである。火葬骨等の存在を期待したが、土壌内からは須恵器甕の破片3点が検出され

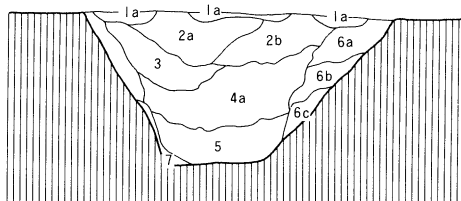
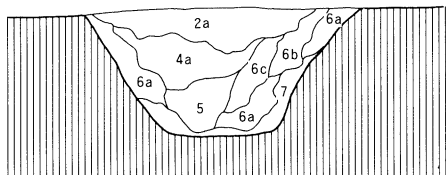


0 (1 : 120) 4m

第31図 13号遺構実測図1

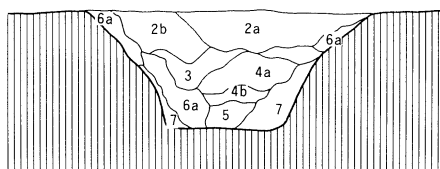
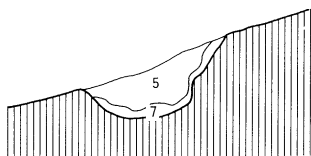
A 82.300

A'



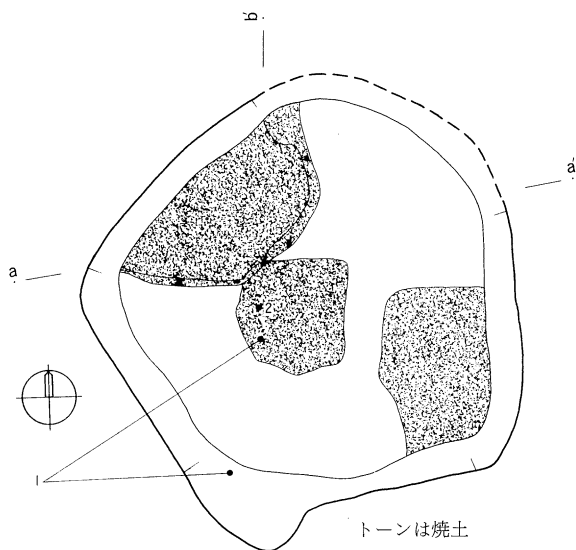
B 82.300

B'



土層説明

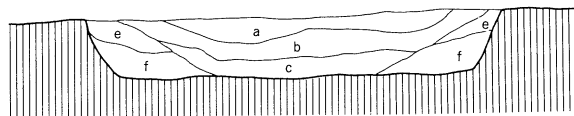
- 1a 暗褐色土 ローム粒若干含む、やや明るい
 1b 暗褐色土 ローム粒、1a層よりも少量含む、やや暗い
 2a 暗褐色土 ローム粒若干含む、新期テフラ崩壊土を斑点状に含む
 2b 暗褐色土 ローム粒若干含む、有機質性強
 3 暗褐色土 ローム粒若干含む、新期テフラ崩壊土と有機質土を多量に含む
 4a 黒褐色土 ローム粒、新期テフラ崩壊土を混入するが、極めて有機質性が高い
 4b 黒褐色土 ローム粒、新期テフラ崩壊土をやや多く混入し、4a層よりも有機質性が低い
 5 黒褐色土 ローム粒を若干混入するが極めて有機質性が高い
 6a 暗褐色土 ローム粒と新期テフラ崩壊土を多量に含む
 6b 暗褐色土 ローム粒を若干含む、新期テフラ崩壊土を多量に含む
 6c 黒褐色土 ローム粒、新期テフラ崩壊土を多量に含むが有機質土も多量に混入している
 6d 暗褐色土 ローム粒、新期テフラ崩壊土を少量含む、有機質土をやや多く含む
 7 褐色土 壁崩壊のロームを多量に含む



a

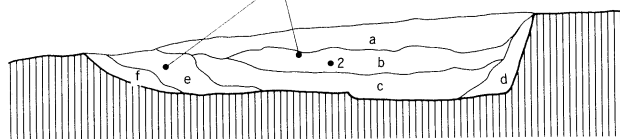
b

a'



b

b'



0 (1:40) 2m

第32図 13号遺構実測図 2

たにすぎない。しかし、当地域の古墳に伝統的な埋葬形態である木棺直葬の形態とは明らかに異なっており、火葬址である可能性が極めて高い。また当遺構の形態が、東西に長い長方形を呈するのに対して、内部施設の位置があまりにも西側に片寄っていることから、方台部東側にさらに別の内部施設が存在することが想定され、慎重に精査を行なったにもかかわらず検出することはできなかった。

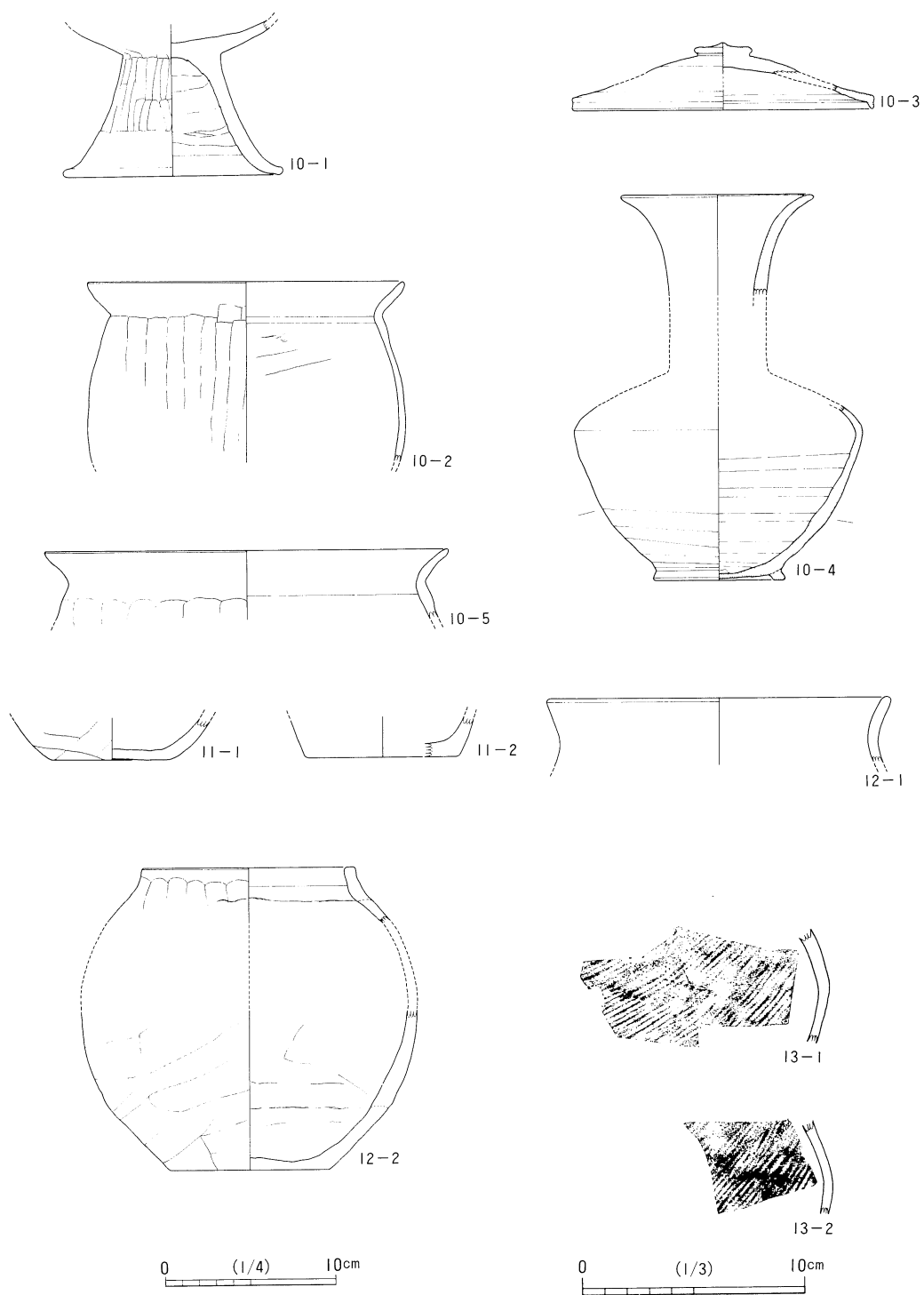
遺物 (第33図、図版24)

内部施設より3点の須恵器片が出土している。いずれも底面から20cm程浮いた状態で検出されている。13-1・13-2は、同一個体と思われる甕の胴部であるが、詳細な器形については不明である。また周溝内及び方台部においては、何の遺物も検出されなかった。

10～13号遺構出土遺物を第33図にまとめた。明瞭な時期区分こそできないが、10号遺構検出遺物は、7C後葉～8C初頭までの時期に納まりそうである。その他の遺構に関しては資料に乏しく時期の確定は困難であるが、主体部の形態から判断して、10号→11号→12号→13号遺構の変遷が考えられようかと考えている。

第4表 10・11・12・13号遺構出土遺物観察表

図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
10-1	土師器高坏 坏部欠く	—	12.8	—	良好	茶褐色	密	外 脚部 ヘラケズリ 裾部 横位ナデ 内 脚部 横位ヘラケズリ 裾部 ナデ	
10-2	土師器 甕 口～体 ^{1/6}	(18.8)	—	—	良好	淡褐色	密	外 口辺部 ナデ 胴部 ヘラケズリ 内 口辺部 ナデ 胴部 ヘラナデ	
10-3	須恵器 蓋 口～体 ^{1/5} 鈕 鈕～体 ^{1/3}	(17.8)	鈕径 3.4 鈕高 1.3	(4.0)	不良	淡白灰色	砂粒少 密	口縁 返りを持たず、端は短く垂直に曲折。 鈕は偏平な擬宝珠形。 鈕貼付の後、付近横ナデ ロクロ成形	器面の風化激しい。 器高は複元実測よりも上まわるものと考え ている。
10-4	須恵器長頸壺 口～頸 ^{1/3} 頸～肩欠 肩～底 ^{1/3}	(11.5)	7.8	(23.0)	良好	淡灰色	砂粒少 密	胴部下位は回転ヘラケズリ。肩部は若干丸 味をもつ。高台取付後、高台内を若干のナ デ。口縁部は素縁。ロクロ成形	外面肩部と口縁部内面に自然釉かかる。
10-5	土師器 甕 口～頸部 ^{1/10}	(24.0)	—	—	良好	淡褐色	密	外 口辺部 ナデ 胴部 ヘラケズリ 内 口辺部 ナデ 胴部 ヘラナデ	
11-1	土師器 坏? 底部の ^{3/5}	—	7.0	—	良好	茶褐色	密	外 ヘラケズリ 内 粗いヘラナデ	
11-2	土師器 甕 底部の ^{1/10}	—	(9.0)	—	良	茶褐色	砂粒多く含む	外 ヘラケズリ 内 粗いヘラナデ	
12-1	土師器 甕 口縁部の ^{1/3}	(20.4)	—	—	良	茶褐色	微砂粒若干含む	外 ナデ 内 ナデ	
12-2	土師器短頸壺 口～肩 ^{2/3} 肩～胴欠 胴～底 ^{1/3}	12.6	9.4	(13.0)	良好	赤茶褐色	茶褐色砂粒含む	外 口縁部 ナデ、胴部ヘラケズリ、後ミ ガキ。底部ヘラケズリ。 内 口縁部ナデ。胴部ヘラナデ	胴部に輪積痕を明瞭に残す。胎土に含まれ る茶褐色砂粒の影響で、色調が全体的に赤 い。
13-1	須恵器 甕	—	—	—	良好	青灰色	密	外 タタキ	13-2と同一個体
13-2	須恵器 甕	—	—	—	良好	青灰色	密	外 タタキ	13-1と同一個体



第33図 10・11・12・13号遺構出土遺物実測図

14号遺構（第34・35図、図版9）

位置と現況 B8グリッド北東部、12号遺構の東、15号遺構の北に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現状においては墳丘の存在は認められなかった。

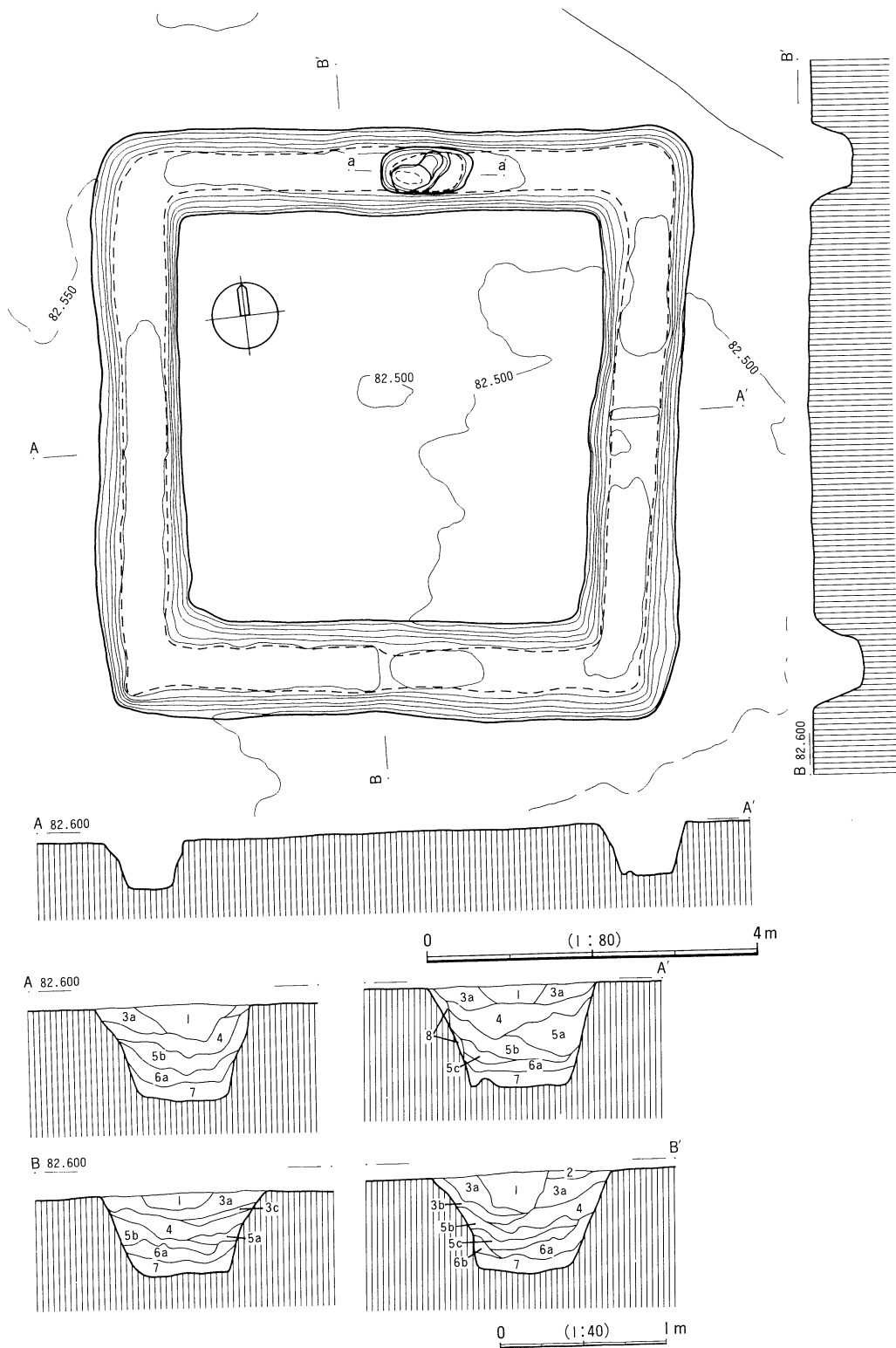
遺構 周溝及び方台部の平面形は、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。北側周溝及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西7.20m・5.20m、南北7.04m、4.88mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-7°-Eを示す。周溝は1~1.2mの幅で全周し、深さは50~60cmを測る。底面は北側周溝の中央部を除けば、ほぼ平坦であり、断面は逆梯形を呈している。ソフトローム層まで掘り込まれ、底面・側壁とも明瞭に検出されている。覆土最下層は、ローム土の中に黒色土を斑点状に含んだ暗褐色土層であり、人為的な整地を施したと考えられる土層である。覆土は自然堆積によって一度埋没した後、周溝全域にわたって掘り直しを施したと思われる土層が検出されている。土層断面によれば西・南側周溝の方が深く、北・東側周溝の方が浅い。規模は構築時よりも縮小され、幅40~60cm、深さは12~24cmを測る。覆土は全体的に粒が粗く、接している他の土層との区別も明瞭である。周溝内側の方台部は平坦であり、盛土及び内部施設の存在は認められない。北側周溝内中央部において、土壌1基が検出されている。

土壌 北側周溝内のほぼ中央、ソフトロームの溝底を直接掘り込んで存在する。周溝内覆土を完全に除去した後に初めてその存在を確認したものであり、本遺構に直接関係すると思われる。平面形は楕円形を呈し、底部は一段低くなっている。壁は西側がやや急激に立ちあがり、東側はややなだらかに立ちあがっている。長軸1.1m、短軸0.6m、深さは周溝底面より32cmを測る。覆土は、付近の周溝覆土に比べ、ローム粒・ロームブロックを多量に含んでおり、若干乱れており、人為的な埋土と考えられる。

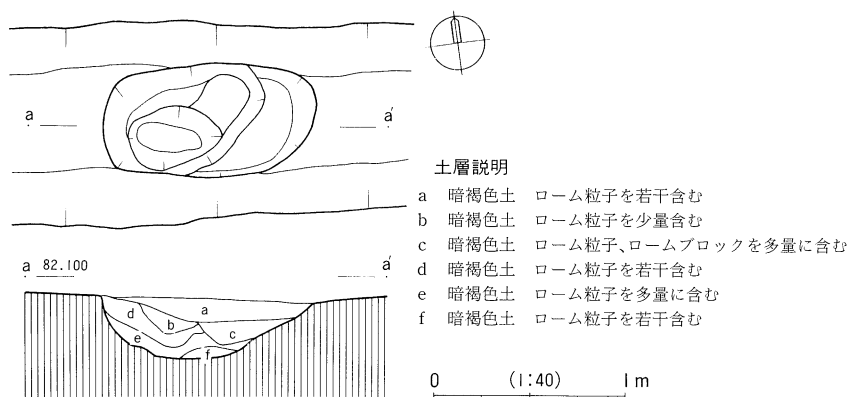
遺物 東側周溝覆土中より2点の土師器小破片が検出された他は皆無である。2点の土師器に関しては、あまりの小破片であり、図示は不可能であった。また、器種・器形等についての詳細についても不明である。

土層説明

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1 淡褐色土 全体的に粒子粗、ローム粒を斑点状に含む、接している2~3層との区別が明瞭 | 5a 暗褐色土 有機性強いがローム崩壊土の量も多く両者の区別が明瞭 |
| 2 黒褐色土 南溝のみに見られる、有機性強、ローム粒等はまったく含まない | 5b 暗褐色土 有機性強い土と、ロームが均一に混合 |
| 3a 暗褐色土 黒褐色土に褐色土を斑点状に含む、ローム粒をまばらに含む | 5c 暗褐色土 ロームの影響強くやや明るさ増す |
| 3b 暗褐色土 ロームの影響強く褐色土増す | 6a 黒褐色土 有機性の強いが、ローム粒も多く含む |
| 3c 暗褐色土 漸移的な層で有機性増す | 6b 黒褐色土 有機性がやや弱い |
| 4 暗褐色土 有機性強く、褐色土を斑点状に含む | 7 暗黄褐色土 ローム崩壊土中に有機質土を斑点状に含む |
| | 8 暗褐色土 ローム崩壊土をやや多量に含む |



第34図 14号遺構実測図 1



第35図 14号遺構実測図 2

15号遺構 (第36図、図版 9)

位置と現況 B 9 グリッド西南部、14号遺構の東南に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現状における墳丘の存在は認められない。

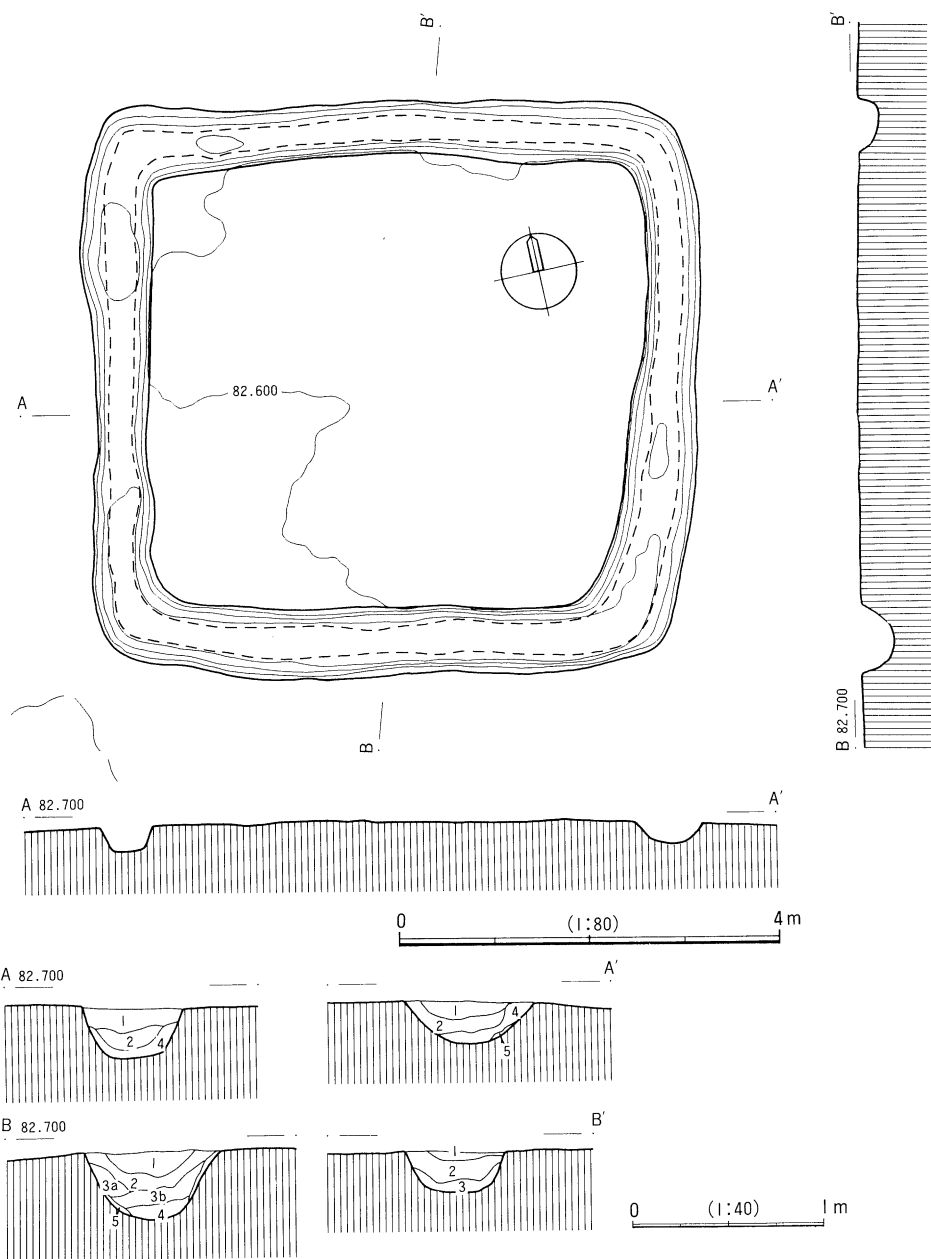
遺構 周溝及び方台部の平面形は隅丸方形を呈する。北側周溝及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西3.12・2.60m、南北2.92・2.20mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合の主軸方位をN-14°-Eを示す。周溝は60～80cmの幅で全周し、深さは南側周溝の36cmを最大とし、北・西・東側周溝は22cm前後を測る。全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、平面及び深さに影響を与えていると思われる。断面は浅いU字形を呈し、あまりしっかりしていない。南側周溝のみⅢ層上面（ソフトローム層）まで掘り込まれた他は、すべてⅡc層（自然堆積黒色有機質土層）中に掘り込まれている。方台部は平坦であり、盛土の存在及び内部施設は確認されない。溝底はゆるやかであり、土壌等の検出はない。

遺物 まったく検出されなかった。

16号遺構 (第37図、図版 9)

位置と現況 D 4 グリッド東側、22号遺構の北東、17号遺構の西に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現状における墳丘の存在は認められない。

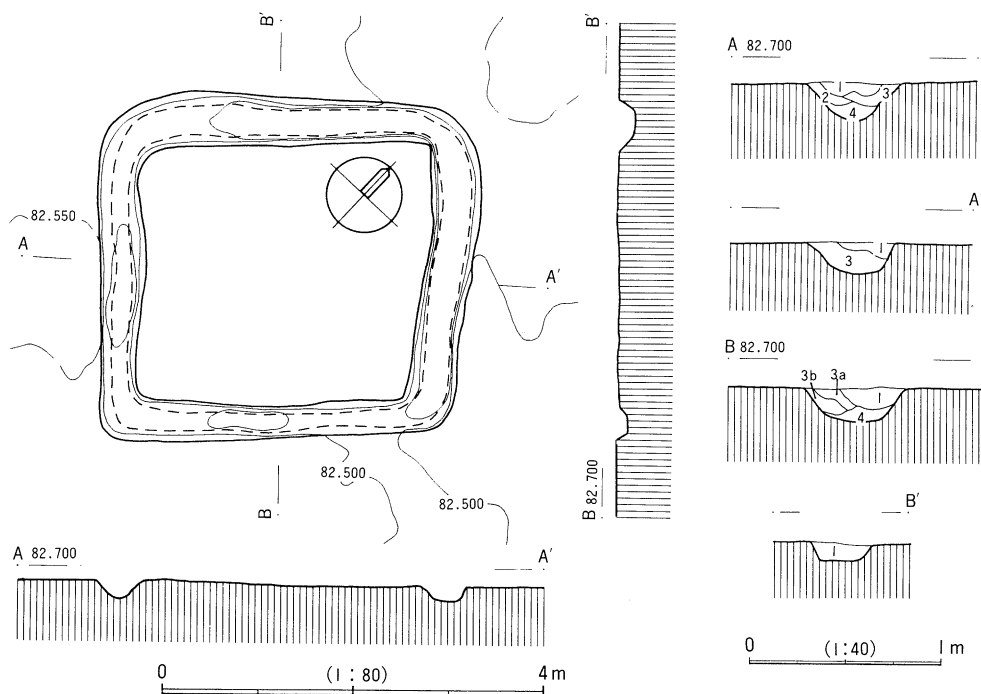
遺構 周溝及び方台部の平面形は、方台部が方形、周溝部は隅丸方形を呈する。北側周溝及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西3.84・1.56m、南北3.52・2.56mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合の主軸方位はN-37°-Wを示す。周溝は32～56cmの幅で全周する。深さは8～20cmで、全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、遺構の規模に影響を与えていると思われる。断面は逆台形を呈するが、しっかりしていない。Ⅱc層（自



土層説明

- | | | | |
|---------|-----------------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒、焼土粒をまばらに含む | 3b 暗褐色土 | 有機性が強く、3a層よりもロームの影響が少ない |
| 2 黒褐色土 | 有機質性強く、ローム粒等をほとんど含まない | 4 暗褐色土 | ローム粒及び新期テフラ崩壊土を多量に含む |
| 3a 暗褐色土 | 有機性強いが、ローム粒及び1~2cm大のロームブロックを全面に含む | 5 褐色土 | ローム粒を多量に含む |

第36図 15号遺構実測図



土層説明		3a	黒褐色土 淡褐色土を若干含む
1	黒褐色土 ローム粒若干含む	3b	黒褐色土 3aに似るが若干軟質
2	暗褐色土 淡褐色土が全体に散る	4	暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをまばらに含む

第37図 16号遺構実測図

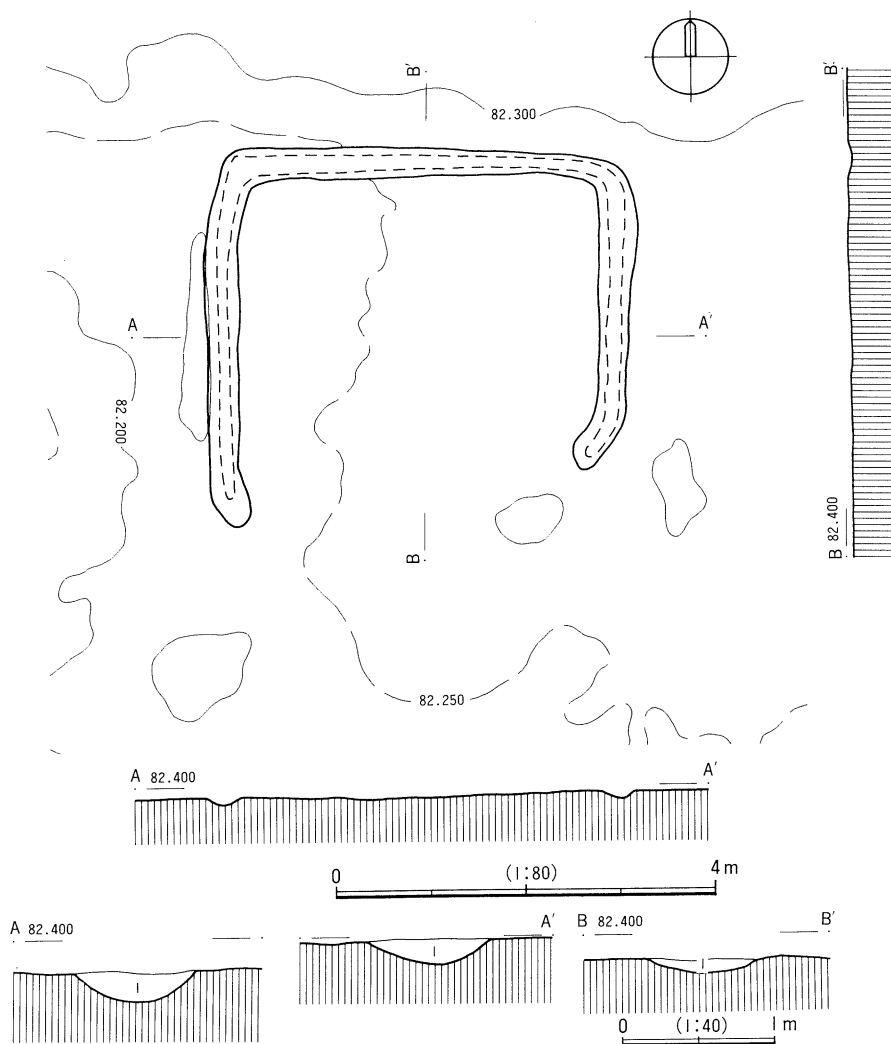
然堆積黒色有機質土層) 中に掘り込まれ、側壁・底面ともあまり明瞭ではない。方台部は平坦であり、盛土及び内部施設は検出されていない。溝底は、各周溝とも概して中央部付近が10cm程低くなっているか、土壌等の検出はない。

遺物 まったく検出されなかった。

17号遺構 (第38図、図版10)

位置と現況 D 5・6グリッドの中央部にまたがって存在する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現状における墳丘の存在は認められない。

遺構 確認面に対する遺構の掘り込みは浅く、全体に遺存状態は不良である。南側周溝は検出することができなかったが、構築時には方形を呈して全周していたものと思われる。現存する北側及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西4.32・3.68m、南北4.00・3.36mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合の主軸方位は、N-2°-Wを示す。周溝は30cm前後の幅で巡り、深さは8cm前後を測る。断面は浅いU字形を呈し、あまりしっかりと



- 土層説明
- 1 暗褐色土 新期テフラ崩壊土斑点状にまばらに含む。
ローム粒は少ない

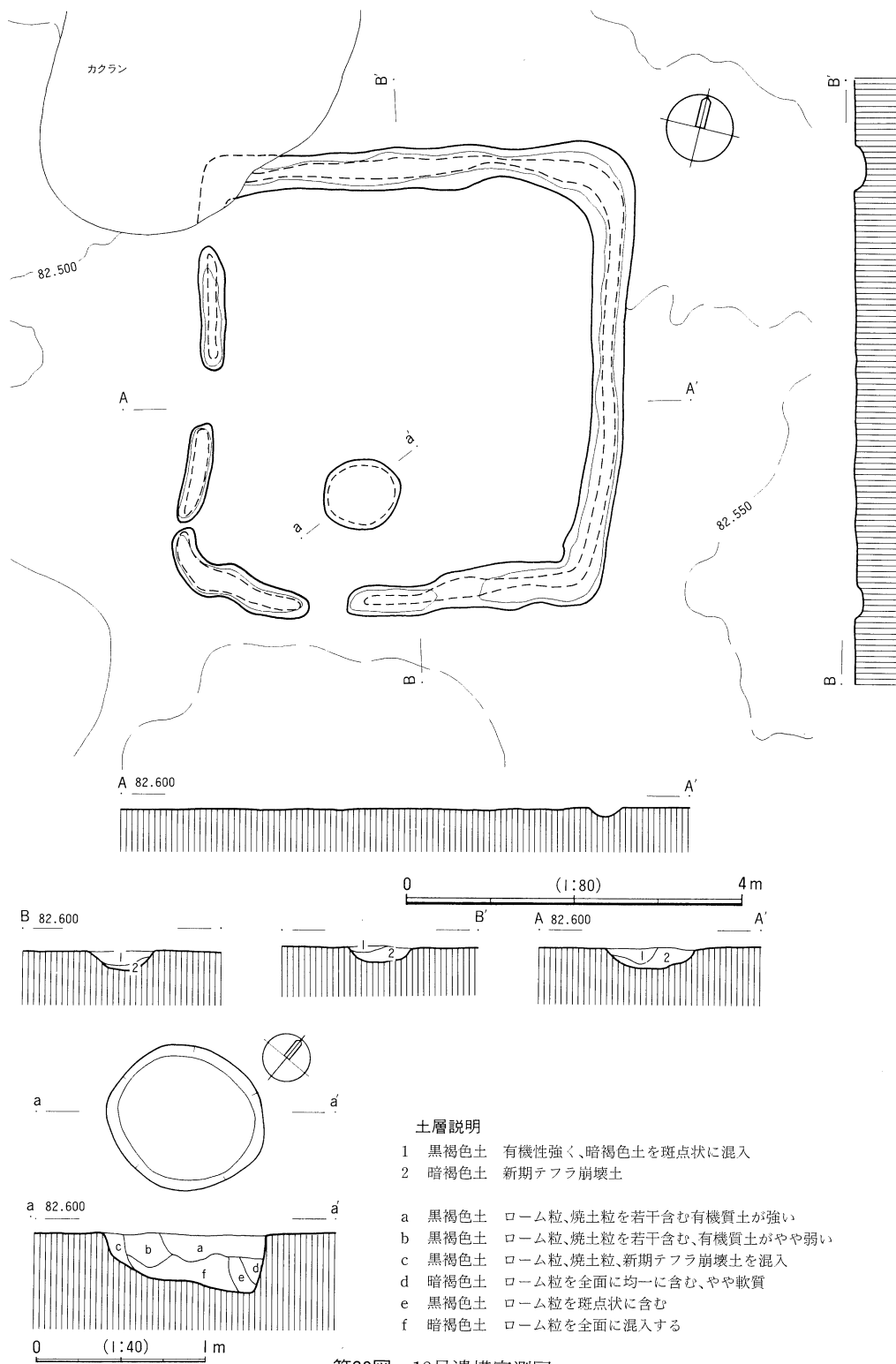
第38図 17号遺構実測図

掘り込まれていない。II b 層（新期テフラ層）中に掘り込まれ、側壁・底面ともあまり明瞭ではない。方台部はほぼ平坦であり、盛土の存在及び内部施設は検出されていない。溝底はなだらかであり、土壌等は検出されなかった。

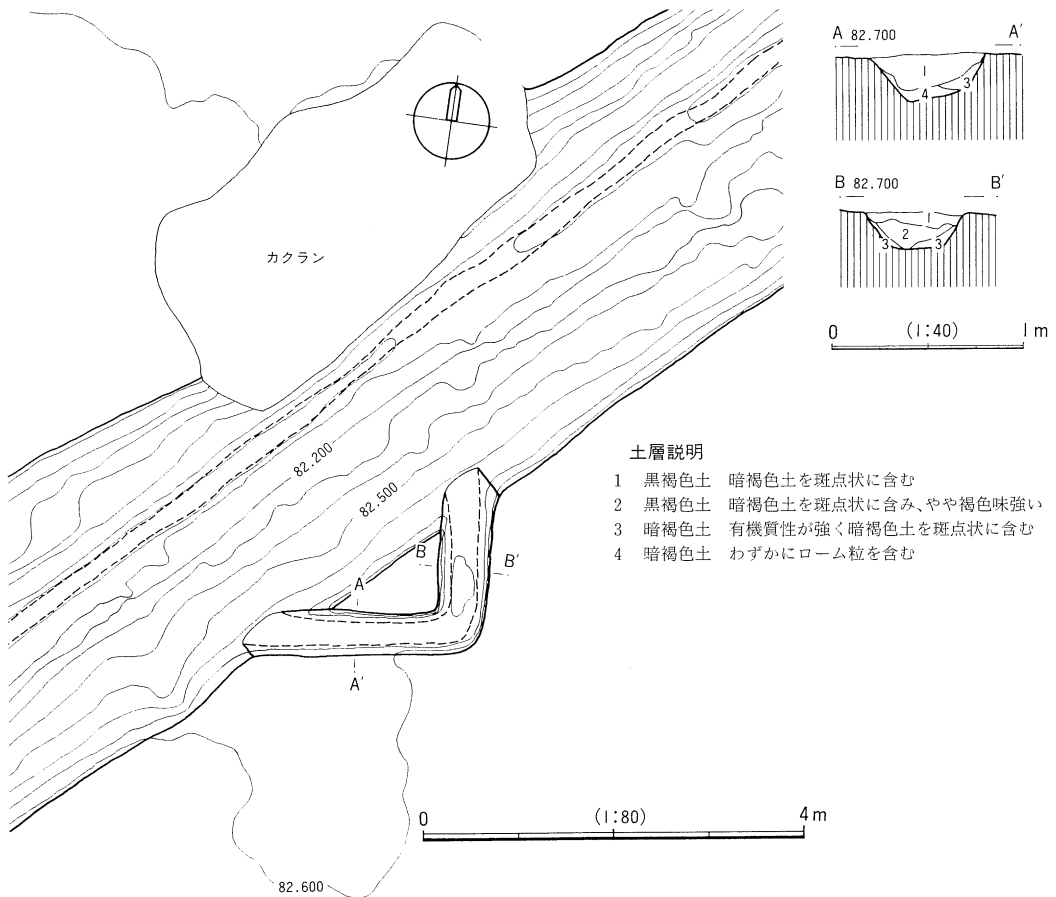
遺物 まったく検出されなかった。

18号遺構 （第39図、図版10）

位置と現況 D 7 グリッド北東部、23号遺構の北西に位置する。立地は標高 82.5 m 前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。



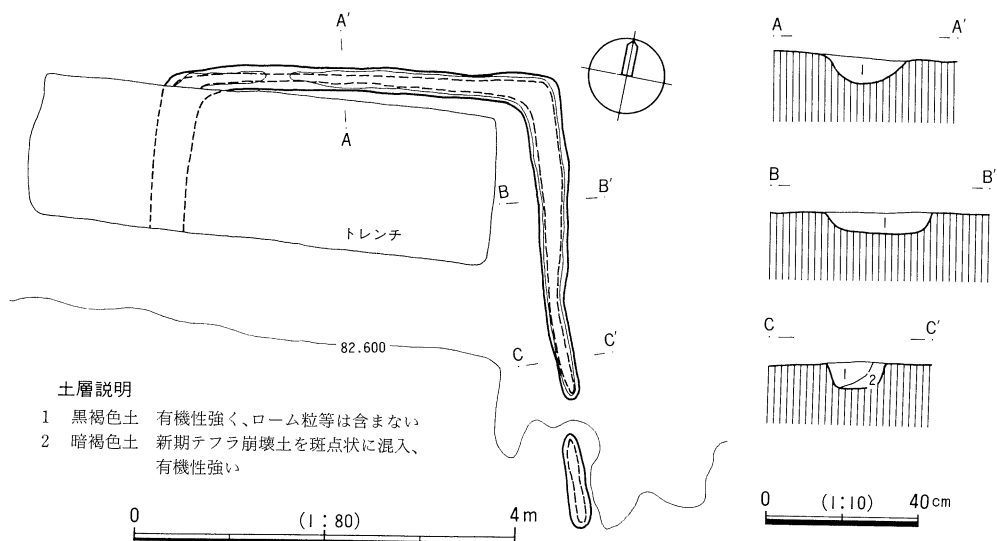
第39図 18号遺構実測図



第40図 19号遺構実測図

遺構 確認面に対する遺構の掘り込みは浅く、全体的に遺存状態は不良である。西・南側周溝は分断され、全周していないが、構築時は方形を呈し全周していたものと思われる。現存する東側及び南側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ南北5.44・4.32m、東西5.20・4.40mを測る。方台部南北辺の中心線を基準とした場合、主軸方位はN-11°-Wを示す。周溝は36~52cmの幅で、とぎれとぎれに巡る。深さは12cm前後を測る。断面はゆるやかなU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b 層(新期テフラ層)中に掘り込まれているが、側壁・底面とも明瞭ではない。溝底はなだらかであり、土壌等は検出されない。方台部はほぼ平坦であり、盛土の存在は検出されないが、土壌1基を検出している。

土壌 方台部南側に位置する。平面は円形を呈する。規模はa~a'で94cm、深さは最大34cmを測り、II c 層(自然堆積黒色有機質土)中に掘り込まれている。覆土はローム粒・焼土粒を含み、人為的な埋土と考えられ、本遺構に直接関係するものと思われる。火葬骨等の検出を期待したが、土壌内からは何の遺物も検出されなかった。



第41図 20号遺構実測図

遺物 本遺構に伴う遺物は、まったく検出されなかった。

19号遺構 (第40図、図版11)

位置と現況 C 9 グリッド西南部、15号遺構の南、20号遺構の北に位置する。立地は標高82.8m前後の台地の平坦面である。現況においては墳丘の存在は認められなかった。

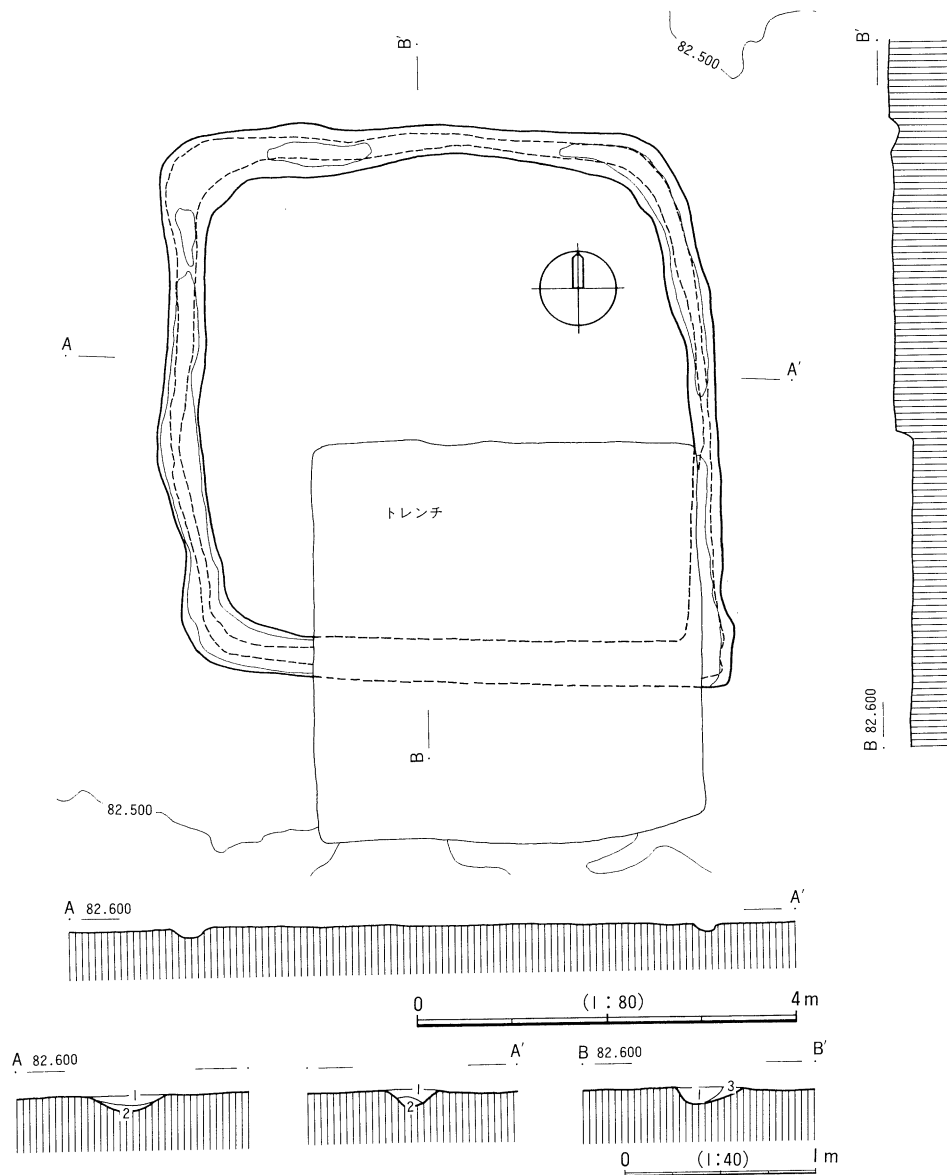
遺構 46号遺構によって大部分が破壊されており、遺存状態は不良である。現存する東側及び西側周溝の外縁径・内縁径の規模は、それぞれ南北1.60・1.28m、東西2.32・1.60mを測る。46号遺構北側に対応するコーナー付近が検出されていないことから、1辺2.50m前後の規模で巡る方形を呈していたものと推察される。周溝は幅56cm、深さは24cm前後を測り、断面は逆梯形を呈している。ソフトローム層上面まで掘り込まれ、底面・側壁とも明瞭に検出されている。覆土は自然堆積の状況を示す。

遺物 本遺構に伴う遺物は、まったく検出されなかった。

20号遺構 (第41図、図版11)

位置と現況 D 9 グリッド西側、19号遺構の南、24号遺構の北に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現況においては墳丘の存在は認められなかった。

遺構 確認面に対する遺構の掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。確認調査時に西側周溝の一部を削平してしまい、周溝は分断され、全周していないが、構築時は方形を呈し全周していたものと思われる。現存する北側及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞ



土層説明

- 1 暗褐色土 有機質土中に新期テフラ崩壊土を斑点状に含む、焼土も若干含む
- 2 黒褐色土 有機質土を主体とする
- 3 暗褐色土 1層に近似するが、焼土粒を多く含む

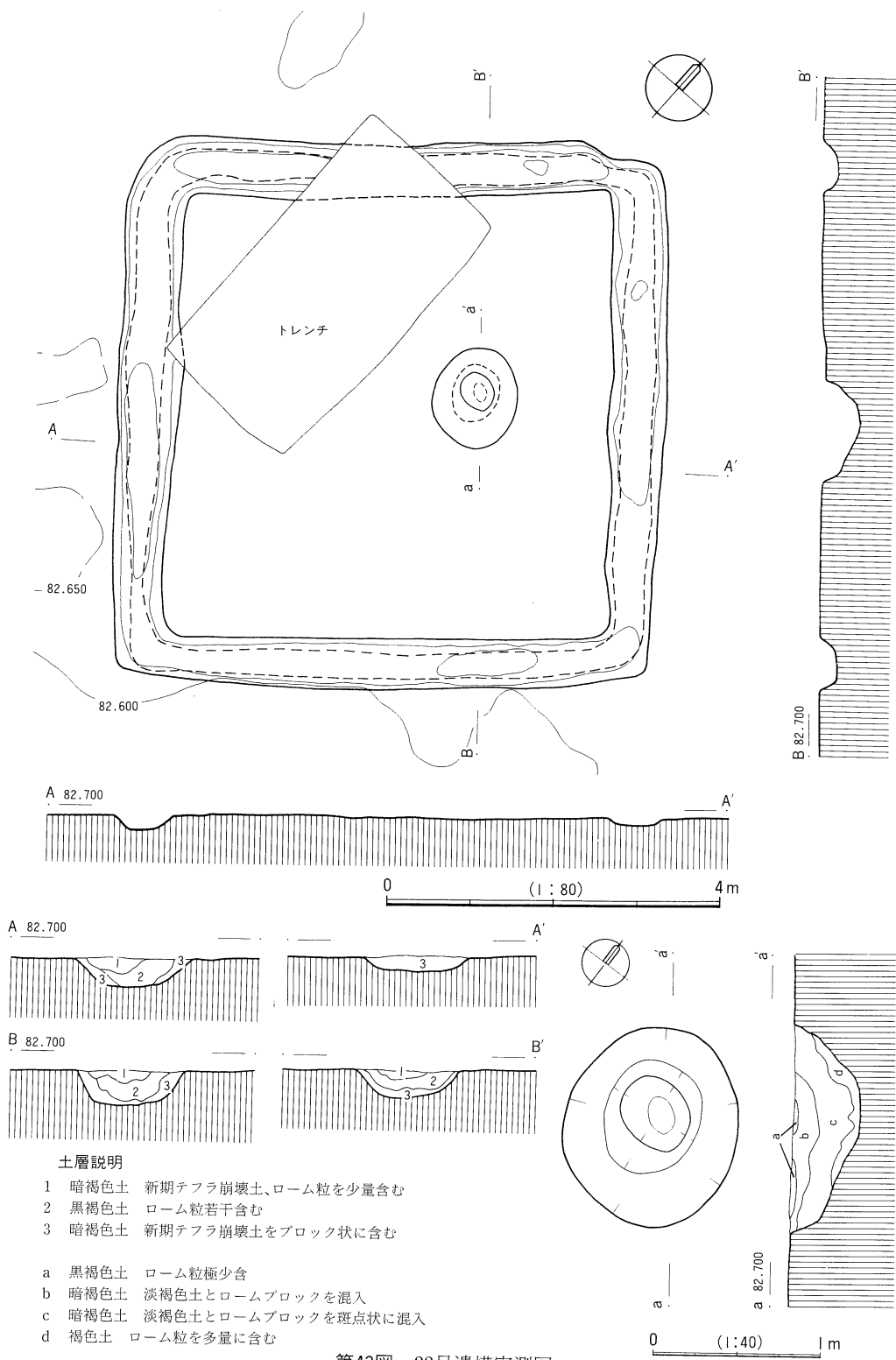
第42図 21号遺構実測図

れ東西4.28・3.04m、南北4.80・4.56mを測る。周溝は幅14~28cm、深さは8cm前後を測る。断面はなだらかなU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれているが、側壁・底面ともあまり明瞭ではない。

遺物 まったく検出されなかった。

21号遺構 （第42図、図版12）

位置と現況 D 9・10グリッドの中央部にまたがって存在する。立地は標高82.5m前後の台



第43図 22号遺構実測図

地の平坦面である。現況においては墳丘の存在は認められなかった。

遺構 確認面における遺構の掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。確認調査時に南側周溝の一部を削平してしまったが、構築時における遺構平面形は隅丸方形を呈していたものと思われる。北側及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西 $5.36 \cdot 4.32\text{m}$ 、南北 $5.60 \cdot 4.40\text{m}$ を測る。方台部南北辺の中心線を基準とした場合、主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ を示す。周溝は幅 $24 \sim 40\text{cm}$ 、深さ 8cm を測る。断面はゆるやかなU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b 層（新期テフラ層）中に掘り込まれるが、側壁・底面ともやや明瞭さを欠く。溝底はなだらかであり、土壌等は検出されていない。方台部はほぼ平坦であり、盛土及び内部施設の存在は認められない。

遺物 まったく検出しなかった。

22号遺構 （第43図、図版12）

位置と現況 D・E 5 グリッドにまたがって存在する。立地は標高 82.5m 前後の台地の平坦面である。現況においては墳丘の存在は認められなかった。

遺構 周溝及び方台部の平面形は、北コーナー部分を除けば、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。西側及び南側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ南北 $6.48 \cdot 5.36\text{m}$ 、東西 $6.48 \cdot 5.36\text{m}$ を測り、ほぼ正方形に近い。方台部南北辺中心線を基準にした場合、主軸方位は $N-41^{\circ}-E$ を示す。周溝は 65cm 前後の幅で全周し、深さは $10 \sim 20\text{cm}$ を測る。溝底は各周溝とも概して中央部付近が 10cm ほど低くなっており、断面は逆台形を呈している。II c 層（自然堆積黒色有機質土）中に掘り込まれており、確認面に対する遺構の掘り込みは浅いが、側壁、底面とも明瞭に検出されている。覆土は自然堆積の状況を示し、周溝内に土壌等の検出はない。方台部は平坦であり、盛土の存在は認められなかったが、土壌 1 基を検出している。

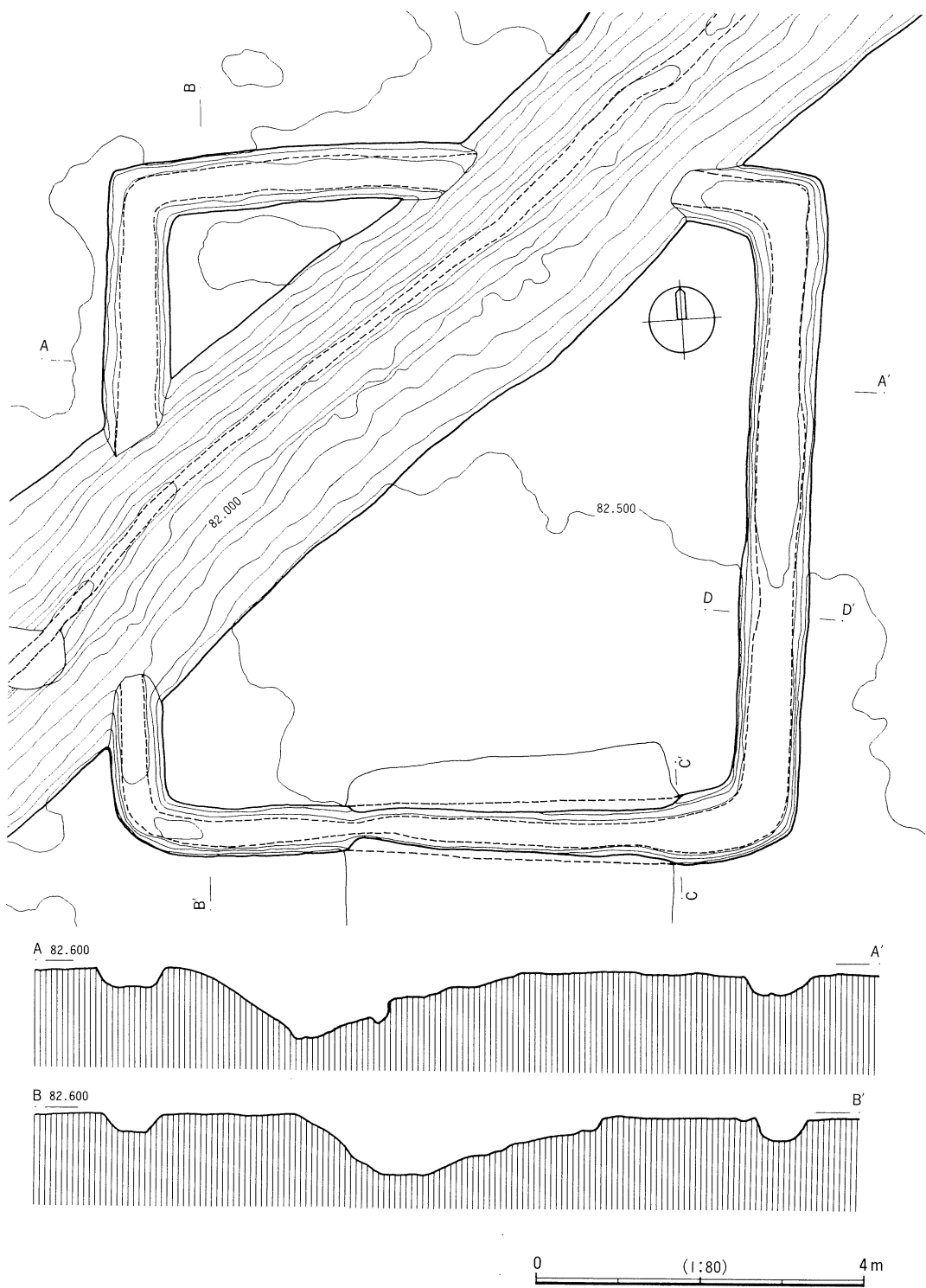
土壌 方台部中央よりやや東側に位置する。平面は円形を呈する。規模は $a \sim a'$ で 1.2m 、深さは 40cm を測り、II d 層（ローム漸移層）中に掘り込まれている。覆土はローム粒・ロームブロックを含んでおり、人為的埋土の可能性が強く、本遺構に直接関係するものと思われる。

遺物 まったく検出されなかった。

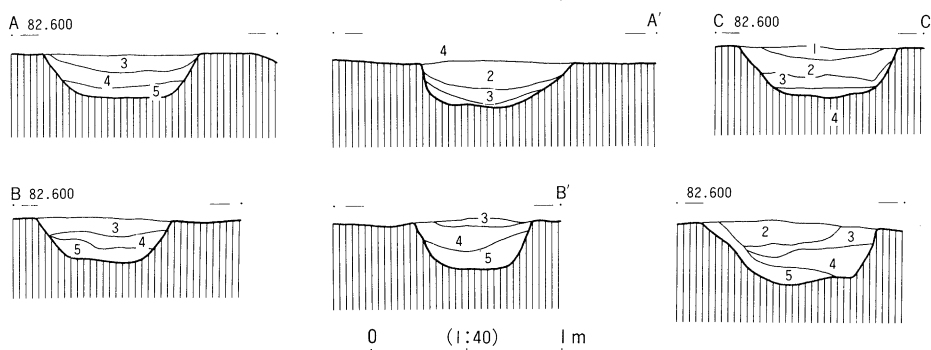
23号遺構 （第44・45図、図版13）

位置と現況 D 7・8 グリッドにまたがって存在し、18号遺構の南、24号遺構の西に位置する。立地は標高 82.5m 前後の台地の平坦面である。現況においては、墳丘の存在は認められなかった。

遺構 46号遺構によって遺構の $1/3$ 近くを破壊されており、遺存状態は不良である。周溝



第44図 23号遺構実測図 1



土層説明

- 1 暗褐色土 新期テフラと有機質土の混合土層
- 2 黒褐色土 有機質土
- 3 暗褐色土 新期テフラ崩壊土と有機質土の混合土層
- 4 黒褐色土 有機性強く、ローム粒を若干含む
- 5 暗褐色土 ローム崩壊土と有機質土が分離したまま混合する

第45図 23号遺構実測図 2

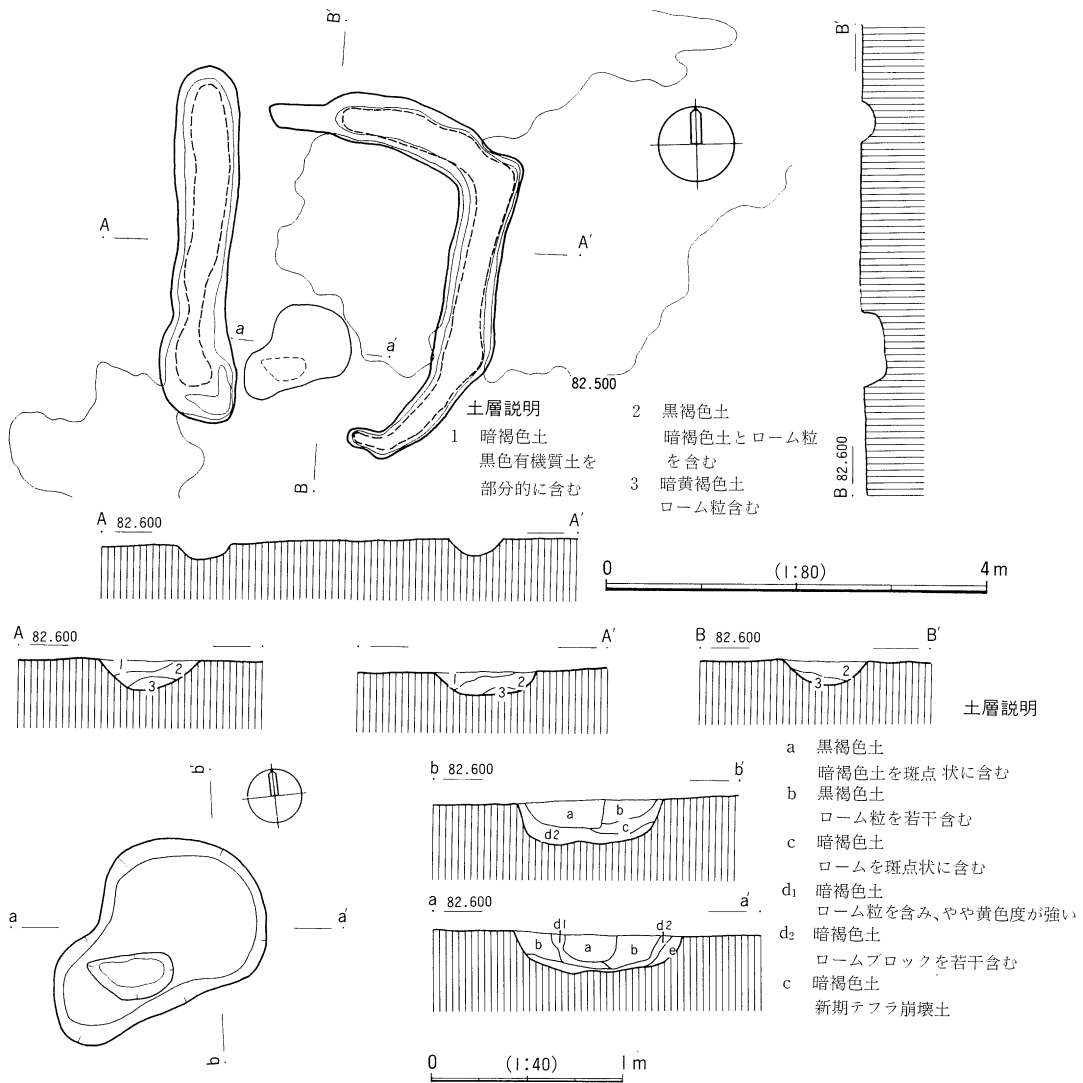
及び方台部の平面形は、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。北側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西8.96・7.20m、南北8.00・6.64mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合主軸方位はN-5°-Eを示す。周溝は64~92cmの幅で全周していたものと考えられ、深さは24~32cmを測る。II d 層（ローム漸移層）中まで掘り込まれ、断面は逆梯形を呈している。確認面に対する掘り込みは比較的浅いが、側壁、溝底とも明瞭に検出されている。覆土は自然堆積の状況を示し、周溝内からの土壌等の検出はない。方台部はほぼ平坦であり、盛土及び内部施設の存在は認められない。

遺物 遺構内からは何の遺物も検出されていない。46号遺構によって破壊された北側周溝付近に、須恵器長頸壺と土師器の破片数点が検出されたが、いずれも46号遺構覆土中からのものであり、当遺構に直接関係するかどうか不明である。詳細は46号遺構出土の遺物を参照されたい。

24号遺構 (第46図、図版13)

位置と概況 D 8・9 グリッドにまたがって存在し、23号遺構の東、20号遺構の南に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 確認面に対する遺構の掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。北側及び南側周溝は分断され、全周していないが、構築時においては不整な方形を呈しながらも全周していたものと思われる。現存する北側及び西側周溝における外縁径の規模は、それぞれ東西2.8m、南北3.8mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位は、N-11°-Eを示す。周溝は西側周溝を除けば、幅、深さとも一定ではなく、規模における数値の上下が激しい。西側周溝に



第46図 24号遺構実測図

おける周溝幅は52cm、深さは16cmを測る。II c 層（自然堆積黒色有機質土層）中に掘り込まれ、断面はゆるやかなU字形を呈する。側壁、溝底は各周溝によってまちまちであるが、概して不明瞭である。覆土は自然堆積の状況を示し、周溝からの土壌等の検出はない。方台部はほぼ平坦であり、墳丘の存在は認められないが、土壌1基を検出している。

土壌 方台部南側に位置する。平面は不整な瓢箪形を呈する。規模はa～a'で92cm、b～b'で76cm、深さは最大28cmを測るがテラス部分における深さは20cm前後である。覆土はローム粒

と黒色有機質土の混合土層であり、覆土中より縄文土器小破片 1 点を検出しているが、図示不可能である。人為的な埋土の可能性もあり、本遺跡における他の遺構の検出状況から、当遺構に伴うものと判断したが、詳細は不明である。

遺物 土壌内より縄文土器小破片 1 点を検出した以外は、まったく検出されなかった。

25号遺構 (第47図、図版14)

位置と概況 E 9 グリッド東側、21号遺構の南に位置する。立地は標高82.3m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 平面形は、東側周溝部分が若干ゆがむ隅丸方形を呈する。確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。南側周溝及び西側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西4.40・3.60m、南北8.16・3.44mを測る。方台部南北辺の中心線を基準とした場合、主軸方位はN-13°-Wを示す。周溝は東側周溝の一部を除けば、40~56cmの幅で全周する。深さは8cm前後を測る。断面はゆるやかなU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b 層（新期テフラ層）中に掘り込まれ、側壁、底面とも明瞭に検出されている。溝底はなだらかであり、土壌等の検出はない。方台部はほぼ平坦であり、盛土の存在は認められないが、土壌 1 基を検出している。

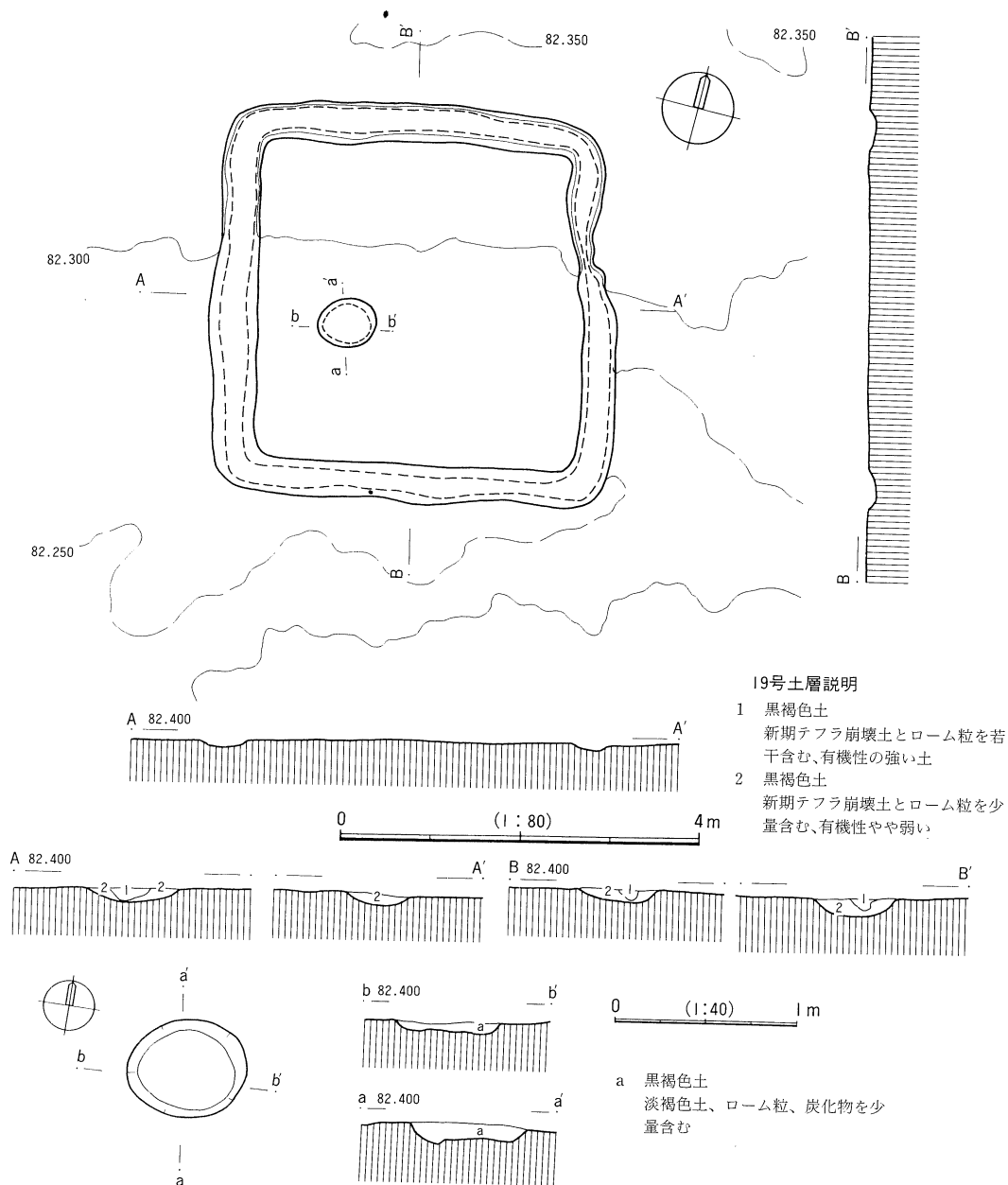
土壌 方台部西側に位置する。平面はほぼ円形を呈する。規模はa~a'で46cm、b~b'で66cmを測り、東西方向が若干長い。深さは約10cmを測り、底面はほぼフラットである。覆土に炭化物を混入し、人為的な埋土と考えられることから、本遺構に直接関係するものと思われる。

遺物 まったく検出されなかった。

26号遺構 (第48・49図、図版14・15)

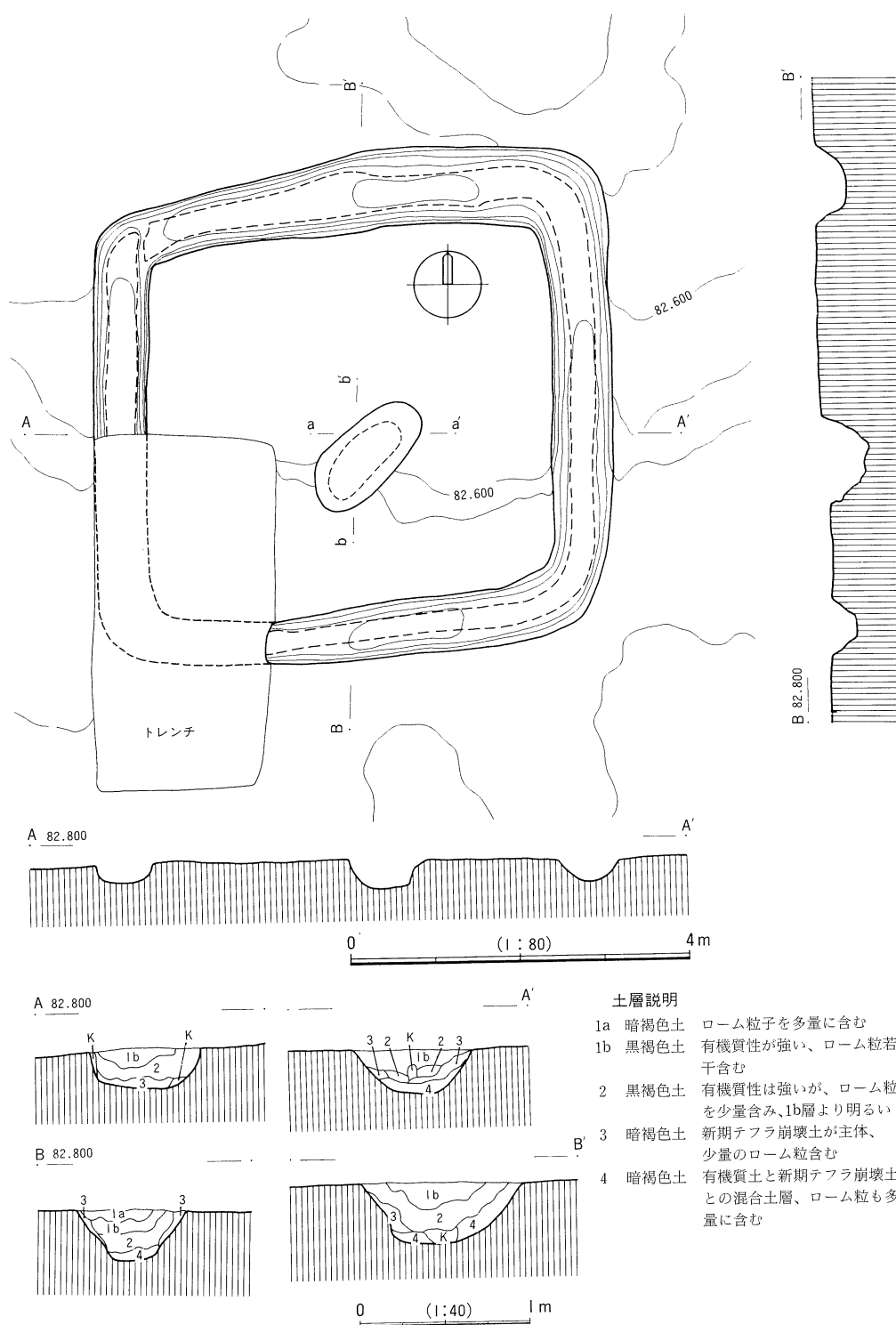
位置と現況 E・F 3 グリッドにまたがって存在する。立地は標高82.6m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 確認調査のトレンチによって、西南部を破壊してしまったが、構築時には、周溝、方台部とも、方形を呈し全周していたものと思われる。北側及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西6.0・4.64m、南北5.52・4.08mを測る。方台部南北辺の中心線を基準とした場合、主軸方位はN-1°-Eを示す。現存する周溝は幅64~96cm、深さは24~36cmを測り、北側周溝が他に比べ、幅、深さとも大きな数値を示す。断面は逆梯形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。ソフトローム層上面まで掘り込まれ、側壁、底面とも明瞭に検出されている。溝底は各周溝とも中央部が若干低い他は、ほぼ平坦であり、土壌等の落ち込みは検出されない。方台部は北側が若干高いが、ほぼ平坦である。盛土の存在は認められないが、中央部

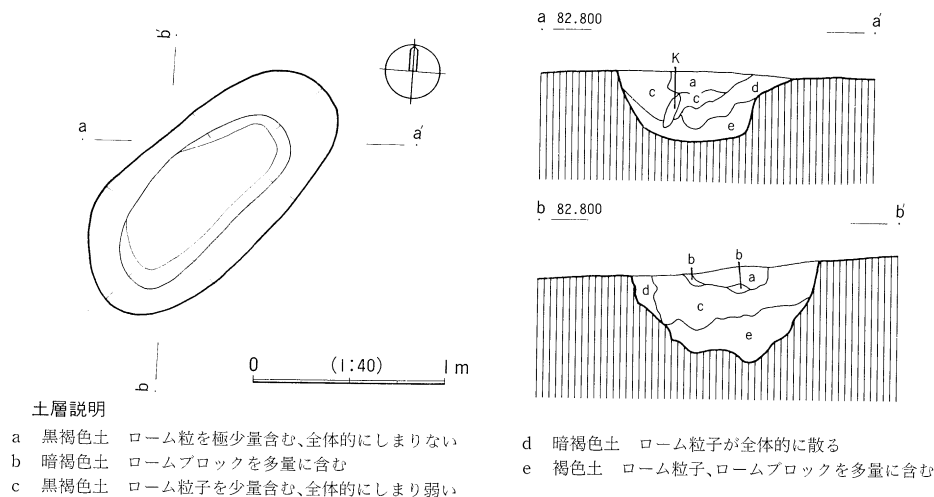


に土壌 1 基を検出している。

土壌 方台部ほぼ中央に位置する。平面は長楕円形を呈する。規模は長軸1.6m、短軸76cm、深さは52cmを測る。長軸方位はN-45°-Eを示す。ソフトローム層まで掘り込まれ、底面、側壁とも明瞭に検出された。覆土は黒色有機質土が主体となるが、全体的にローム粒を含み締りもやや弱い。人為的埋土と考えられ、当遺構に直接関係するものと思われる。



第48図 26号遺構実測図 1



第49図 26号遺構実測図 2

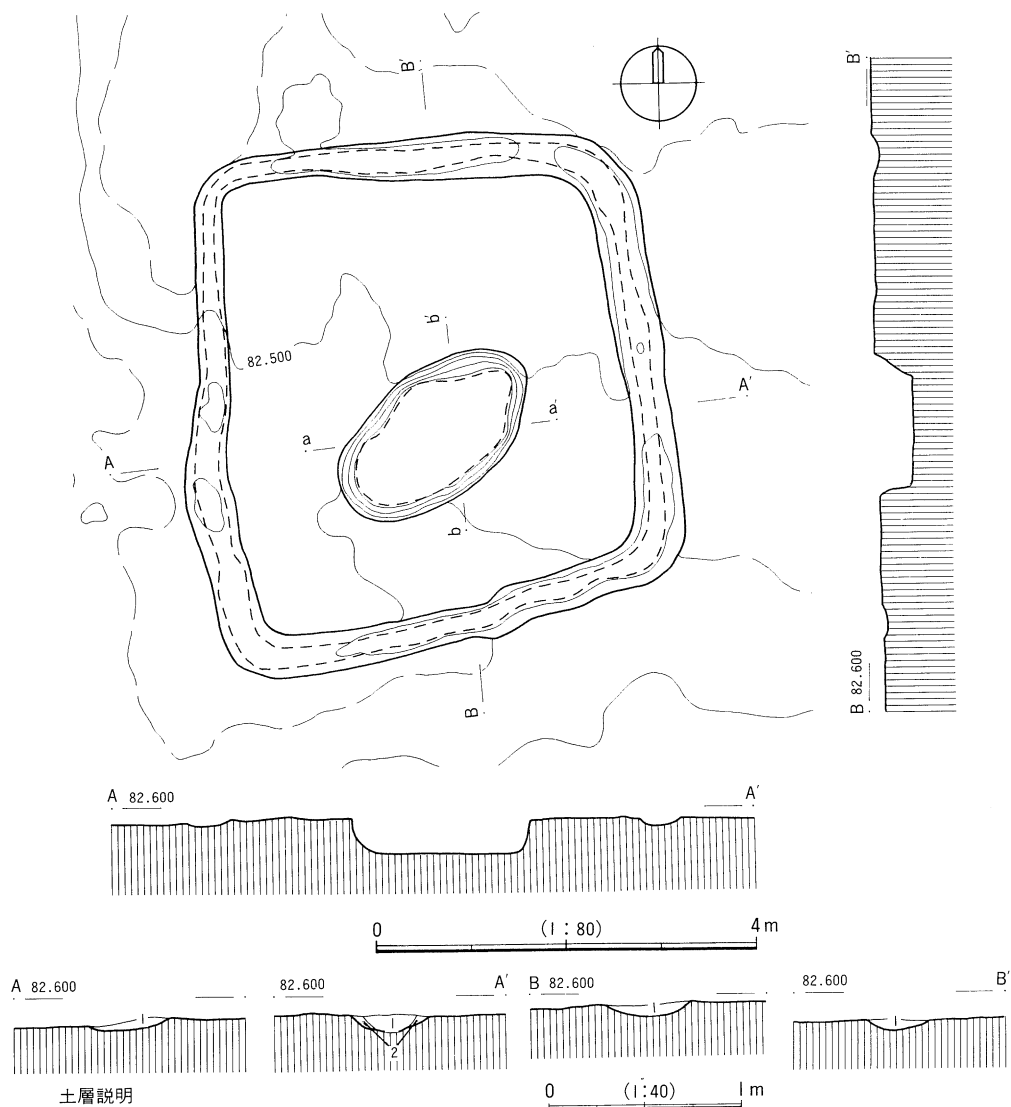
遺物 土壌内覆土上層より自然礫 2 点を検出したのみである。

27号遺構 (第50、51図、図版15・16)

位置と現況 F 5 グリッド北西部に位置する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 周溝及び方台部の平面形は、西側周溝がやや長い隅丸方形を呈する。北側及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西4.40・3.76m、南北4.48・3.76mを測る。方台部南北辺中心線を基準にした場合、主軸方位はN-5°-Wを示す。周溝は幅32~44cm、深さは6~10cmで全周するが、全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b 層(新期テフラ層)中に掘り込まれ、側壁・底面はやや不明瞭である。周溝内からは土壌等の落ち込みは検出されない。方台部はほぼ平坦であり、盛土の存在は認められない。中央部より内部施設と考えられる土壌 1 基を検出している。

内部施設 方台部ほぼ中央、II b 層(新期テフラ層)上面において検出されている。平面は楕円形を呈し、長軸2.44m、短軸1.24m、深さは36cmを測る。長軸方位はN-51°-Eを示す。ソフトローム層まで掘り込まれ、底面・側壁とも明瞭に検出されている。覆土は焼土粒、ローム粒を含み、明らかに人為的埋土である。覆土中及び底面より須恵器広口壺が細々になって検出されている。底面はほぼフラットであり、壁は明瞭に立ちあがっている。慎重に精査を行なったが、木棺痕は検出されていない。掘り込み、規模においても10号・11号遺構にみられる内部施設より劣っていることから、当初より木棺を使用しない土壌墓的な性格をもつものと考えられる。



土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒を若干含む
- 2 黒褐色土 新期テフラ崩壊土を若干含む

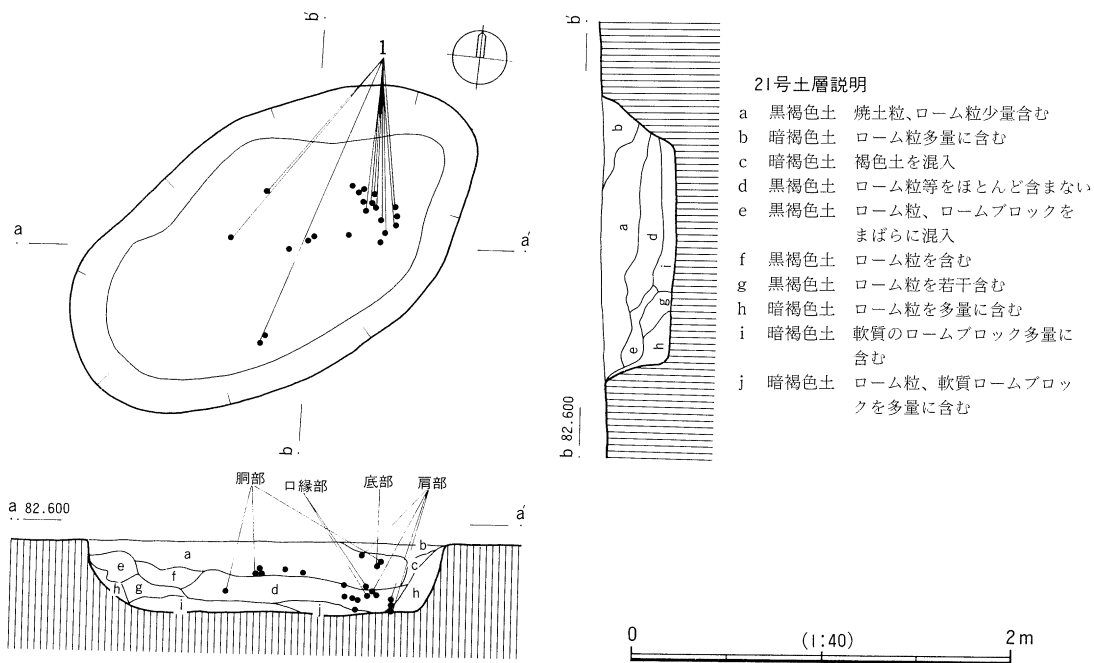
第50図 27号遺構実測図 1

遺物 (第52図、図版24)

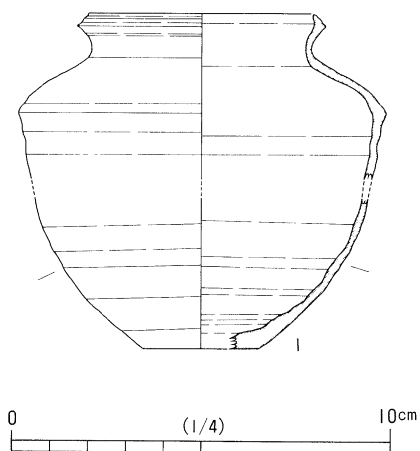
内部施設より須恵器広口壺 1 点を検出した。当初蔵骨器である可能性も考えたが、内部施設より火葬骨等の検出はなく、埋葬の際に意識的に埋納されたものであろう。周溝及び方台部内からは、何の遺物も検出されなかった。

28号遺構 (第53図、図版16)

位置と現況 F 8 グリッド北東部、29号遺構の西に位置する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められない。



第51図 27号遺構実測図 2

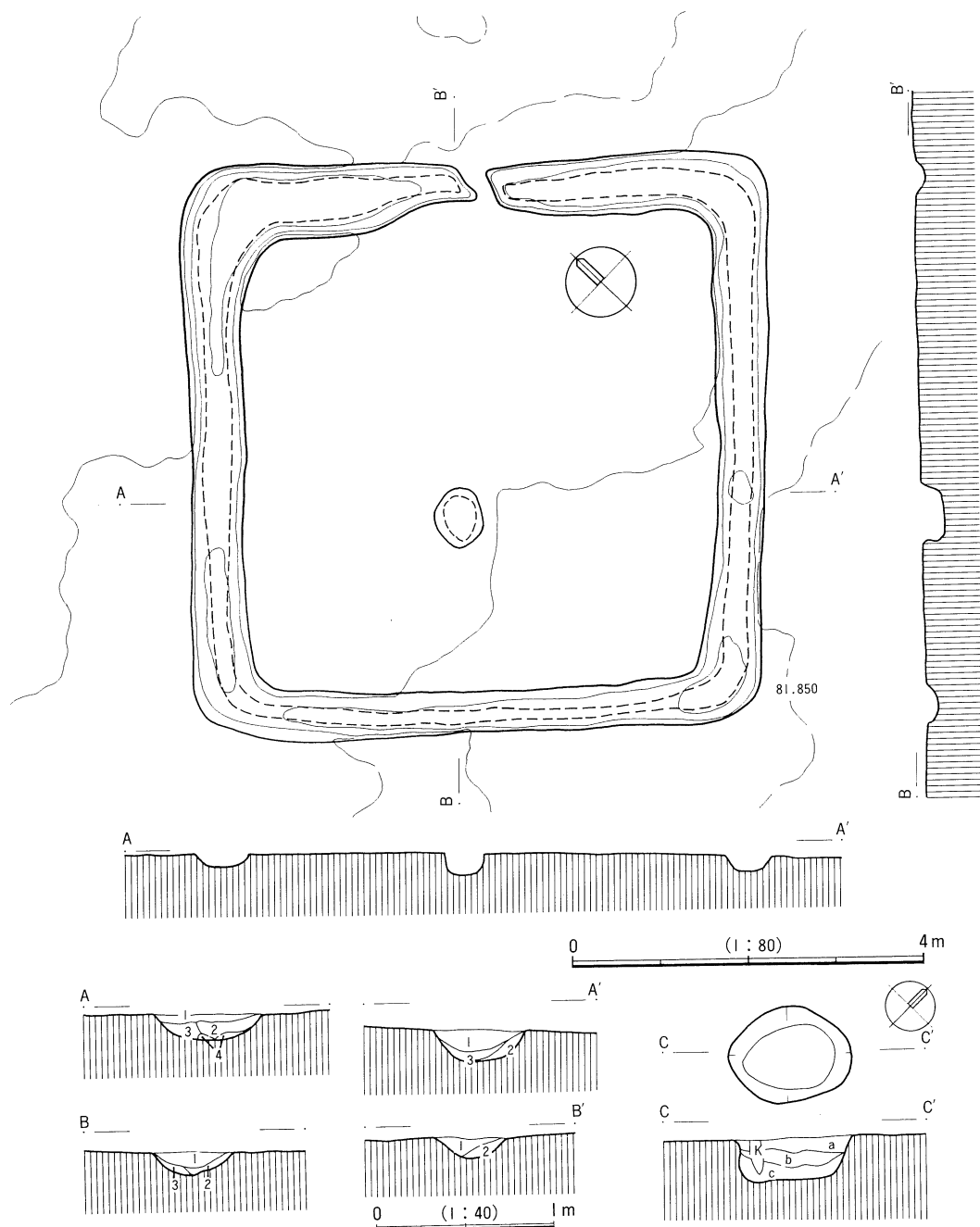


第52図 27号遺構出土遺物実測図

遺構 平面形は、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。南側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西6.48・5.04m、南北6.32・5.20mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-47°-Eを示す。周溝は幅48~80cm、深さは12~30cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。確認面に対する掘り込みは、南側に至るにしたがって浅くなっているが、II d~III層上面（ローム漸移層~ソフトローム層）まで掘り込まれ、側壁、底面とも明瞭に検出されている。北側周溝中

第5表 27号遺構出土遺物観察表

図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
1	須恵陶広口壺 口 径 20 頭~肩 13 脚~底 12	(10.0)	(6.0)	(18.0)	良好	青灰色	密	胴部下端回転ヘラケズリ 最大径は肩部 ロクロ成形	頭部~肩部に自然釉かかる。底部内面に自然釉。



土層説明

- a 暗褐色土 ローム粒を少量含み、若干の炭化物を含む
 b 暗茶褐色土 ローム粒及びロームブロックを多量に含む
 c 極暗褐色土 ローム粒を若干含む、有機性強

- 1 極暗褐色土 新期テフラ崩壊土を若干混入、有機性強い
 2 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を少量混入、有機性やや強
 3 暗茶褐色土 新期テフラ崩壊土を多量含む
 4 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を少量混入、有機性やや弱

第53図 28号遺構実測図

中央部は、構築時において意識的に掘り残されており、ブリッジ形成をしている。周溝内においては、いずれの周溝とも土壌等の落ち込みは検出されていない。方台部は南側に向かって、若

干の緩斜面を形成するが、盛土の存在は確認されない。中央部より西南よりに、土壌1基を検出している。

土壌 平面形は楕円形を呈している。規模は長軸72cm、短軸56cm、深さは24cmを測る。長軸方位はN-47°-Eを示し、方台部主軸と同じ方位を示す。ソフトローム層まで掘り込まれ、底面、側壁とも明瞭に検出されている。覆土はローム粒・ロームブロック及び炭化物等を含み、本遺構に直接関係するものと思われる。火葬骨等の検出を期待したが、土壌内からは、何の遺物も検出されなかった。

遺物 本遺構に伴う遺物は、まったく検出されていない。

29号遺構 (第54、55図、図版17)

位置と現況 F9グリッド北西部、28号遺構の東に位置する。立地は標高82.1m前後の台地傾斜変換面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

遺構 確認調査時のトレンチによって、北西コーナー付近を若干削平してしまったが、現存する遺構の平面形は、隅丸方形を呈している。東南部は緩斜面になっており、遺存状況はやや不良である。南側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西7.20・5.12m、南北7.36・5.84mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-24°-Wを示す。周溝は幅48～144cm、深さ16～48cmを測り、全体的に東南部分の緩斜面に至るにしたがい幅・深さとも減少しており、掘り込みも不明瞭となっている。北・西側周溝は、Ⅲ層（ソフトローム層）上面まで掘り込まれ、側壁・底面とも明瞭に検出されている。断面は、北側周溝が逆梯形を呈し、他は浅いU字形を呈している。覆土は自然堆積の状況を示し、周溝内には土壌等の落ち込みは検出されない。方台部は東南部に向かって緩斜面を形成するが、盛土の存在及び内部施設は検出されていない。

遺物 (第56図、図版24)

方台部及び東、南側周溝より土師器底部と、須恵器長頸壺の破片が検出している。このうち方台部において検出された須恵器長頸壺胴部の破片2点を除けば、すべて溝底より40cmぐらい浮いた状態で検出されている。方台部中央に須恵器長頸壺の破片が密着して検出されていることから、あるいは、この中央部に小規模な土壌等が存在していた可能性も考えられる。

30号遺構 (第57図、図版17)

位置と現況 G・H1グリッドにまたがって存在する。当遺跡における西端の方形周溝である。立地は標高82.3m前後の緩斜面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

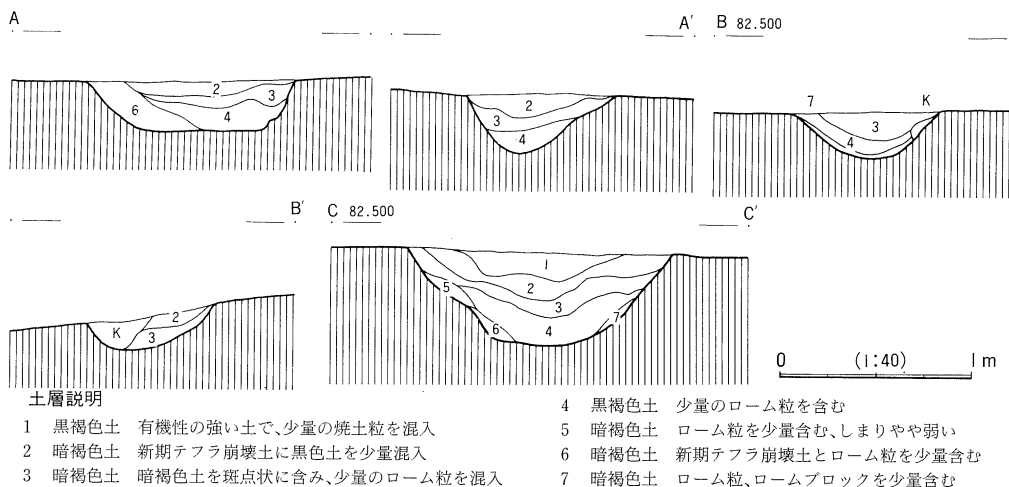
遺構 確認調査時のトレンチによって、東及び南側周溝の一部を削平してしまったが、全体



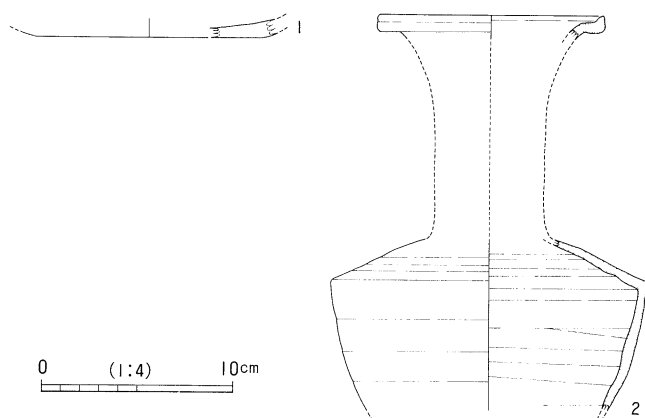
第54図 29号遺構実測図1

的に確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。周溝は分断され、全周していないが、構築時には方形を呈し全周していたものと推定される。北側周溝における外縁径の規模は5.84m、深さは最大12cmを測る。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれ、側壁、底面ともやや不明瞭である。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。北側周溝に見られる突出は、木根による攪乱である。方台部は南側に向って若干の緩斜面を形成するが、盛土の存在は確認されない。中央部よりやや東側に粘土を伴う土壌1基が検出されている。

土壌 平面形は楕円形を呈している。確認面はII b層（新期テフラ層）上面である。中央に



第55図 29号遺構実測図 2



第56図 29号遺構出土遺物実測図

白黄色粘土を配しており、規模は a～a'で80cm、b～b'で62cm、深さは14cmを測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。白黄色粘土と範囲は a～a'で34cm、b～b'で28cmを測り、厚さは4cm前後である。平面形は楕円形を呈している。

遺物 本遺構に伴う遺物は、まったく検出されなかった。

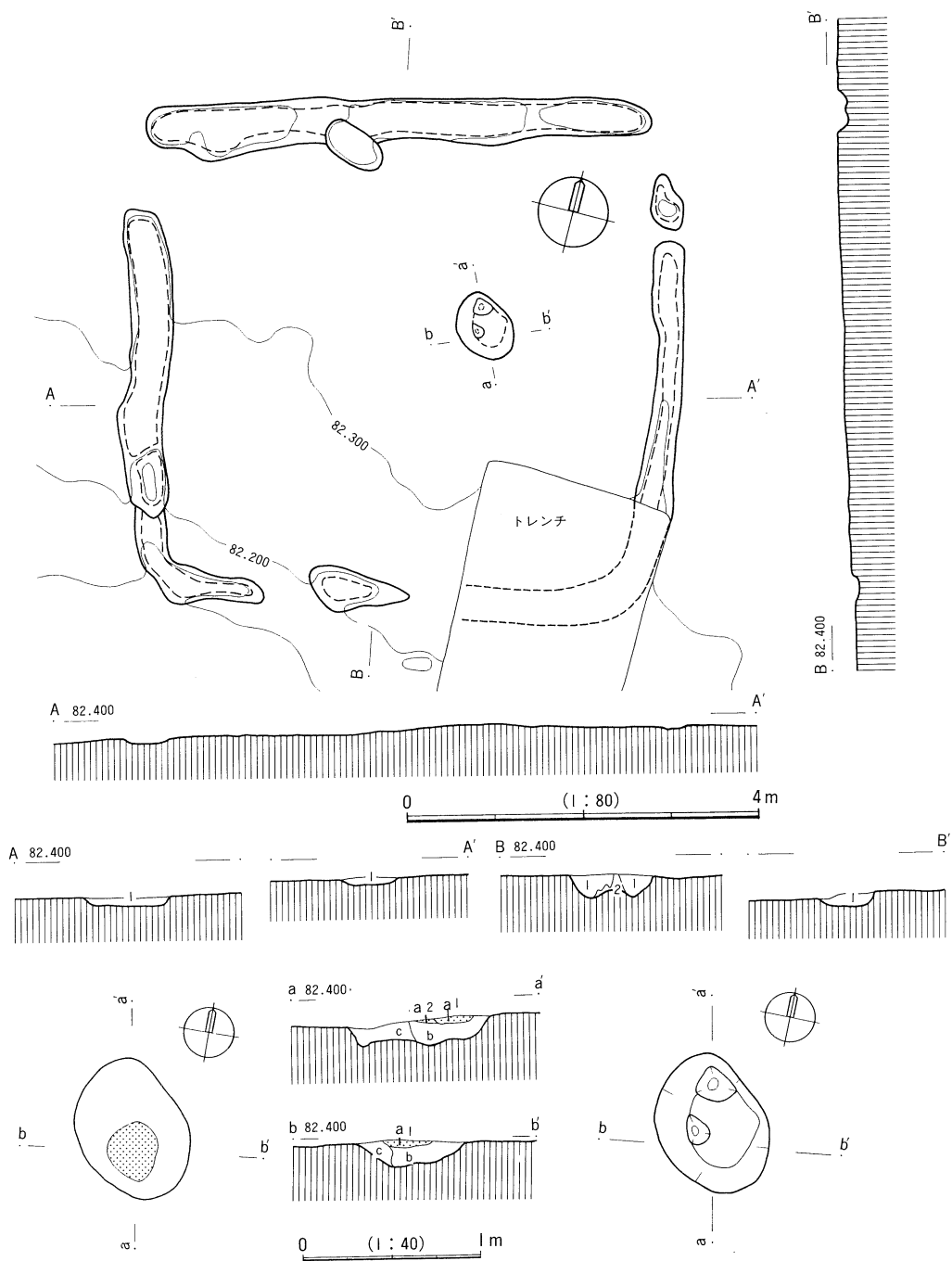
第 6 表 29号遺構出土遺物観察表

図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推 定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
1	土師器 甕? 底 20	—	(11.8)	—	良	茶 褐 色	密	外 ヘラケズリ 内 ヘラミガキ	
2	須恵器長頸壺	(11.9)	胴部最大 径(16.7)	—	良好	灰 色	密	肩部のはった胴部上位に最大径をもち、口 頸部は直立する。	肩部に自然軸かかる。

31号遺構 (第58図、図版18)

位置と現況 H 3 グリッドに存在し、32号遺構の南に位置する。立地は標高82.3m前後の台地の緩斜面から急斜面に移行する傾斜変換面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

遺構 現存する遺構の平面形はL字形を呈するが、構築時においては、周溝、方台部とも方形を呈し全周していたものと思われる。北側及び西側周溝における外縁径の規模は、それぞれ東西5.60m、3.20m、深さは28～36cmを測り、西側周溝の方が深い。断面はU字形を呈し、覆



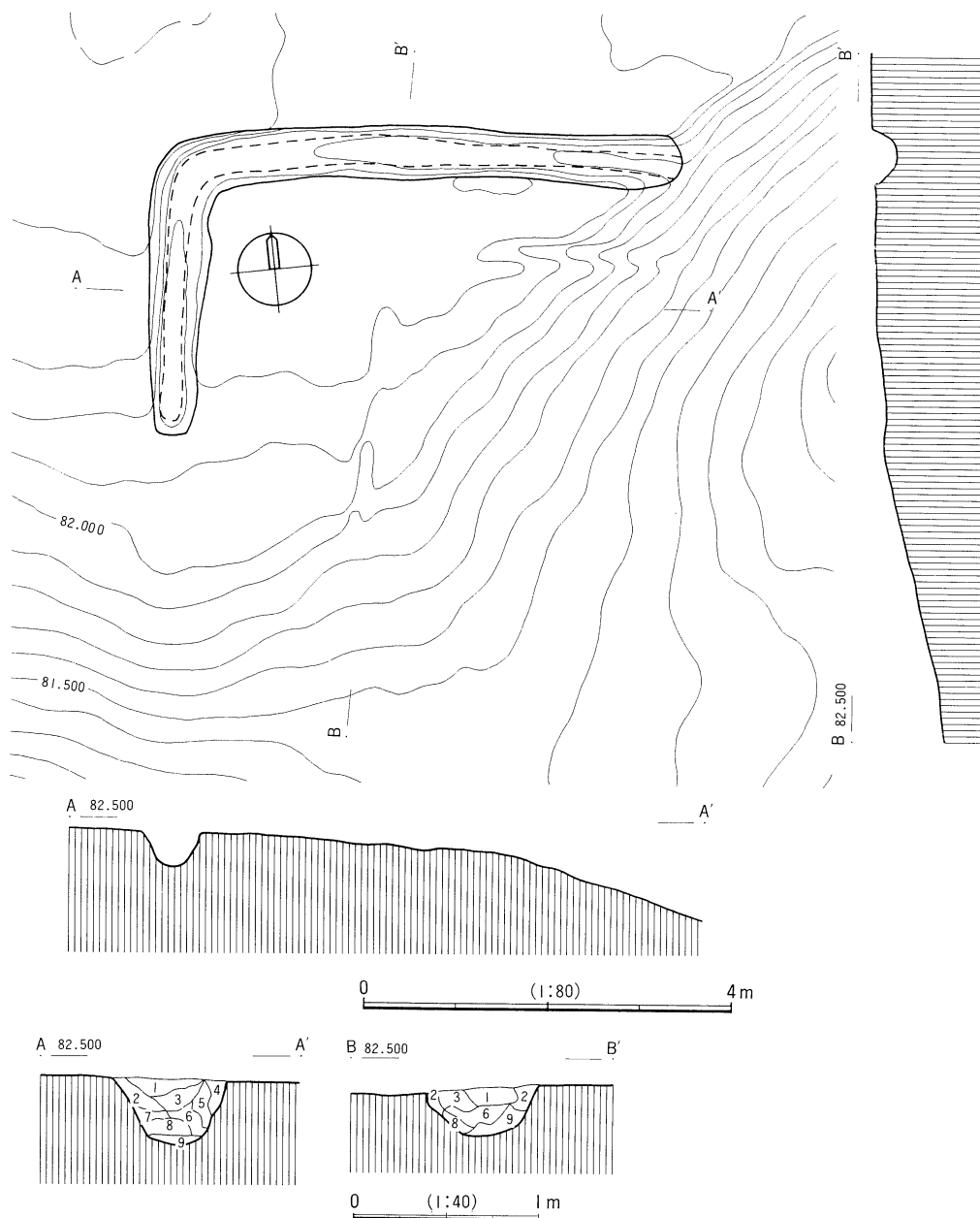
土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック若干含む
- 2 暗褐色土 新期テフラ崩壊土多量に含む、しまり弱

土層説明

- a1 白黄色土 砂質粘土
- a2 白黄色土 砂質粘土、aより砂っぽい
- b 黒褐色土 粘土ブロックをまばらに含む
- c 暗褐色土 粘土粒を少量含む

第57図 30号遺構実測図

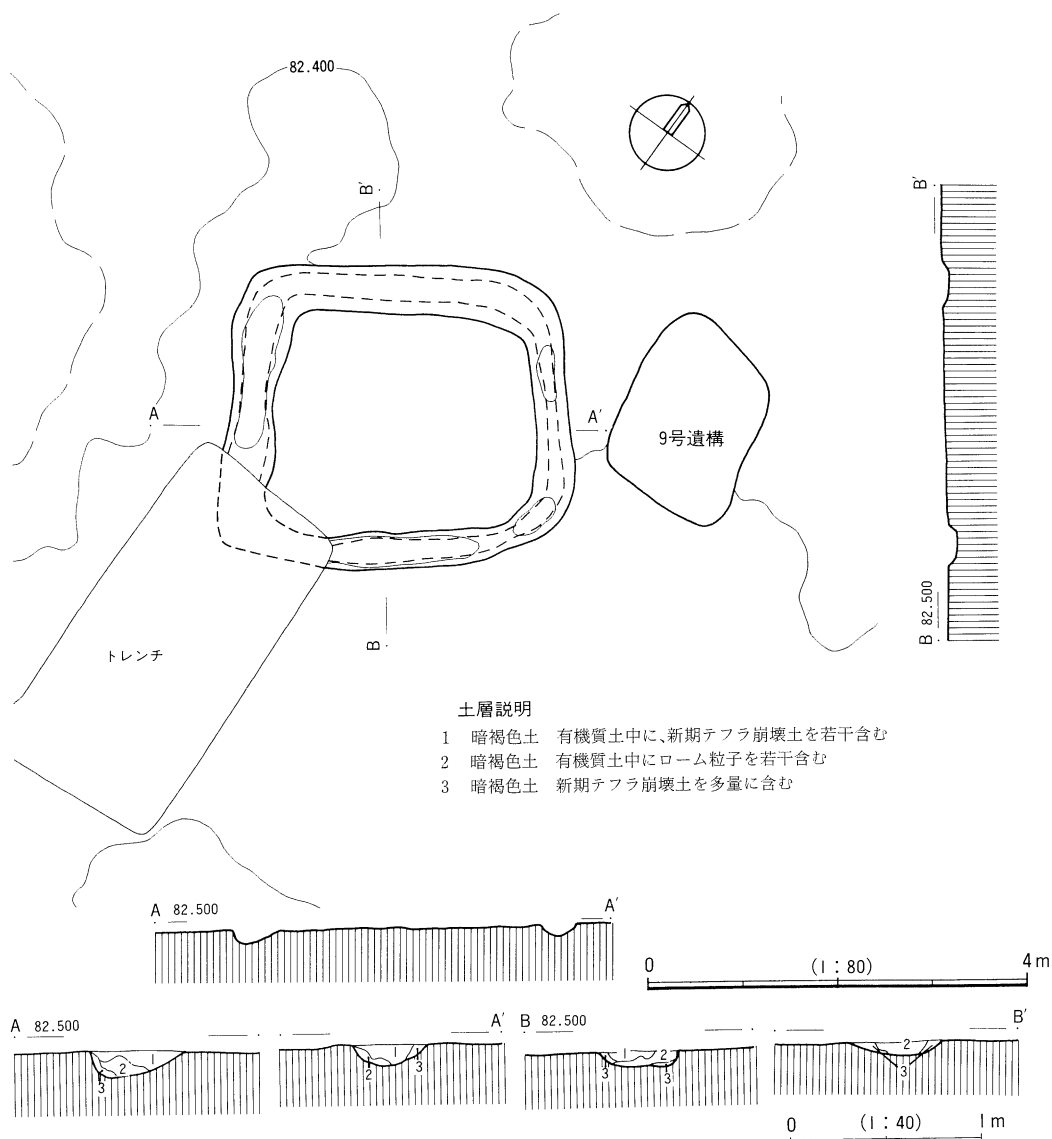


土層説明

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含み、少量のローム粒含む | 6 暗褐色土 ローム粒を多量に含む |
| 2 褐色土 新期テフラ崩壊土が全体に混入 | 7 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、⑥層よりやや明るい |
| 3 暗褐色土 有機質性がやや強く、新期テフラ崩壊土や若干混入している | 8 暗褐色土 ローム粒を斑点状に含む |
| 4 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を2~5cmのブロック状に多量に含む | 9 暗褐色土 ロームブロックを含む |
| 5 褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含み、ローム粒を少量含む | |

第58図 31号遺構実測図

土は自然堆積の状況を示す。溝底はほぼ平坦であり、土壌等の検出はない。方台部は大部分が流出しており、盛土及び内部施設等の検出はない。

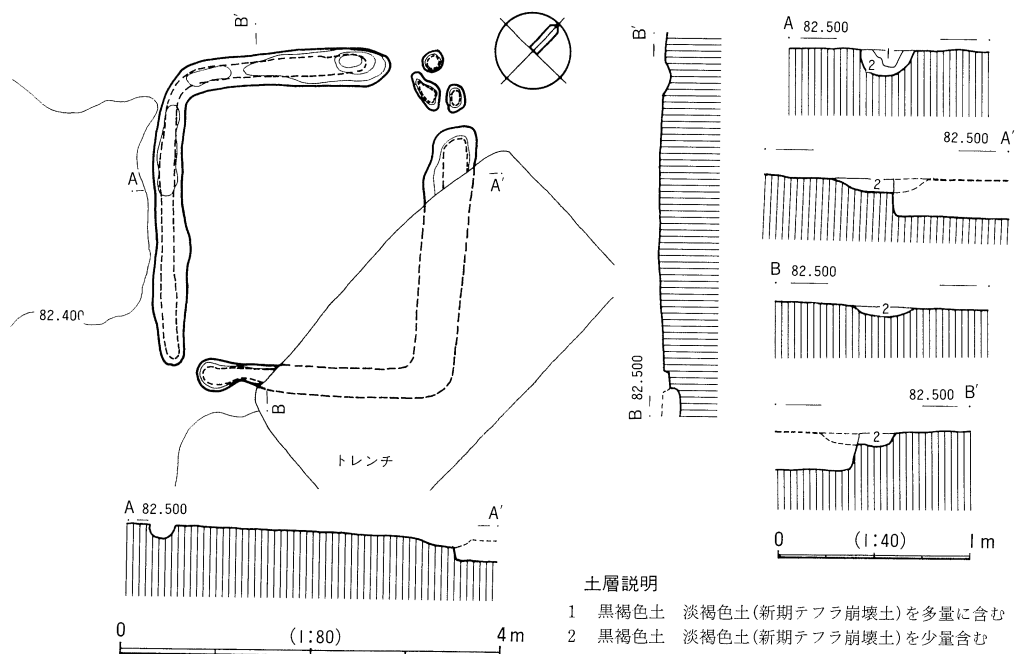


遺物 本遺構に伴う遺物の検出は皆無である。

32号遺構 (第59図、図版18)

位置と現況 G 3 グリッドに存在し、31号遺構の北に位置する。立地は標高台地の傾斜変換面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

遺構 確認調査時に南側コーナー部分を削平してしまったが、構築時には周溝、方台部とも方形を呈し全周していたものと考えられる。北側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西3.04・2.40m、南北2.56・1.84mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-35°-Wを示す。周溝は40～48cmの幅で全周していたものと思われ、



第60図 33号遺構実測図

深さは8～16cmを測る。全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状況は不良である。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれており、溝底はなだらかである。周溝内に土壌等は存在しない。方台部はほぼ平坦であり、盛土及び内部施設の存在は認められない。

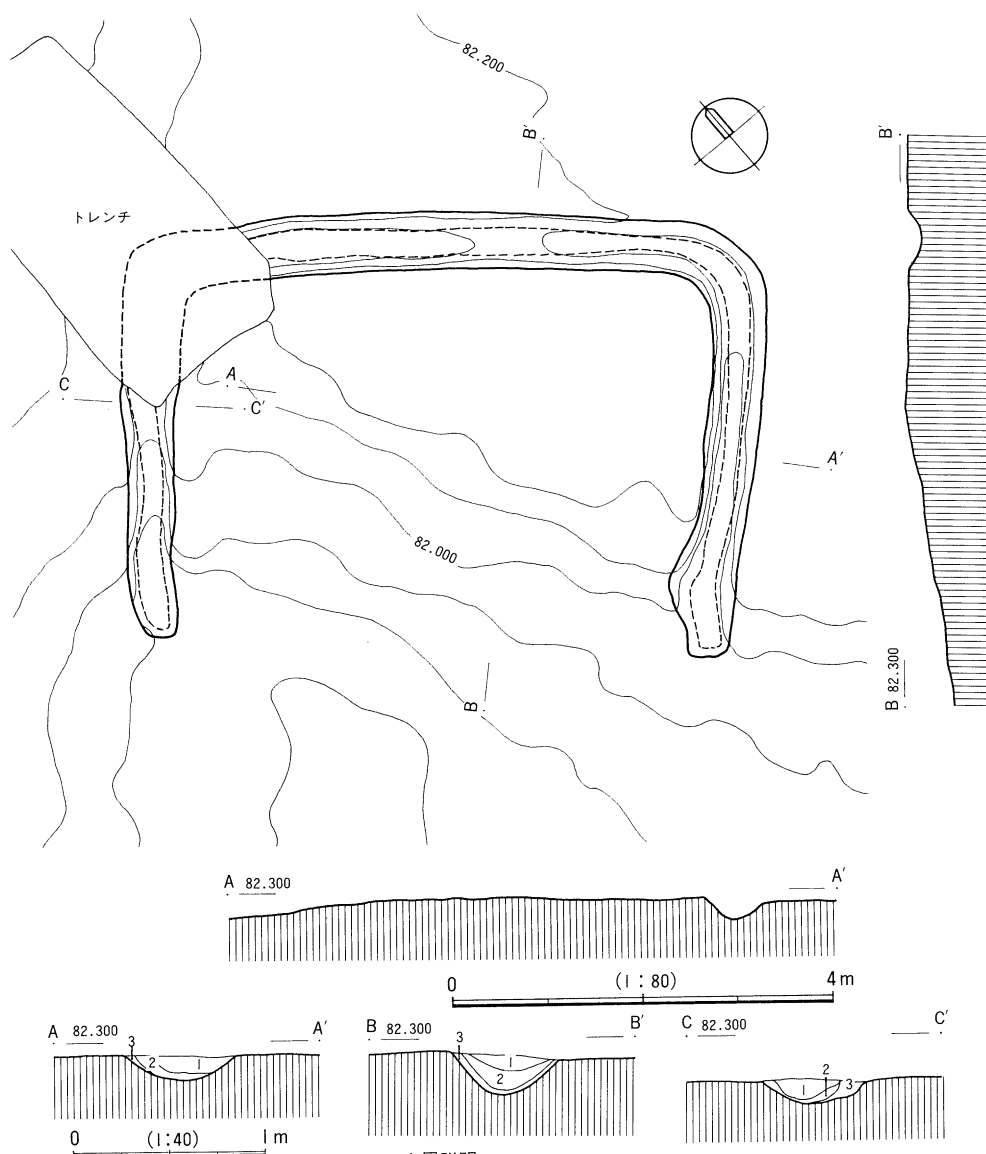
遺物 まったく検出しなかった。

33号遺構（第60図、図版18）

位置と現況 G 3・4グリッドにまたがって存在し、32号遺構の北東に位置する。立地は標高82.4m前後の台地の傾斜変換面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 確認調査時に東側コーナー部分を削平してしまったが、構築時には周溝・方台部とも方形を呈し全周していたものと思われる。全体的に確認面に対する掘り込みは浅く、遺存状態は不良である。北側及び南側のコーナー部分は検出されていないが、外縁径の一辺が3.20m前後で全周していたものと推定される。現存する周溝は幅32cm、深さ4～12cmを測る。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれているが、溝底・側壁ともやや不明瞭である。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。周溝内には土壌等の存在は認められない。方台部はほぼ平坦であるが、盛土及び内部施設の存在は認められない。

遺物 まったく検出しなかった。



土層説明

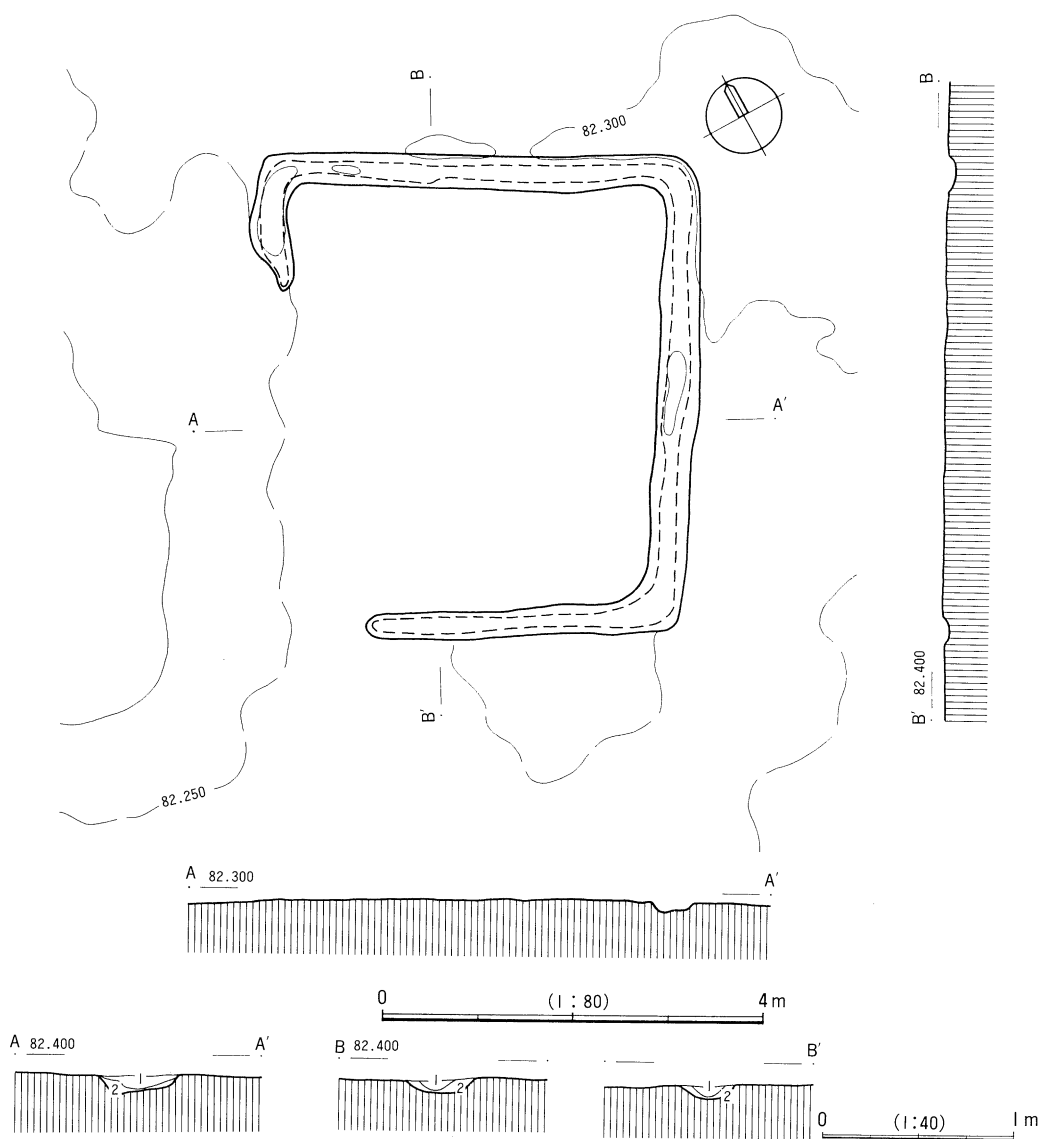
- 1 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を若干混入
- 2 極暗褐色土 ローム粒、焼土粒を若干混入
- 3 暗褐色土 新期テフラ崩壊土をまばらに含む

第61図 34号遺構実測図

34号遺構 (第61図、図版19)

位置と現況 H 4・6 グリッドにまたがって存在し、13号遺構の北西に位置する。立地は標高82.2m前後の台地の傾斜変換面である。現況における墳丘の存在は認められない。

遺構 緩斜面に位置する南側の周溝は検出されない。確認調査時に北側コーナー部を削平してしまったが、構築時には周溝・方台部とも方形を呈し全周していたものと考えられる。現存



第62図 35号遺構実測図

する平面形はコの字形を呈しており、北側周溝における外縁径は、推定6.50m前後である。周溝は幅52～60cm、深さ12～30cmを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN－41°－Eを示す。北側周溝はII c 層(自然堆積黒色有機質土)、南側周溝はIII層(ソフトローム層)上面まで掘り込まれており、南側周溝の方が北側周溝に比べ、やや明瞭に検出されている。断面はU字形を呈しており、覆土は自然堆積の状況を示す。溝底は南側斜面に向かってなだらかなり、土壌等の検出はない。方台部は南側に向かって緩斜面を形成しているが、盛土及び内部施設等の存在は認められない。

遺物 まったく検出されなかった。

35号遺構 （第62図、図版19）

位置と現況 G・H 5 グリッドにまたがって存在し、34号遺構の北、36号遺構の西に位置する。立地は標高82.3m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認めることができなかった。

遺構 確認面に対する遺構の掘り込みは浅く、全体的に遺存状態は不良であるが、構築時における周溝及び方台部は、方形を呈し全周していたものと推定される。北側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西4.56・4.00m、南北4.80・4.16mを測る。方台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-30°-Eを示す。周溝は幅28~44cm、深さは8cm前後を測り、II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれている。断面は浅い逆台形を呈しており、覆土は自然堆積の状況を示す。溝底はほぼ平坦であり、土壌等の検出はない。方台部は平坦であり、盛土及び内部施設の存在は認められない。

遺物 まったく検出しなかった。

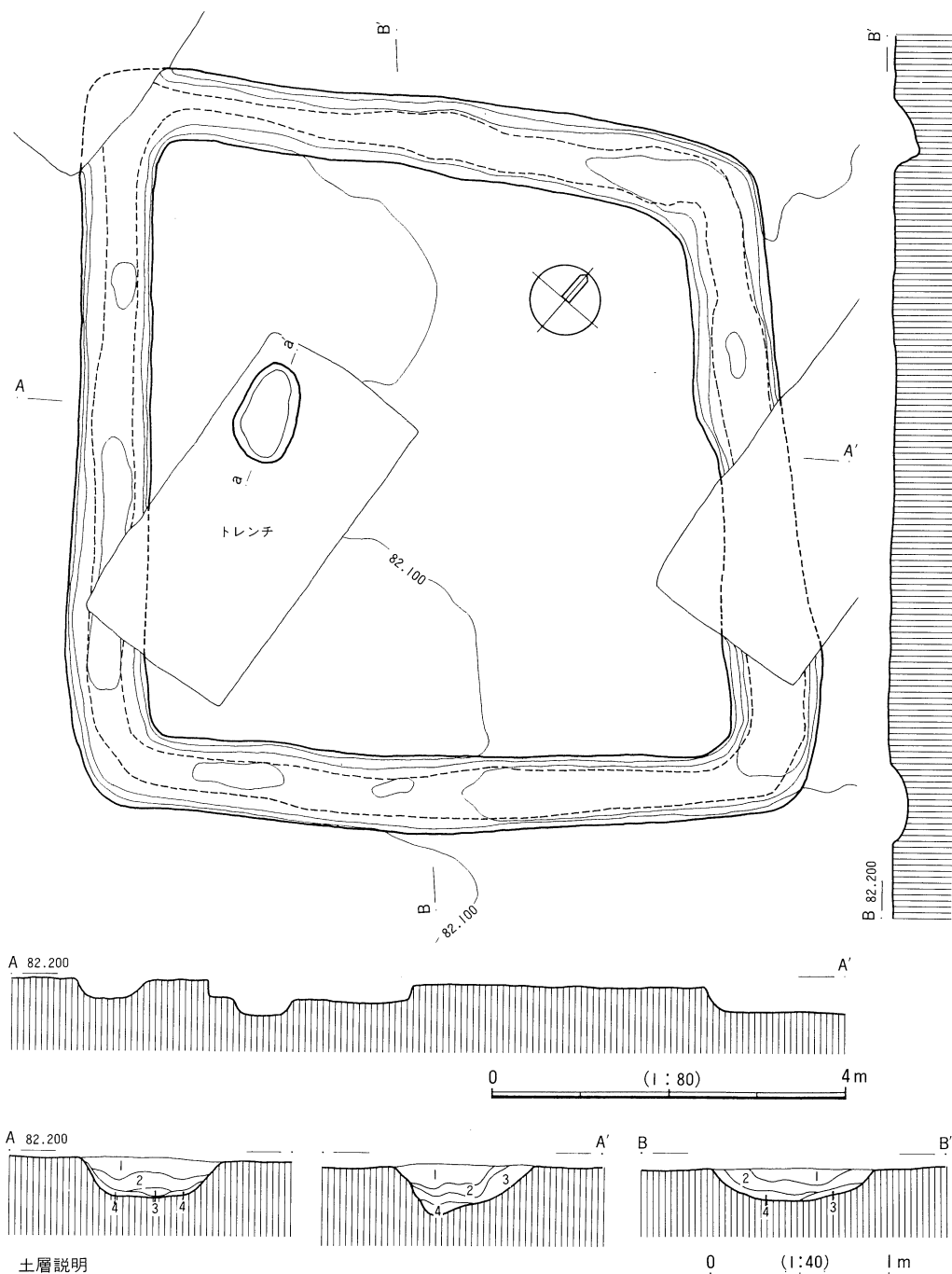
36号遺構 （第63・64図、図版19）

位置と現況 H 5 グリッドに存在し、35号遺構の東、37号遺構の西に位置する。立地は標高82.1m前後の台地平坦面である。現況における墳丘の存在は認めることができなかった。

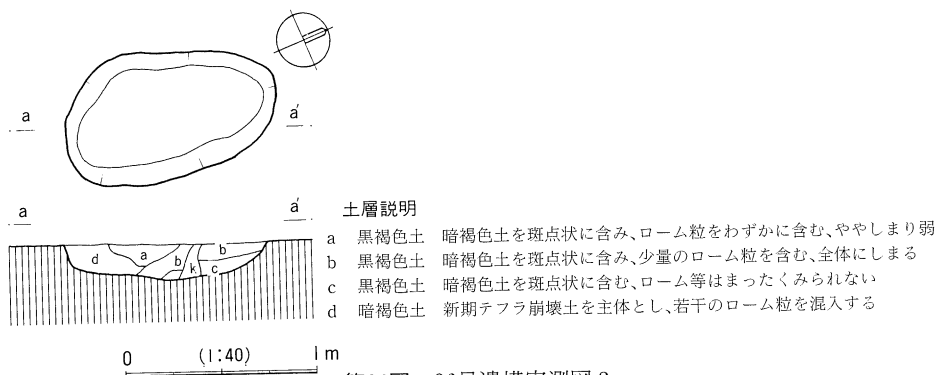
遺構 確認調査時において周溝の一部を削平してしまったが、現存する遺構の平面形は、西側周溝がやや長い隅丸方形を呈する。南側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西8.16・6.40m、南北6.48・5.92mを測る。方台部南北辺を中心線とした場合、主軸方位はN-44°-Wを示す。周溝は幅80~92cm、深さは20~30cmを測る。III層上面（ソフトローム層）まで掘り込まれ、溝底・底面とも削平された部分を除けば明瞭に検出されている。断面はU字形を呈しており、覆土は自然堆積の状況を示す。溝底はなだらかであり、土壌等の検出はない。方台部はほぼ平坦であり、盛土の存在は認められなかった。また方台部内西側の確認調査グリッド内に土壌1基を検出している。

土壌 確認調査時にすでに検出されていたが、本遺構に伴うものかどうかは不明であった。規模は長軸1.20m、短軸0.68m、深さは確認面（ソフトローム層上面）より20cmを測り、平面形は楕円形を呈する。長軸方位はN-5°-Eを示し、壁・底面とも明瞭に検出されている。覆土は黒褐色土中に若干のローム粒を含む層が主体をなし、極めて有機質性が高い。焼土・粘土及び炭化物等の検出がない為、人為的な埋土かどうか不明であるが、本遺跡における他の改葬系区画墓の検出例からみて、本遺構に直接関係するものと思われる。

遺物 周溝内より図示に致らぬ縄文土器小破片 3 点が出土しているが、いずれも本遺構に直接関係するとは思われない。また方台部及び土壌内からの検出遺物は皆無である。



第63図 36号遺構実測図1



第64図 36号遺構実測図2

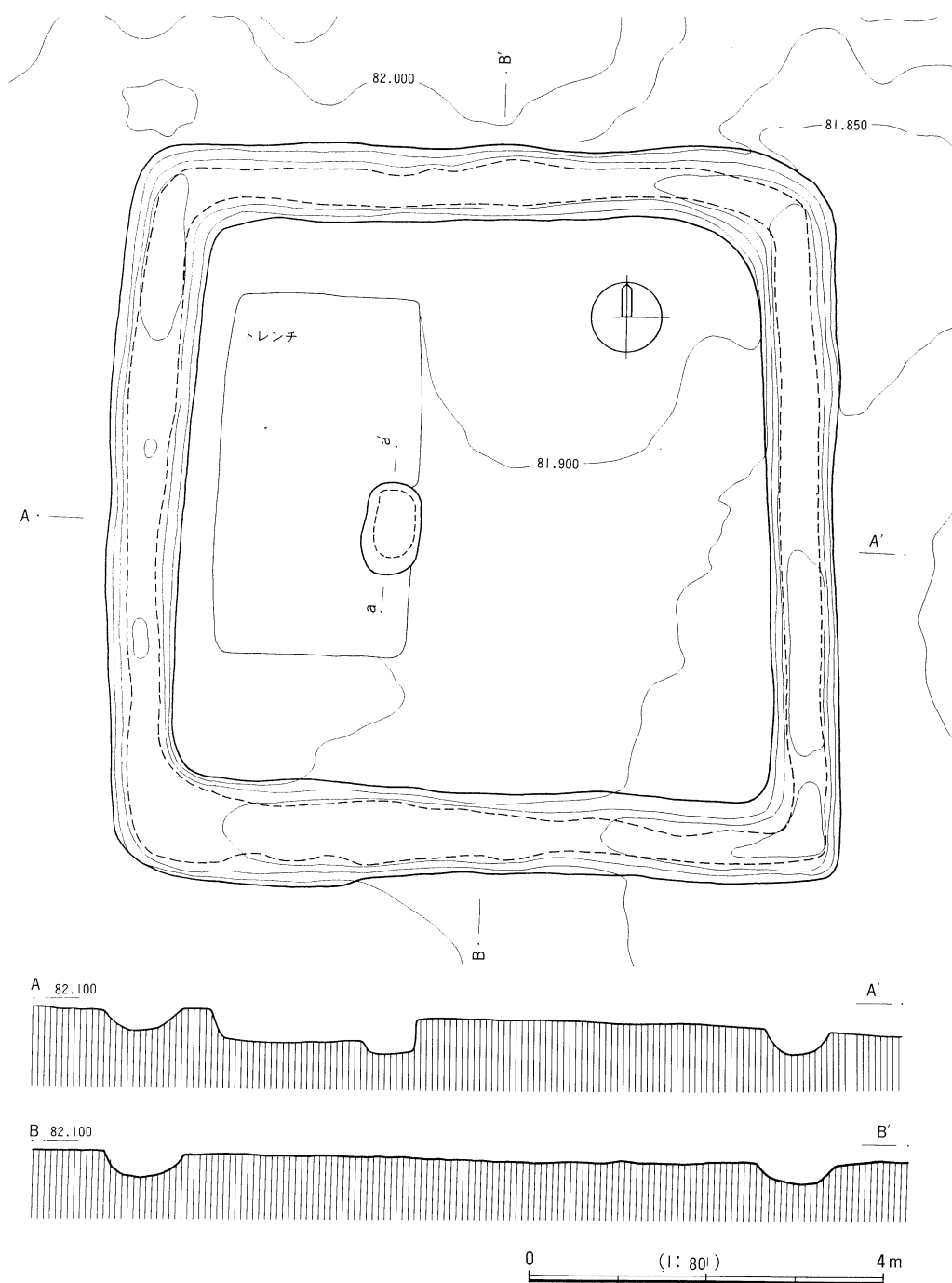
37号遺構 (第65・66図、図版20)

位置と現況 G・H 6 グリッドにまたがって存在し、36号遺構の東、38号遺構の南西に位置する。立地は標高81.9m前後の台地の平坦面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

遺構 周溝及び方台部の平面形は、北東コーナー付近を除けば各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈する。北側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西7.68・6.00m、南北8.00・6.40mを測る。方台部南北辺の中心線を基準とした場合、主軸方位はN-1°-Wを示す。周溝は幅0.72~1.20m、深さは24~36cmを測る。II d 層（ローム漸移層）中に掘り込まれ、底面・側壁とも明瞭に検出されている。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。溝底はほぼ平坦であり、土壌等は検出されていない。方台部は南東方向に緩斜面を形成するが、盛土の存在は認められない。また方台部の西側周溝よりの確認調査グリッド内において土壌1基を検出している。

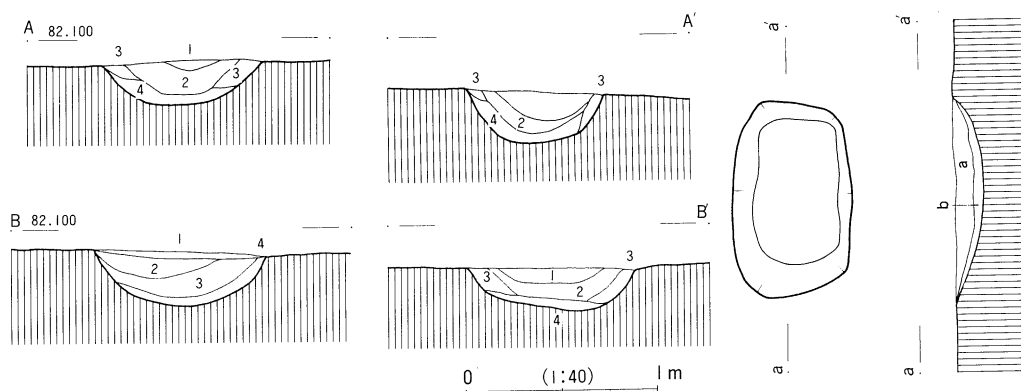
土壌 確認調査時にすでに検出されており、グリッド内東壁においてII a 層（自然堆積有機質土）中より掘り込まれていることが確認できた。しかしあまりに壁際すぎた為に、土層断面図作成以前に、壁そのものが崩落してしまい、記録に残すことができなかった。しかしながら掘り込み面から考えても、本遺構に直接伴うものと考えられ、内部施設である可能性が高い。現存する遺構の規模は長軸1.04m、短軸0.64m、深さは方台部確認面より40cm（確認調査時における掘り込み面からの深さは、およそ60cm前後であった。）を測り、長軸方位はN-11°-Eを示す。ソフトローム層まで掘り込まれており、底面はなだらかである。南北壁はあまり明瞭ではなくゆるやかに立ち上っているのに対して、東西壁は比較的急激に立ちあがっている。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体をなす。残存部分が少なく詳細は不明であるが、内部施設と考えた場合、人為的埋土と考えることが妥当であろう。

遺物 確認調査時にグリッド内の土壌覆土内より、実測不可能な（おそらく長頸壺の肩部付



第65図 37号遺構実測図 1

近であると思われるが、肩部及び頸部が残っておらず、径及び傾き等が復原できない。)須恵器小破片 1 点が検出された以外に、本遺構に伴う遺物の検出は皆無である。



土層説明

- 1 暗褐色土 有機質土を基調とし、若干の新期テフラ崩壊土混入
- 2 極暗褐色土 有機質土にごく微量の新期テフラ崩壊土混入
- 3 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に混入
- 4 暗褐色土 有機質土に少量にローム粒を混入

土層説明

- a 暗褐色土 ローム粒を斑点状に混入
- b 暗褐色土 ローム粒を若干含む

第66図 37号遺構実測図2

38号遺構 (第67図、図版20)

位置と現況 G 7 グリッドに存在し、37号遺構の東に位置する。立地は標高81.9m前後の緩斜面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

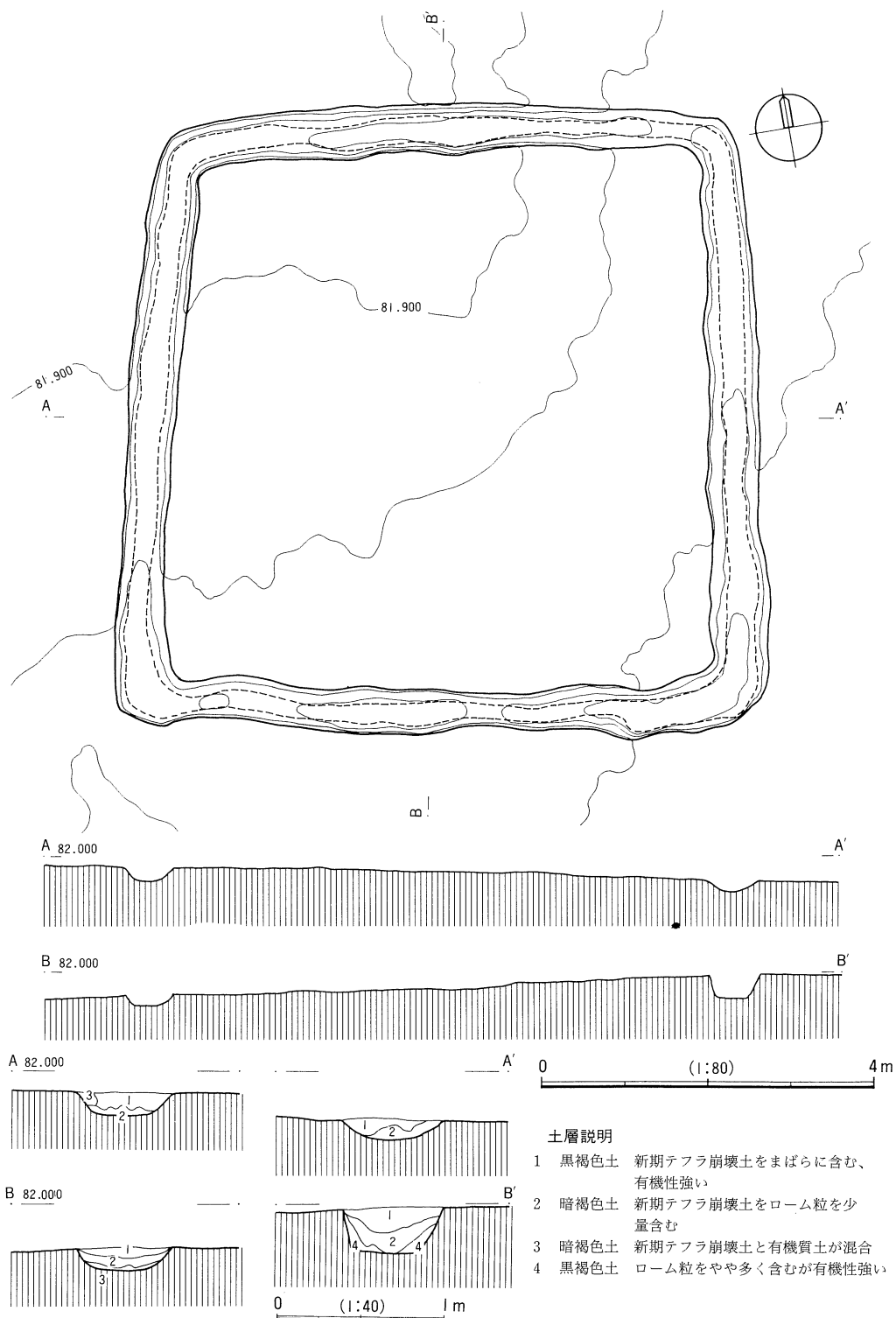
遺構 周溝及び方台部の平面形は、各隅とも明瞭に屈曲する方形を呈している。南側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西7.76・6.64m、南北7.12・6.32mを測る。北側周溝における外縁径・内縁径は、6.88・6.16mを測り、南側周溝の方が大きな数値を示す。方台部南北中心線を基準とした場合、主軸方位はN-9°-Eを示す。周溝は幅40~70cm、深さ12~30cmを測る。II d 層（ローム漸移層）中に掘り込まれ、底面、側壁とも明瞭に検出されている。断面は掘り込みの深い所では逆梯形を呈し、南側の緩斜面に至るにしたがい浅いU字形を呈している。覆土は自然堆積の状況を示す。溝底は若干の凹凸があるがほぼ平坦であり、周溝内には土壌等の検出はない。方台部は南側に向って若干の緩斜面を形成するが、盛土及び内部施設の存在は認められなかった。

遺物 南東周溝コーナー部分に、若干の炭化物が検出された他は皆無である。

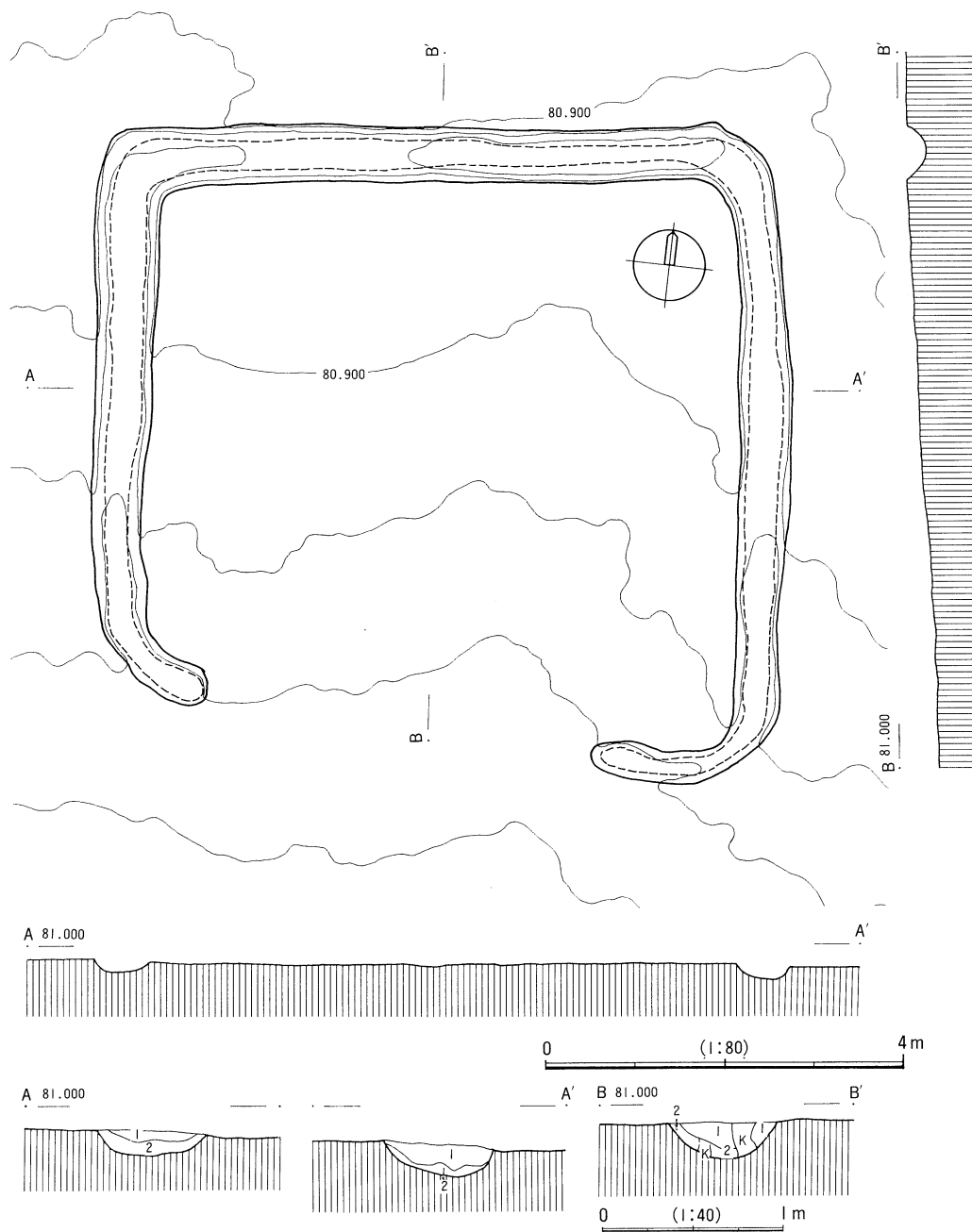
39号遺構 (第68図、図版20)

位置と現況 H 8 グリッドに存在し、南側周溝の一部が I 8 グリッドにまたがっている。立地は標高80.9m前後の台地の緩斜面である。現況における墳丘の存在は認められなかった。

遺構 南側周溝の一部は検出することができなかった。現存する遺構の平面形は、南側を除けば方形を呈している。構築時において周溝は全周していたものと思われるが、残存する南側



第67図 38号遺構実測図



土層説明

- 1 黒褐色土 有機質性強、ローム粒等をまったく含まない
- 2 暗褐色土 新期テフラ崩壊土に少量のローム粒を含む

第68図 39号遺構実測図

周溝から判断して、ややいびつな方形を呈していたものと推定される。北側周溝及び東側周溝における外縁径・内縁径の規模は、それぞれ東西7.36・6.32m、南北6.80・6.24mを測る。方

台部南北辺中心線を基準とした場合、主軸方位はN-7°-Wを示す。周溝は幅60cm前後、深さは16~70cm前後を測る。全体的に確認面に対する遺構の掘り込みは浅いが、南側周溝を除けばII d層上面（ローム漸移層）まで掘り込まれ、底面・側壁とも明瞭に検出されている。断面は浅いU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示す。溝底は若干の凹凸が認められるがほぼ平坦であり、周溝内においては土壌等の検出はない。方台部は南側に向って若干の緩斜面を形成しているが、盛土及び内部施設の存在は認められなかった。

遺物 まったく検出することができなかった。

3 火葬墓（蔵骨器）

40号遺構 （第69・70図、図版21）

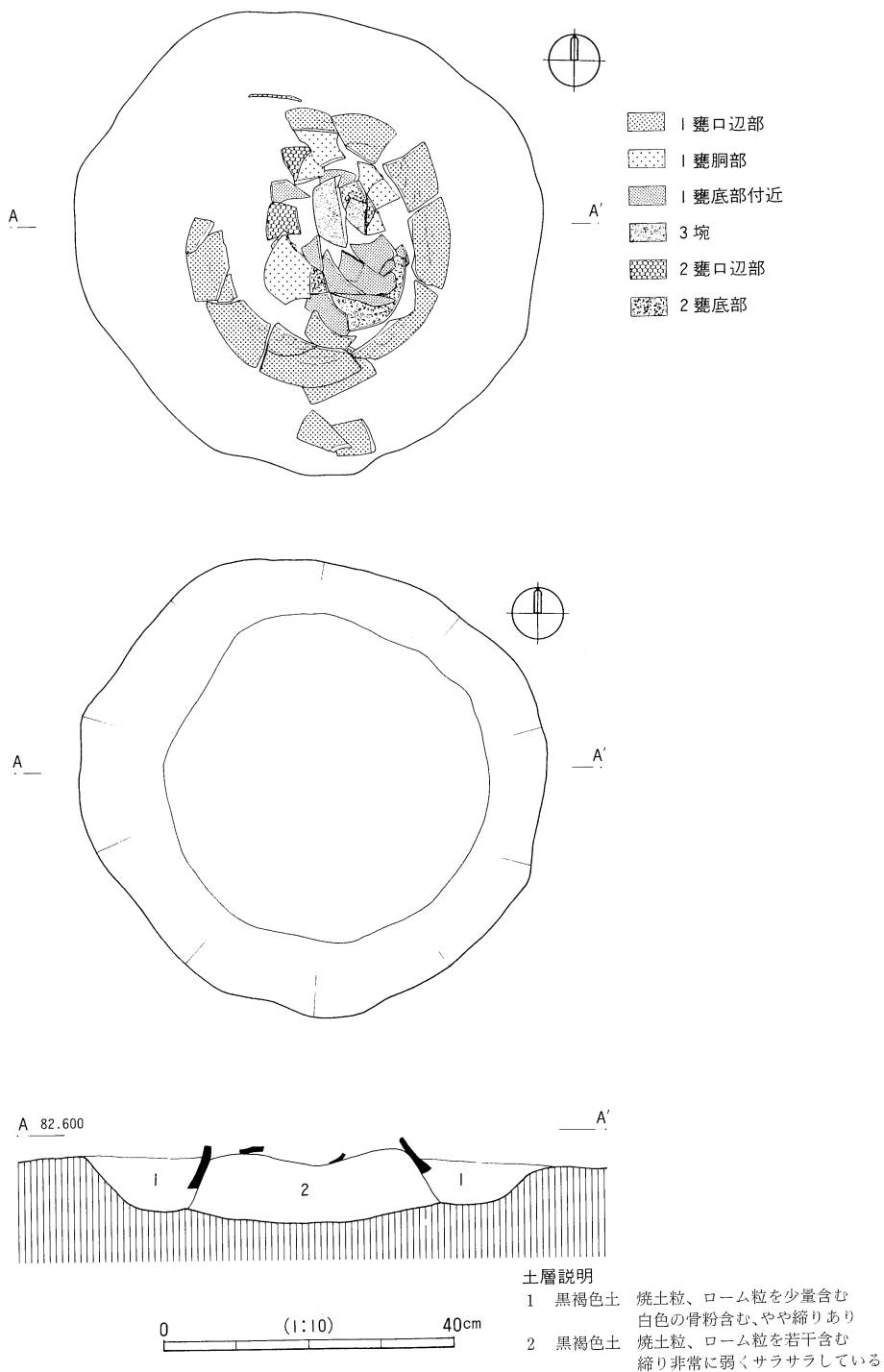
位置 F 3-96グリッドに単独に存在する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は円形を呈する。検出面はII a層（自然堆積黒色有機質土層）下面であり、A~A'における規模は64cm、深さは11cmを測る。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上っている。覆土1層は若干締りに欠けるが、明瞭な円形プランをもって蔵骨器である土師器甕形土器のまわりを巡っている。2層は遺物・骨粉等を含んだ層で、やや締りがある。また本遺構覆土は攪乱を受けていない。遺物が掘り方の底面に達していないことから、腐食しやすい材質を使用した蔵骨器外容器が使用されていた可能性が考えられる。

遺物（第70図、図版24） 3個体の遺物が検出されている。1の土師器甕形土器は、口縁部を覆土中に埋没させた状況で検出されている。胴部~底部にかけては表土除去の際、細々になって検出されたものを一括して取り上げてしまったが、口縁部外にはみ出した遺物はほとんど検出されておらず、また接合しない破片も多い。2の甕形土器は、覆土2層中に土圧で沈下したかのように、底部が突きささって検出されている、底面と1の甕形土器の口縁部とのレベルはほぼ同じであり、内部には粉末化した火葬骨が入っていた。3の埴型土器は釉の存在が認められないが、器形から推察して灰釉陶器と考えられる。底部をななめにして、2の甕形土器の破片内におさまって検出されている。

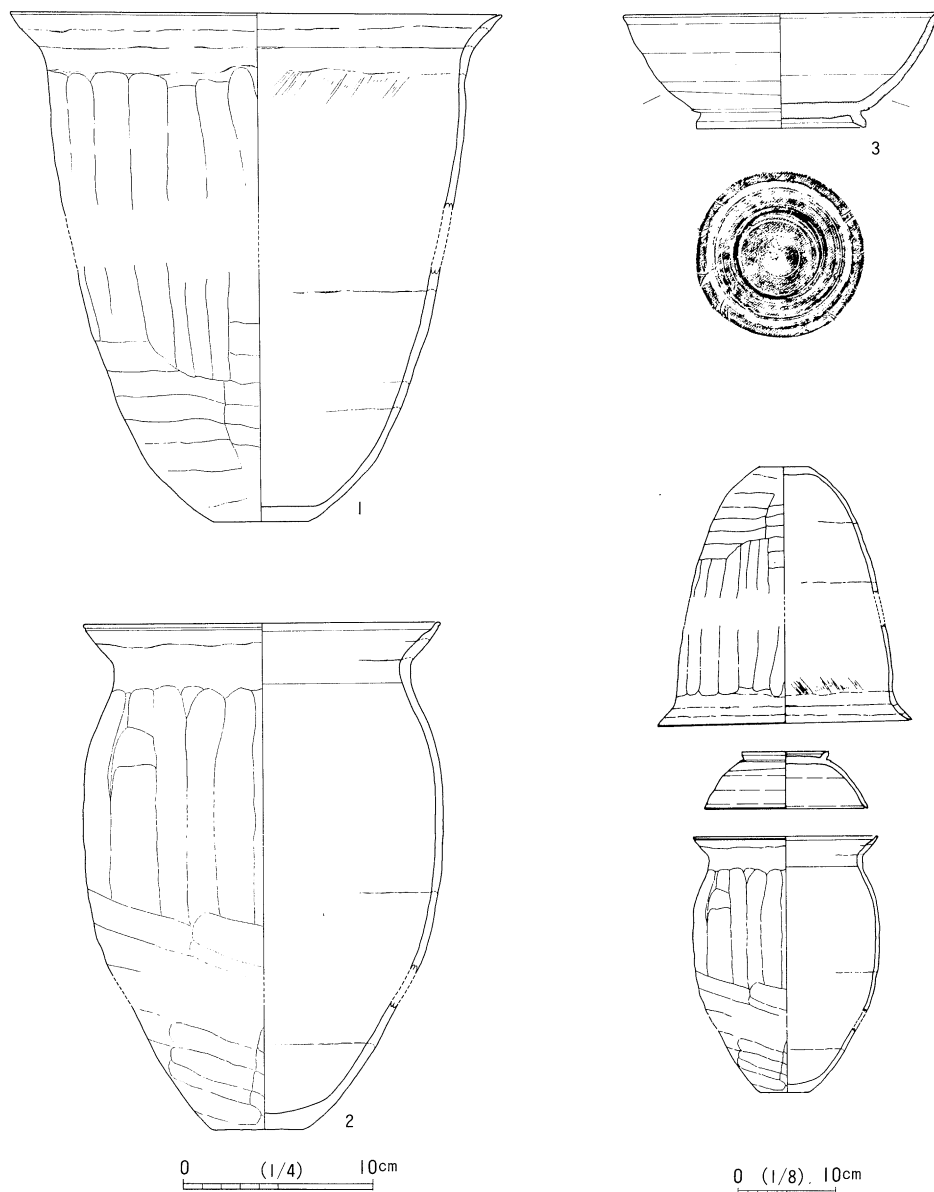
埋葬状況の復原 上記の検出状況を考えると、第72図に示した状況が考えられる。すなわち2の甕形土器に火葬骨を納め、3の埴型土器で蓋をし、1の甕形土器を覆せる。

この場合、1の甕形土器の口縁部が覆土中に埋没したかの状況で検出されていることが問題となるが、そのことについては後のまとめでふれる。



41号遺構 (第71図、図版21)

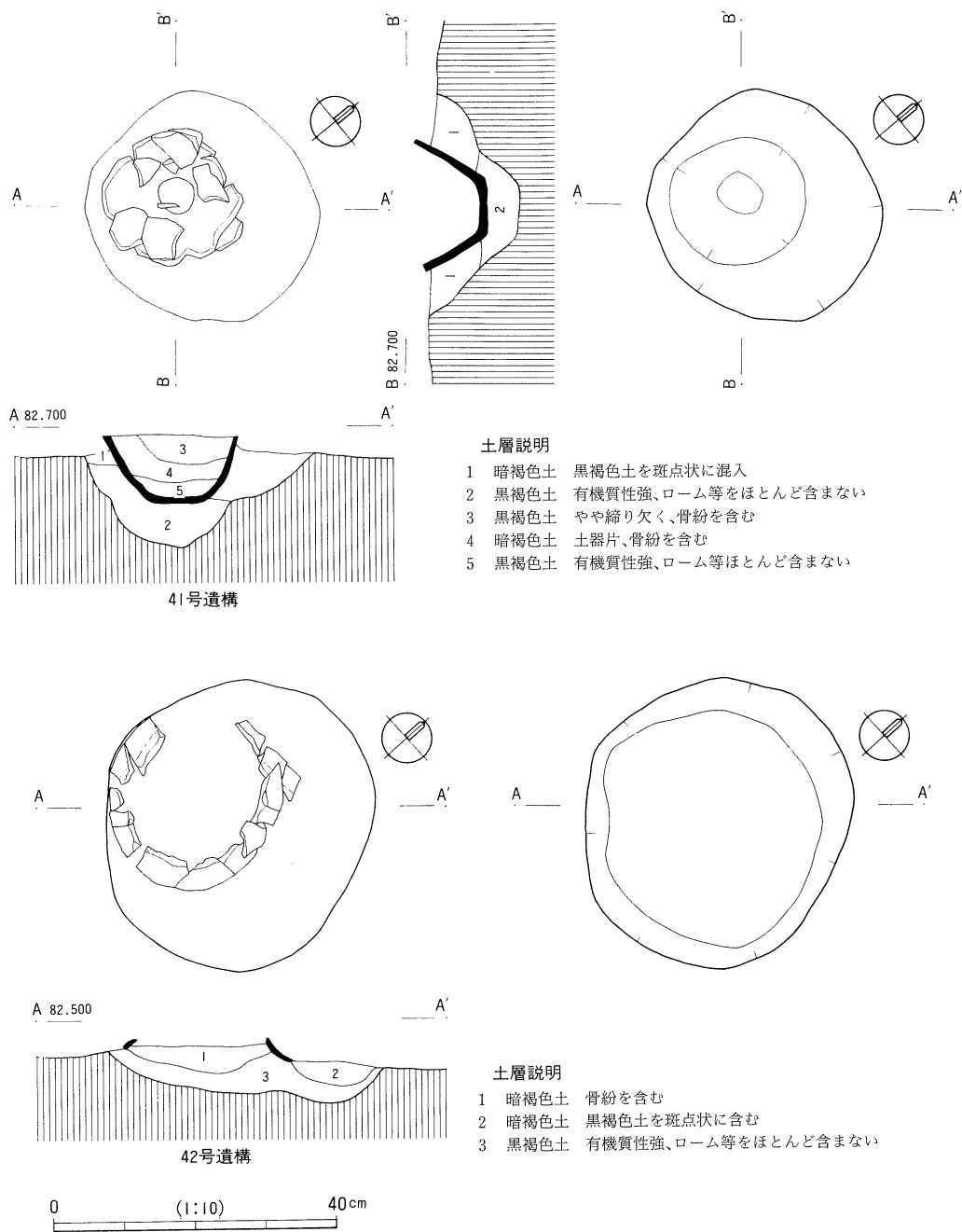
位置 C 8 - 72グリッドに単独に存在する。立地は標高82.6m前後の台地の平坦面である。



第70図 40号遺構出土遺物実測図

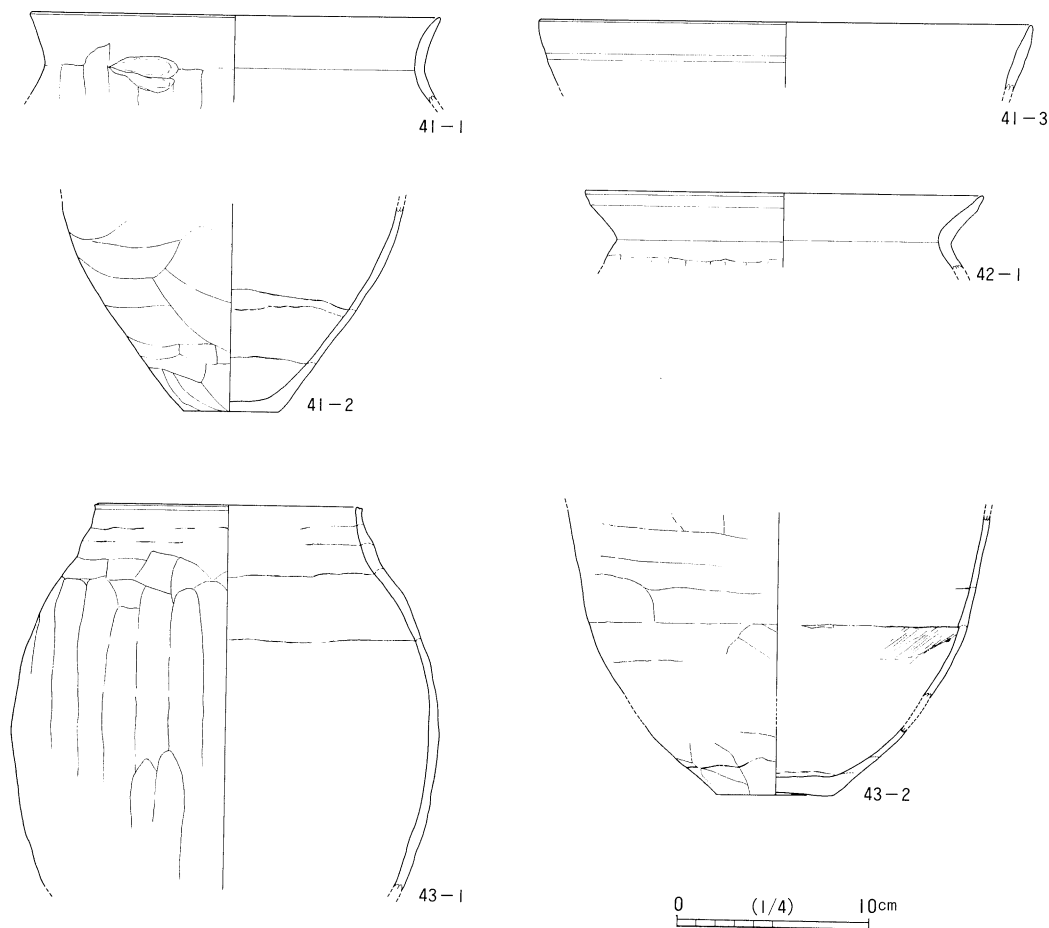
遺構 平面形は円形を呈する。検出面はII a層下面であり、A～A'・B～B'における規模はそれぞれ33.5・31.5cm、深さは12.5cmを測る。II b層（新期テフラ層）中に掘り込まれ、底面・側壁は明瞭に検出されており、中位にテラスを有している。覆土は攪乱を受けておらず、土師器甕形土器内に粉末化した火葬骨が入っている。遺物が掘り方の底面に達していないことから、腐食しやすい材質を使用した外容器が使用されていた可能性も十分考えられる。

遺物（第72図、図版24） 2個体分の遺物が検出されている。1の甕形土器口縁部は、2の



第71図 41・42号遺構実測図

甕形土器内に細々になって検出されている。2の甕形土器は覆土1層中に底部を埋没させた状態で検出されている。内部には粉末化した火葬骨が入っていた。1と2の甕形土器は胎土が非常によく似ており、同一個体の甕と考えられる。3の甕形土器口縁部は、2の甕形土器に小破片1点のみの検出である。遺存部分が少なく、口径は復原実測によって割り出したが、若干の



第72図 41・42・43号遺構出土遺物実測図

誤差が生じているものと思われる。しかし、確実に2個体分の遺物が存在した根拠となりえるため、あえて図示した。口縁部中位に沈線状の凹帯が認められる。検出状況から判断して40号遺構と同様の状況で埋葬されたものと考えられるが、蓋に該当する遺物は検出されていない。

42号遺構 (第71図、図版22)

位置 D 9-95グリッドに単独に検出されている。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は円形を呈している。検出面はⅡa層下面である。A～A'における規模は39cm、深さは7cmを測る。Ⅱb層中に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上っている。覆土は攪乱を受けておらず、甕形土器口縁部内の1層には、粉末化した火葬骨を含んでいる。遺物が掘り方の底面に達していないことから、腐食しやすい材質を使用した外容器が

使用されていた可能性が十分考えられる。

遺物（第72図） 土師器甕形土器口縁部が検出されている。覆土中に口縁部を埋没したかの状況で検出されており、意識的に逆さに設置したものであろう。他に遺物の検出は認められないが、40号遺構と同様の状況で埋葬されたものと考えられる。

43号遺構 （第72図、図版24）

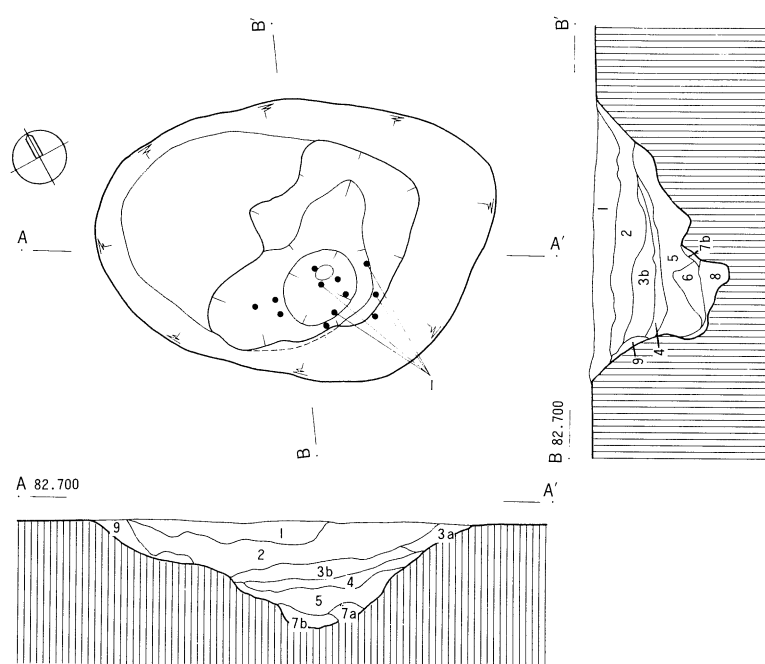
位置 F1-77グリッドにおいて単独に検出されている。立地は標高82cm前後の台地の平坦面である。

遺構 表土除去を行う際にバックホウを使用し、II a層下面まで削平してしまった為、遺物のみの検出である。このことは他の火葬墓についても同様のことが言え、遺構・遺物の検出状況はかならずしも良好とは言えない。

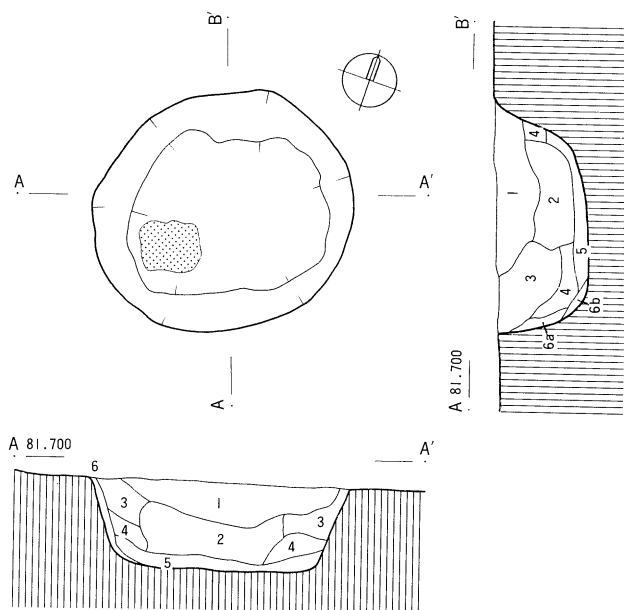
遺物 他の火葬墓に使用された蔵骨器は、器厚が非常に薄く、輪積痕も明瞭に残っており、外見こそ日常用品である甕形土器と大差ないように思われるが、甕本来の機能を十分にはたしていたかどうかは、大きな疑問が残る。これに対して、本遺構検出の蔵骨器1は、当初から納骨を目的としたかの様に土師器広口壺であることが注目され、内部には粉末化した火葬骨が入っていた。2は胴部中位～下位にかけて、横～斜方向のヘラケズリが施されており、1の広口壺とは別個体と考えられる。

第7表 40・41・42・43号遺構出土遺物観察表

図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
40-1	土師器 甕 胴部中位を欠く	25.9	5	(26.9)	やや不良	淡 褐 色	2～3mm大の小石を少量含む全体的に砂ばい	外 口辺部 輪積痕を明瞭に残す粗雑なナデ 胴 部 ヘラケズリ 底 部 ヘラケズリ 内 頸 部 ヘラ状工具による擦痕	全体的にナデ、ケズリとも粗雑である。器厚は非常に薄い。
40-2	土師器 甕 口縁部、胴部下位を欠く	18.8	4.9	(26.8)	良好	淡茶褐色	2～3mm大の小石を含む。	外 口縁部 輪積痕を明瞭に残す粗雑なナデ 胴 部 ヘラケズリ 底 部 ヘラケズリ 内 口縁部 粗雑なナデ 胴 部 ヘラナデ	全体的にナデ、ケズリとも粗雑である。器厚は非常に薄い。
40-3	灰釉陶器？ 碗	16.7	8.9	6.0	良好	淡 灰 色	密	口クロ 体部下端 回転ヘラケズリ 底部 回転ヘラ切り後高台貼り付	内面火だすき痕、釉の存在は認められない。器形は灰釉陶器に似ている。
41-1	土師器 甕 口縁部 1/8	(21.6)	—	—	良好	茶 褐 色	微砂粒含む	外 口縁部 ナデ 頸 部 ヘラケズリ、指による圧痕残る。 内 口縁部 ナデ 頸 部 ヘラナデ	41-2と同一個体か、器厚は非常に薄い。
41-2	土師器 甕 胴～底部 1/3	—	5.2	—	良好	茶 褐 色	微砂粒含む	外 ヘラケズリ 内 粗いヘラナデ	41-1と同一個体か、器厚は非常に薄い。
41-3	土師器 甕 口縁部 1/5	(26.0)	—	—	良好	淡 褐 色	微砂粒含む	外 ナデ、沈線状の凹帯 内 ナデ	
42-1	土師器 甕 口縁部 5/6	21.0	—	—	良好	茶 褐 色	密	外 ナデ～ヘラケズリ 内 ナデ～ヘラナデ	
43-1	土師器 甕 口縁部、胴部 1/4	14.2	—	—	良好	茶 褐 色	密	外 口縁部 輪積痕を明瞭に残す粗雑なナデ 胴 部 ヘラケズリ	輪積痕が明瞭に残る、器厚は非常に薄い。
43-2	土師器 甕 胴～底部 1/6	—	6.2	—	良好	茶 褐 色	石英などの微砂粒含む。	外 胴 部 斜位のヘラケズリ 内 ヘラナデ	ケズリ、ナデとも雑である。



44号遺構



45号遺構

44号遺構土層説明

- 1 暗褐色土
ローム粒若干含む、炭化物をまばらに含む
- 2 黒褐色土
有機質土中にローム崩壊土をブロック状に、ローム粒を霜降り状に含む。1層よりも有機質性強い
- 3a 黒褐色土
有機質土中にローム崩壊土をブロック状に含む
- 3b 黒褐色土
有機質土中にローム崩壊土をブロック状に含む、2~4cm大の炭化物をまばらに含む
- 4 暗黄褐色土
ローム崩壊土を基本とし、黒色有機質土を部分的に混入する
- 5 黒褐色土
有機質土中にローム崩壊土を部分的に混入、3~5cm大の炭化物若干含む
- 6 黒褐色土
5層に近似するが、ローム崩壊土の影響が大きい
- 7a 暗褐色土
ローム崩壊土と有機質土との混合土。やや有機質土の影響大
- 7b 暗褐色土
ローム崩壊土と有機質土との混合土
- 8 暗褐色土
ローム崩壊土と有機質土との混合土。やや締り弱い
- 9 暗褐色土

45号遺構土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒極微量含む
有機質性強い
- 2 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まず、多量の山砂を含む有機質性強い
- 3 暗褐色土 ローム粒を少量含む
極微量の焼土粒、炭化物含む
- 4 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含み、若干の焼土粒混入締り強い
- 5 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含むが、有機質性も強い
- 6a 褐色土 ローム粒多量に含む、締りやや強い
- 6b 褐色土 ローム粒多量に含む、締り弱い

0 (1:40) 2m

第73図 44・45号遺構実測図

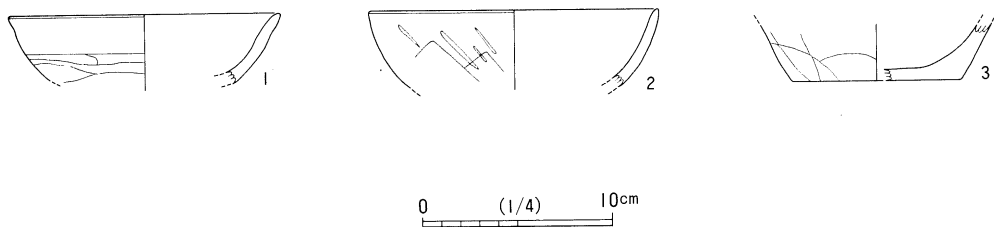
4 土 墳

44号遺構 (第73図、図版22)

位置 C 9－43グリッドに存在する。立地は標高82.6m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は楕円形を呈し、長軸方位はN－48°－Wを示す。規模はA～A'・B～B'において、それぞれ2.04・1.52m、深さは最大72cmを測る。覆土はロームブロック、炭化物を含み、人為的な埋土と考えられる。ソフトローム層まで掘り込まれ、壁・底面とも明瞭に検出されている。底面はテラスを有し、最深部はピット状に落ち込んでいる。南側壁はオーバーハングぎみに立ち上っており、いわゆる有天井土壌の形態を示す。

遺物 (第74図、図版24) 4層以下底面に致る覆土中より、3個体の遺物が細々になった状態で検出されている。1・2は土師器坏形土器である。両方とも底部は検出されていない。3は土師器甕形土器である。口縁～胴部下位にかけては検出されなかった。



第74図 44号遺構出土遺物実測図

第8表 44号遺構出土遺物観察表

図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
1	土師器 坏 底部欠く%	(14.2)	—	—	良好	淡橙褐色	密	外 口辺部 ナデ 内 体 部 ヘラケズリ ヘラミガキ	
2	土師器 坏 口 辺～体 部 1/6	(15.2)	—	—	良	淡茶褐色	微砂粒若干含む 密	外 口辺部 ナデ 内 体 部 ヘラケズリ ナデ	
3	土師器 甕 底部の1/4	—	8.8		やや不良	暗 褐 色	2～3mm大の小 石を多量に含 む。	外 胴部下位 ヘラケズリ 内 底部 ヘラケズリ	

45号遺構 (第73図、図版22)

位置 D10－85グリッドに存在する。立地は標高81.6m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は円形を呈する。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ1.40m・1.28mを測り、短軸方位はN－20°－Eを示す。ソフトローム層中に掘り込まれており、深さは48cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上っている。覆土は山砂・焼土等を含み、人為的な埋土と考えられる。特に2層中には山砂が幅30cm、厚さ48cmにわたってブロック状に含まれており、何らかの特殊な意味をもつものと推定される。本遺跡の性格上から判断して、墓墳的な

性格が強いものと考えられる。

遺物 火葬骨等の検出を期待したが、本遺構からの遺物はまったく検出することができなかった。

Ⅲ 中～近世

1 概 要

中～近世にかけての時期に比定される遺構は野馬堀状遺構1条、道路状遺構1条が検出されている。また道路状遺構について言及すれば、遺跡内にさらに2ヶ所の道路状遺構と考えられるよく踏み堅められた面が検出されている（第75図1・2）。また遺跡の西側を走る現道が土塁を伴うものであり、既知の「鎌倉街道」と考えられる重要候補地であった為、土塁に対して2本のトレンチを設定して調査を行なったが、中世まで遡る確証は得られなかった。しかし付近の字名に「大街道」「鎌倉街道」という地名が残っており、現道直下あるいはさらに西側に「鎌倉街道」が存在する可能性が高い。

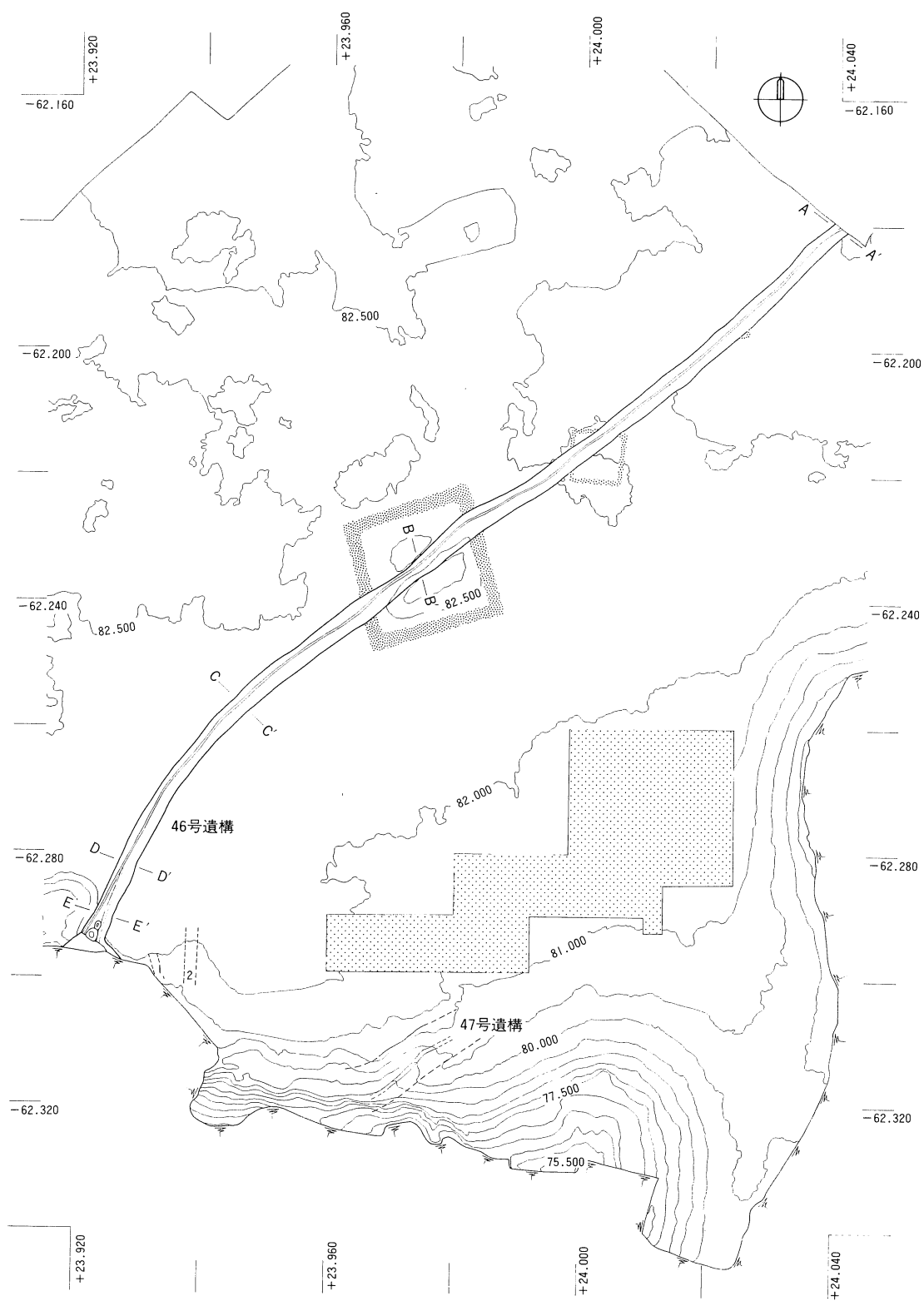
2 遺構と遺物

1 野馬堀状遺構

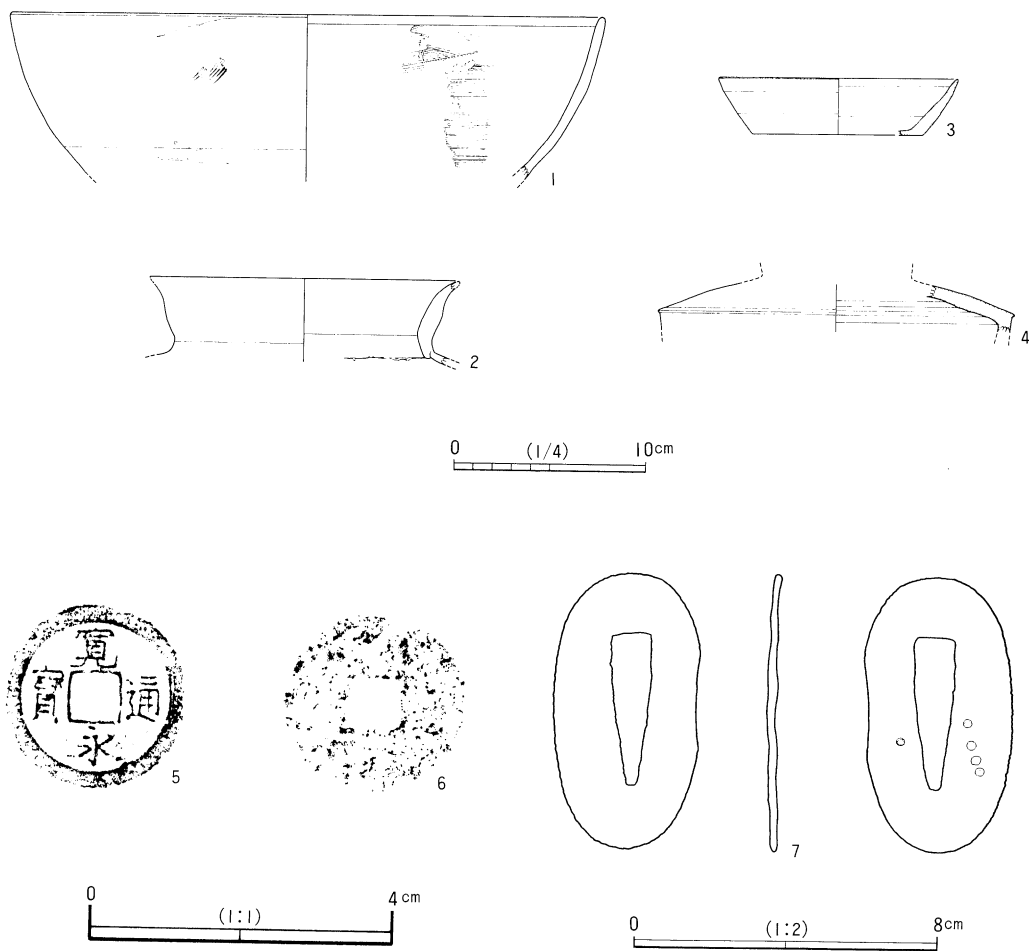
46号遺構 （第75・76・81図、図版22）

位置と現況 C9～H4グリッドにまたがって存在する。立地は標高82.3m前後の台地平坦面であり、10・19・23号遺構を切っている。調査前の現況は道路として使用されており、肉眼でも若干窪んでいることは確認できた。

遺構 検出された遺構の長さは約165m、確認面における幅は約2.8m、深さは1m前後を測る。覆土は自然堆積の状況を示し、特に上層の3層は宝永の火山灰を含んでおり、最上層は最も粒子が粗く、有機質土と混合しており暗褐色を呈している。中層は青灰色を呈し、純粋な火山灰層である。最下層は有機質土と混合し、茶褐色を呈している。10号遺構と共用するB～B'の断面図には、この最下層は検出されていない。またA～A'からE～E'にかけての断面図によれば、一度掘り直しが行なわれたと考えられる土層が検出されており、また時として道路に使用されたかと思われる程よく踏み堅められた面も検出されている。またベルト状に残した溝東側の断面図C～C'、D～D'においては、掘削時に発生した排土を使用したと考えられる盛土が検出されており、あるいは土塁が伴っていたという可能性も考えられる。また付近の字名に馬尻・牛食沢等の地名が残っていることから、当初掘られた溝の性格としては、中世牧関係の、野馬堀状遺構と考えられる。またこの遺構は道路として2次利用されていた可能性が高く、少なくとも掘り返された時点においては、すでに道路として使用されていたものと考えられる。



第75図 46号遺構実測図 1 1:1000



第77図 46号遺構出土遺物実測図

第9表 46号遺構出土遺物観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	土師器 埴 口辺部の 1/8	(33.6)	—	—	良好	外 褐色 内 黒色	密	内 黒色処理、ていねいなヘラミガキ	遺存度が悪く口径は多少の誤差を含んでいると考慮してもらいたい。
2	土師器 甕 1/10	(16.8)	—	—	良	淡褐色	微砂粒を含む		
3	須恵器 坏 全体の 1/30	(13.2)	(9.6)	(3.2)	やや不良	褐色 (一部青灰色)	微砂粒含む	ロクロ使用、全体的に遺存度がわるく細部不明	姉市原市文化財センター調査研究員田所真氏の御教示によれば永田、不入産の須恵器であり、高台付の坏である。
4	須恵器 (長頸 甕) 全体の 1/30	—	—	—	良好	青灰色	密	ロクロ	
図番	名称	材質	径(mm)	孔 (mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	備考		
5	寛永通寶	銅	23.00	7.00	1.00				
6	寛永通寶	鉄	22.75	6.75	1.25				
7	切羽	金銅	縦37.00 横19.00	縦20.50	1.00				

遺物（第77図、図版24） 図示可能な遺物は総数7点である。1はSPA～A'付近の覆土から検出された土師器碗であり、内面は黒色処理と丁寧なヘラミガキが施されている。2は23号遺構付近で検出された土師器甕である。付近に若干の土師器・須恵器片が検出されているが図示に致らなかった。3・4は19号遺構付近において検出された須恵器である。3は外面の一部が青灰色を呈する他は褐色を呈しているがロクロ成形されている。市原市文化財センター調査研究員、田所 真氏によれば、永田・不入窯産の高台付の坏であるという御教示をいただいたが、口縁部から底部外縁の面取り部にかけての遺存度が極めて悪く、底部外縁面取り部を底部として復原実測してしまったことを付け加えておく。4は長頸壺と推定されるが詳細は不明である。5はSPA～A'付近の宝永火山灰最上層中において検出された銅製の寛永通寶である。6・7は、SPB～B'付近の宝永火山灰最上層中において検出された鉄製の寛永通寶と金銅製の切羽である。

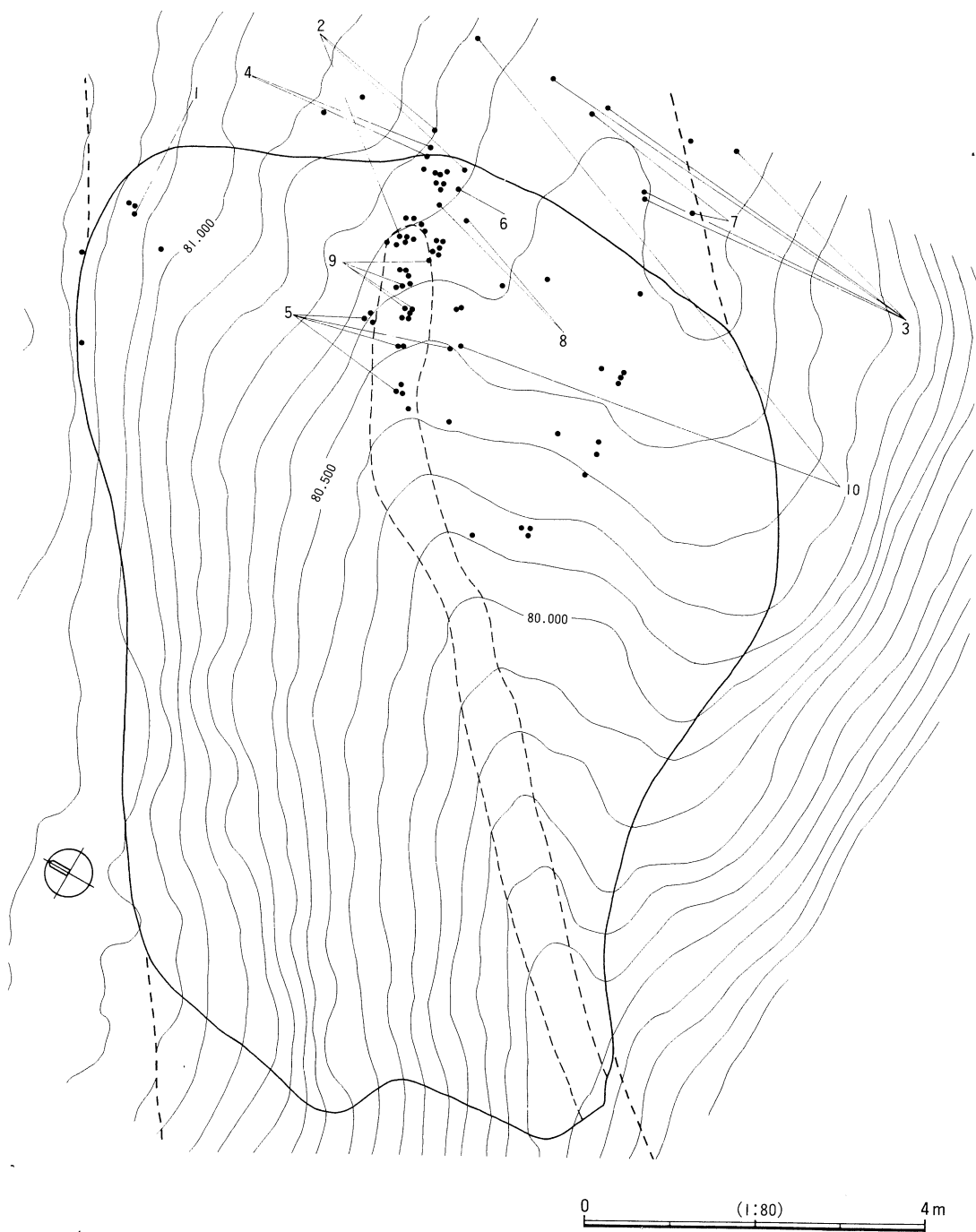
2 道路状遺構

47号遺構 （第78図、図版23）

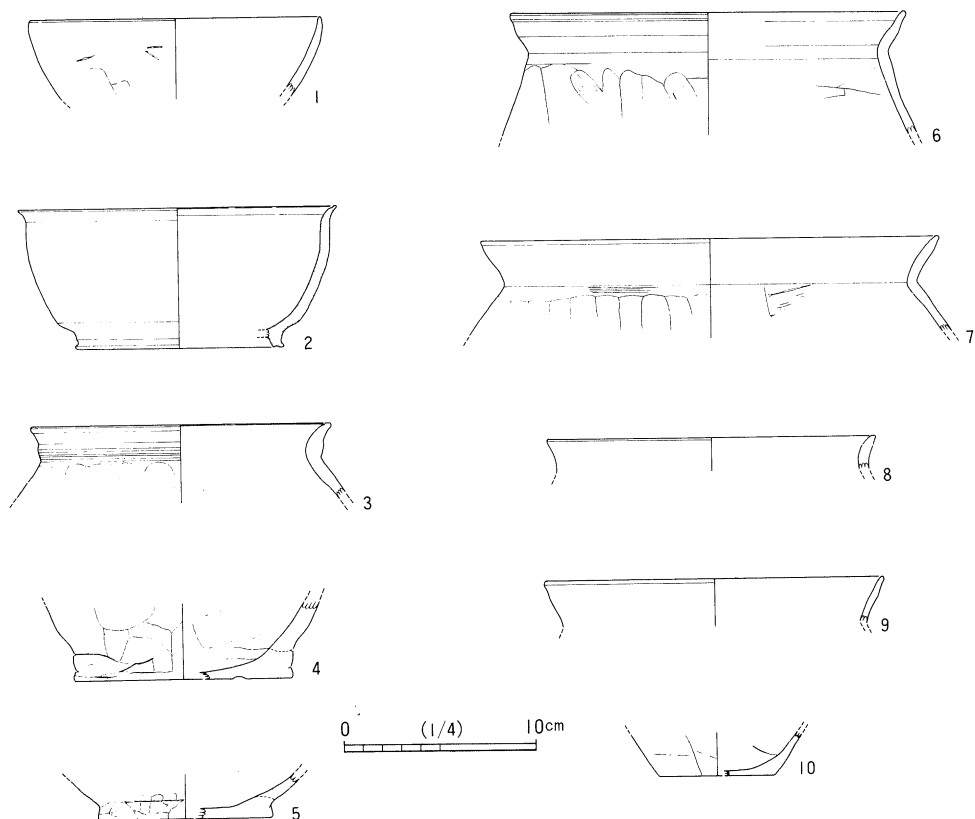
位置 I 6 グリッドに存在する。立地は標高80m前後の台地の急斜面である。

遺構 バックホウにより表土を除去した後の遺構確認においては、遺構の存在そのものにつく気づかなかったが、図の破線で示した下端より約20cm程上層に、若干の宝永火山灰が点々と検出された為、精査を行なったところ図の様な道路状遺構が検出された。下端付近がやや堅く踏み固められている他は軟弱であり、プランもはっきりしない。確認面における検出された遺構の規模は、長さ5.60m、最大幅4.20m前後の不整楕円形を呈している。掘り込みも浅く、覆土に宝永火山灰が検出されていることから、比較的新しい時期のものと考えられる。

遺物（第79図、図版24） 図示可能な遺物は総数10点を数える。遺物は粉々になった状態で遺構の東側に集中しており、いずれも底面より10cm前後浮いた状態で検出されている。本遺構に直接関係するものではなく、むしろ本遺構によって破壊された火葬墓等の遺物であると考えられる。1～10に図示した遺物のうち須恵器は2の碗形土器のみであり、他はすべて土師器である。また3・4は、土師器広口壺であり、接合関係に致らなかったが同一個体と考えられる。成形、調整ともやや粗雑であり、同様のことは5についても言及することができ、あるいはその器形等を考慮した場合、蔵骨器として使用されていた可能性が最も強い。また本遺跡における他の火葬墓の遺物検出例では、日常雑器である甕・碗などが蔵骨器として転用されていることから、他に検出された遺物も蔵骨器として使用されていた可能性が強く、本遺構によって破壊される以前に、少なくとも2～3基程度の火葬墓がこの遺構近辺に存在していた可能性が考えられる。



第78図 47号遺構実測図



第79図 47号遺構出土遺物実測図

第10表 47号遺構出土遺物観察表

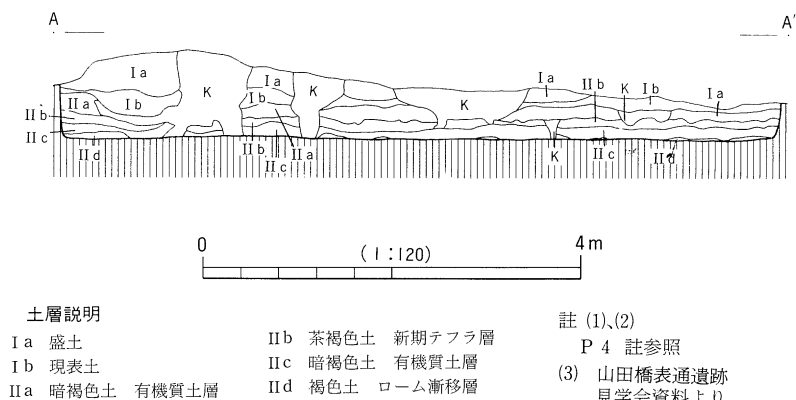
図 番	器 種 遺 存 度	法 量 (推 定) cm			焼 成	色 調	胎 土	整形・調整等	備 考
		口 径	底 径	器 高					
1	土師器 坏 口辺の 1/8	15.2	—	—	良	茶 褐 色	微砂粒多量に含む。	外 口辺部 ナデ 体 部 ヘラケズリ 内 ナデ	
2	土師器 甕	20.8	—	—	良好	淡 褐 色	密	外 口辺部 ナデ 胴 部 ヘラケズリ 内 口辺部 ナデ 胴 部 ヘラナデ	外面に指による圧痕が残る。
3	須恵器 埴 口辺の 1/8	16.8	10.8	7.4	良好	淡青灰色	密	ロクロ使用	底部全面欠損
4	土師器 甕 口辺の 1/8	34.0	—	—	良好	茶 褐 色	微砂粒を含む	外 口辺部 ナデ 胴 部 ヘラケズリ 内 口辺部 ナデ 胴 部 ヘラナデ	
5	土師器 大口壺 口縁部の 1/8	15.8	—	—	良好	茶 褐 色	茶褐色微砂粒多量に含む。	外 口辺部 横位のヘラ状工具によるナデ 胴 部 ヘラケズリ 内 口辺部 ナデ 胴 部 ヘラナデ	ナデ、ケズリとも粗雑である。
6	土 師 器 甕 口辺の 1/8	17.2	—	—	良	暗茶褐色	白色微砂粒多量に含む	内 ナデ 外 ナデ	
7	土師器 大口壺 底部の 1/8	—	11.4	—	良	茶 褐 色	密	外 粗雑なヘラケズリ 内 粗雑なヘラナデ	底部に板状の圧痕 輪痕が明瞭に残り粗雑
8	土師器 甕	17.8	—	—	良好	暗 褐 色	微砂粒を含む	外 口辺部 ナデ 内 口辺部 ナデ	
9	土師器 (大口壺) 底部の 1/8	—	9.0	—	良	茶 褐 色	白色微砂粒多量に含む	外 粗雑なヘラケズリ 内 粗雑なナデ	内面に輪痕明瞭に残る。
10	土師器 甕 底部の 2/8	—	6.0	—	良好	淡 褐 色	密	外 ヘラケズリ 内 ヘラナデ	非常に器厚が薄い。

3 鎌倉街道 (第80・81・82図)

遺跡西側を走る現道以西は、「鎌倉街道」という字名であり、また調査区域付近の現道は土塁状の高まりを東側に伴うものであった。既知の「鎌倉街道」と考えられる重要候補地であった為、土塁状の高まりに対して2本のトレンチ(No.1、No.2)を設定して調査を行ったが、中世に遡る確証は得られなかった。第80図はNo.1トレンチの土層断面図であり、土塁状の高まりと考えられたI a層中からはビニール、空缶等が検出され、最近の盛土であることが判明している。

しかしながら、付近には「大街道」という字名も存在しており、現道直下、あるいはさらに西側に既知の「鎌倉街道」が存在する可能性は非常に高い。また昨年度調査が実施された山田橋表通遺跡においては、古代官道と推定される道路状遺構が検出されており、付近に存在する稻荷台遺跡においても同様の遺構が検出されている。第82図は、鎌倉街道及び古代道路の推定ラインであり、古くは小熊吉蔵氏^{注(1)}、近年では須田 勉氏^{注(2)}の論考や発掘調査例を加味して作成したもの^{注(3)}である。また調査区域東側下に展開する中高根風戸地域には、平安時代末期の作といわれる木造聖観音立像を安置する日光寺や、鎌倉の鶴岡八幡宮から伝承したといい、一名「鎌倉ばやし」とも呼ばれる鶴峯八幡宮に伝えられる十二座神楽が今日まで残っている。その他にも立野に在住する旧家切替家には、源 頼朝に係る伝承や遺品も数多く残されており、この地域における古代末期～鎌倉時代にかけての「鎌倉」との関連の深さを物語っている。

また、小熊・須田両氏の論考のごとく、「鎌倉街道」=「古東海道」の可能性が極めて強いならば、山田橋表通遺跡や稻荷台遺跡において検出された道路状遺構と、字名等によって復元される鎌倉街道は一致するものと考えられ、字名「分目」や海上郡衙推定地付近を通して直結していたものと考えられる。



第80図 調査区西側No.1 トレンチ実測図



第81図 外迎山遺跡周辺地番図及び鎌倉街道推定図

IV その他時期不明

1 概 要

時期不明の遺構は19基検出された。いずれも小土壇であり、覆土も一様の状況を示していた。当初遺跡の性格から火葬墓等の墳墓関連の遺構と考えて調査を進めたが、19基の土壇からは何の確証も得られなかった。

2 遺構と遺物

1 土 壇

48号遺構 (第83図)

位置 E 2-2 グリッドに存在する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は楕円形を呈する。検出面は基本土層II b層上面であり、B～B'における長軸方位はN-51°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ0.8m・1m、深さは20cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

49号遺構 (第83図)

位置 E 1-30グリッドに位置する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は円形を呈する。検出面は基本土層II b層上面であり、B～B'における方位はN-35°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.92m・1m、深さは20cm前後を測る。底面から壁にかけてなだらかに立ちあがっている。

遺物 まったく検出されなかった。

50号遺構 (第83図)

位置 E 2-85グリッドに位置する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形はほぼ円形を呈している。検出面は基本土層II b層上面であり、B～B'における方位はN-20°-Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.72m・0.80m、深さは20cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり壁はなだらかに立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

51号遺構 （第83図）

位置 E 3－2 グリッドに存在する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はIII b 層上面であり、B～B'における方位はN－32°－Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.70・1 m、深さは最大36cmを測る。底面はテラスを形成しており、テラス部分においては深さ28cmを測る。壁はやや急激に立ちあがっている。

遺物 まったく検出されなかった。

52号遺構 （第83図）

位置 F 2－77グリッドに存在する。立地は標高82.6m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b 層上面であり、B～B'における方位はN－28°－Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ1.48・0.80m、深さは24cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ちあがっている。

遺物 まったく検出されなかった。

53号遺構 （第83図）

位置 F 2－87グリッドに存在する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈している。検出面はII b 層上面であり、B～B'における方位はN－15°－Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.76m・1 m、深さは28cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

54号遺構 （第84図）

位置 G 1－34グリッドに存在する。立地は標高82.3m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b 層上面であり、B～B'における方位はN－49°－Eを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ1.68m・1.48m、深さは最大41cmを測る。底面は中央部の窪みを除けばほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

55号遺構 （第84図）

位置 G 1－38グリッドに位置する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b 層上面であり、B～B'における方位は

N-2°-Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.76m・1.04m、深さは最大36cmを測る。底面の一部にテラスを有しており、テラス部分の深さは18cm前後を測る。壁はピット状に落ち込んだ最深部からの立ち上りが最も急激であるが、他は全体的になだらかに立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

56号遺構 (第84図)

位置 G2-49グリッドに存在する。立地は標高82.7m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈している。検出面はII b層上面であり、B～B'における方位はN-10°-Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ1.16m・0.88m、深さは36cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

57号遺構 (第84図)

位置 F3-86グリッドに存在する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈している。検出面はII b層上面であり、B～B'における方位は、ほぼ真北に等しい。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ1.2m・0.8m、深さは20cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

58号遺構 (第84図)

位置 F3-95グリッドに存在する。立地は標高82.6m前後の台地の平坦面である。

遺構 遺構の平面形から推定すると、G3-5グリッドにも存在していたものと考えられるが、確認調査時にバックホウを使用し、新期テフラ層上面まで下げた為に、すでに削平してしまっただけと考えられる。現存する遺構の平面形は不整な楕円形を呈しており、B～B'における方位はN-1°-Wを示す。A～A'における規模は1.44m、深さは24cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

59号遺構 (第85図)

位置 D9-80グリッドに存在する。立地は標高82.5m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈している。検出面はII b層上面であり、B～B'における方

位はN-10°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ88cm・68cm、深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

60号遺構 (第85図)

位置 E 8-15グリッドに存在する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b層上面であり、B～B'における方位はN-51°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ0.84m・1.32m、深さは24cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

61号遺構 (第85図)

位置 E 8-16グリッドに存在する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b層上面であり、C～C'における方位はN-22°-Wを示す。A～A'・C～C'における規模はそれぞれ1.52m・1.92m、深さは最大32cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は比較的なだらかに立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

62号遺構 (第85図)

位置 E 8-27グリッドに存在する。立地は標高82.4m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈している。検出面はII b層上面であり、B～B'における方位はN-46°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ0.9m・1.68m、深さは26cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

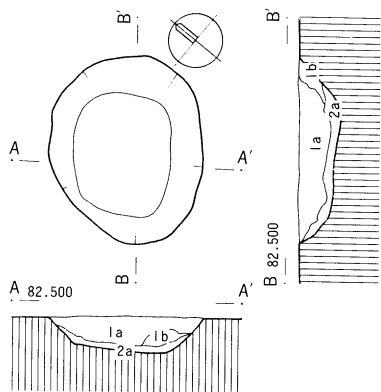
遺物 まったく検出されなかった。

63号遺構 (第86図)

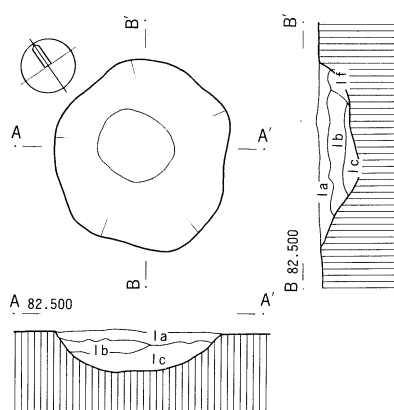
位置 F 8-52グリッドに存在する。立地は標高82.1m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な円形を呈している。検出面はII b層下面であり、B～B'における方位はN-5°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ1.76・1.60m、深さは20cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はややなだらかに立ち上っている。

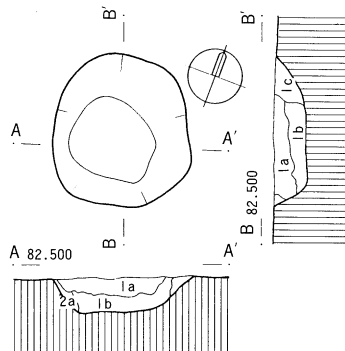
遺物 まったく検出されなかった。



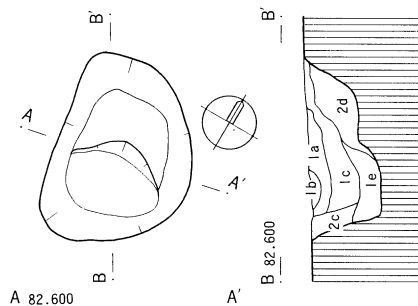
48号遺構



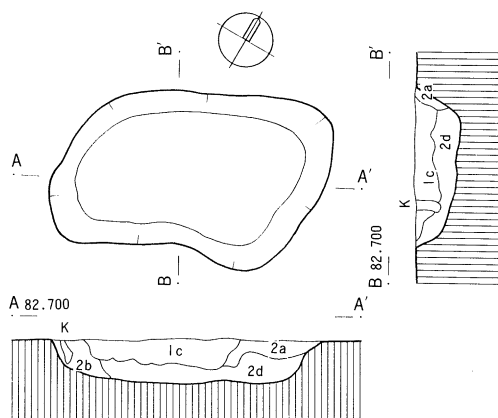
49号遺構



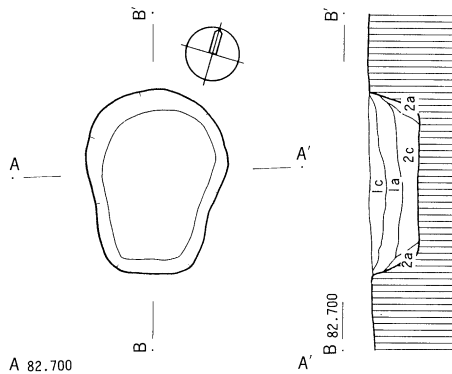
50号遺構



51号遺構



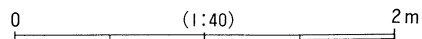
52号遺構



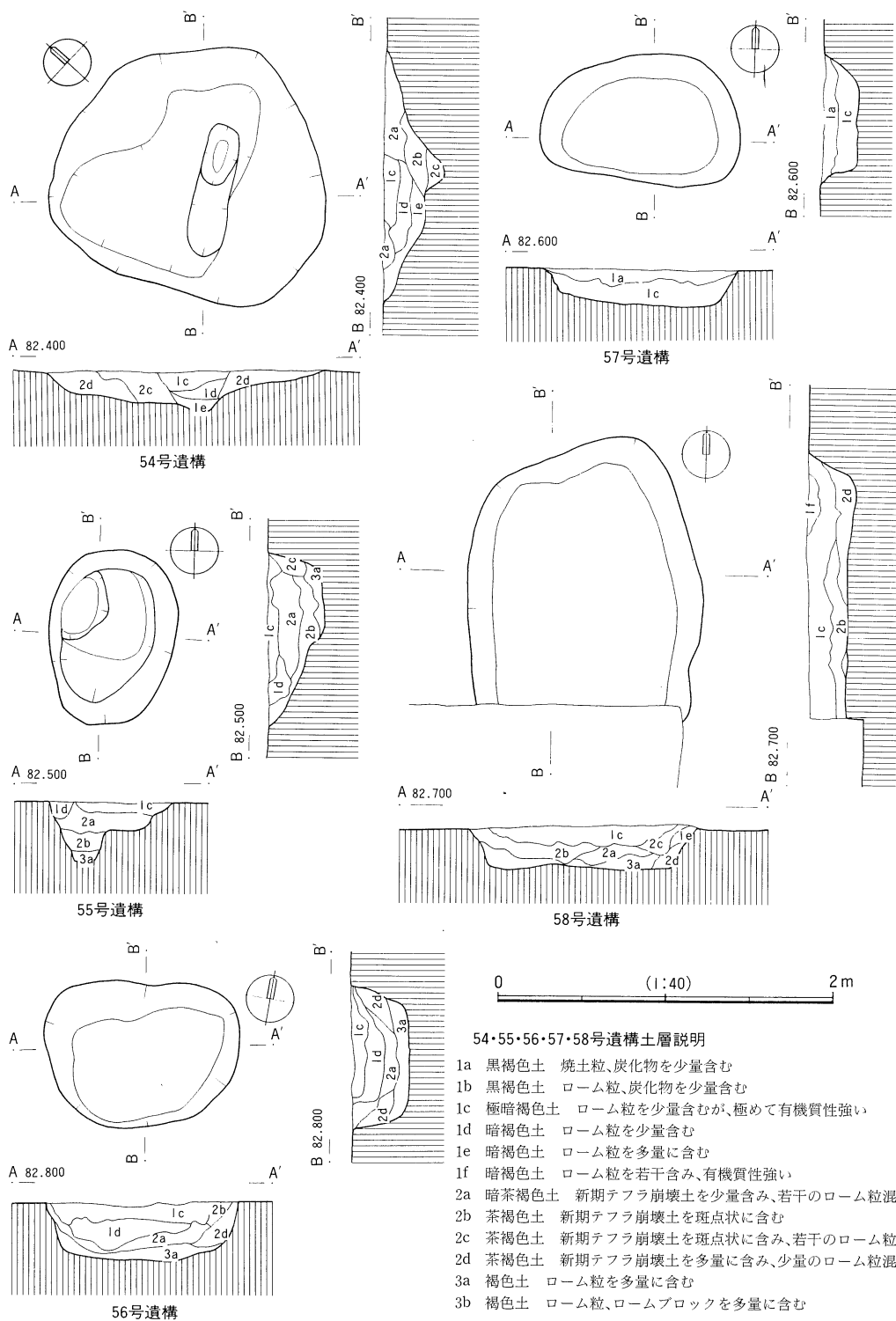
53号遺構

48 49 50・51・52・53号土層説明

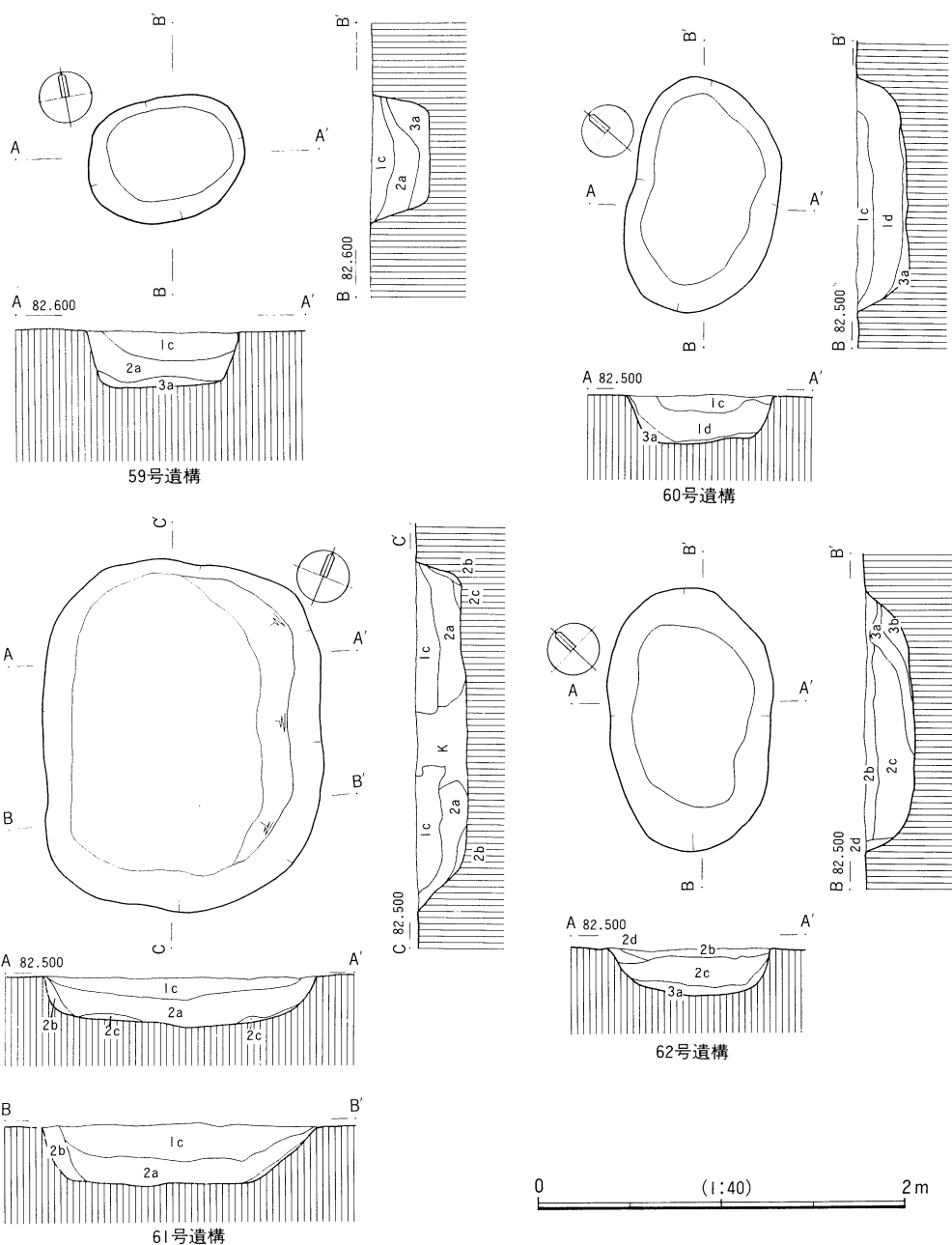
- 1a 黒褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む
- 1b 黒褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む
- 1c 極暗褐色土 ローム粒を少量含むが、極めて有機質性強い
- 1d 暗褐色土 ローム粒を少量含む
- 1e 暗褐色土 ローム粒を多量に含む
- 1f 暗褐色土 ローム粒を若干含む、有機質性強い
- 2a 暗茶褐色土 新期テフラ崩壊土を少量含む、若干のローム粒混入
- 2b 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む
- 2c 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む、若干のローム粒混入
- 2d 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含む、少量のローム粒混入
- 3a 褐色土 ローム粒を多量に含む
- 3b 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む



第83図 48・49・50・51・52・53号遺構実測図



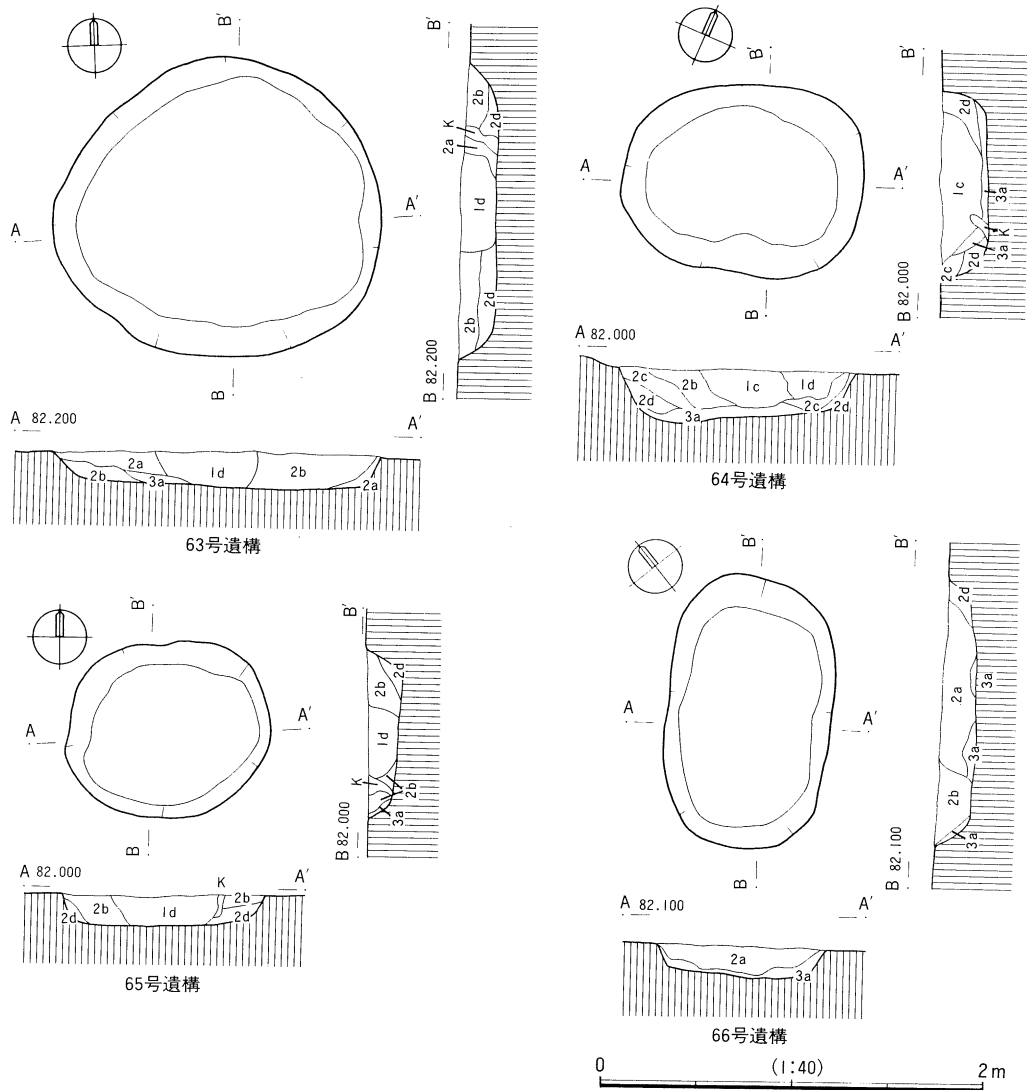
第84図 54・55・56・57・58号遺構実測図



59・60・61・62号遺構土層説明

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1a 黒褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む | 2a 暗茶褐色土 新期テフラ崩壊土を少量含む、若干のローム粒混入 |
| 1b 黒褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む | 2b 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む |
| 1c 極暗褐色土 ローム粒を少量含むが、極めて有機質性強い | 2c 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む、若干のローム粒混入 |
| 1d 暗褐色土 ローム粒を少量含む | 2d 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含む、少量のローム粒混入 |
| 1e 暗褐色土 ローム粒を多量に含む | 3a 褐色土 ローム粒を多量に含む |
| 1f 暗褐色土 ローム粒を若干含む、有機質性強い | 3b 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む |

第85図 59・60・61・62号遺構実測図



63・64・65・66号遺構土層説明

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1a 黒褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む | 2a 暗褐色土 新期テフラ崩壊土を少量含む、若干のローム粒混入 |
| 1b 黒褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む | 2b 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む |
| 1c 極暗褐色土 ローム粒を少量含むが、極めて有機質性強い | 2c 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を斑点状に含む若干のローム粒混入 |
| 1d 暗褐色土 ローム粒を少量含む | 2d 茶褐色土 新期テフラ崩壊土を多量に含む、少量のローム粒混入 |
| 1e 暗褐色土 ローム粒を多量に含む | 3a 褐色土 ローム粒を多量に含む |
| 1f 暗褐色土 ローム粒を若干含む、有機質性強い | 3b 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む |

第86図 63・64・65・66号遺構実測図

64号遺構 (第86図)

位置 F 8 - 82グリッドに存在する。立地は標高81.9m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b層下面であり、B～B'における方位はN-22°-Wを示す。A～A'・B～B'における規模は、それぞれ1.28m・1.04m、深さは最大28cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

65号遺構 (第86図)

位置 F 8 - 83グリッドに存在する。立地は標高81.9m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b層下面であり、B～B'における方位はほぼ真北を示す。A～A'・B～B'における規模はそれぞれ1.12m・0.92m、深さは16cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

66号遺構 (第86図)

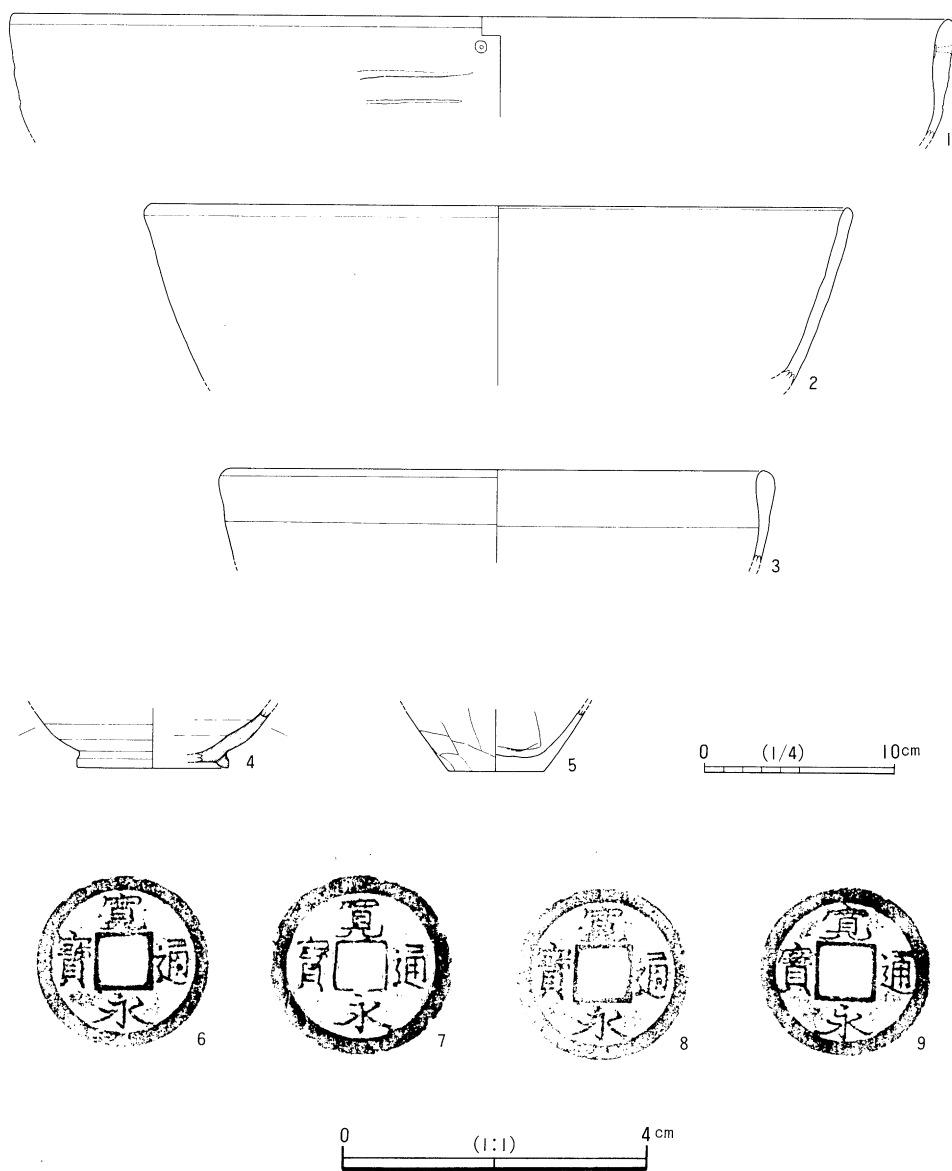
位置 F 8 - 94グリッドに存在する。立地は標高82m前後の台地の平坦面である。

遺構 平面形は不整な楕円形を呈する。検出面はII b層上面であり、B～B'における方位はN-40°-Eを示す。A～A'・B～B'における規模は0.88m・1.44m、深さは20cm前後を測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上っている。

遺物 まったく検出されなかった。

3 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物を第87図にまとめた。1・3は近世の内耳焙烙である。2は土師器大型碗である。4は須恵器長頸壺、5は土師器甕である。5～9は銅製の寛永通寶である。これらの遺物は46号遺構に関する大グリッドから検出されているものの散在的に検出されているものであり、特定の遺構からの検出ではない。



第87図 遺構外出土遺物実測図

第3章 唐 沢 遺 跡

1 概 要

唐沢遺跡は椎津川支流の最奥部、養老川小支谷との分水界近くに位置し、南から西に向かって湾曲しながら伸びる標高68～72mの細長い舌状台地上に立地している。

調査はこの台地のほぼ中央部を東西550mの範囲で行い、対象面積42,350m²の10%である4,235m²に対して行なわれた遺構確認調査である。遺構はすべて縄文時代のもので、早期条痕文系の遺物を伴う炉穴が21基と本遺跡の主体をなし、調査区中央部に19基が集中して大きな一群を形成し、北東緩斜面に2基の小群が確認されている。また調査区南東部には、早期撚糸文系土器、中期加曽利E式土器、後期堀之内式土器を伴う土壌がそれぞれ1基ずつ確認されている。

調査によって検出された資料は、整理作業の過程で、時期別分類、総数把握に努めた結果、6,023点の土器片と、1,728点の礫・石器を確認した。出土土器の約32%は晩期に比定される資料である。その他早期～後期に至る各期の資料も出土しているが、早期後葉の条痕文系土器を除けばいづれも僅少である。

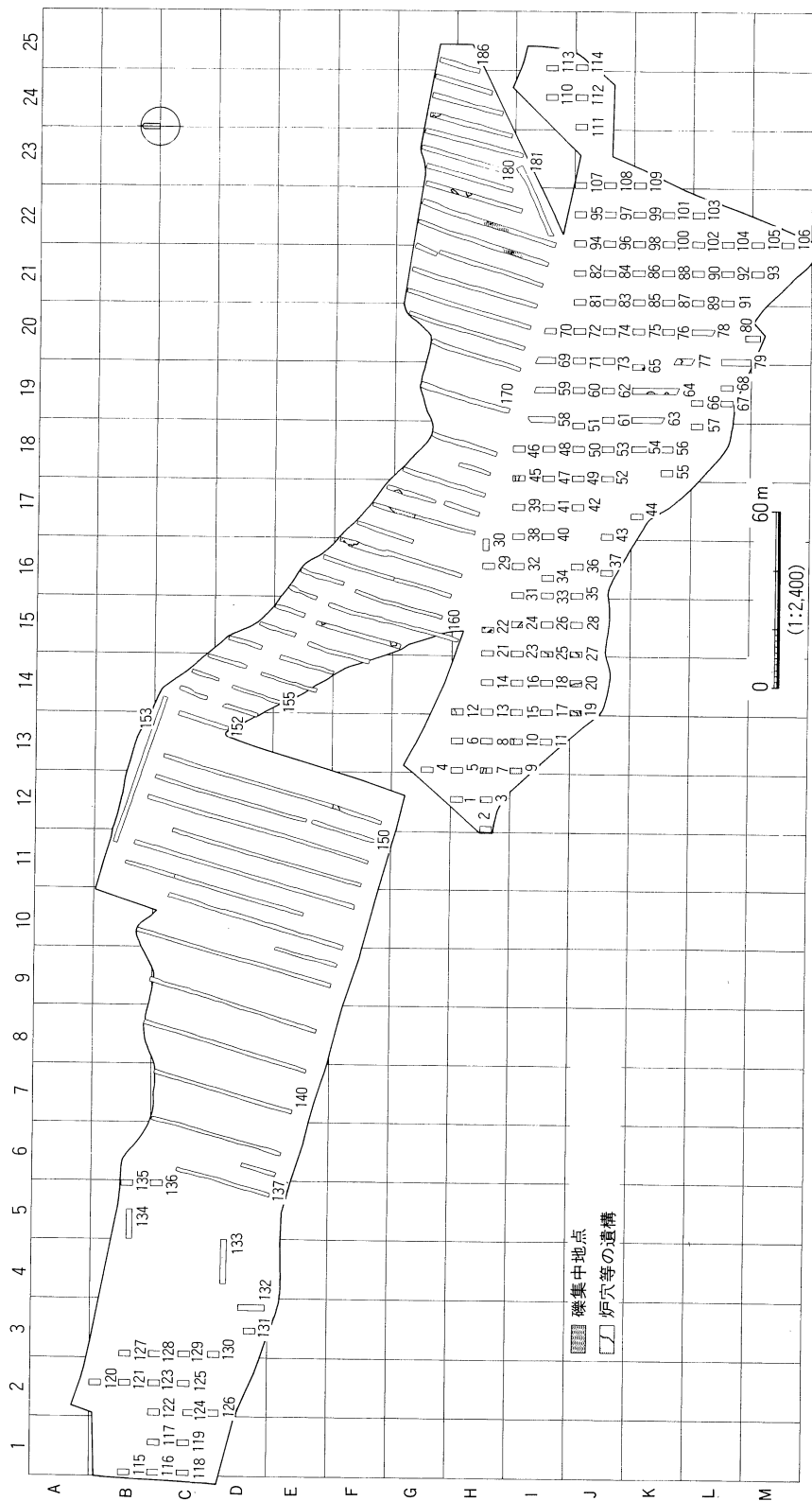
それぞれの内訳は以下の通りである。

縄文土器	第Ⅰ群	早期前葉の撚糸文系土器	206点…………… a
	第Ⅱ群	早期中葉の沈線文系土器	5 点…………… b
	第Ⅲ群	早期後葉の条痕文系土器	677点…………… c・d
	第Ⅳ群	前期前葉の繊維土器	66点…………… e
	第Ⅴ群	前期後葉の浮島系土器	2 点…………… f
	第Ⅵ群	中期後葉の加曽利E式土器	74点…………… g
	接Ⅶ群	後期前葉の堀之内式土器	79点…………… h
	第Ⅷ群	後期中葉の加曽利B式土器	15点…………… i
	第Ⅸ群	晩期後葉の土器	1,927点…………… j
その他		細片（時期不明）	2,898点…………… k
		土師器	73点…………… l
		須恵器	1 点…………… m

（cは鶴ヶ島台式、dは広義の茅山系の土器群である）

石器 磨石2点、細片214点

礫 自然礫923点、焼礫558点、割礫31点



第88図 唐沢遺跡トレンチ配置図

出土遺物は縄文時代の土器、礫が大部分を占め、覆土を掘り下げていないため遺構に伴うものは少なく、包含層中のものが主体をなしている。この包含層中の遺物は早期～晩期に渡って出土しており、以下の分布傾向を示している。

第Ⅰ群………南東部の12号遺構を中心とした区域と中央南側の区域から出土するが、両者とも集中度は低い。

第Ⅱ群………調査区域に散在的に検出されており、点数も少ない。三戸式土器が主体。

第Ⅲ群………調査区域中央部の炉穴群と一致する範囲で集中する。北東部の炉穴群周辺は極めて少ない。cは鵜ヶ島台式、dは広義の茅山式土器に比定される。

第Ⅳ群………調査区域中央部西寄りの北端部に集中するが、両者とも密度は低い。関山～黒浜式土器が主体を占める。

第Ⅴ群………調査区域に散在的に検出、点数も少ない、浮島式土器が主体。

第Ⅵ群………調査区域東南部13号遺構付近に若干集中するのみで総数は極めて少ない。加曽利E式土器が主体である。

第Ⅶ・Ⅷ群………13号・14号遺構付近に集中しているが密度は低い。堀之内式・加曽利B式土器が検出されている。

第Ⅸ群………Ⅰ19グリッド周辺を中心に集中的に検出されている。遺構に伴うものは皆無であり、大多数が地表面で検出された表採である。

この他にソフトローム層中より剥片4点と、調査区域に散在的に検出された土師器・須恵器片がある。また、古墳時代所産のものと思われる鉄鏃1点と、滑石製白玉1点が表土中から検出されている。

2 遺構と遺物

遺構内より検出された遺物を第89図以下にまとめた。このうち第89図1～第90図58に図示した遺物は、すべて遺構覆土上面からの検出である。

第89図1～5は10号遺構より検出されている。1～3は早期擦糸文系、4・5は早期条痕文系の土器である。6～9は2号遺構、10～12は3号遺構、13～17は4号遺構、18～21は5号遺構、22は7号遺構、23～25は8号遺構、26～35は9号遺構、36は101号遺構、37・38は105号遺構、39・40は109号遺構、41・42は108号遺構覆土上面から検出された早期条痕文系の土器であり、胎土には繊維を含んでいる。また、検出された遺構覆土上面には焼土粒が散在しており、当期に比定される炉穴であるものと推定される。

第90図43～48は、13号遺構検出のものである。このうち46を除けばすべて加曽利E式期の特徴を示すものである。また遺構は覆土を掘り下げてない為に不明な点も多いが、焼土粒等の検

出を認めないことから当期に比定される土壌であるものと考えられる。

第90図49～58は14号遺構覆土上面から検出されている。56・57は、あるいは加曾利B式期の所産かとも考えられるが、大部分は堀之内式期の範疇でとらえられるものと考えられ、遺構の属する時期も当期に比定されよう。(図版26)

3 包含層遺物

遺跡内出土遺物を第91図以下にまとめた。第91図1～28は第Ⅰ群土器に比定されるものである。このうち1～4は口唇部以下に横位の撚糸文を施すものであり、1は井草Ⅰ式、他は井草Ⅱ式に比定されるものである。また5・6は撚糸文の条間が開いており、器面がよく磨かれていることから、稻荷台式土器に比定されるものと考えられる。7～28はすべて胴部の破片であり、具体的な器形、時期の確定は困難である。ただし23～28は撚糸文の条間や胎土などを加味した場合、あるいは晩期に比定される一群ではないかと考えている。

第91図29～32は第Ⅱ群土器に比定されるものである。詳細は不明であるが三戸式土器に比定されるものと考えられる。

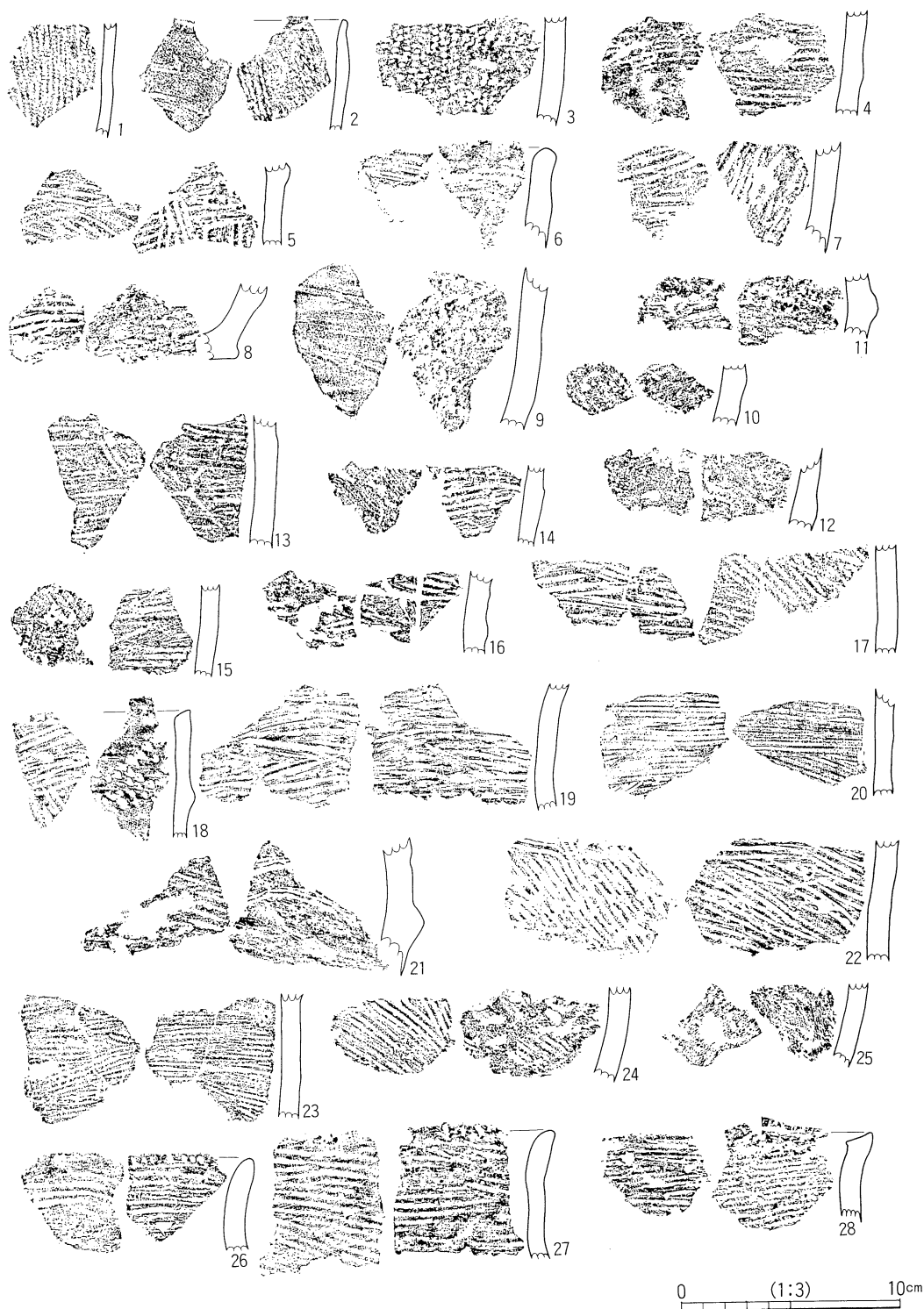
第91図33～第92図60は第Ⅲ群の土器に比定されるものである。このうち34～39は外面に沈線文や円形刺突文、内面には条痕が施されており、胎土は繊維を含んでいる。鶉ヶ島台式土器に比定される。またこれ以外は内外面とも条痕が施されており、また胎土には繊維を含んでいる。広義の茅山式土器に比定される。

第92図61～第93図75は第Ⅳ群の土器に比定されるものである。胎土に繊維を含み、羽状縄文を施すなどの特徴が認められ、関山～黒浜期に相当するものと考えられる。また76は竹筥による連続刺突が認められ、第Ⅴ群の範疇に属するものと考えられる。

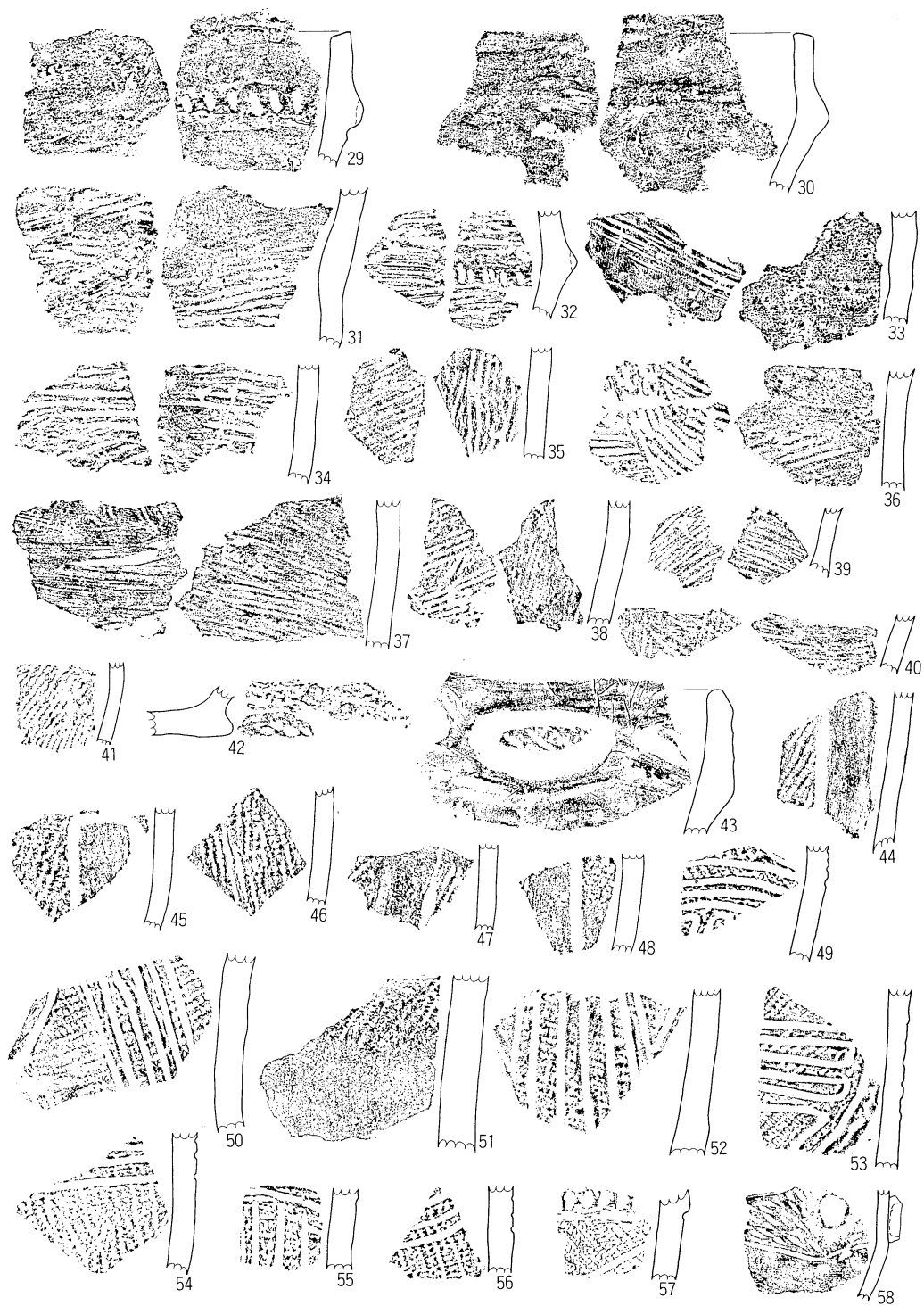
第93図77～85は、第Ⅵ群、第94図86～99は第Ⅶ群、100～104は第Ⅷ群にそれぞれ比定される土器群である。これらの土器群は前述した該当期の遺構と考えられる土壌付近に散在して検出されている。

第94図105～第97図179は、第Ⅸ群の土器に比定されるものである。外面の文様構成からそれぞれ、沈線・条痕系に細分が可能であり、前述した撚糸文もこれに加わる可能性が高い。またこれらの遺物はⅠ－19グリッドを中心とした範囲に多量に分布しており、付近に住居跡等の遺構の存在が考えられる。

第98図1・2は磨石であり、表裏とも中央部に敲かれた痕跡を有している。包含層遺物として紹介したこれらの遺物は、晩期に比定される遺物を除けば、いずれも遺跡内に散在した状況で検出されるものであり、特定の遺構からの出土ではない。(図版27・28)

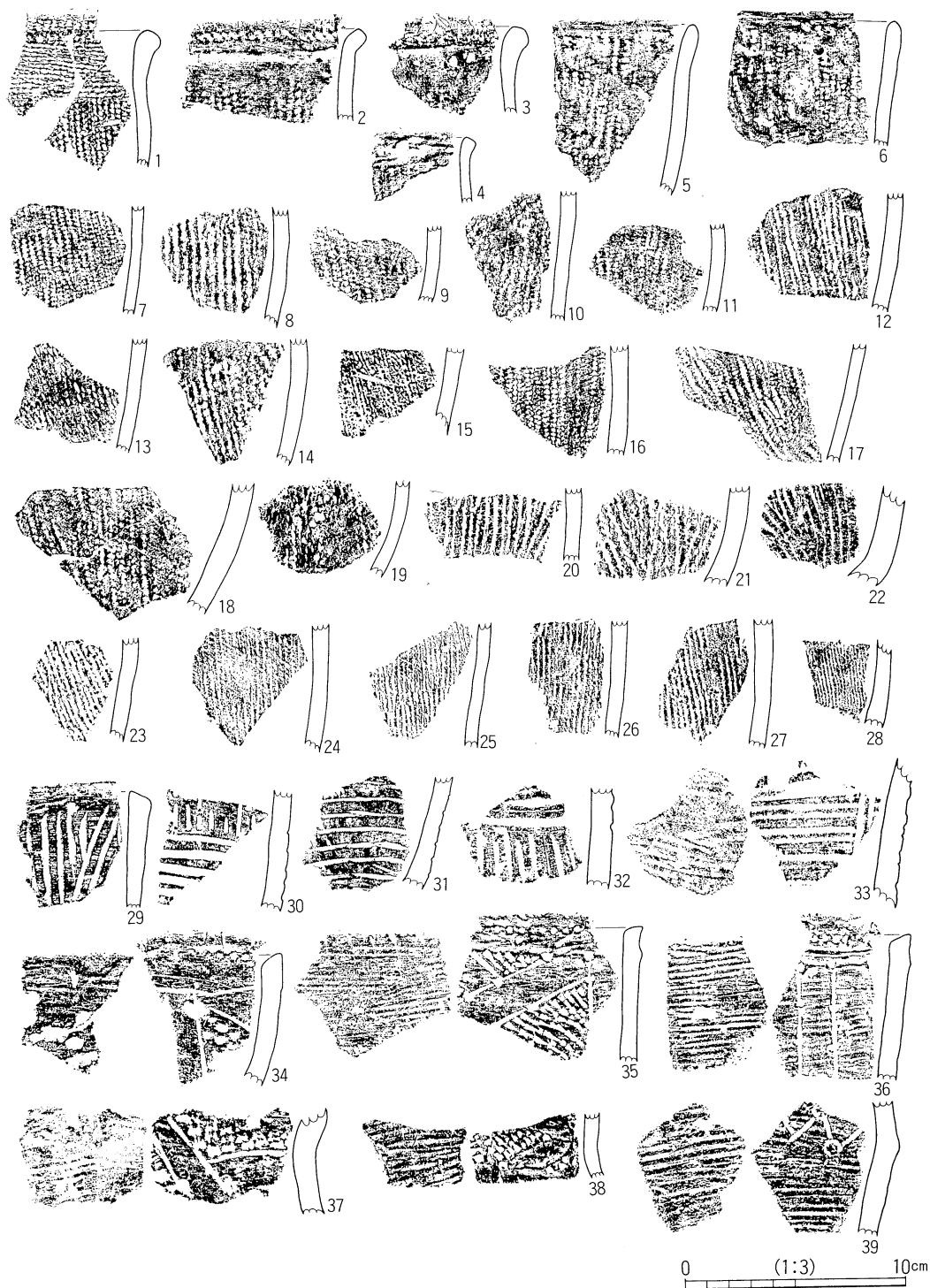


第89図 唐沢遺跡出土遺物実測図 1

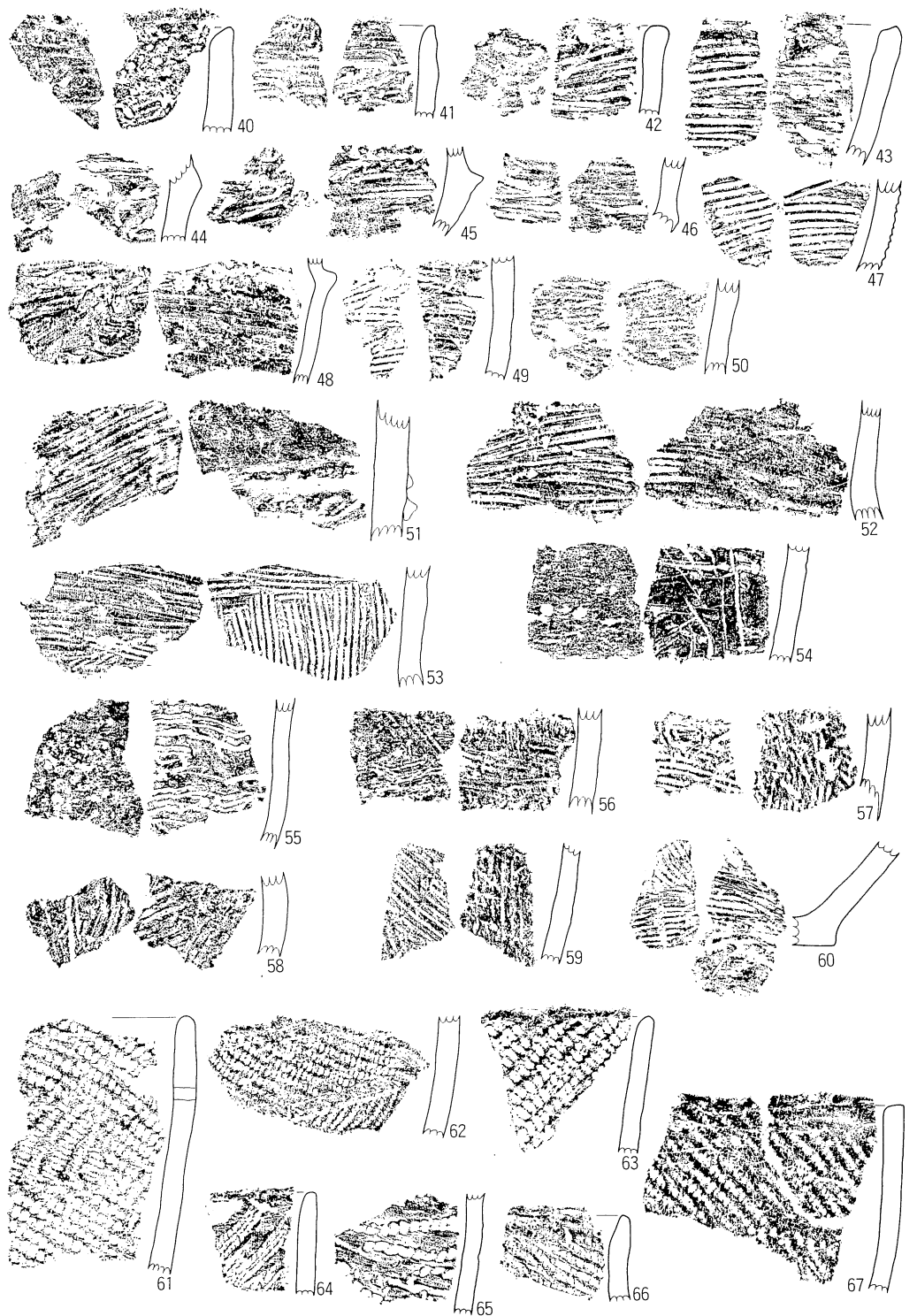


0 (1:3) 10cm

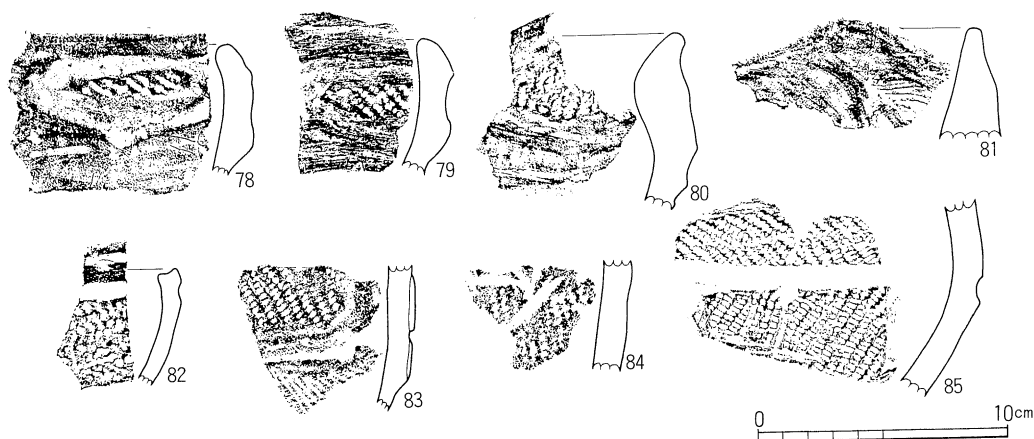
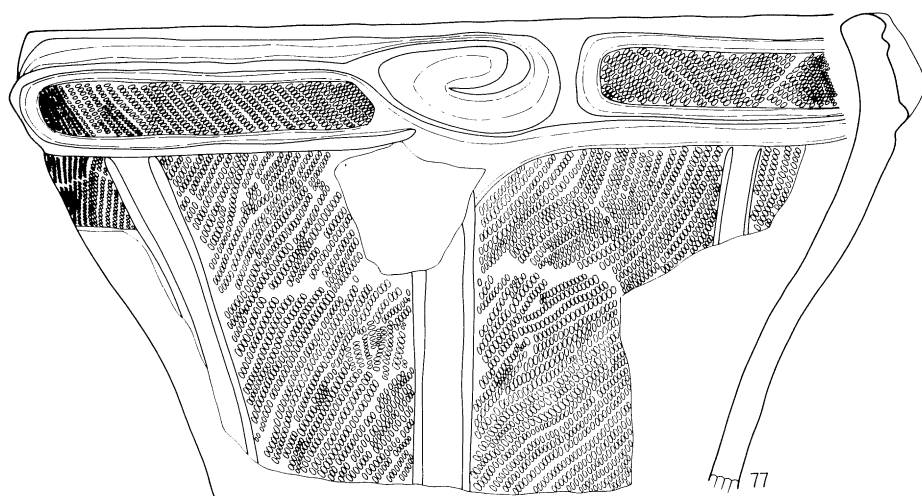
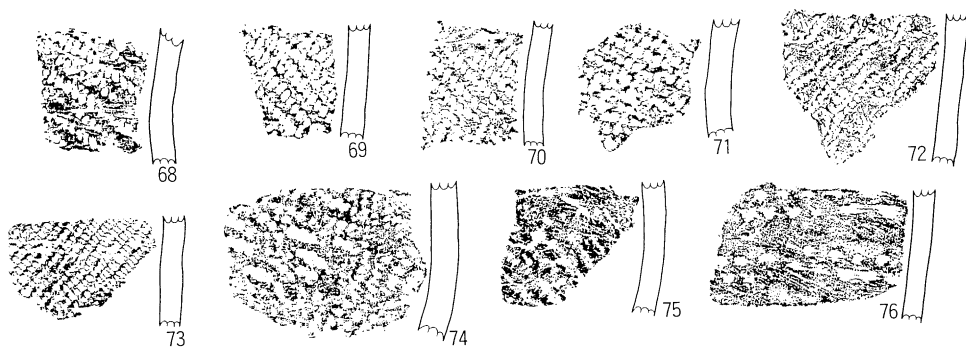
第90図 唐沢遺跡出土遺物実測図 2



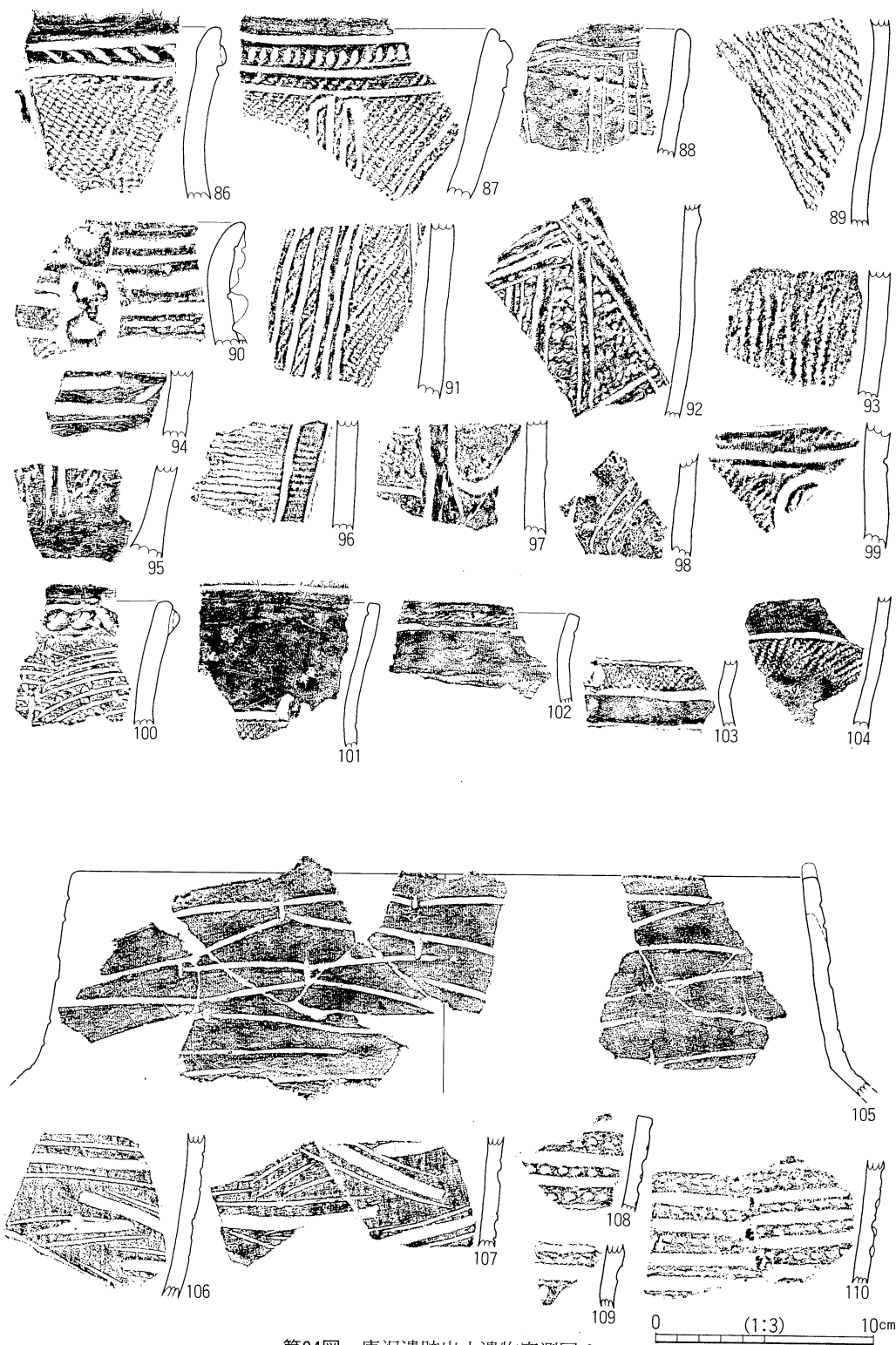
第91図 唐沢遺跡出土遺物実測図 3



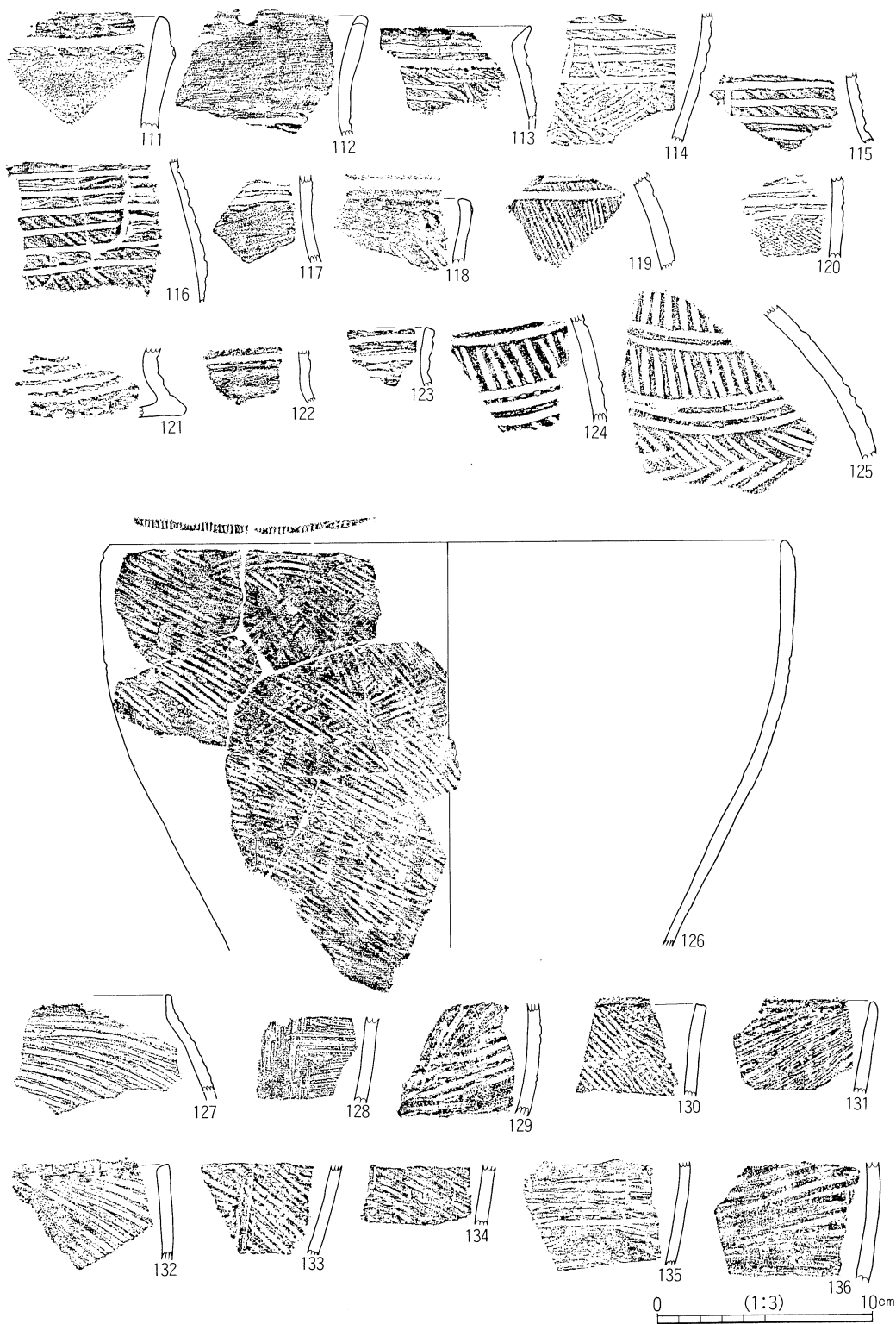
第92図 唐沢遺跡出土遺物実測図 4



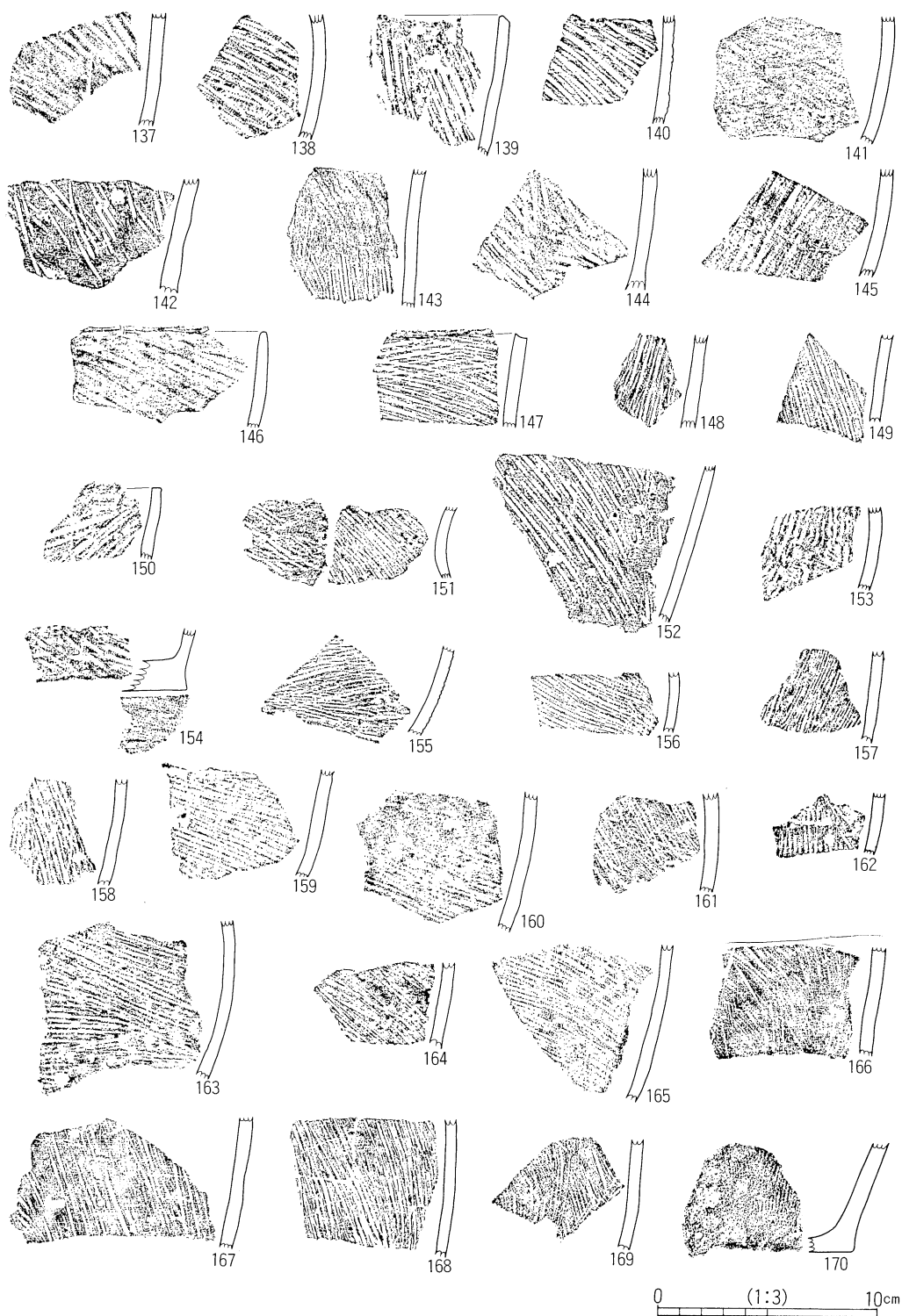
第93図 唐沢遺跡出土遺物実測図 5



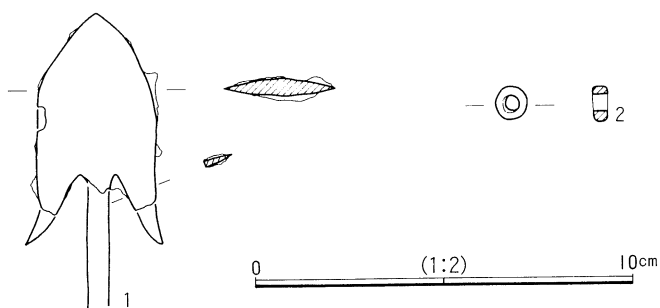
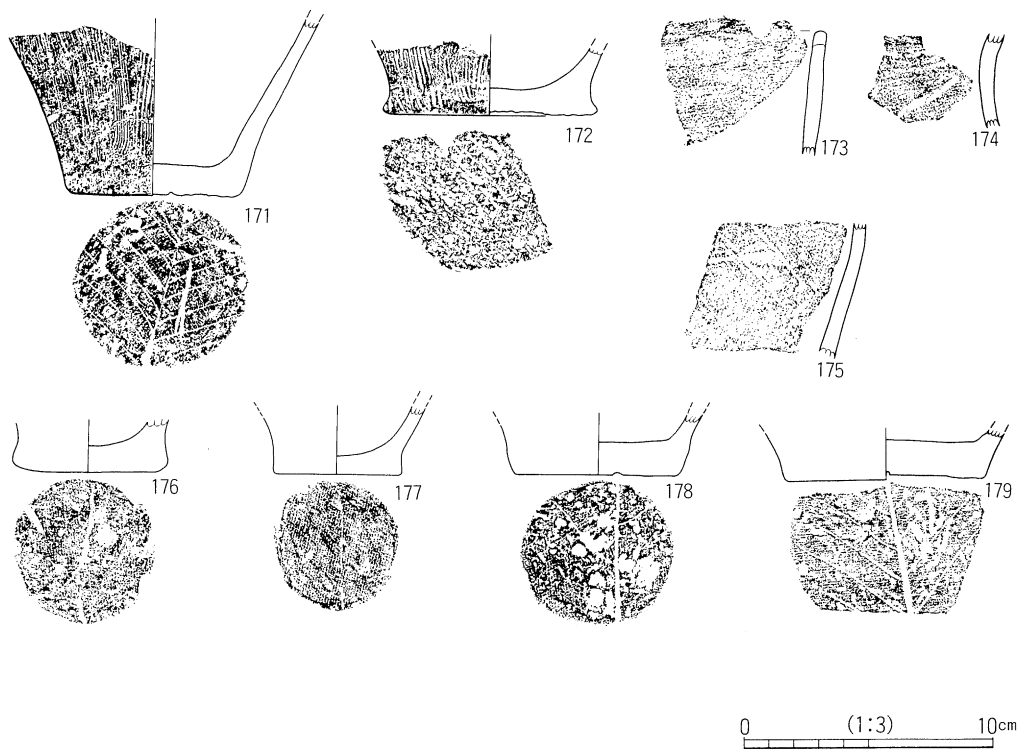
第94図 唐沢遺跡出土遺物実測図 6



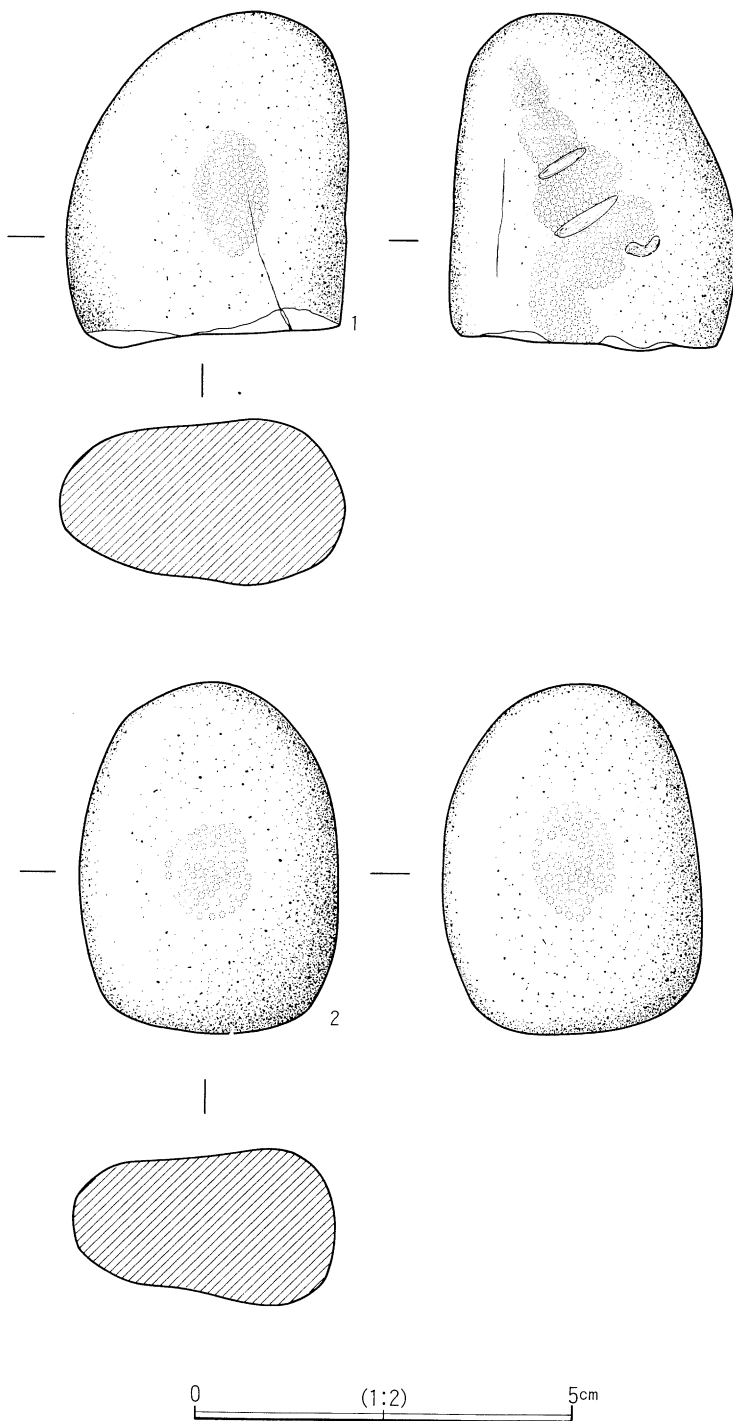
第95図 唐沢遺跡出土遺物実測図 7



第96図 唐沢遺跡出土遺物実測図 8



第97図 唐沢遺跡出土遺物実測図 9



第98図 唐沢遺跡出土遺物実測図10

第11表 唐沢遺跡出土遺物一覧表

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
1	A B	2 3					k 2	2 3	5
2	A B	35 15					a 1 d 16 g 3 j 2 k 13	35 15	50
3	A B	1 3					k 1	1 3	4
4	A B	4 1			2		d 1 k 2 l 1	4 3	7
5	A B	7 7					a 1 h 3 k 3	7 7	14
6	A B	2 2			3		a 1 d 1 k 3	5 2	7
7	A B	40 12			2		d 29 g 2 k 11	42 12	54
8	A B	3			5 2		d 5	5 5	10
9	A B	21 7					a 1 d 11 k 9	21 7	28
10	A B	21 11					d 19 c 1 k 1	21 11	32
11	A B	3 10			1		d 3	3 11	14
12	A B	8 9			2		a 1 d 8 k 1	10 9	19
13	A B	9			1 3		a 1 d 6 k 3	10 3	13
14	A B	12 2		2	6 8		a 4 d 12 j 1 k 2 l 1	20 10	30
15	A B	4 2					d 4	4 2	6
16	A B	5 2					d 4 k 1	5 2	7
17	A B	1 1					d 1	1 1	2
18	A B	4 1					d 3 k 1	4 1	5
19	A B	8 5					d 7 k 1	8 5	13
20	A B	18 6					d 15 k 3	18 6	24
21	A B	12 9			13 10		a 3 d 20 k 2	25 19	44
22	A B	4 1					a 1 d 2 k 1	4 1	5
23	A B	8 7					a 1 d 5 j 1 k 1	8 7	15

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
24	A B	7 4			25 10		d 22 e 2 h 2 k 6	32 14	46
25	A B	97 23					a 16 d 61 j 9 k 11	97 23	120
26	A B	1 2		1	6		a 3 d 3 j 2	8 2	10
27	A B	38 20					a 3 d 30 j 2 k 3	38 20	58
28	A B	5 12		5 2			a 2 d 4 k 4	10 14	24
29	A B	2					d 2	2 —	2
30	A B				1 3		a 1	1 3	4
31	A B				6 9		a 3 d 3	6 9	15
32	A B	2 2		1 1	1 2		a 1 d 3	4 5	9
33	A B	14 5		1	7 3		a 5 d 10 h 1 j 3 k 3	22 8	30
34	A B	1			3 2		a 3	3 3	6
35	A B	5		1	1		a 3 d 2 k 2	7 —	7
36	A B	6 1					j 6	6 1	7
37	A B	1		1	7 3		a 3 d 6	9 3	12
38	A B	1						— 1	1
39	A B	2						— 2	2
40	A B	2			1		k 1	1 2	3
41	A B	3 1			1		a 1 g 3	4 1	5
42	A B				2			— 2	2
43	A B								0
44	A B	5 4			3 2		a 1 d 6 j 1	8 6	14
45	A B								0
46	A B								0
47	A B				1		a 1	1	1

トレンチNo	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
48	A B	1 1			2		a 1	1 3	4
49	A B				2			— 2	2
50	A B				1		a 1	1 —	1
51	A B	17 8	5	27 1	5		a 4 d 1 j 35 k 14	54 9	63
52	A B	1 5			1		k 1	1 6	7
53	A B	1					k 1	1 —	1
54	A B	3 6			1		d 2 l 1	3 7	10
55	A B	1			6			— 7	7
56	A B	1 4		1	4 1		a 1 d 3 l 1	5 6	11
57	A B	5			41		a 1 g 39 k 6	46 —	46
58	A B	32 16		3 1	36 8		a 5 d 2 j 42 k 17 l 5	71 25	96
59	A B	1		1	1		k 2	2 1	3
60	A B	5 1		1	1		a 1 j 3 k 2	6 2	8
61	A B	2 1			3		h 1 j 3 k 1	5 1	6
62	A B	2 2		1	1 1		i 1 j 2 l 1	4 3	7
63	A B	5 2					j 2 k 3	5 2	7
64	A B	51 5		35 4	3 3		a 13 g 4 j 55 k 17	89 12	101
65	A B	2 2			1 3		a 2 d 1	3 5	8
66	A B				3 1		a 3	3 1	4
67	A B	3						— 3	3
68	A B	3 8		27	2 3		a 2 d 1 k 17 l 12	32 11	43
69	A B	5 1		3 1	1 1		a 6 j 2 k 1	9 3	12
70	A B								0
71	A B	36 7			1 2		a 6 d 12 j 12 k 7	37 9	46

トレンチNo	A 土 器 B 礫・石器	一 括	Ⅱ a 層	Ⅱ b 層	Ⅱ c 層	Ⅱ d 層	時 期	小 計	合 計
72	A B	2 3			2		a 1 k 3	4 3	7
73	A B	6 2			1		a 2 j 2 k 3	7 2	9
74	A B	4 2			1		a 3 d 1 k 1	5 2	7
75	A B	5			3		a 5 j 2 k 1	8 —	8
76	A B	6		1	6 11		a 1 d 1 g 5 h 3 k 3	13 11	24
77	A B	6 5			5 15		a 2 d 4 i 2 l 3	11 20	31
78	A B	9 4			10 7		a 4 d 7 k 8	19 11	30
79	A B	7 11			5 11		a 8 d 1 h 1 k 2	12 22	34
80	A B	4 3			4 5		d 1 j 2 k 5	8 8	16
81	A B	1			2		k 1	1 2	3
82	A B								0
83	A B	2			1			— 3	3
84	A B	1						— 1	1
85	A B	9 10		1			j 1 k 8	9 11	20
86	A B				1			— 1	1
87	A B	2 1			1		k 2	2 2	4
88	A B	3 1			1		a 3 k 1	4 1	5
89	A B	3			2 5		a 2 k 3	5 5	10
90	A B	4			1		k 5	5 —	5
91	A B	2			1		a 1 g 1	2 1	3
92	A B	3			3		a 3	3 3	6
93	A B	1						— 1	1
94	A B	1						— 1	1
95	A B	4						— 4	4

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
96	A B	1 1					d 1	1 1	2
97	A B	1						— 1	1
98	A B	1						— 1	1
99	A B				1			— 1	1
100	A B	1						— 1	1
101	A B	2						— 2	2
102	A B	2					a 1 j 1	2 —	2
103	A B	1					k 1	1 —	1
104	A B	2			4		k 4	4 2	6
105	A B				6 1		a 1 d 1 j 1 k 3	6 1	7
106	A B	3 2			2		a 3 d 1 k 1	5 2	7
107	A B								0
108	A B	1					c 1	1 —	1
109	A B	1 7					k 1	1 7	8
110	A B	4			2		j 2 k 2	4 2	6
111	A B								0
112	A B	1						— 1	1
113	A B								0
114	A B								0
115	A B								0
116	A B	1			1			— 2	2
117	A B	4 2			1		g 4 h 1	5 2	7
118	A B								0
119	A B	1 1					a 1	1 1	2

トレンチNo	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
120	A B				1		a 1	1 —	1
121	A B	12 1			2 2		a 1 e 1 h 7 k 3 l 2	14 3	17
122	A B	3 1		3	1		h 4 k 3	7 1	8
123	A B	8 3			7		a 5 h 4 i 2 j 1 k 3	15 3	18
124	A B	1					h 1	1 —	1
125	A B	4					a 2 k 2	4 —	4
126	A B				1 1		k 1	1 1	2
127	A B	2 1					i 1 k 1	2 1	3
128	A B	2 5					k 1 l 1	2 5	7
129	A B	3			3		a 3	3 3	6
130	A B				2			— 2	2
131	A B								0
132	A B	5 2					a 2 d 2 k 1	5 2	7
133	A B				1			— 1	1
134	A B	2						— 2	2
135	A B	2						— 2	2
136	A B								0
137 D 6	A B	1 1					k 1	1 1	2
138 D 6	A B	1						— 1	1
139 C 6	A B	4 1					d 2 j 2	4 1	5
139 D 6	A B	3 1					j 3	3 1	4
140 C 7	A B	3						— 3	3
140 D 7	A B	2 1					d 2	2 1	3
140 E 7	A B	1					d 1	1 —	1

トレンチNo	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
141 B 8	A B	1 2					k 1	1 2	3
141 C 8	A B	1 1					a 1	1 1	2
141 E 7	A B	3 1					j 2 k 1	3 1	4
141 E 8	A B	2 2					d 2	2 2	4
141 D 8	A B	2					d 1 k 1	2 —	2
142 B 9	A B	1						— 1	1
142 C 9	A B	17 4					d 4 e 3 g 1 i 2 j 4 k 3	17 4	21
142 D 8	A B	6 3					a 1 d 2 k 3	6 3	9
142 D 9	A B	9 1					d 5 j 2 k 2	9 1	10
142 E 8	A B	5 1					e 3 l 2	5 1	6
143 B 10	A B	5 2					e 2 h 2 k 1	5 2	7
143 C 9	A B	6 1					d 3 e 2 k 1	6 1	7
143 C 10	A B	17 3					e 15 k 1 l 1	17 3	20
143 D 9	A B	8 1					d 4 e 1 k 3	8 1	9
143 E 9	A B	2 2					d 1 i 1	2 2	4
143 F 9	A B	1						— 1	1
144 B 10	A B	2 1					d 1 e 1	2 1	3
144 C 10	A B	1					d 1	1 —	1
144 D 10	A B	1 1					l 1	1 1	2
144 E 10	A B	1					e 1	1 —	1
144 E 9	A B	2					e 2	2 —	2
144 F 9	A B								0
145 C 10	A B	2 1					e 1 k 1	2 1	3
145 D 10	A B	4						— 4	4

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	Ⅱ a 層	Ⅱ b 層	Ⅱ c 層	Ⅱ d 層	時 期	小 計	合 計
145 E 10	A B	1						— 1	1
145 F 9	A B	1 1					d 1	1 1	2
146 B 11	A B	2						— 2	2
146 D 10	A B								0
146 C 11	A B	1 2					e 1	1 2	3
147 B 11	A B	1						— 1	1
147 C 11	A B								0
147 D 11	A B	3 2					e 2 k 1	3 2	5
147 E 10	A B	5 2					d 1 e 3 l 1	5 2	7
147 F 10	A B	5						— 5	5
148 C 11	A B	2 7					e 1 k 1	2 7	9
148 D 11	A B	1 5					d 1	1 5	6
148 E 11	A B								0
149 D 11	A B	1						— 1	1
149 D 12	A B	5 6					e 2 k 3	5 6	11
149 E 11	A B	4 1					e 2 k 1 l 1	4 1	5
149 E 12	A B	2 2					k 2	2 2	4
149 F 11	A B	2 4					d 2	2 4	6
149 B 12	A B	1 2					d 1	1 2	3
149 C 12	A B	1 1					d 1	1 1	2
150 C 12	A B	4 10					c 3 e 1	4 10	14
150 D 12	A B	5 1					d 1 i 2 k 2	5 1	6
150 E 12	A B	2 5					d 2	2 5	7
150 F 12	A B								0

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
151 C 13	A B	1 3					e 1	1 3	4
151 D 12	A B	2						— 2	2
151 E 12	A B	2 3					d 2	2 3	5
151 F 12	A B	6 4					d 5 k 1	6 4	10
152 C 13	A B	2						— 2	2
152 C 14	A B	1						— 1	1
152 D 13	A B	4						— 4	4
153 B 12	A B	3 3					d 1 k 2	3 3	6
153 B 13	A B	1 1					e 1	1 1	2
153 C 13	A B	7 1					a 3 d 2 e 2	7 1	8
154	A B								0
155 D 14	A B	3						— 3	3
155 E 14	A B	2						— 2	2
156 D 14	A B	3 1					a 1 g 1 k 1	3 1	4
156 E 14	A B	2 2					d 2	2 2	4
157 D 15	A B	1						— 1	1
157 E 14	A B	14						— 14	14
158 F 15	A B	6 7					d 4 k 2	6 7	13
159 F 15	A B	16 20					a 1 d 14 c 1	16 20	36
159 G 15	A B	12 4					b 2 d 10	12 4	16
160 F 15	A B	1						— 1	1
160 G 15	A B	3						— 3	3
161 F 15	A B	3						— 3	3
161 F 16	A B								0

トレンチNo	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
161 G15	A B	6 6					d 6	6 6	12
161 E16	A B	2 1					k 2	2 1	3
162 F16	A B	1 5					d 1	1 5	6
162 G16	A B	2 1					a 1 d 1	2 1	3
162 E16	A B	1 1					a 1	1 1	2
163 F16	A B	6 1					d 5 h 1	6 1	7
163 G16	A B	1 3					d 1	1 3	4
164 F17	A B	10 5					d 6 k 4	10 5	15
164 G16	A B	4 2					d 3 k 1	4 2	6
164 G17	A B	1					k 1	1 —	1
165 F17	A B	2						— 2	2
165 H17	A B	1					C 1	1 —	1
166 F17	A B	6 4					d 6	6 4	10
166 G17	A B	5 5					d 5	5 5	10
166 H17	A B	7 1					d 7	7 1	8
167 H17	A B	3					a 1 d 1 k 1	3 —	3
167 G18	A B	4 2					d 4	4 2	6
168 G18	A B	2 1					a 1 k 1	2 1	3
168 H18	A B	1 3					h 1	1 3	4
169 H18	A B	1					d 1	1 —	1
170 G19	A B	3						— 3	3
170 H19	A B	98 33					j 73 k 25	98 33	131
171 H20	A B	3 5					j 2 k 1	3 5	8
171 I19	A B	5 1					j 3 k 2	5 1	6

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
171 H19	A B	1						— 1	1
172 G20	A B	2 1					a 1 e 1	2 1	3
172 H20	A B	13 7					h 3 j 8 k 2	13 7	20
172 I 20	A B	4					a 1 j 2 k 1	4 —	4
173 H20	A B	3						— 3	3
173 G21	A B	1					e 1	1 —	1
174 G21	A B	3 4					e 3	3 4	7
174 H21	A B	1 2					a 1	1 2	3
174 I 21	A B	1						— 1	1
175 G21	A B	2 1					a 1 k 1	2 1	3
175 G22	A B	4						— 4	4
175 H21	A B	3						— 3	3
176 G22	A B	2 5					k 2	2 5	7
176 H21	A B	2 4					k 2	2 4	6
177 G22	A B	1 1					k 1	1 1	2
177 H22	A B	1 12					d 1	1 12	13
178 G23	A B	1						— 1	1
178 H22	A B	9						— 9	9
179 G23	A B	3						— 3	3
179 H23	A B	1 2					e 1	1 2	3
180 G23	A B	1					a 1	1 —	1
180 H23	A B	2					d 2	2 —	2
181 I 22	A B	2 1					a 1 h 1	2 1	3
181 I 23	A B	2 2					a 1 j 1	2 2	4

トレンチNo.	A 土 器 B 礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
182 G23	A B	1 17					k 1	1 17	18
182 H23	A B	2 21					a 1 d 1	2 21	23
182 I 23	A B	3						— 3	3
183 G24	A B	1 7					a 1	1 7	8
183 H24	A B	5 4					d 5	5 4	9
183 H23	A B	1						— 1	1
184 G24	A B	1 8					d 1	1 8	9
184 H24	A B	18 17					a 1 b 2 d 2 e 2 i 3 k 8	18 17	35
185 G24	A B	13 17					a 2 d 4 j 1 k 4 l 2	13 17	30
185 H24	A B	5 16					b 1 e 1 i 1 k 2	5 16	21
186 G25	A B	15 20					a 1 d 7 e 1 f 2 k 4	15 20	35
186 H24	A B	1 16					a 1	1 16	17
186 H25	A B	3						— 3	3
I 20表採	A B	433 56					h 16 j 173 k 224 l 20	433 56	489
I 19表採	A B	741 169					j 202 k 539	741 169	910
J 20表採	A B	763 82					j 351 k 406 l 6	763 82	845
J 19表採	A B	1,642 189					a 5 d 2 j 610 k 1025	1,642 189	1,831
J 18表採	A B	275 73					a 1 d 1 j 141 k 132	275 73	348
K19表採	A B	363 31					a 5 d 9 h 1 j 137 k 202 l 9	363 31	394
K18表採	A B	24 8					a 1 d 1 j 10 k 10 l 2	24 8	32
表 採	A B	15 12					d 1 e 4 j 5 k 4 m 1	15 12	27

遺 構	トレンチNo	A土 器 B礫・石器	一 括	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層	時 期	小 計	合 計
1号遺構	3トレ	A B								0
2号	7トレ	A B	18 3					d 18	18 3	21
3号	9トレ	A B	6 2					d 4 k 2	6 2	8
4号	10トレ	A B	42 5					d 42	42 5	47
5号	19トレ	A B	8 2					d 8	8 2	10
6号	19トレ	A B	1						1	1
7号	20トレ	A B	11					d 11	11	11
8号	12トレ	A B	3 5					d 3	3 5	8
9号	22トレ	A B	40 13					a 1 d 39	40 13	53
10号	24トレ	A B	6 2					a 2 d 4	6 2	8
11号	45トレ	A B								0
12号	64トレ	A B	4					a 4	4	4
13号	64トレ	A B	11					g 11	11 —	11
14号	77トレ	A B	26 5					h 26	26 5	31
15号	89トレ	A B								0
16号	25トレ	A B								0
17号	27トレ	A B								0
101号	F12 151トレ	A B	6					d 6	6 —	6
102号	E15 159トレ	A B								0
103号	F15G15 159トレ	A B								0
104号	F16 163トレ	A B								0
105号	F17G17 165トレ	A B	3 7					d 3	3 7	10
106号	G22H22 178トレ	A B	1						— 1	1
107号	H22 178トレ	A B	1						— 1	1

遺 構	トレンチNo	A土 器 B礫・石器	一 括	Ⅱ a 層	Ⅱ b 層	Ⅱ c 層	Ⅱ d 層	時 期	小 計	合 計
108号	G 24 183トレ	A B	2 17					e 2	2 17	19
109号	G 17 166トレ	A B	3 2					d 3	3 2	5

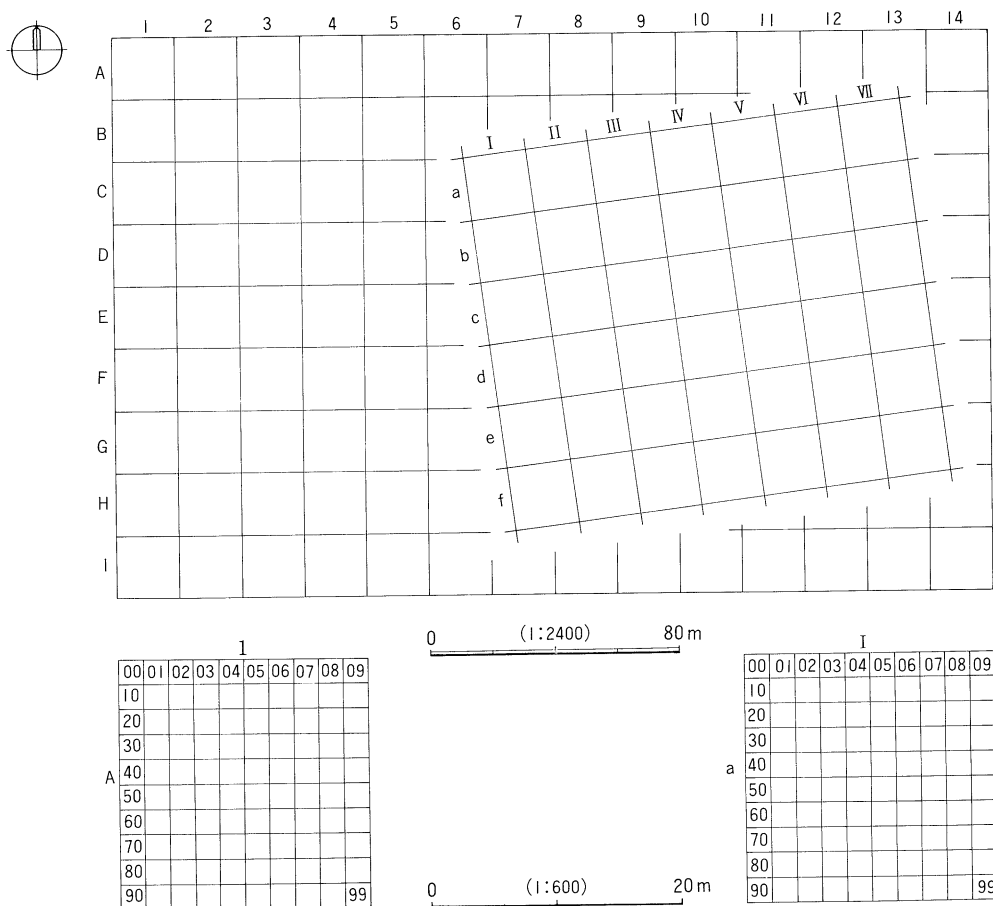
第4章 山見塚遺跡

1 概 要

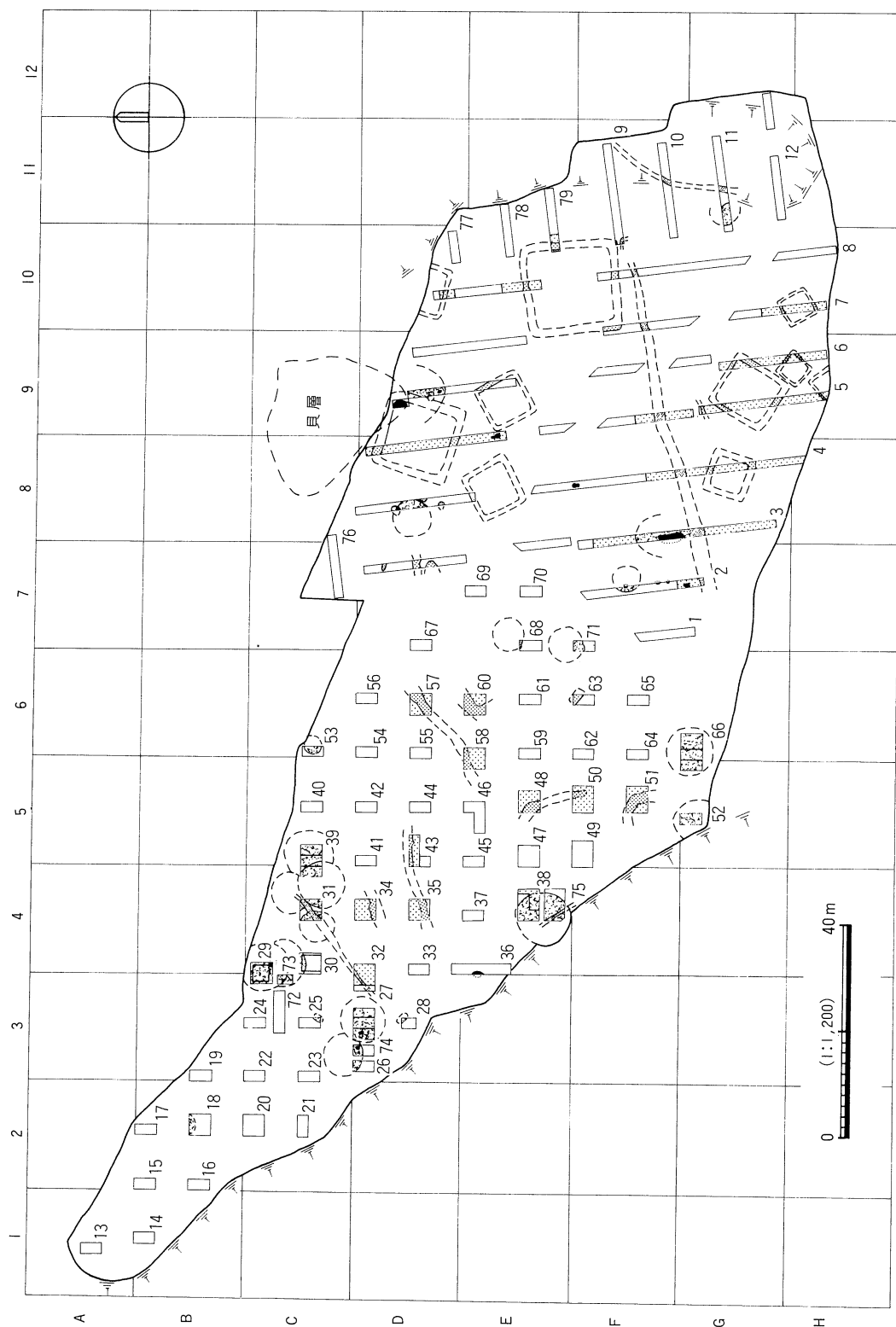
山見塚遺跡は、東京湾に灌ぐ椎津川支流によって形成される標高78m前後の舌状台地に位置するA地点と、これよりさらに東側にゆるい谷を隔てて存在するB地点に分かれており、狭義においては、それぞれ独立した遺跡と考えられた。

調査は、対象面積18,250m²の10%である1,825m²に対して行なわれた遺構確認調査である。

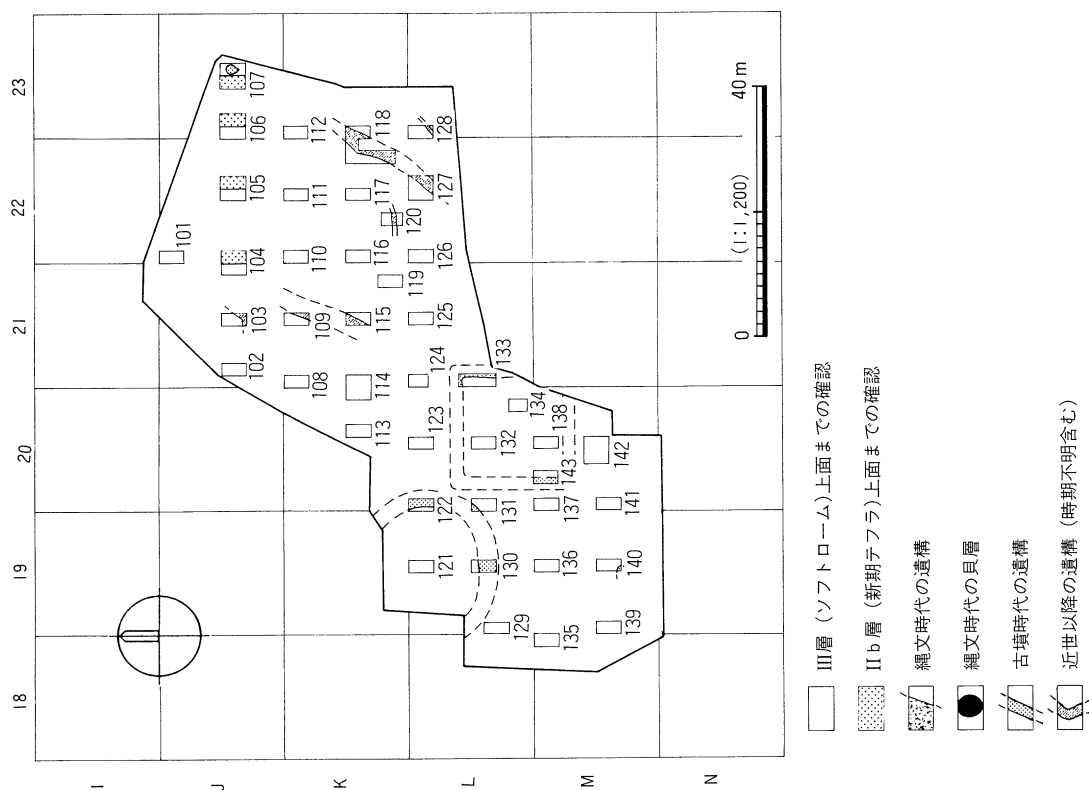
調査の方法は、公共座標を使用し、20×20mの大グリッドを基本としたが、A地点においては、東側半分の現況が植林地であった為、木根列にそったトレンチ法を採用することが最も妥当と考えられた。このため、A地点の東側半分に対してはN-7.5°-Wの任意座標を設定し、20×



第99図 山見塚遺跡グリッド配置図



第100図 山見塚遺跡A地点全体図



第101図 山見塚遺跡B地点全体図

20mの任意大グリッドを設定した。両大グリッドの下に、さらに 2×2 mの小グリッドを設定し、00～99までのNo.を与えた。(第99図)

調査によって検出された資料は、時期別分類、総数把握につとめ、特にA地点から検出された遺物を第21表にまとめた。これによれば総数54,726点の土器片と、4,022点の礫・石器を検出した。出土土器の約25.5%は後期堀之内式土器の特徴を顕著に示すものであり、73.5%は具体的型式判断の困難な後期の土器群である。この結果、A地点に存在する山見塚貝塚は、後期堀之内式期を中心とする時期に形成された貝塚に比定されるものと考えられる。

以下A・B両地点の概要を列挙する。

A地点

A地点において確認された遺構の概要は以下の通りである。

縄文時代 集石1 (早期)・住居跡19軒・土壇7基・貝ブロック14ヶ所 (以上後期)

古墳時代～歴史時代 方墳 (改葬系区画墓) 10基・土壇1基・溝7条

時期不明 溝4条・道路状遺構1条

縄文時代早期の遺構は、調査区北東端部に集石遺構を伴う遺物包含層として検出されている。

第12表 山見塚遺跡A・B地点検出遺構一覧表

遺構No	検出トレンチ	性 格	備考(時期等)	遺構No	検出トレンチ	性 格	備考(時期等)
1	48、50	溝	古墳時代後期～歴史時代	33	38、75	住居跡	縄文時代後期
2	31、32	〃	時期不明	34	11	〃	〃
3	57、58	〃	古墳時代後期～歴史時代	35	51	溝	古墳時代後期～歴史時代
4	60	〃	〃	36	63	土壌	縄文時代晩期？
5	35、43	〃	古墳時代後期～歴史時代	37	68	住居跡	縄文時代後期
6	53	住居跡	縄文時代後期	38	5	改葬系区画墓	古墳時代後期～歴史時代
7	75	溝	時期不明	39	4	貝ブロック	縄文時代後期
8	34	〃	古墳時代後期～歴史時代	40	5	溝	古墳時代後期～歴史時代
9	71	住居跡	縄文時代後期	41	6	改葬系区画墓	古墳時代後期～歴史時代
10	25	土壌	〃	42	2	住居跡	縄文時代後期
11	2	貝ブロック	〃	43	30	〃	縄文時代後期
12	2	〃	〃	44	4	土壌	縄文時代後期
13	2	〃	〃	45	4	〃	古墳時代
14	18	集石遺構	縄文時代早期	46	4	〃	縄文時代後期
15	26、74	住居跡	縄文時代後期	47	4	改葬系区画墓	古墳時代後期～歴史時代
16	27	〃	〃	48	4	住居跡	縄文時代後期
17	28	土壌	〃	49 _{abc}	31	〃	縄文時代後期
18	6	住居跡か？	縄文時代後期	50	36	貝ブロック	縄文時代後期
19	29、73	住居跡	〃	51	31、39	住居跡	縄文時代後期
20	5、6	改葬系区画墓	古墳時代後期～歴史時代	52	52	〃	縄文時代後期
21	4	〃	〃	53	66	〃	縄文時代後期
22	5、6	〃	〃	54	3	住居跡か？	縄文時代後期
23	6	〃	〃	55	122、130、131	円墳	B地点 古墳時代後期
24	7	〃	〃	56	133、143	改葬系区画墓	〃 奈良時代
25	7、8、9、79	〃	〃	57	140	土壌	〃 時期不明
26	2、3、4、5、6、7	溝	時期不明	58	120	溝	〃 近世？
27	3	土壌	縄文時代後期	59	128	〃	〃 〃？
28	3	溝	古墳時代～歴史時代	60	118、127	〃	〃 〃？
29	3	土壌	縄文時代後期	61	103	〃	〃 〃？
30	10、11	道路状遺構	時期不明	62	109、115	〃	〃 〃？
31	8	改葬系区画墓	古墳時代後期～歴史時代	63	107	焼土ブロック	〃 古墳時代後期
32	9	溝	時期不明				

縄文時代後期の集落は、調査区中央を空白部として環状に住居跡を配しており、調査区南東部を除く包含層中に極めて多量の土器・石器が集中している。調査区中央から北東にかけては貝ブロックが多く、調査区域外に存在する貝塚に続いているものと考えられる。

古墳時代後期から歴史時代の遺構は、方墳（改葬系区画墓）を主体として、調査区東側台地縁辺部に連っている。遺物は極めて少なく、若干の土師器、須恵器を検出したにすぎない。

B地点

B地点において確認された遺構の概要は以下の通りである。

古墳時代後期 円墳 1 基・焼土ブロック 1 ヶ所

奈良時代 方墳（改葬系区画墓） 1 基

時期不明 溝 5 条・土壇 1 基

古墳時代後期の古墳は、調査区西端部に位置し、墳丘・周溝ともに現地表でとらえられる。

墳丘は高さ約80cmで、大部分は機械による堀削で盛土が露出してしまっている。調査の結果直経約20mの円墳であることが確認された。また南側の周溝覆土上面から該当期の土師器片数点が検出されている。焼土ブロックは調査区の北東端に一ヶ所確認されている。焼土上面より、古墳時代後期頃の土師器片 1 点が検出されていることから、付近に同期の住居跡等の遺構の存在が考えられる。

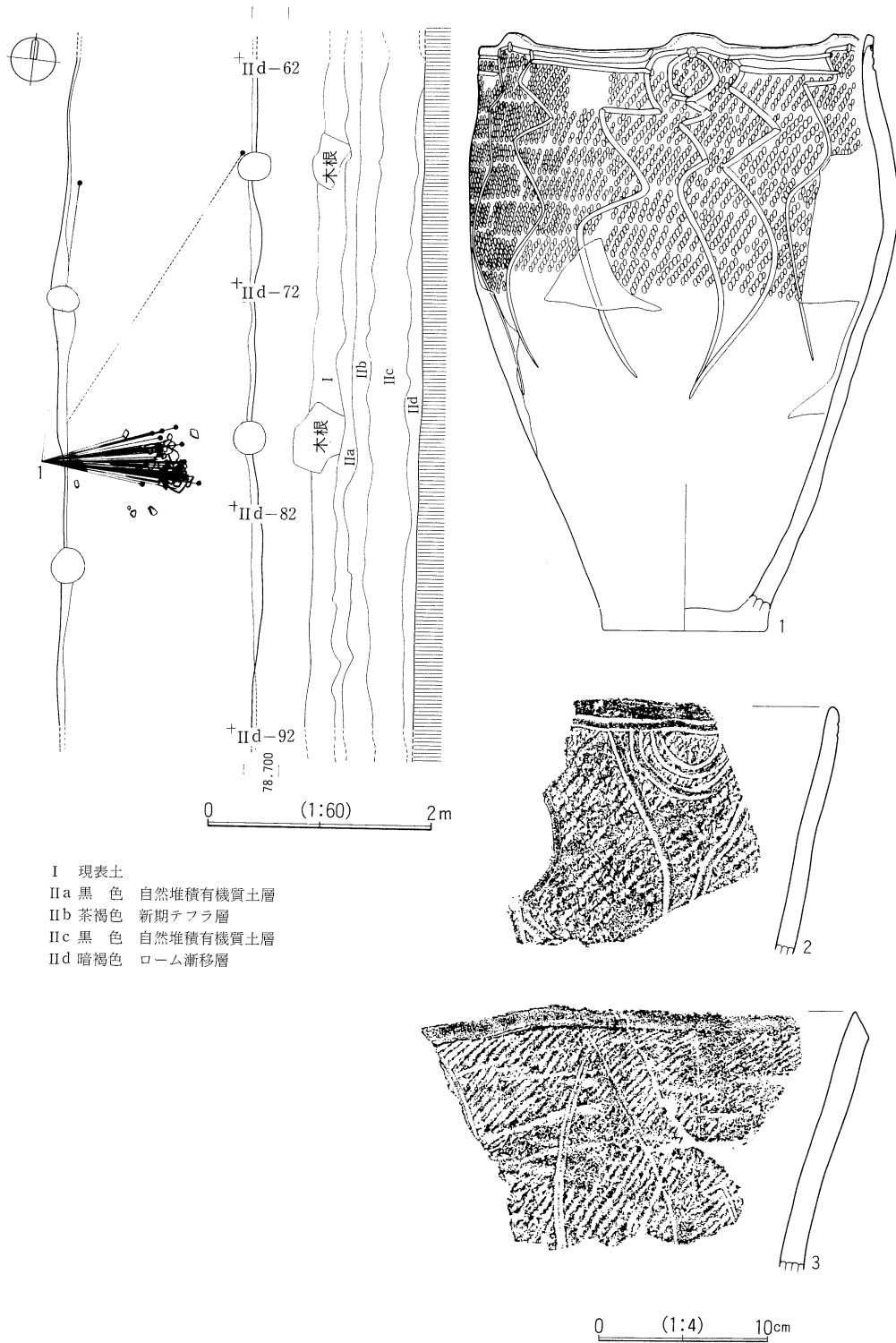
奈良時代の改葬系区画墓は、調査区の南東端に検出された。付近より奈良時代の土師器甕・須恵器が出土している。古墳時代以降の溝状遺構は 5 条確認された。基本土層 II a 層を掘り込んでいるため、比較的新しい時期のものと考えられる。遺物は 5 条とも検出されなかった。

2 遺構と遺物（A 地点）

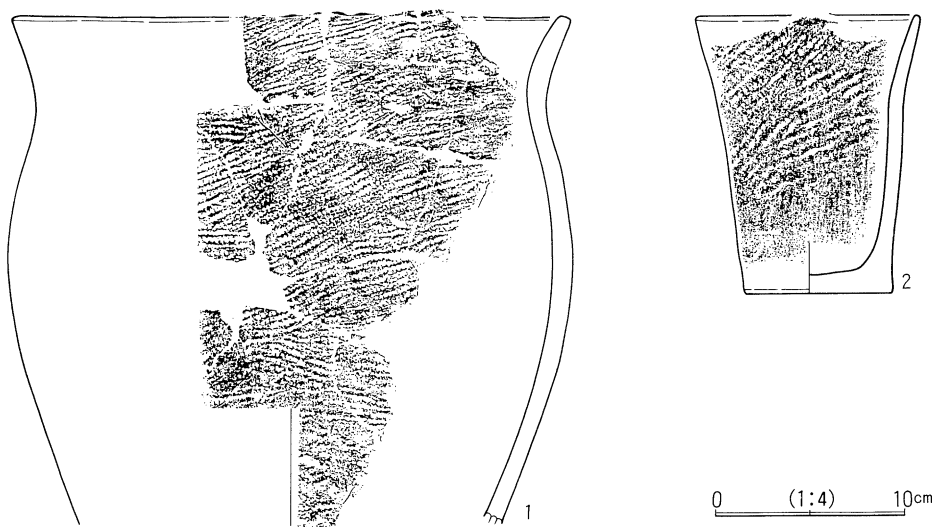
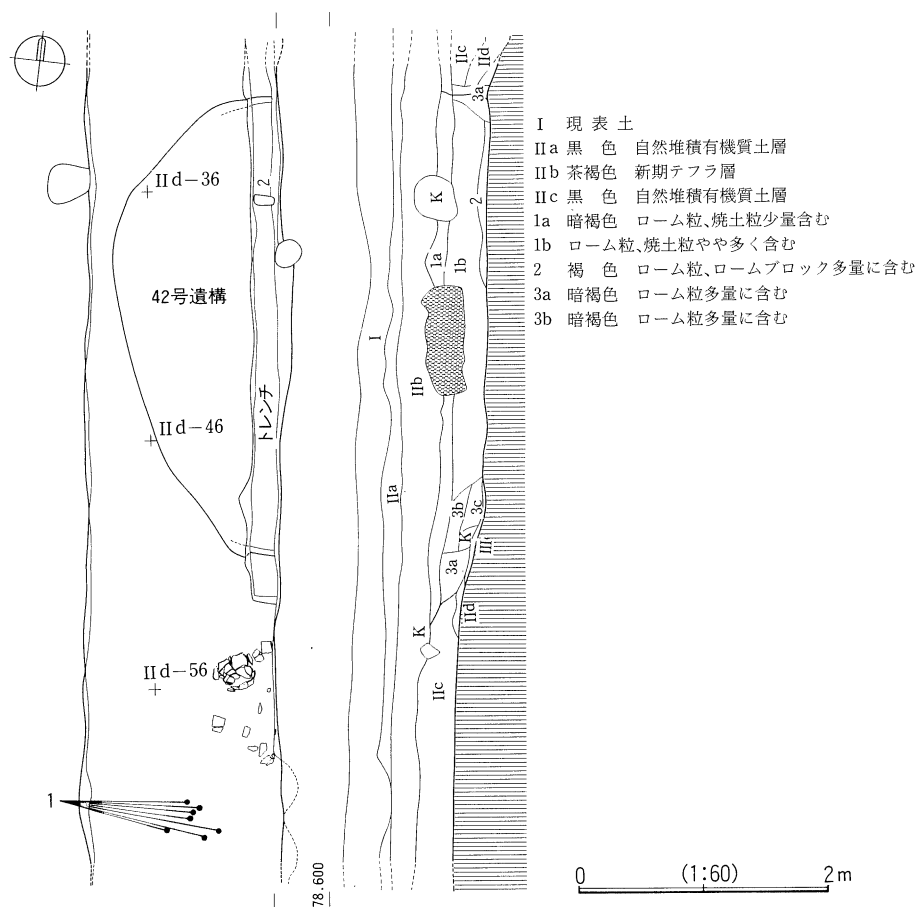
検出された遺構・遺物を第102図以下にまとめた。総面積の10%の確認調査とはいえ、第12・21表のごとく検出された遺構・遺物は膨大な量であり、そのすべての図示は不可能であった。今回ここに紹介するのは、山見塚遺跡の中でも一部の遺構と遺物である。また検出された遺構も覆土を掘り下げていないものが多く、不明瞭なものも含まれていることをあらかじめ申し加えておく。また平面図トーンは、遺物集中範囲と、貝ブロックである。

1 トレンチ 1 トレンチより検出された遺物を第102図にまとめた。図のスクリーントーンの範囲は基本土層 II b 層以下に検出された遺物の集中範囲である。このうち 1 は図示のごとく基本土層 II c 層中より検出されている。2・3 は、1 トレンチ内から検出された遺物のうち選択して図示した。また当トレンチ内の遺物はすべて全点ドットによって取り上げられている。また 1 トレンチ内はソフトローム層まで掘り下げたにもかかわらず、何の遺構も検出されなかった。

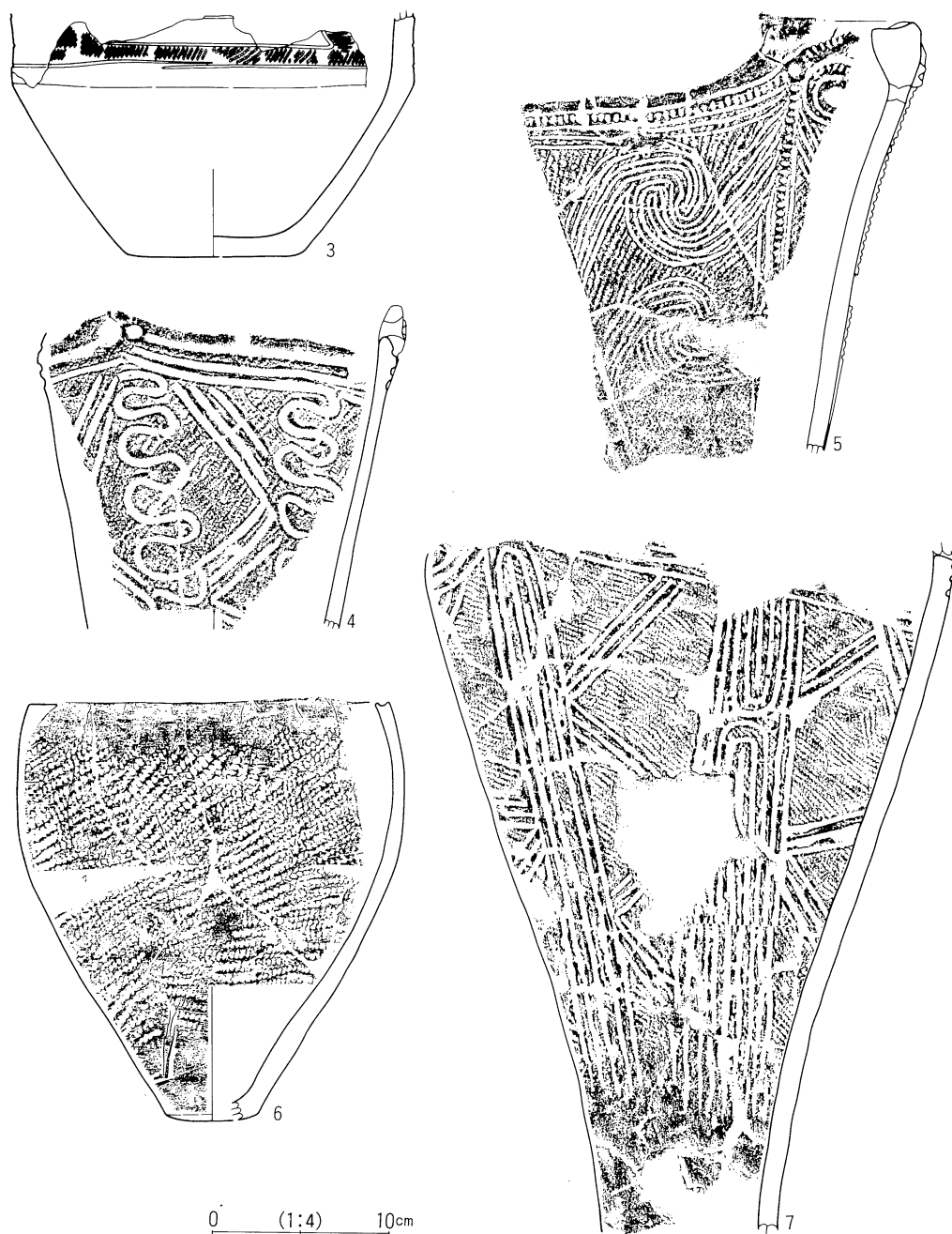
2 トレンチ 2 トレンチより検出した遺構と遺物を第103図～第105図にまとめた。1 トレンチ同様、一部を除いて全点ドットによりソフトローム層上面まで掘り下げた。1 は基本土層 II c 層からの検出である。2 は42号住居跡床面密着の状態で検出されており、本遺構に直接伴うものと考えられる。また本遺構覆土上層には11号遺構である貝ブロックが検出されている。3～14 は 2 トレンチ内より検出された遺物を選択して図示した。（図版30～32）



第102図 1 トレンチ実測図及び出土遺物実測図

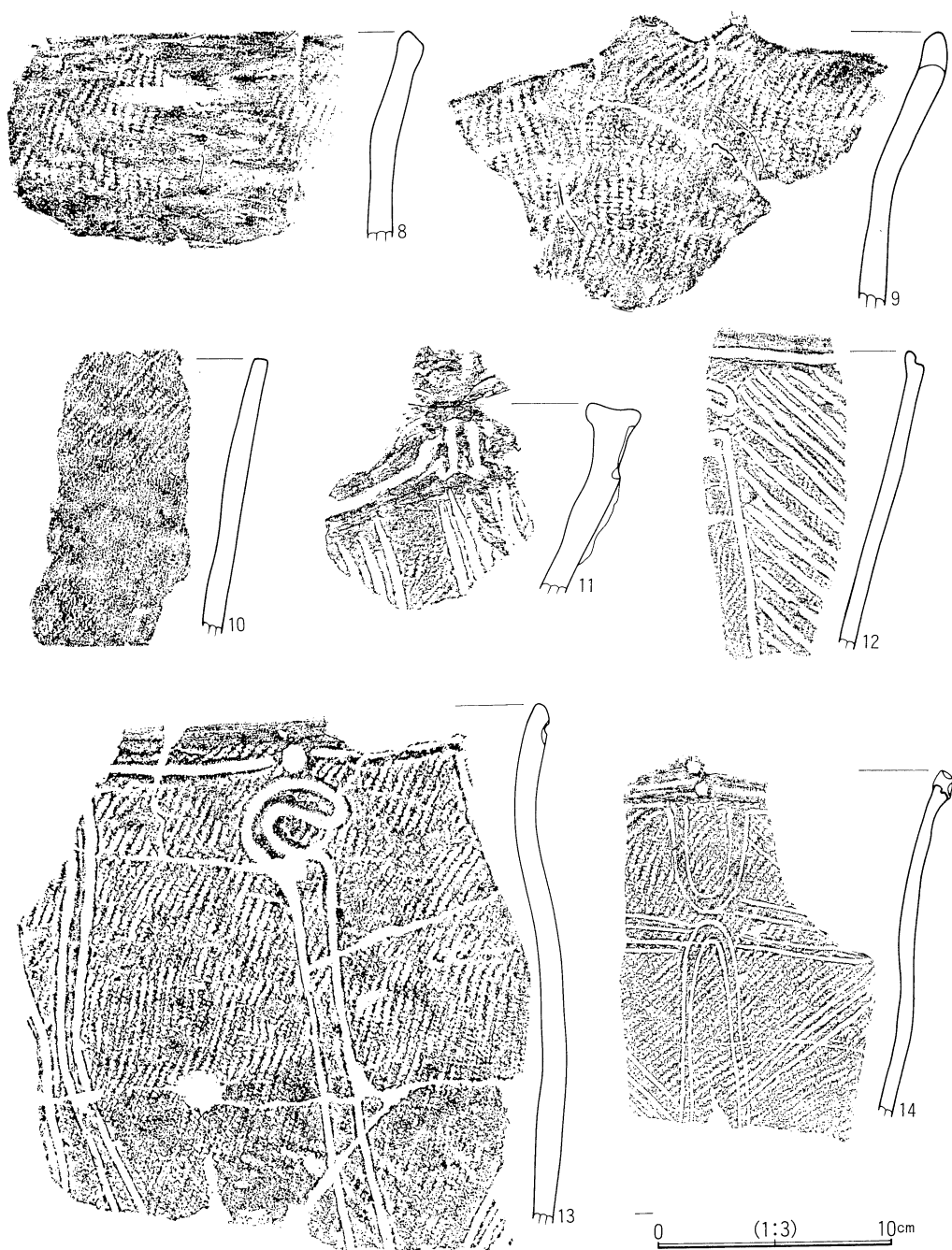


第103図 2 トレンチ実測図及び出土遺物実測図



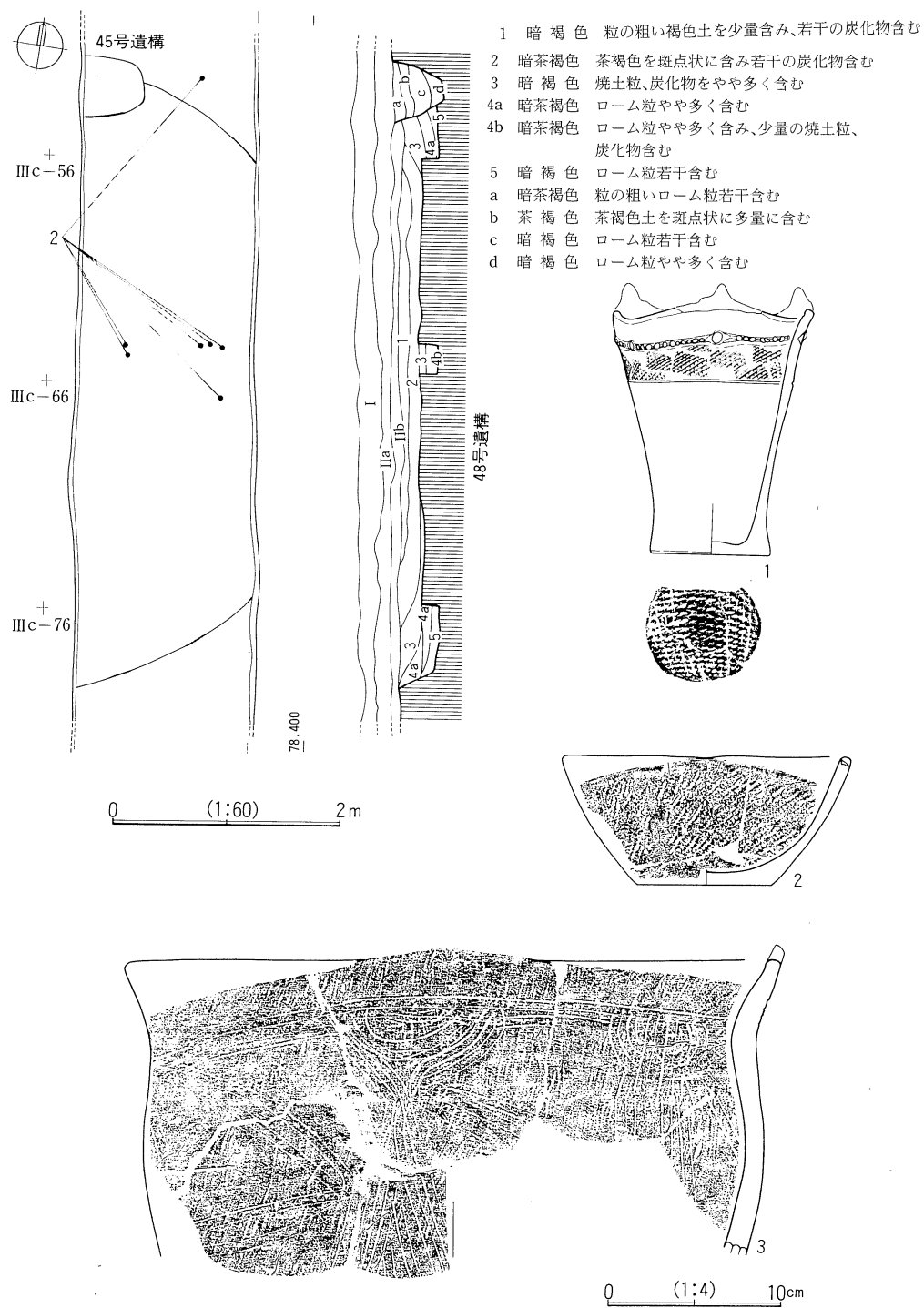
第104図 2 トレンチ出土遺物実測図

4 トレンチ 4 トレンチ検出48号遺構を第106図に図示した。2 は住居跡覆土上層からの検出である。本遺構一部トレンチによって掘り下げ、明瞭な床面を検出している。北側にある土壌は土師器片を検出していることから、古墳時代の遺構であると考えられる(45号遺構)が、具体的な



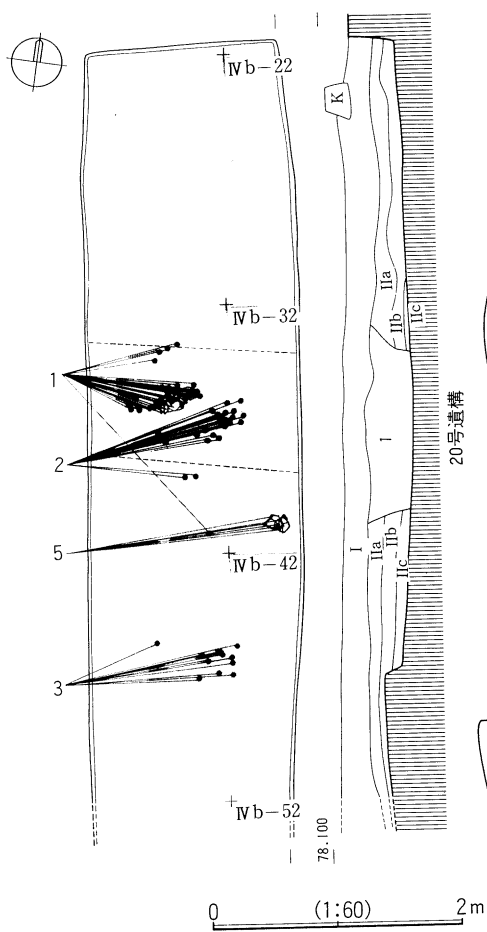
第105図 2トレンチ出土遺物実測図

時期は不明である。1・2は、4トレンチ内より検出された遺物より選択して図示した。本トレンチは、全点ドットによりソフトローム層上面まで掘り下げている。(図版30・32)



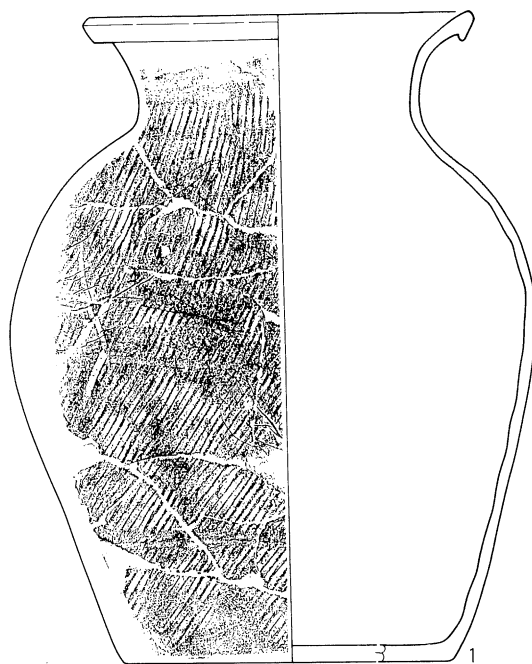
第106図 4トレンチ実測図及び出土遺物実測図

5トレンチ 5トレンチより検出された遺構と遺物の一部を第107図～第110図にまとめた。

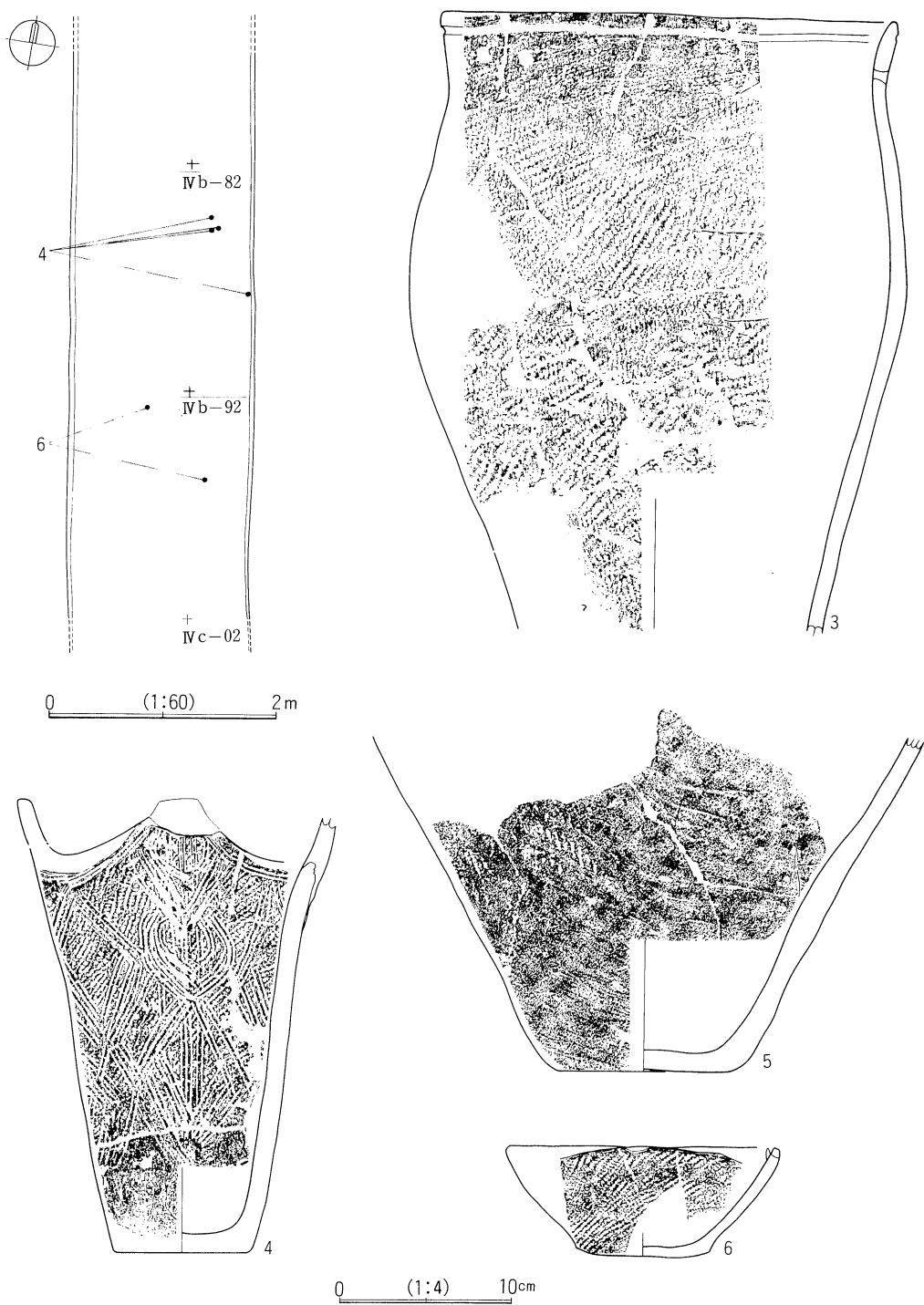


- I 現表土
- IIa 黒色 自然堆積有機質土
- IIb 茶褐色 新期テフラ層
- IIc 黒色 自然堆積有機質土
- 1 黒褐色 他の自然堆積土層に比べ著しくしまりなし
須恵器、縄文土器を多量に含む

破線は、遺物量が多く明瞭なプランが検出されなかった20号（改葬系区画墓）の推定ライン

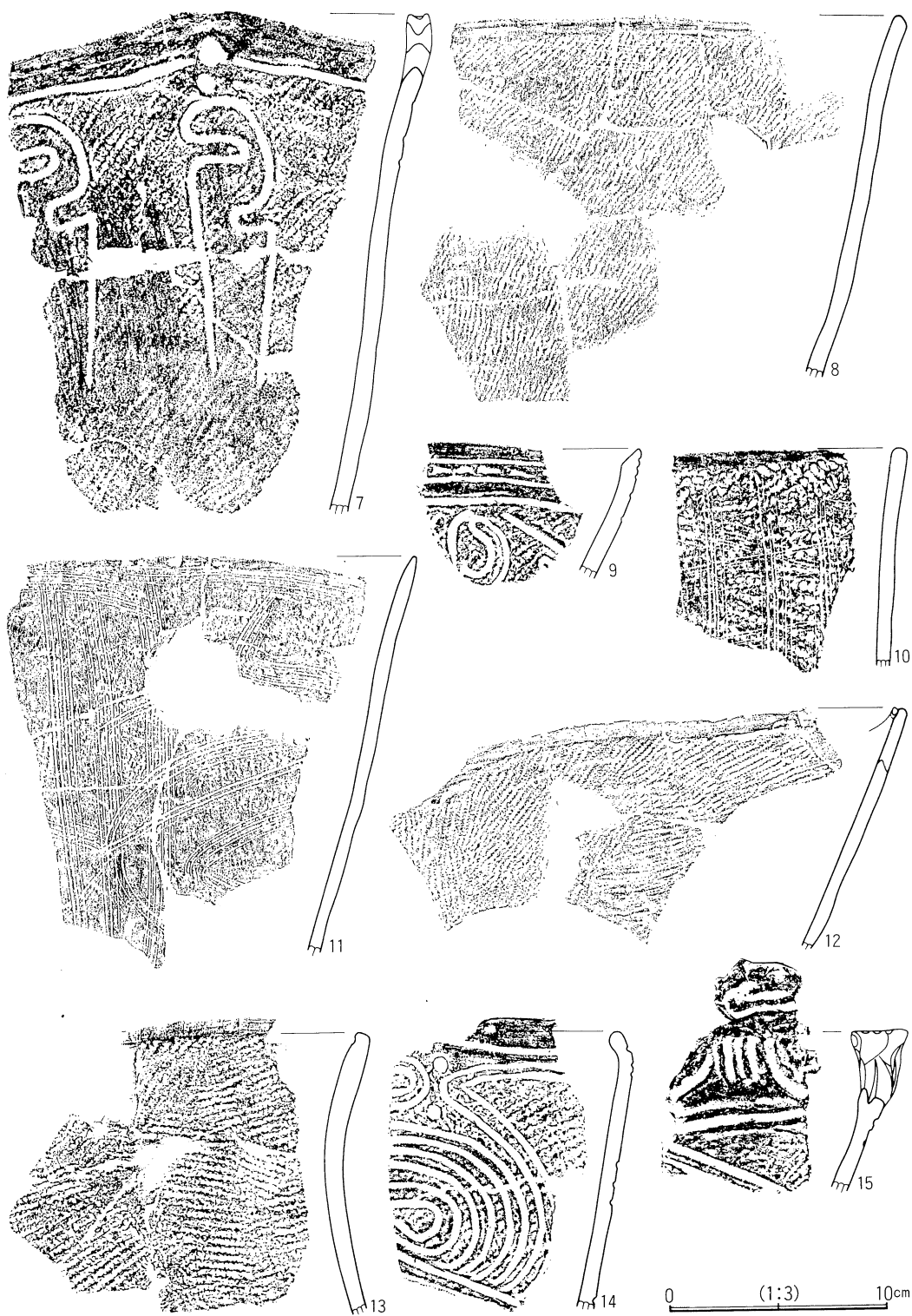


第107図 5トレンチ実測図及び出土遺物実測図



第108図 5 トレンチ実測図及び出土遺物実測図

1は20号改葬系区画墓より検出された須恵器甕である。本トレンチは、歴史時代の遺構が検出



第109図 5 トレンチ出土遺物実測図

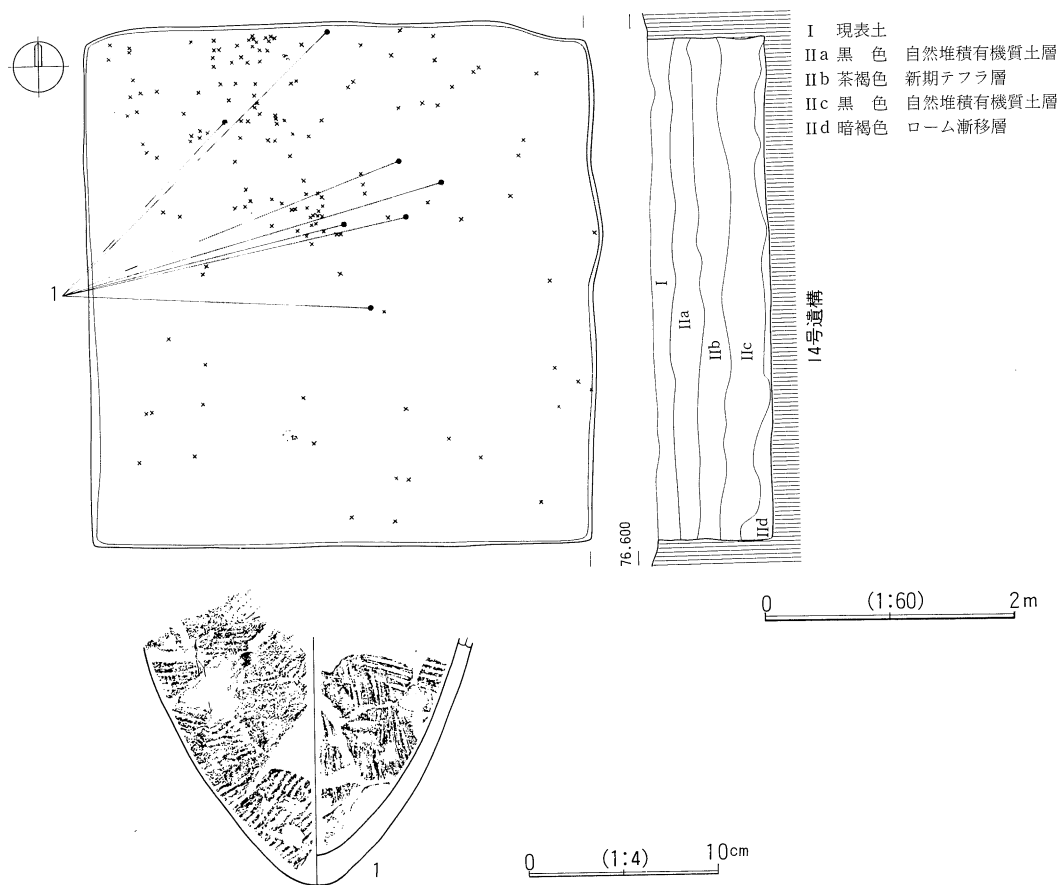


第110図 5トレンチ出土遺物実測図

された為、一部を除いて基本土層II b層中を確認面とした。遺物は全点ドットにより取り上げている。2は改葬系区画墓覆土内からの検出ではあるが、直接遺構に伴うものではない。3～6は、図示のごとく接合関係を有する。7～21はトレンチ内により検出された遺物のうち選択して図示した。出土層位はすべて基本土層II b層中のものである。(図版30・32・33)

18トレンチ 18トレンチ検出状況は第111図に示した。1は縄文時代早期条痕文系土器の底部であり、トレンチ内から極めて多量の礫も基本土層II c層下面より検出している。礫は北側に集中して検出されており、明瞭な掘り方プランを有していないが、縄文時代早期に比定される集石遺構であろう。(図版30)

25トレンチ 25トレンチより検出された遺構・遺物を第112図に示した。土層断面によれば、基本土層b層が完全に埋没する以前に堆積しており、10号遺構は新期テフラ降下以前に構築された遺構であることは明瞭である。覆土を完全に除去しておらず、性格的にはやや不明瞭では



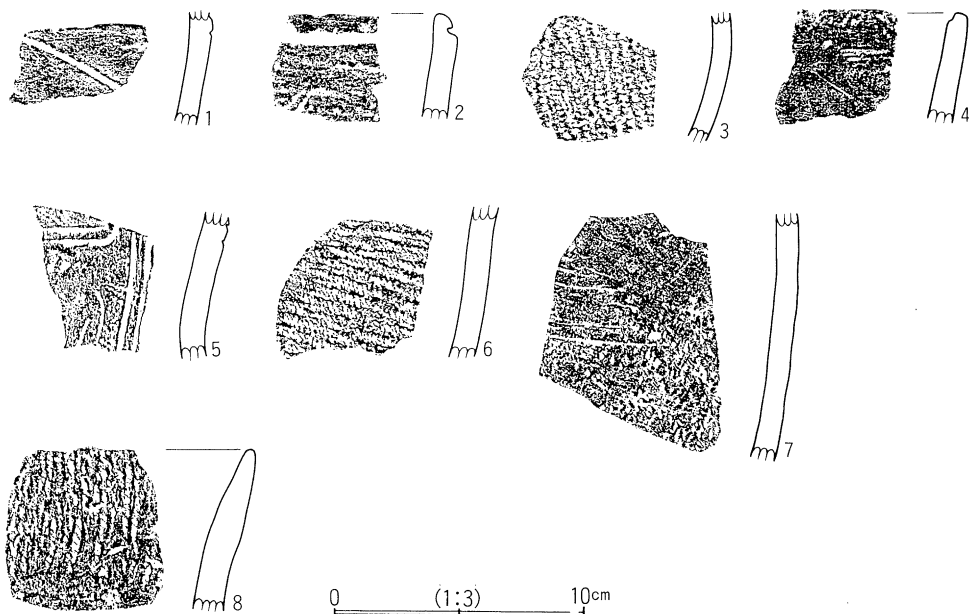
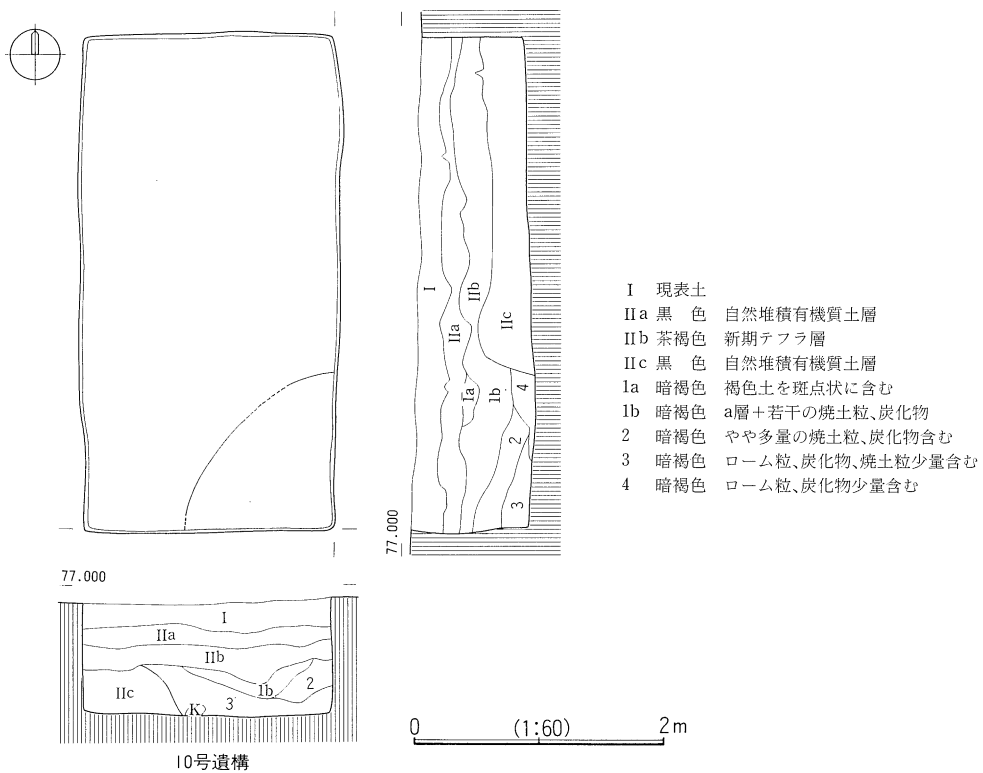
第III図 18トレンチ実測図及び出土遺物実測図

あるが、土壌であろうと推定された。図示した遺物はすべて覆土中一括の資料である。

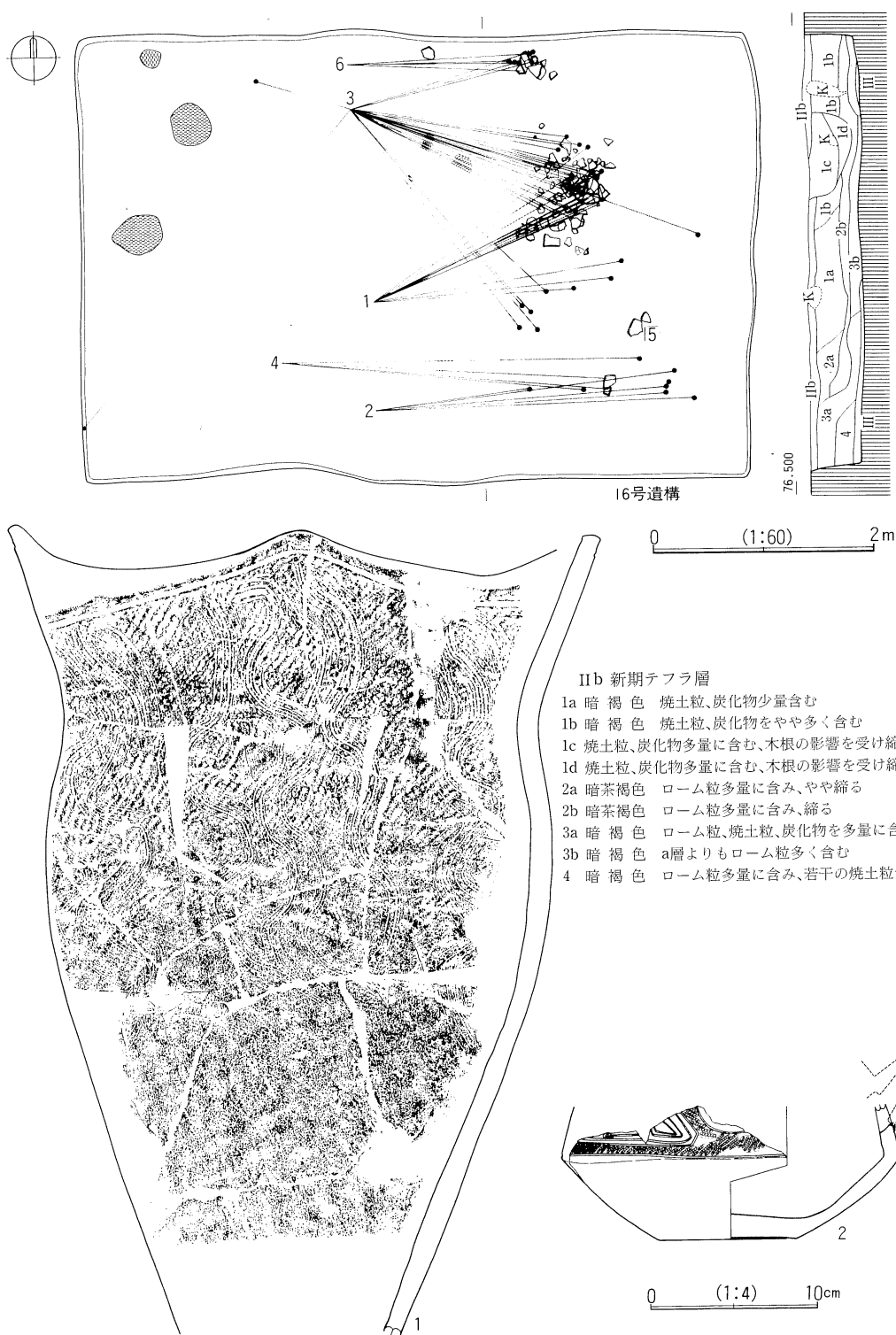
27トレンチ 16号住居跡として報告する資料である。明瞭なプランは検出されなかったが、覆土中に焼土・炭化物を含んでいることからほぼまちがいないであろう。図示した遺物はトレンチ東側に集中しており、西側に3ヶ所の貝ブロックが検出されている。これらの検出面は覆土上層内である。(図版31・33)

28トレンチ 17号遺構として報告する資料である。1はトレンチ内基本土層IIc層中一括の資料である。2は、遺構底面より検出され、遺構外の1点と接合する。(図版33・34)

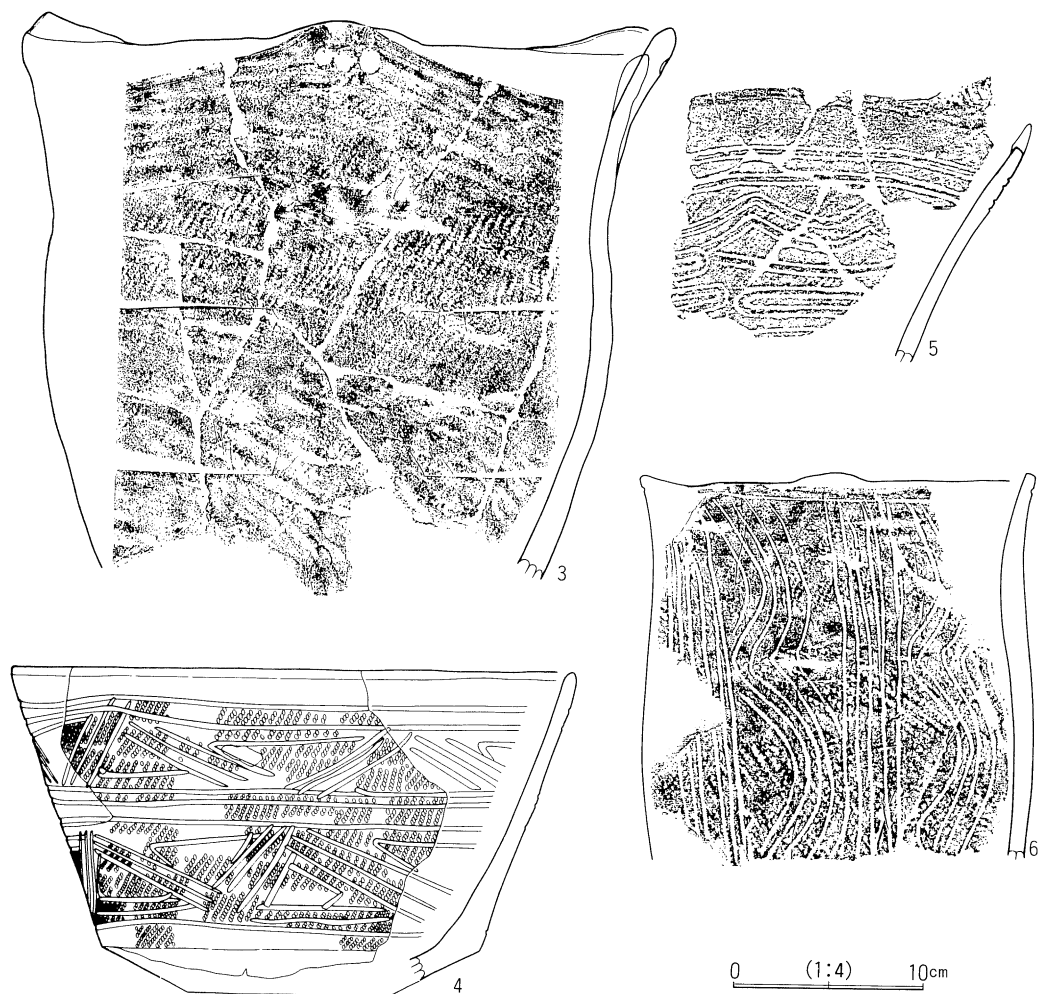
29トレンチ 19号遺構として報告する資料である。トレンチ内東西南北方向に幅50cmのサブトレンチを設定し掘り下げた所、いずれの箇所からも明瞭な床面が検出され、住居跡であるこ



第112図 25トレンチ実測図及び出土遺物実測図



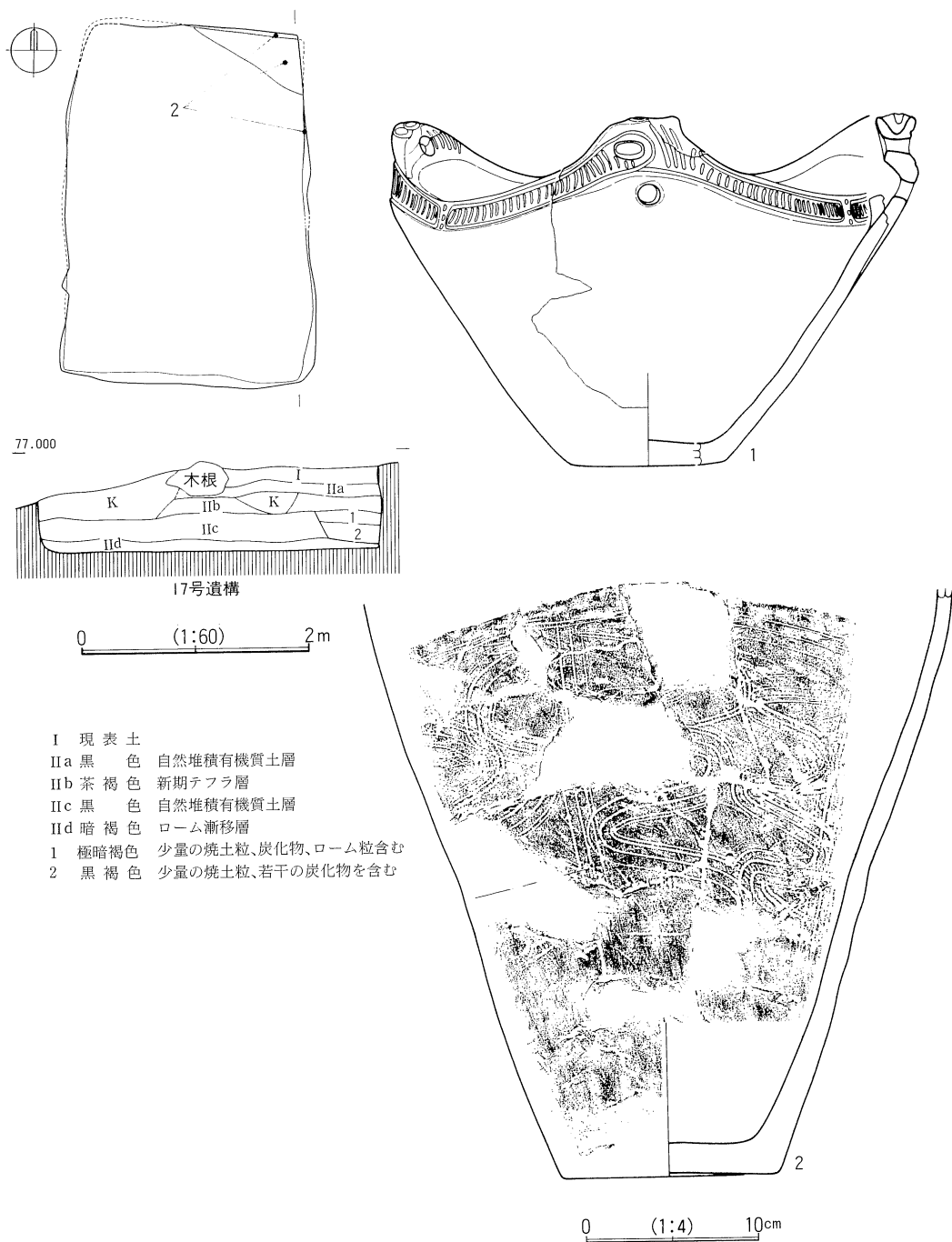
第113図 27トレンチ実測図及び出土遺物実測図



第114図 27トレンチ出土遺物実測図

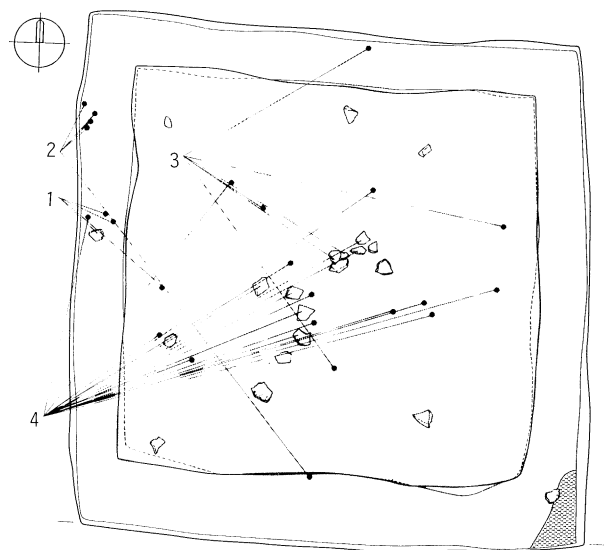
とはまちがいないであろう。遺物は方台状に残した覆土上層部と、床面直上より検出される遺物のうち3点が接合関係を有している。また南東コーナー部において、貝ブロックを伴う土壇状の落ち込みも検出されている。(図版31・34)

31トレンチ 2号及び49号a・b・c遺構として報告する資料である。表土から約70cm掘り下げた所で、第117図に図示したプランが検出された。中央を32トレンチでも検出された2号溝が走っているが、断面図によれば基本土層II a層を掘り込んで構築されていることから、比較的新しい時期の遺構と考えられる。問題は2号遺構によって切られている下層遺構であり、図のようなプランで検出されている。これをレンズ状に堆積した1軒の住居跡であるか、あるいは図示どおりに3軒の住居跡が切り合っているのかどうかは、覆土を掘り下げていない為に不明

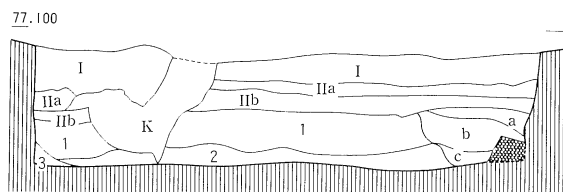


第115図 28トレンチ実測図及び出土遺物実測図

瞭であるが、今回は一応3軒の住居跡が切り合って存在しているものとして報告しておく。また遺物は、全体的に覆土を掘り下げていない為に検出量も少なかったが、2点を今回図示した。

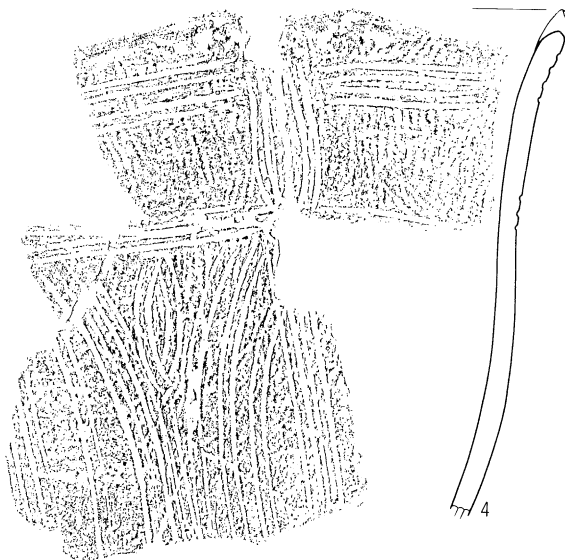
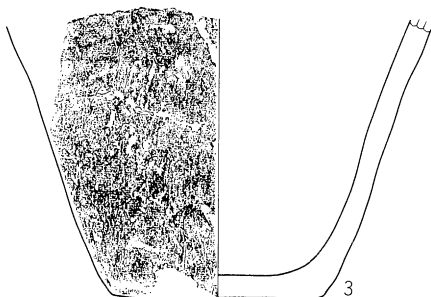
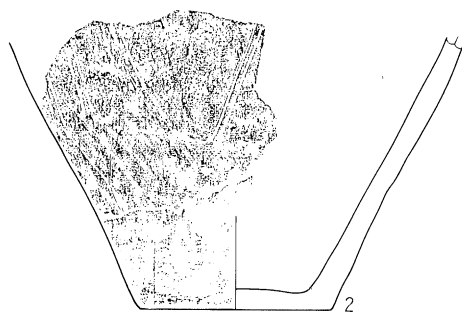
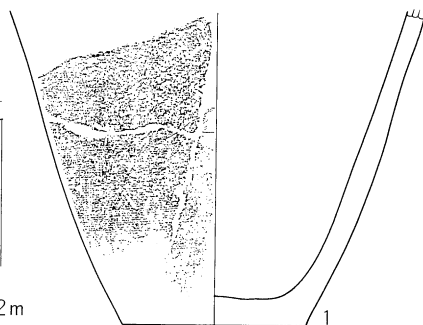


- I 現表土
 IIa 黒色 自然堆積有機質土層
 IIb 茶褐色 新期テフラ層
 1 暗褐色 微量の焼土粒、炭化物混入
 2 暗茶褐色 ローム粒を多量に含み少量の焼土粒、炭化物含む
 3 暗赤褐色 焼土粒、炭化物多量に含む、縮る
 a 暗赤褐色 焼土粒、炭化物多量に含む、やや縮り弱
 b 暗赤褐色 焼土粒、炭化物多量に含む、やや縮る
 c 暗赤褐色 焼土粒、炭化物多量に含む、縮る



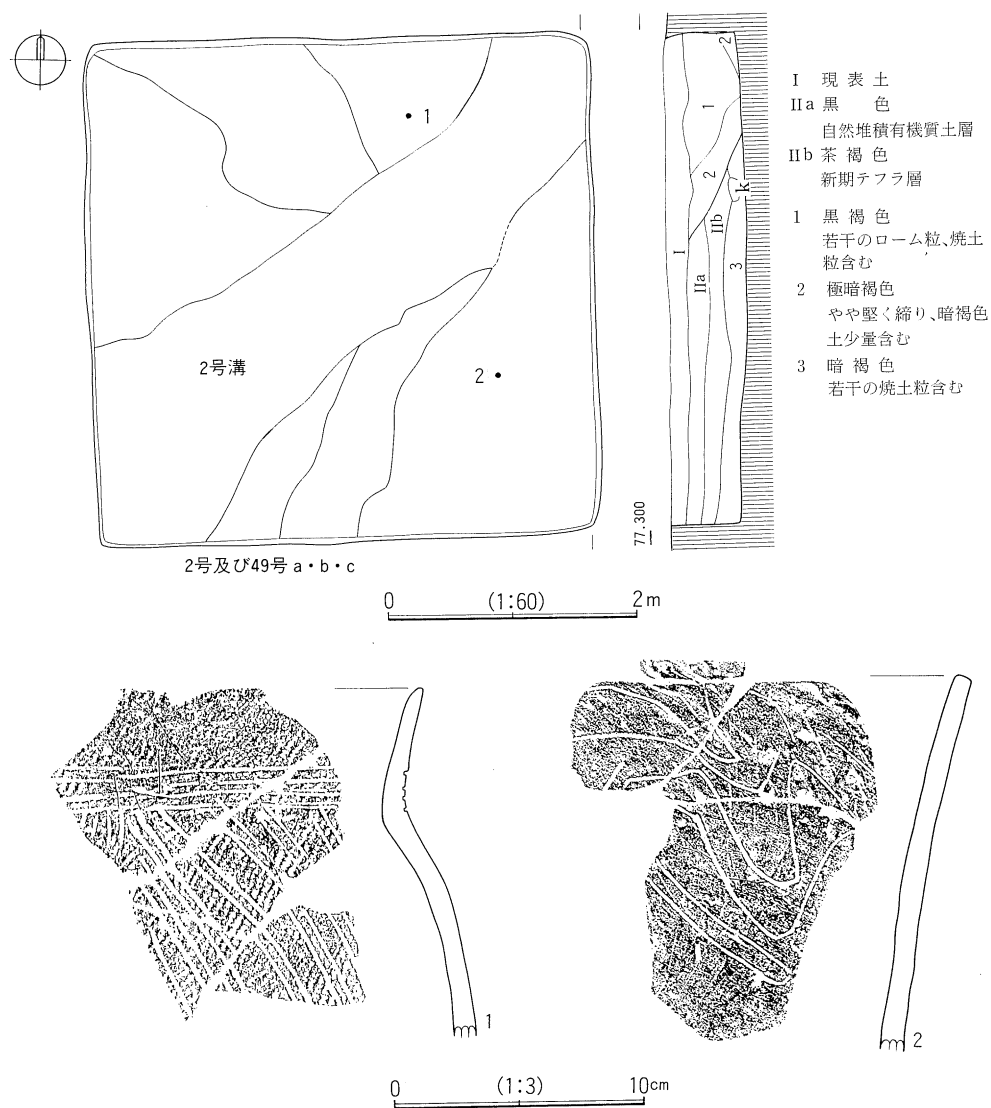
19号遺構

0 (1:60) 2m



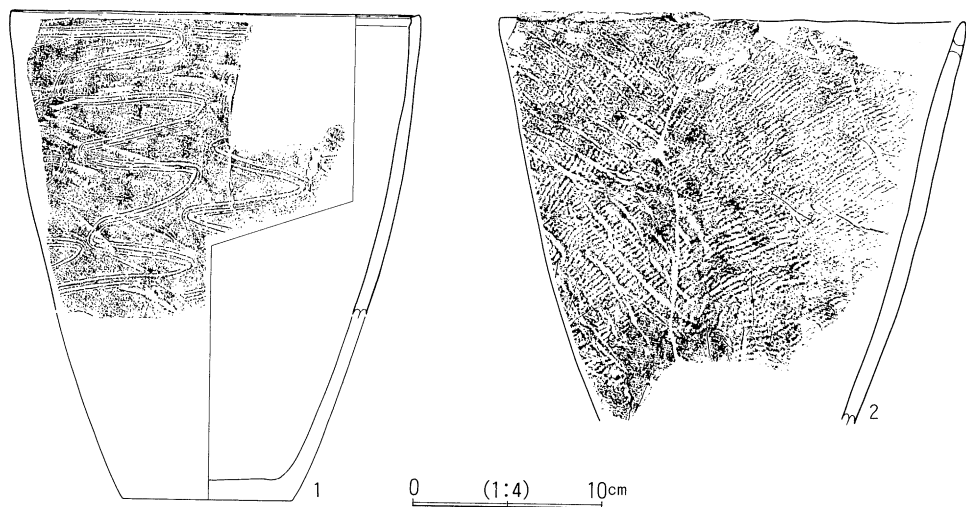
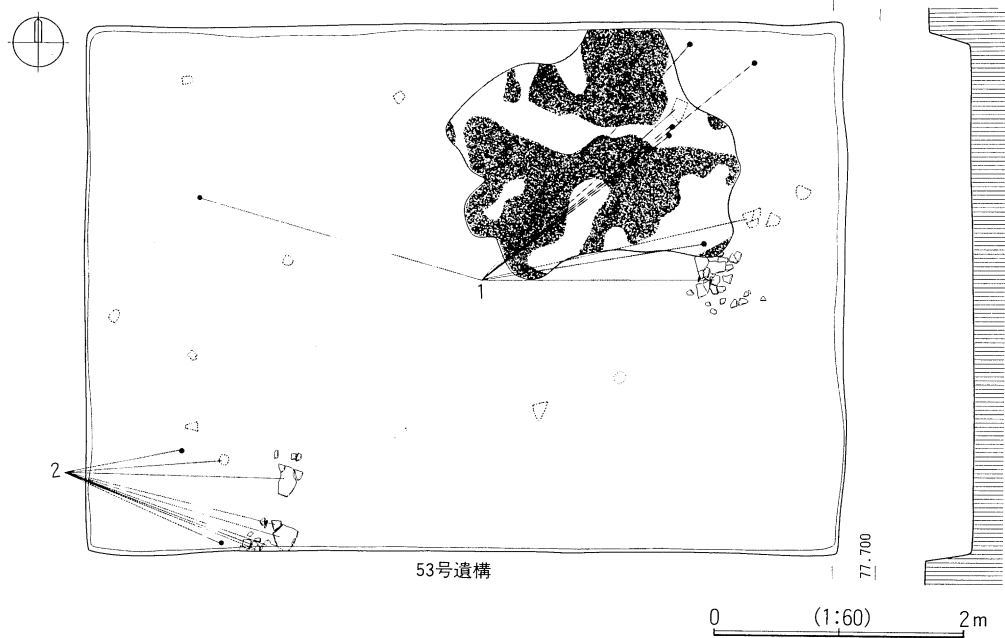
0 (1:4) 10cm

第116図 29トレンチ実測図及び出土遺物実測図



第117図 31トレンチ実測図及び出土遺物実測図

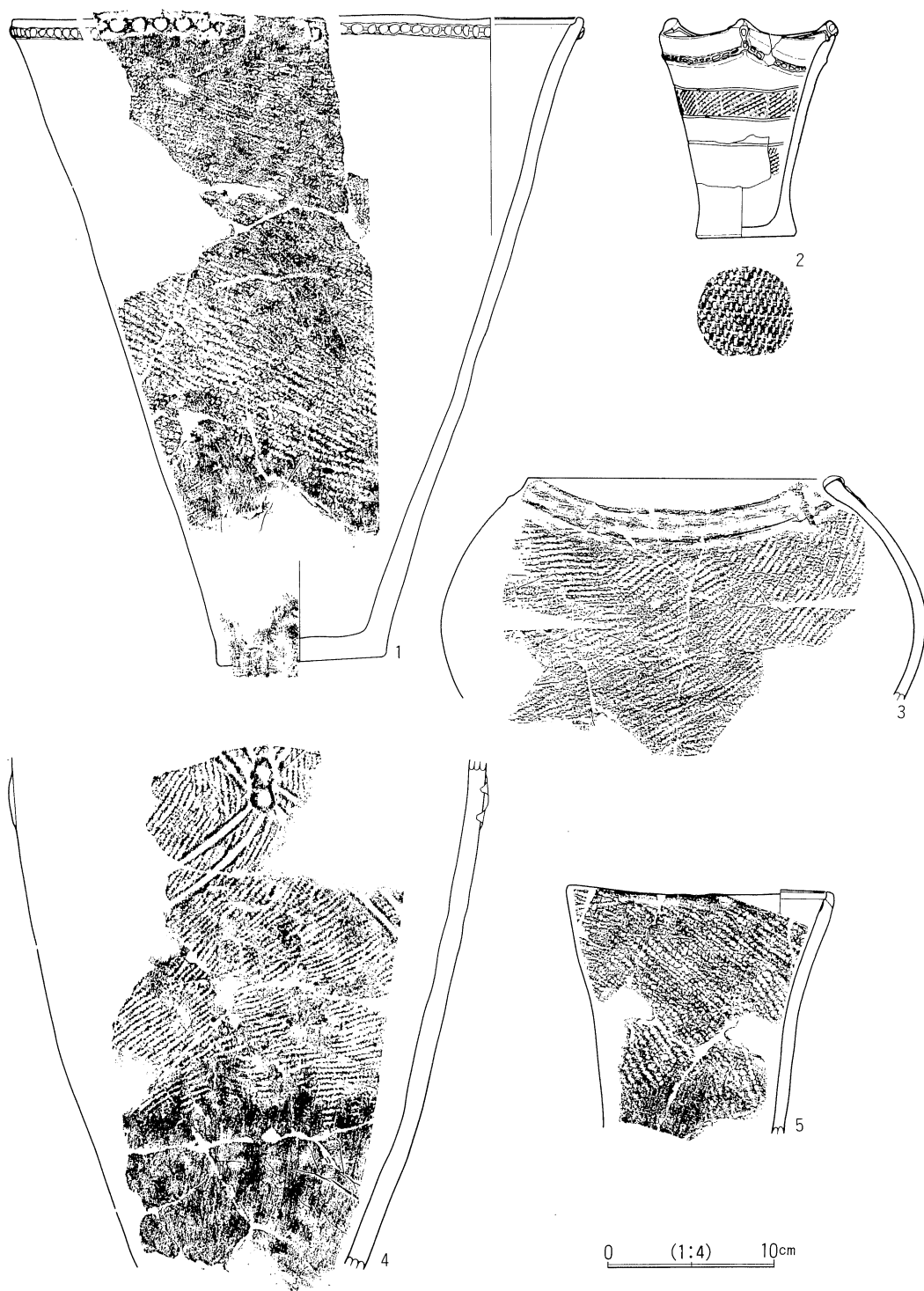
39トレンチ 53号遺構として報告する資料である。表土から約50cm程掘り下げた所で、焼土ブロック1ヶ所を検出している。この様な焼土検出のあり方は、66トレンチ内39号遺構検出状況と類似しており、おそらく住居跡であるものと考えられる。西側に隣接する31トレンチが3軒の切り合い住居跡であるとすれば、当然本トレンチにも半円状のプランが検出されるものと推定されたが、31トレンチに比べ掘り下げ面が約20cm程高い状況で焼土面を検出したことから、明瞭なプラン検出を断念した。しかしながらトレンチ西側及び焼土周辺から、遺物集中地点を検出し、1・2の遺物が検出されていることから、2軒の切り合い住居跡である可能性が強い



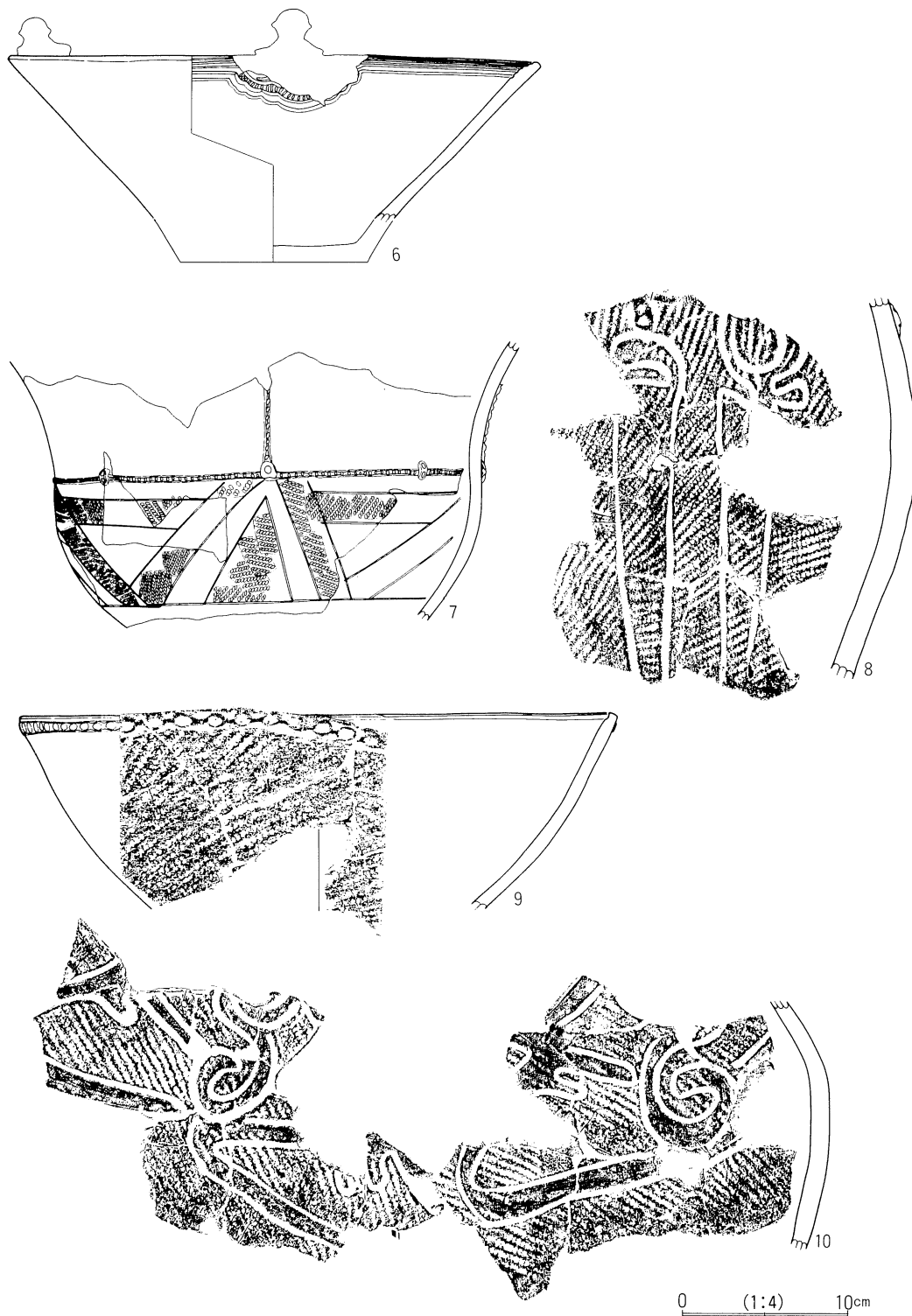
第118図 39トレンチ実測図及び出土遺物実測図

ものとして報告しておく。(図版34)

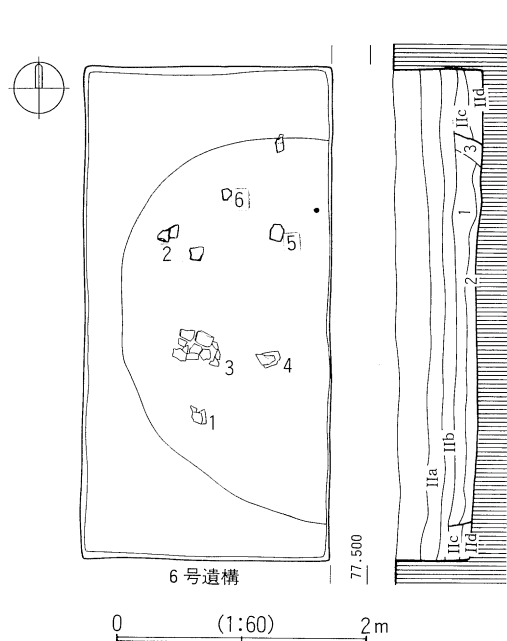
49トレンチ ソフトローム層上面まで掘り下げたが明瞭なプランは検出されなかった。しかしながら、検出された図示可能な遺物が多く、あるいは本トレンチ周辺が土器捨て場だった可能性も考えられる。(図版34・35)



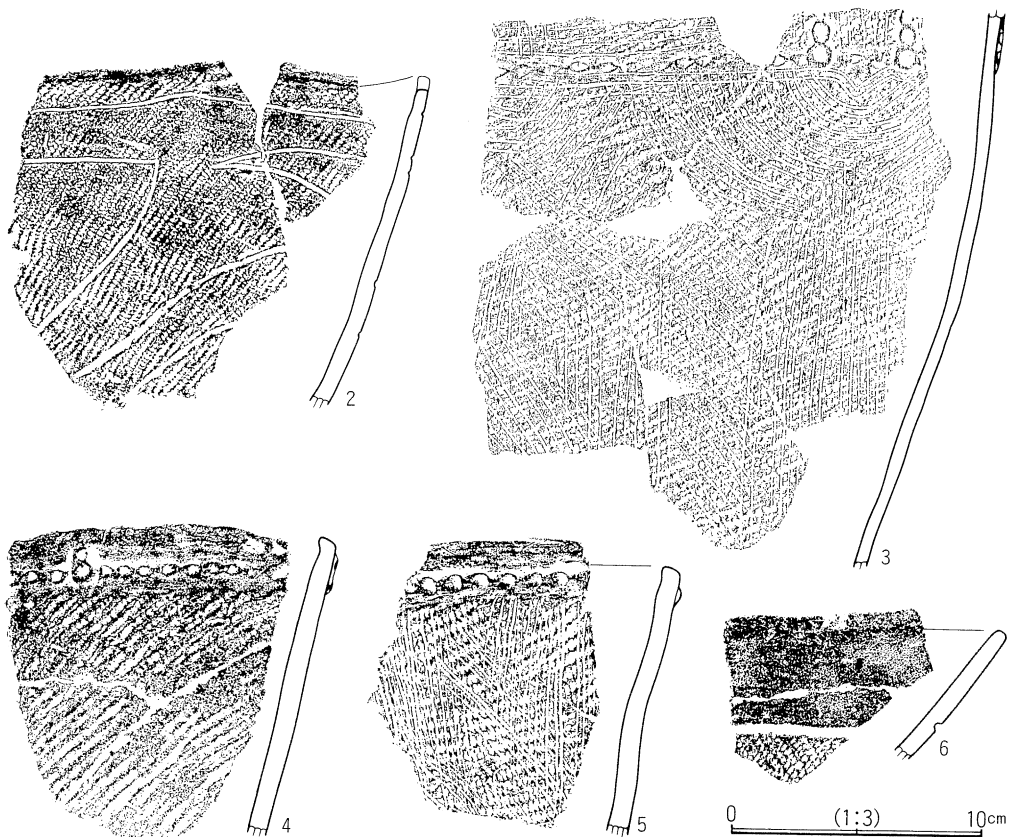
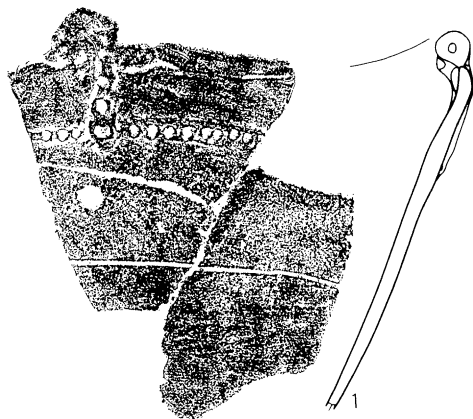
第119図 49トレンチ出土遺物実測図



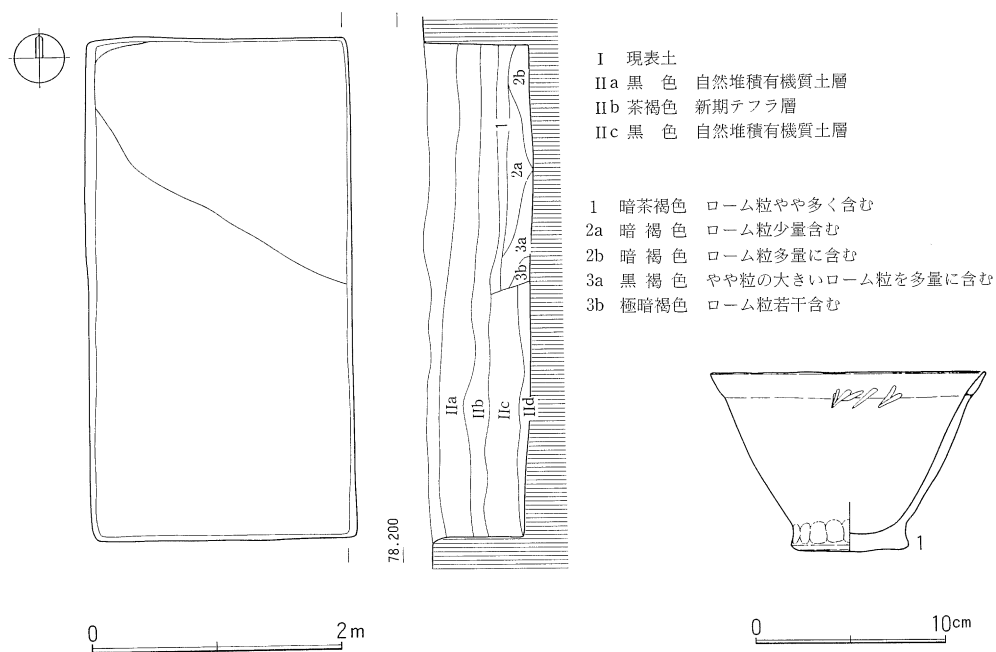
第120図 49トレンチ出土遺物実測図



- I 現表土
- IIa 黒色 自然堆積有機質土層
- IIb 茶褐色 新期テフラ層
- IIc 黒色 自然堆積有機質土層
- IIc 暗褐色 ローム漸移層
- 1 暗褐色 若干のローム粒、炭化物、焼土粒を黒色有機質土中に混入する
- 2 暗褐色 ローム粒多量に含み少量の炭化物、焼土粒含む
- 3 暗褐色 ローム粒多量に含む



第122図 53トレンチ実測図及び出土遺物実測図



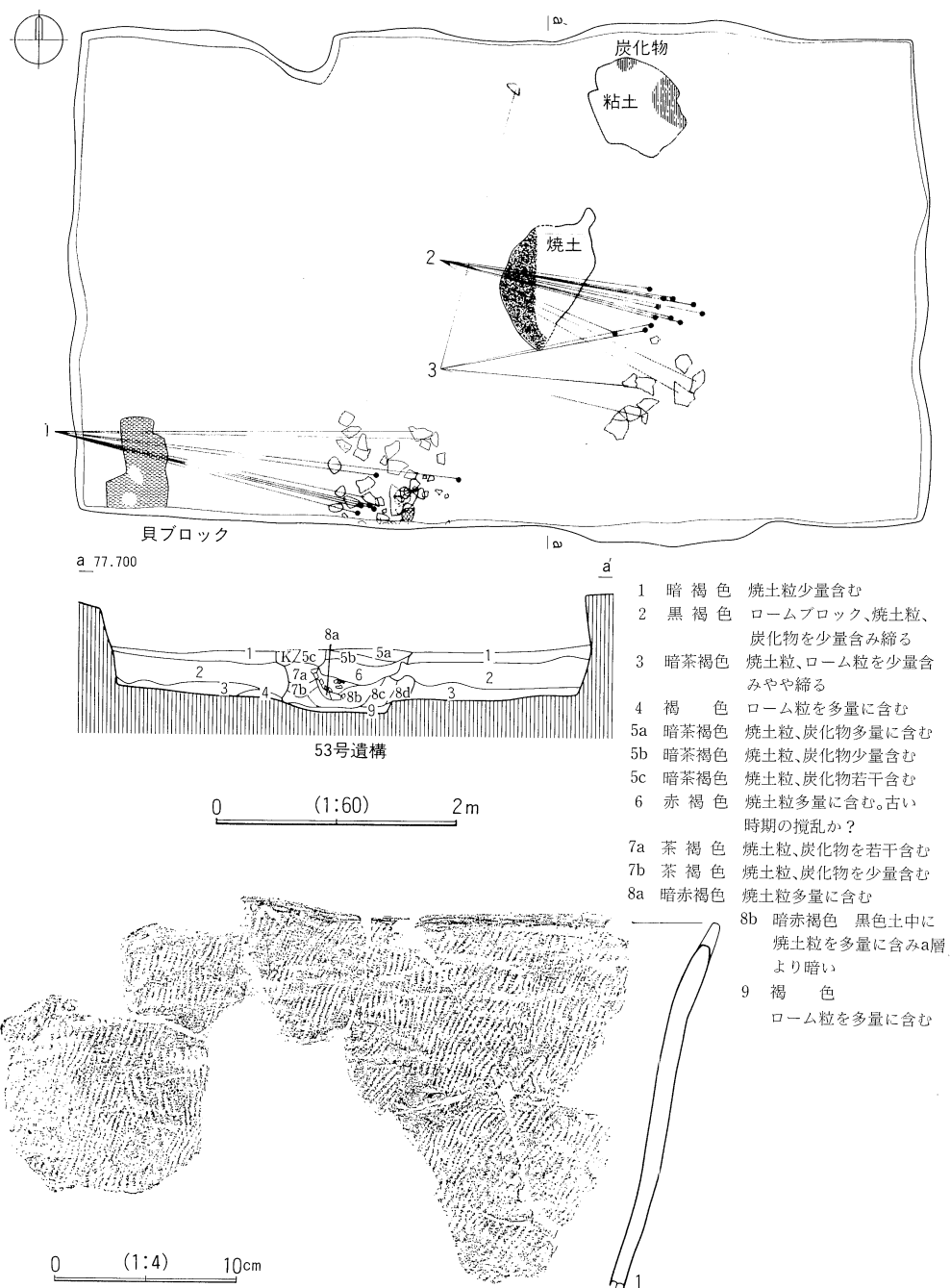
第123図 63トレンチ実測図及び出土遺物実測図

52トレンチ 52号遺構として報告する資料である。トレンチ内一面にわたり遺物の集中地点が認められる。また北側の一部を掘り下げてみた所、焼土粒が散在していたことから、住居跡であるものと推定される。完形に近い土器は図1～3である。(図版35)

53トレンチ 6号遺構として報告する資料である。ソフトローム層上面まで掘り下げた所、半円状のプランが検出されたことから、住居跡であることは確実である。1～6はすべて覆土2層中からの検出である。(図版31・36)

63トレンチ 36号遺構として報告する資料である。ソフトローム層上面まで掘り下げた所、図のような長隋円形のプランが検出されていることから、土壇であろうと推定された。中央付近に遺物集中箇所が検出され、1の遺物が検出されている。器厚は薄く、外面は暗褐色を呈し、土師器を思わせる整形ぶりではあるが、おそらく縄文晩期に比定される資料であろう。(図版36)

66トレンチ 53号遺構として報告する資料である。基本土層IIb層を完全に除去した後、焼土、粘土、炭化物、貝ブロックなどを4箇所を検出している。また中央部分のみ掘り下げた所、明瞭な床面及び炉を検出したことから住居跡であるものと考えられる。図示した1～3の遺物



第124図 66トレンチ実測図及び出土遺物実測図

の他に、炉中央断面内に、深鉢型土器が検出されていたが、本トレンチ内検出の遺物量が非常に多く、調査期間との関係から遺物取り上げを断念した。(図版31・36)

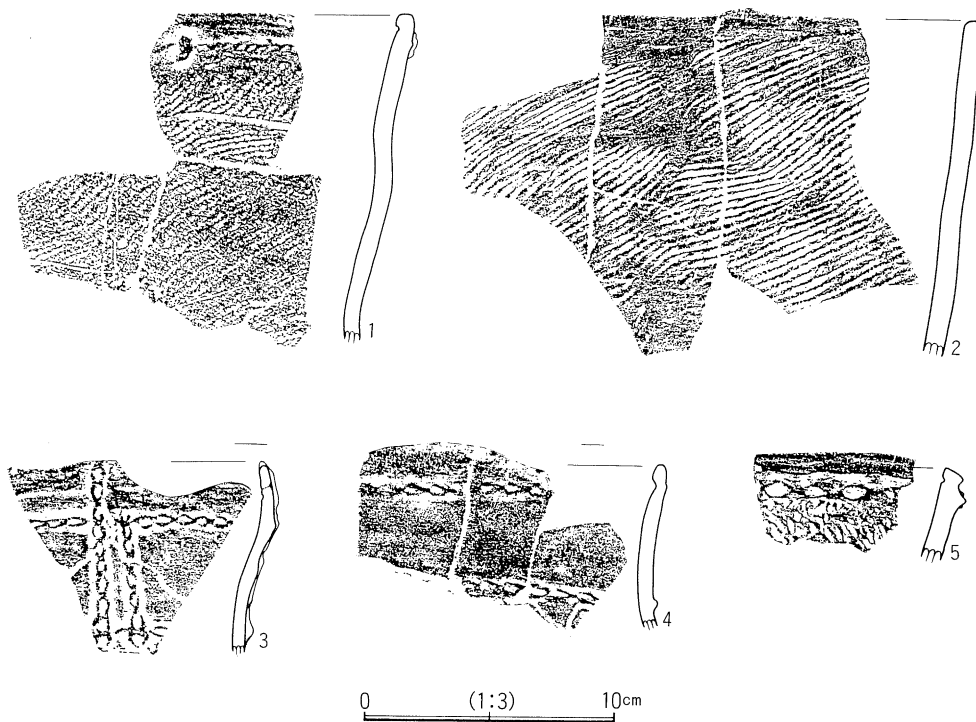
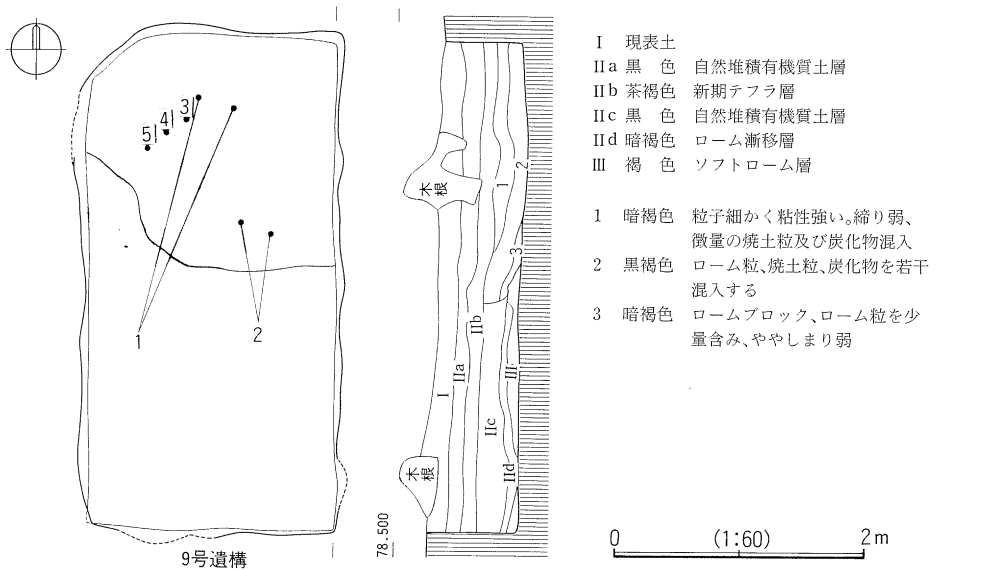


第125図 66トレンチ出土遺物実測図

71トレンチ 9号遺構として報告する資料である。ソフトローム層まで掘り下げた所、円形状のプランが検出されたことから、住居跡であろうと考えられる。1～5は覆土2層中からの検出である。

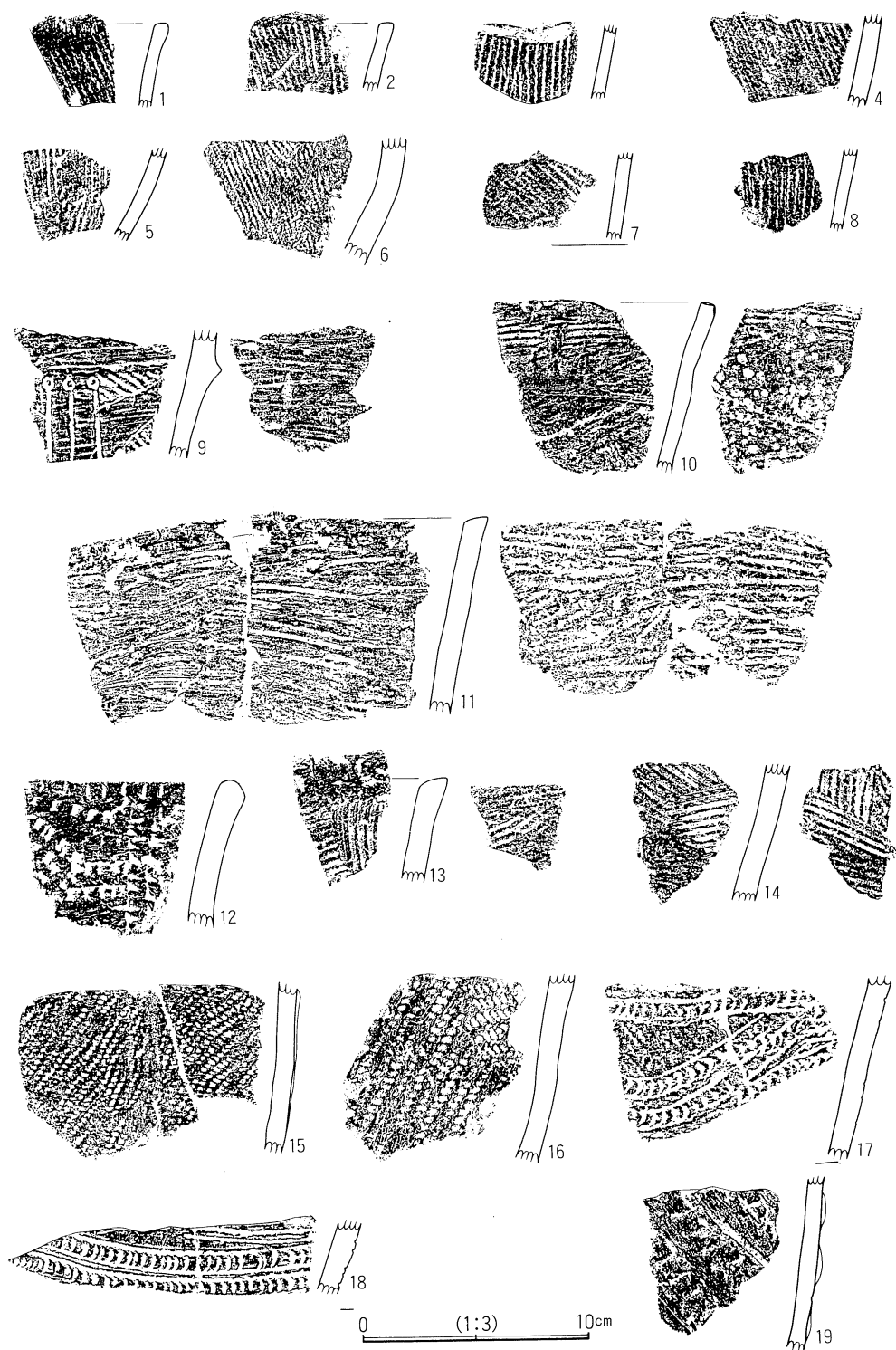
遺物包含層

第127図～第141図137までの遺物は、すべて遺構外(遺構検出トレンチ内から検出されたもの

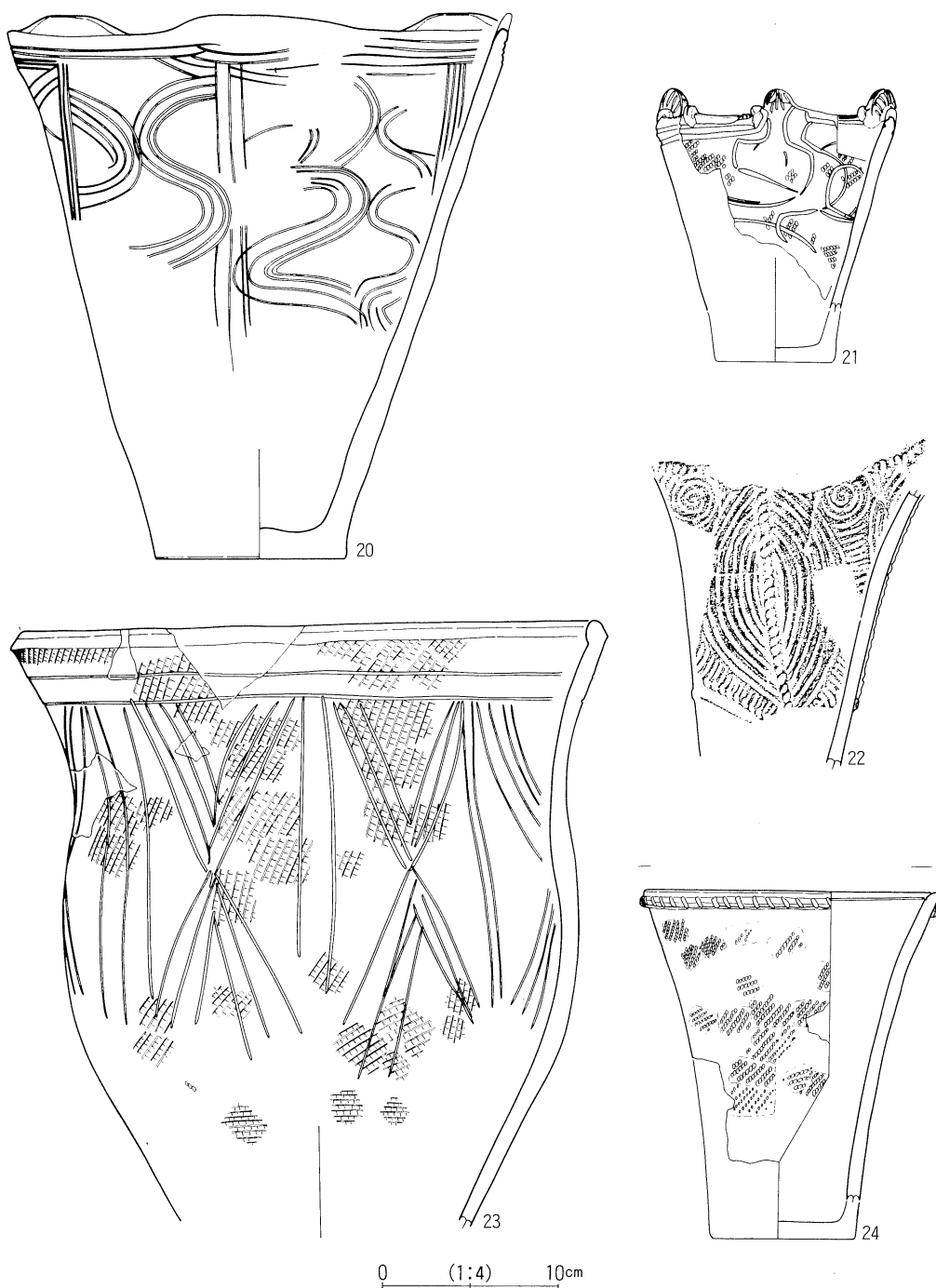


第126図 71トレンチ実測図及び出土遺物実測図

も含むが、総じて遺構プラン外及び基本土層中)からの検出である。第127図1～8は早期撚糸文系の土器群である。9～14は早期条痕文系の土器であり、9は鶴ヶ島台式、他は広義の茅山



第127図 出土遺物実測図 1



第128図 出土遺物実測図 2

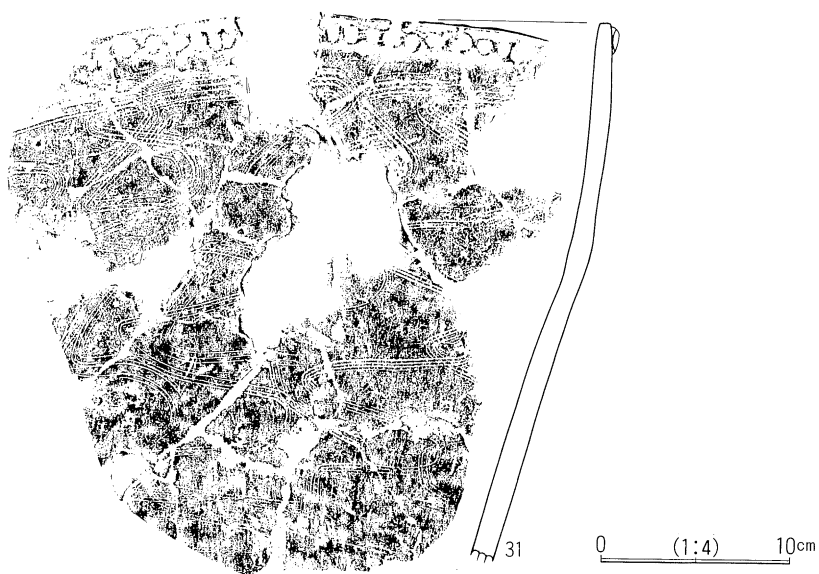
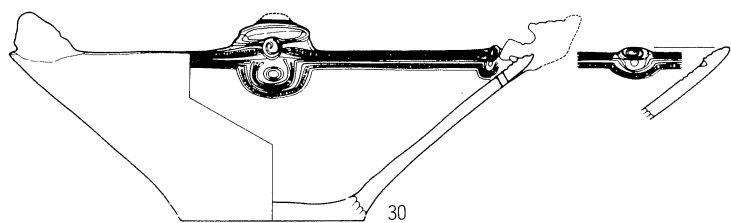
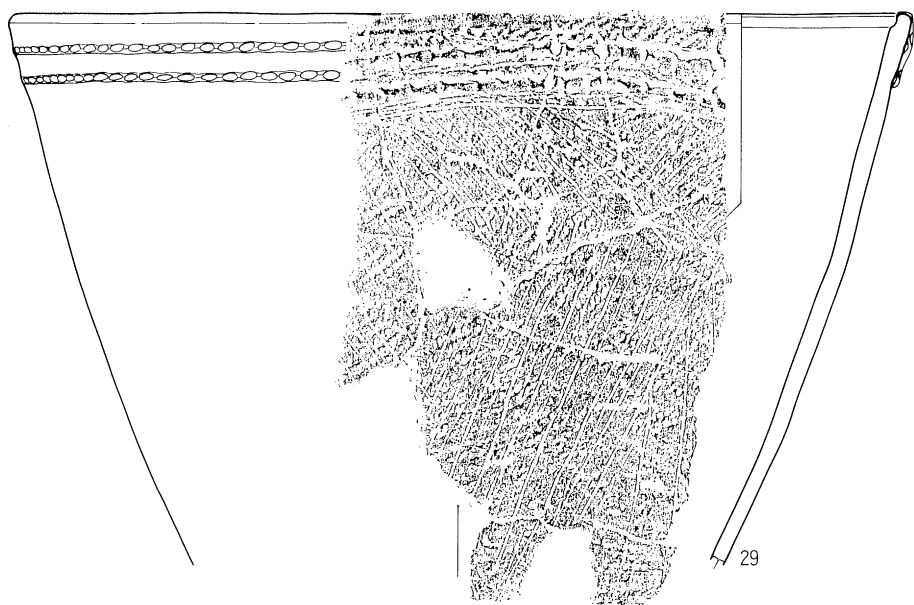
式土器に比定される。15・16は前期前半の黒浜式土器に比定される。17～19は前期後半に位置づけられる土器群である。17・18は諸磯系に、19は3条の貼付文が認められるが帰属系統はよ



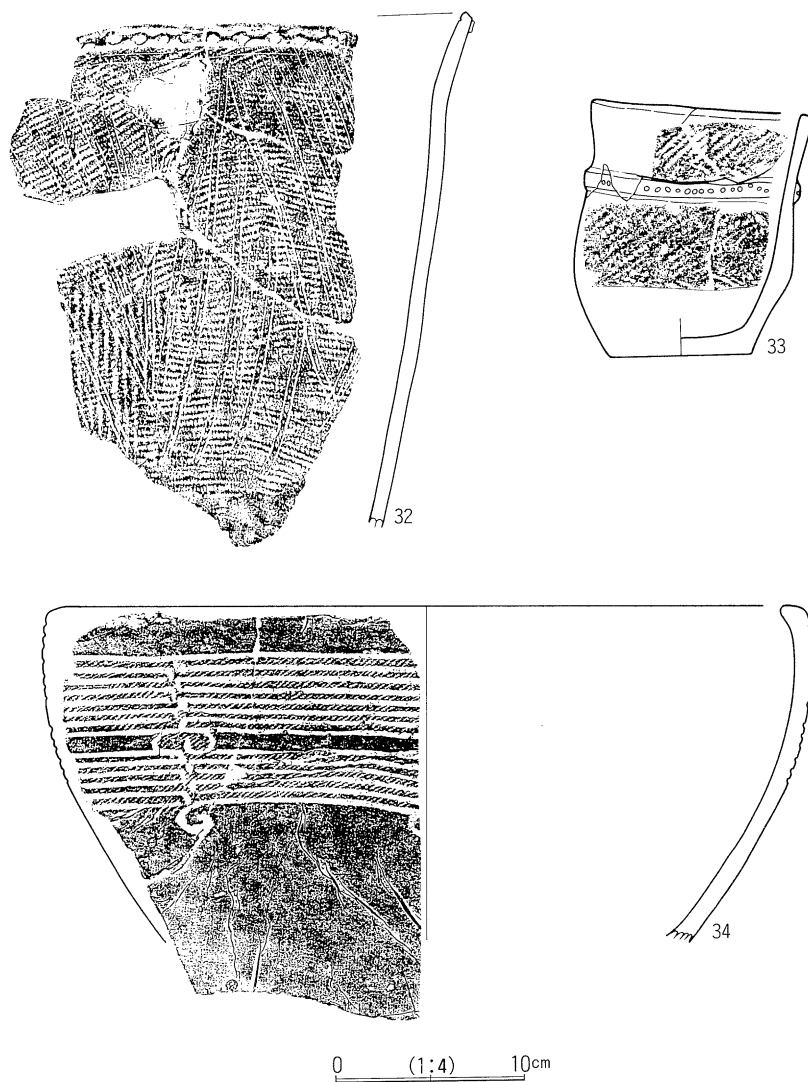
第129図 出土遺物実測図 3

くわからない。

20～123は後期に位置づけられる資料である。堀之内Ⅰ・Ⅱ式、加曽利BⅠ式などが認められ、本遺跡の主体となる土器群である。全体的に堀之内式期の遺物が多く、Ⅱ式期に比定されるものの中に26・30などの精製土器を認めることができる。48～55は、加曽利BⅠ式期に比定され



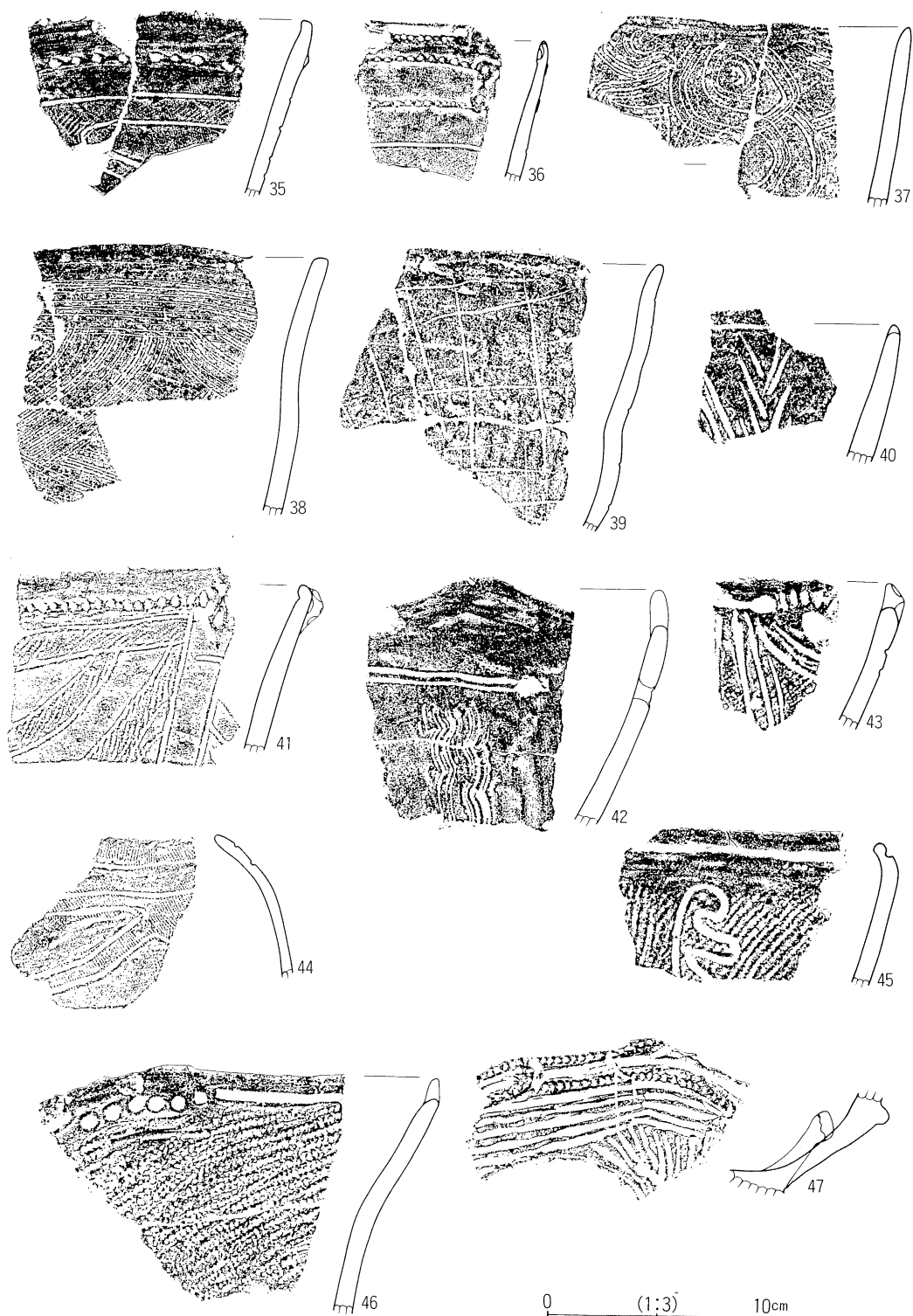
第130図 出土遺物実測図 4



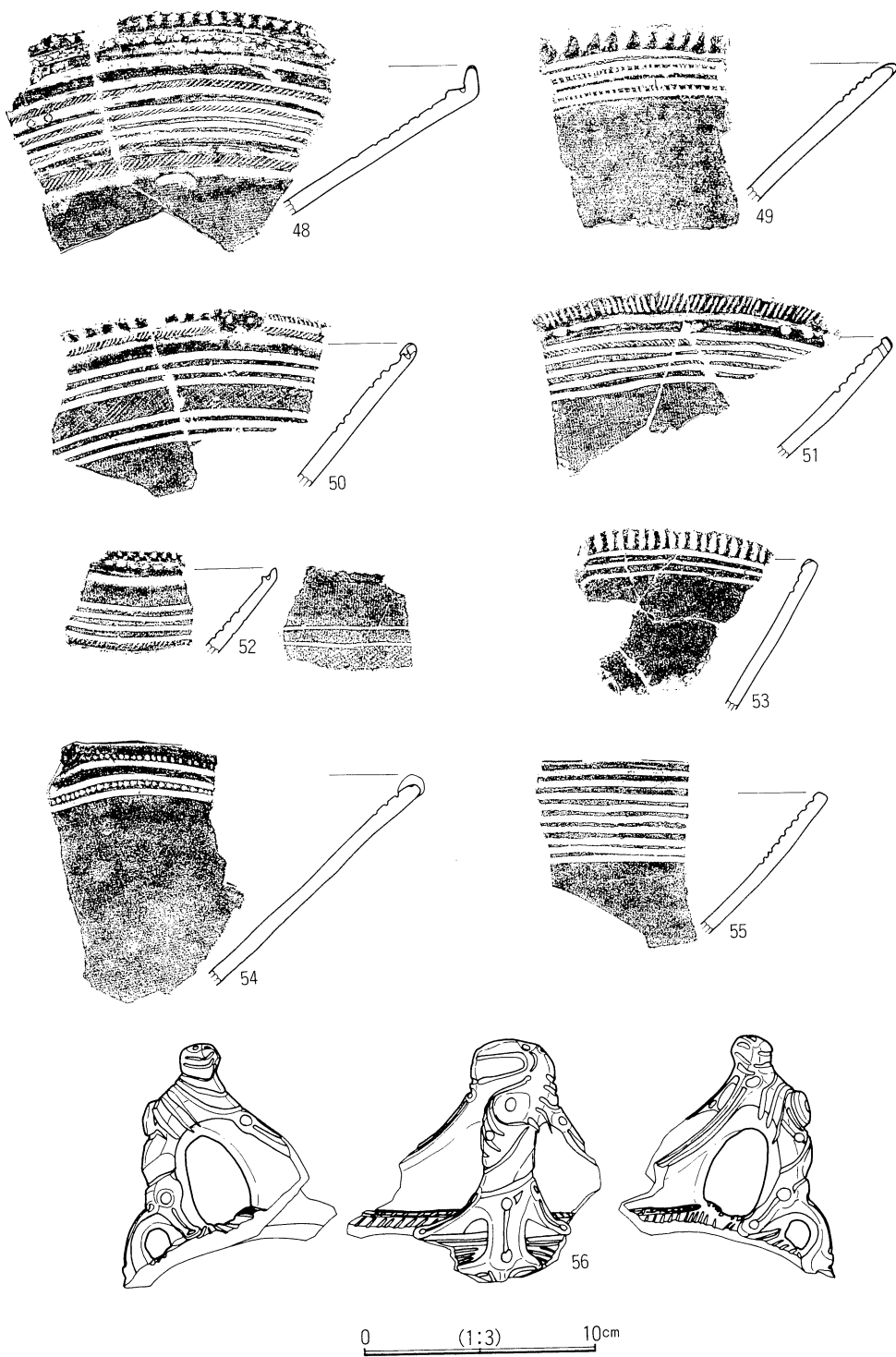
第131図 出土遺物実測図 5

る浅鉢型器内面のバリエティである。内外面とも光沢が表われるほどよく磨かれている。56～73は浅鉢型土器の取手部分である。このうち70の加曽利BⅠ式器に比定されるもの以外は、明瞭な帰属型式がよくわからない。71は焼成後に孔を穿っている。74は土偶脚部である。75～81は注口土器の注口部分である。いずれも胴部を欠いているため、具体的な器形及び帰属型式は不明である。(図版36～38)

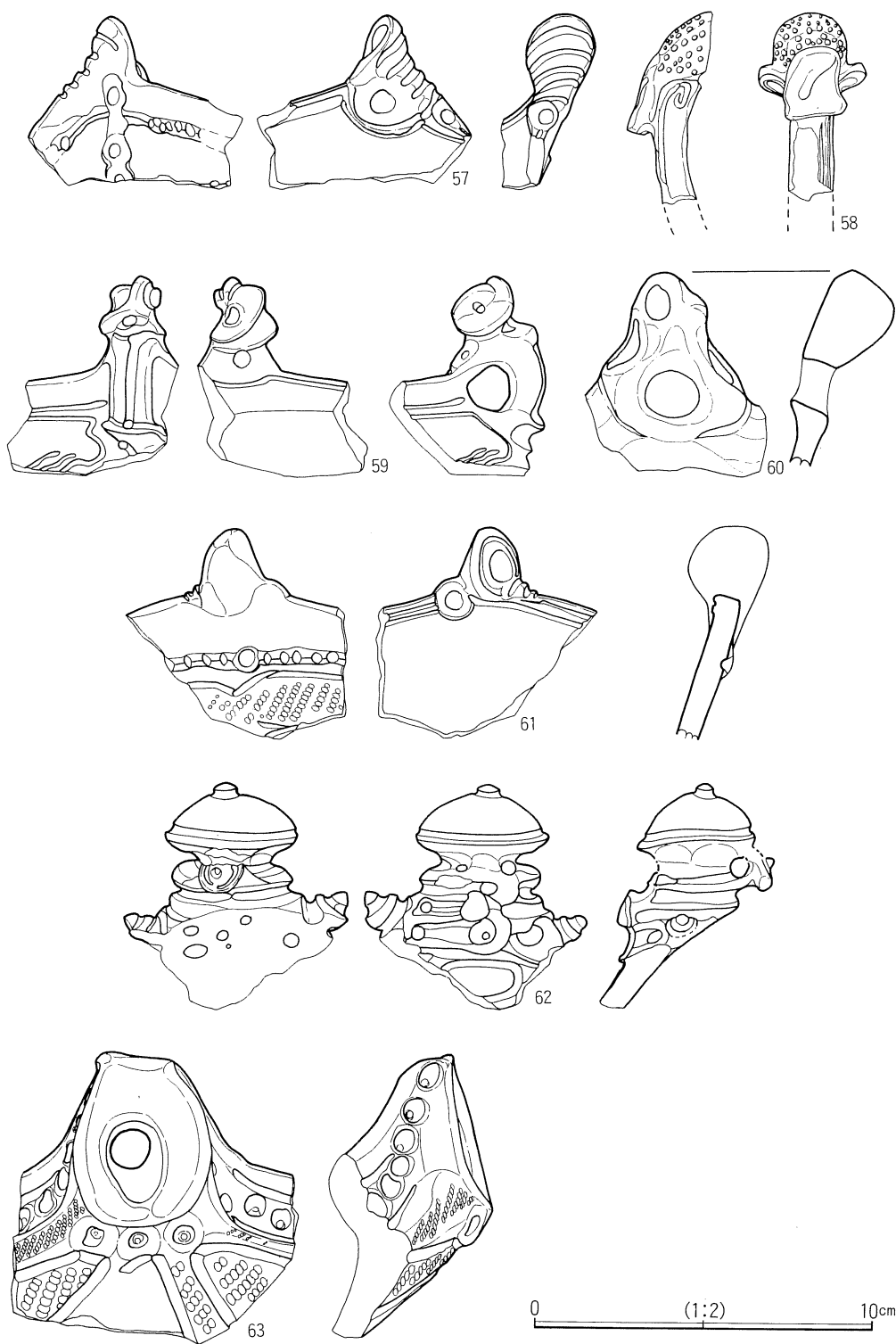
本遺跡出土の土製品を第138図にまとめた、82～84は土器底部再利用の土製円板である。いずれも割れ口を丁寧に研磨している。85～90は土器片再利用の土錘である。(図版38・39)



第132図 出土遺物実測図 6



第133图 出土遺物実測図 7

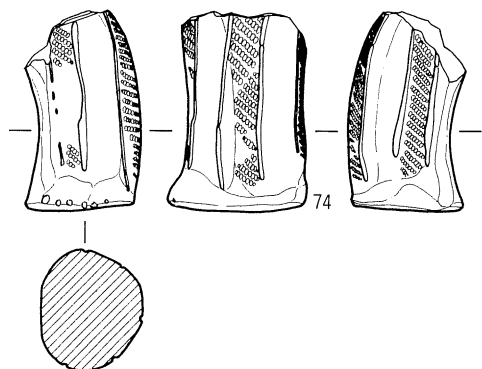
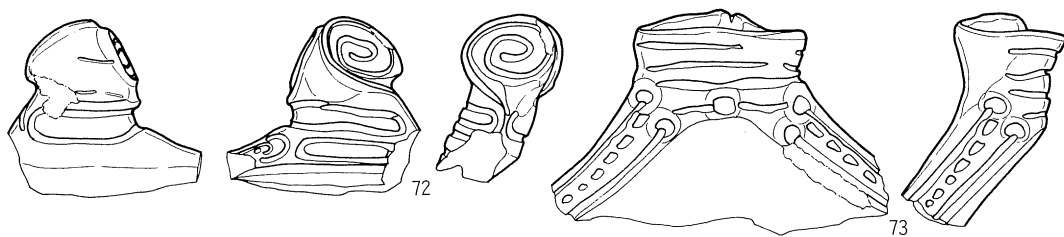
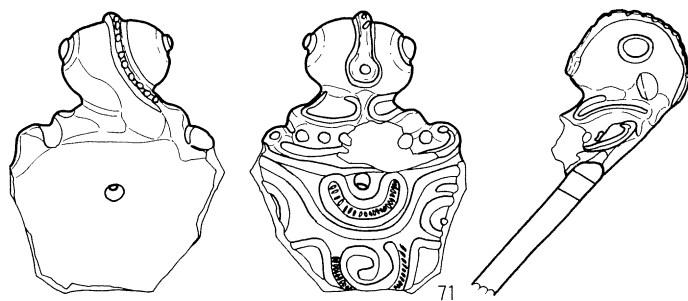
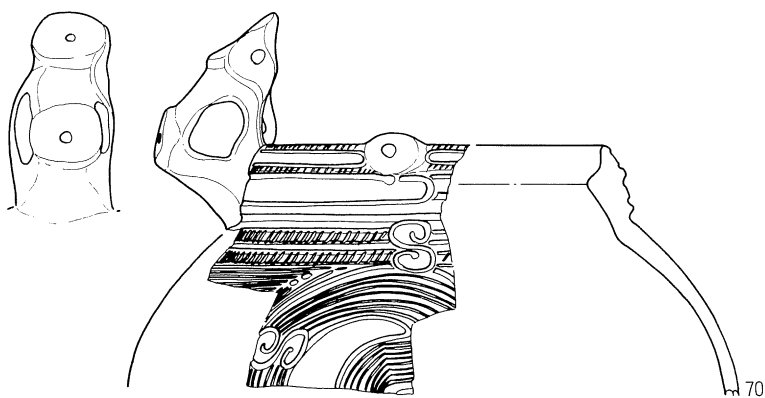


第134図 出土遺物実測図 8

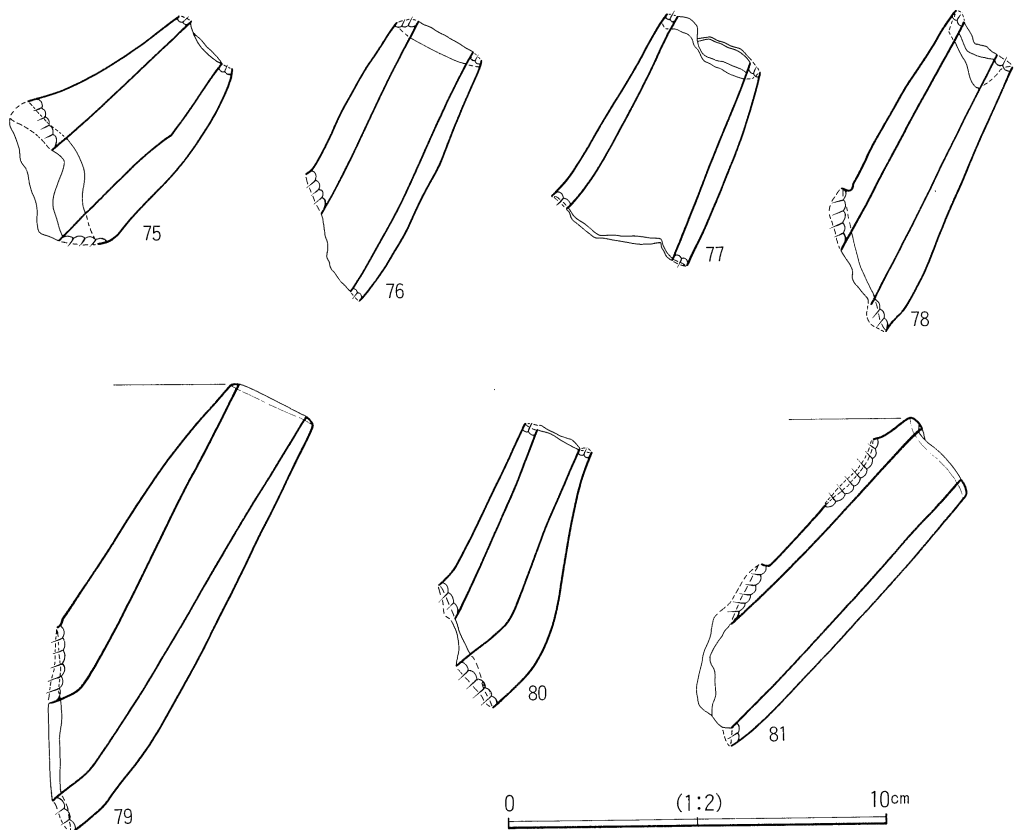


0 (1:2) 10cm

第135图 出土遺物実測図 9



第136図 出土遺物実測図10

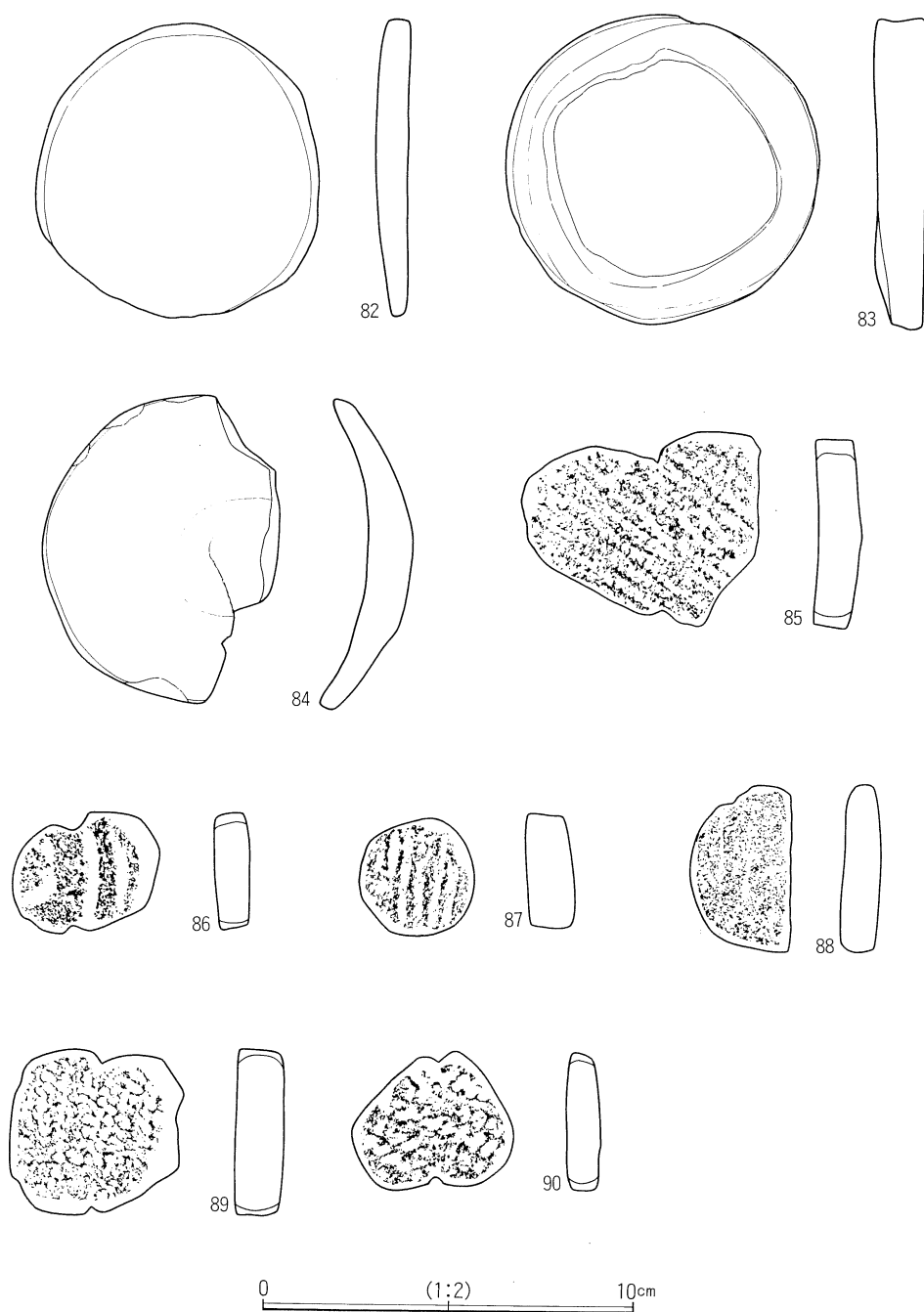


第137図 出土遺物実測図11

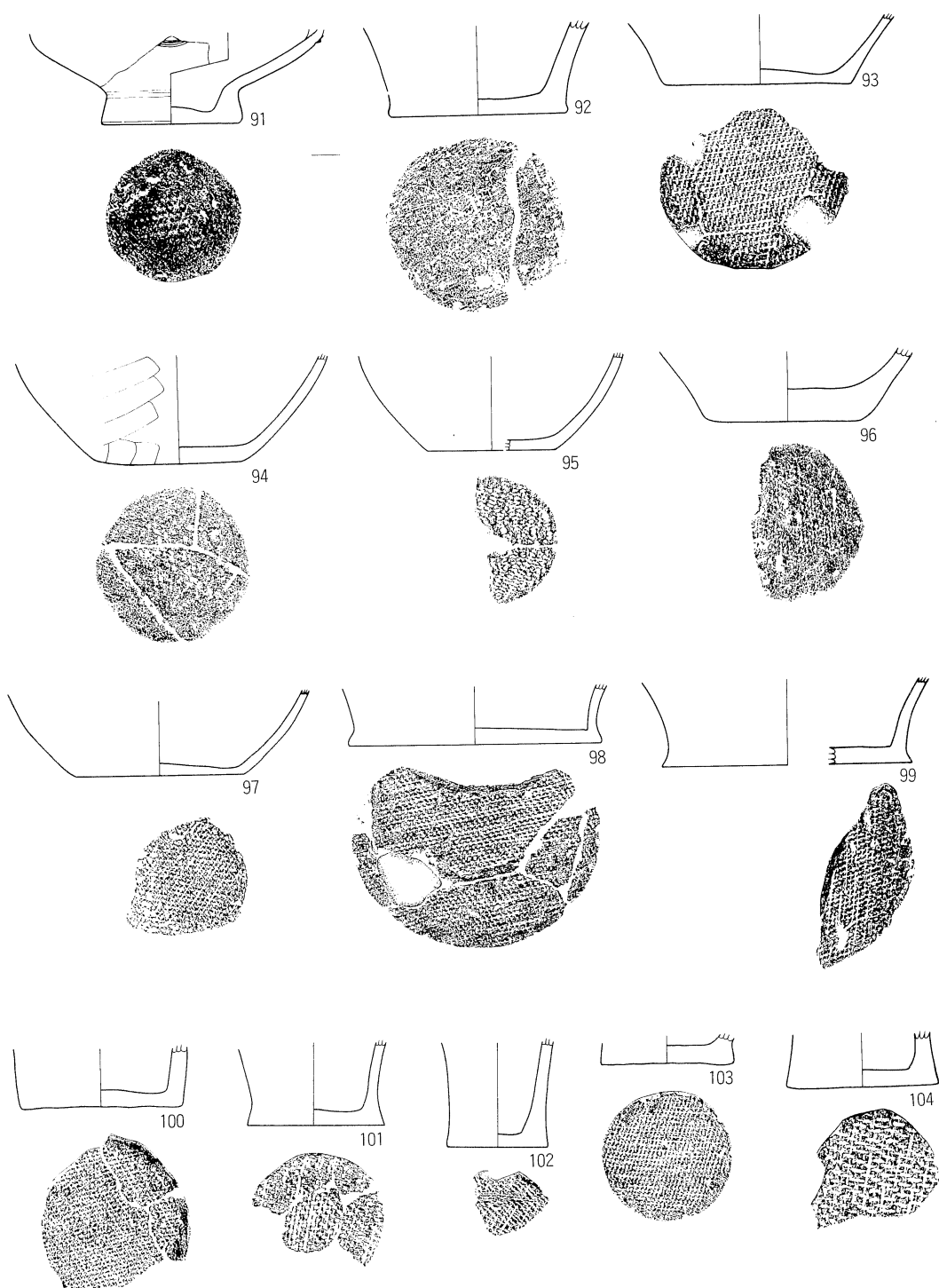
本遺跡出土の底部を第139・140図にまとめた。網代痕・木葉痕・無文のものが認められる。網代底のものには、91・92・94・96などの様に中央部に網代痕跡を残し、周囲を磨消すものや、105の様に一部に痕跡を有するものなどが認められる。また、網代そのものにも93・98を代表とする編目の細かいものや、104・106の様に太さの異なる素材によって編まれたものなど、その組合せにも数通りの文様構成が認められる。また、無文・木葉痕のものに比べ、内外面とも丁寧に磨かれており、光沢を表すものが多く認められる。

124～137は縄文晩期に比定される資料である。いずれも外面に条痕を有し、器厚は薄く、胎土は精選されている。色調は外面黒褐色、内面は茶褐色を呈している。唐沢遺跡出土晩期条痕文系土器とよく似ており、65トレンチ周辺に分布する傾向が認められた。

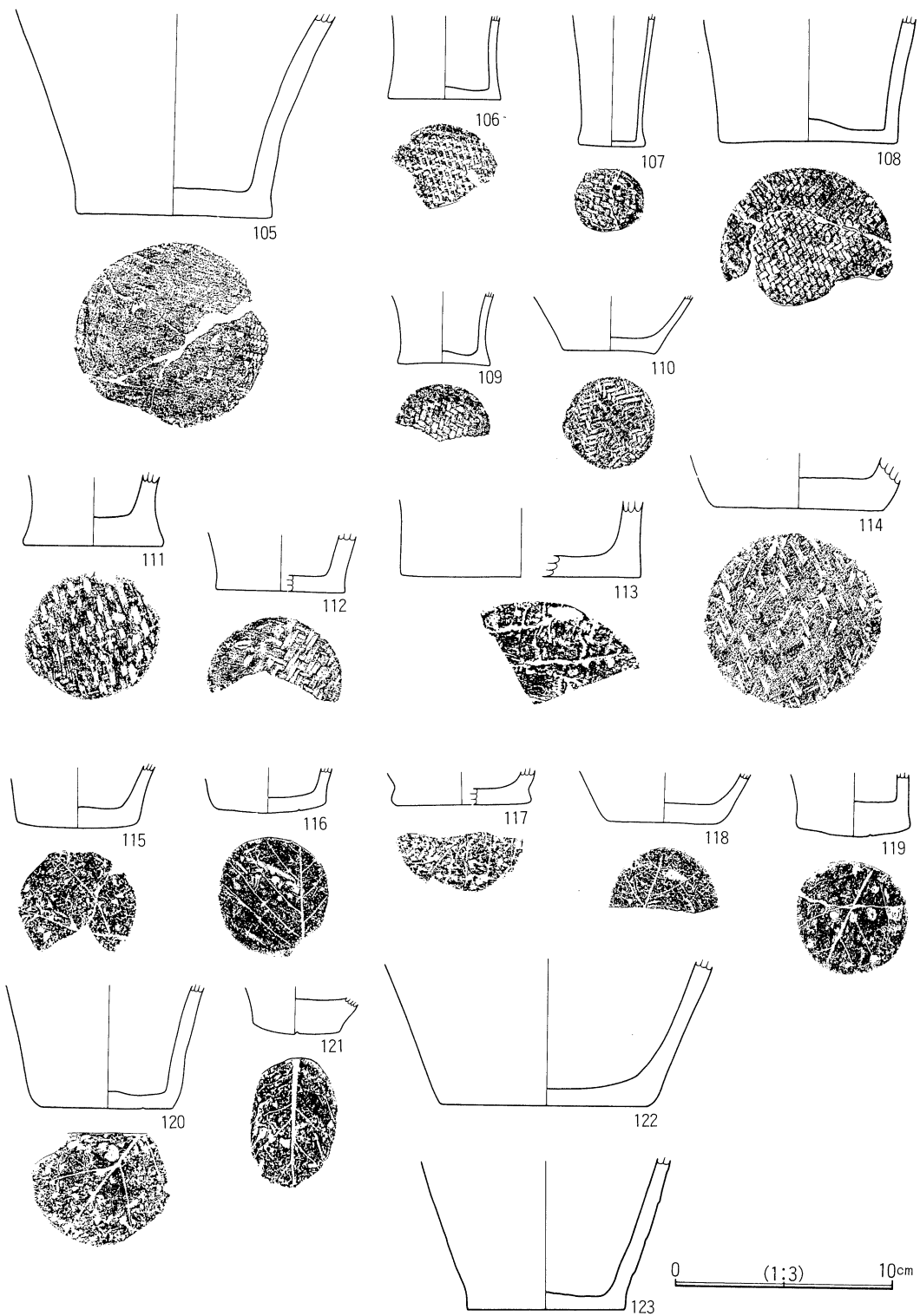
これら1～137までの資料の大部分は、縄文後期堀之内式期に比定されるものであり、当該期に比定される遺構が検出されたトレンチ周辺に大量に検出されているものの一部である。



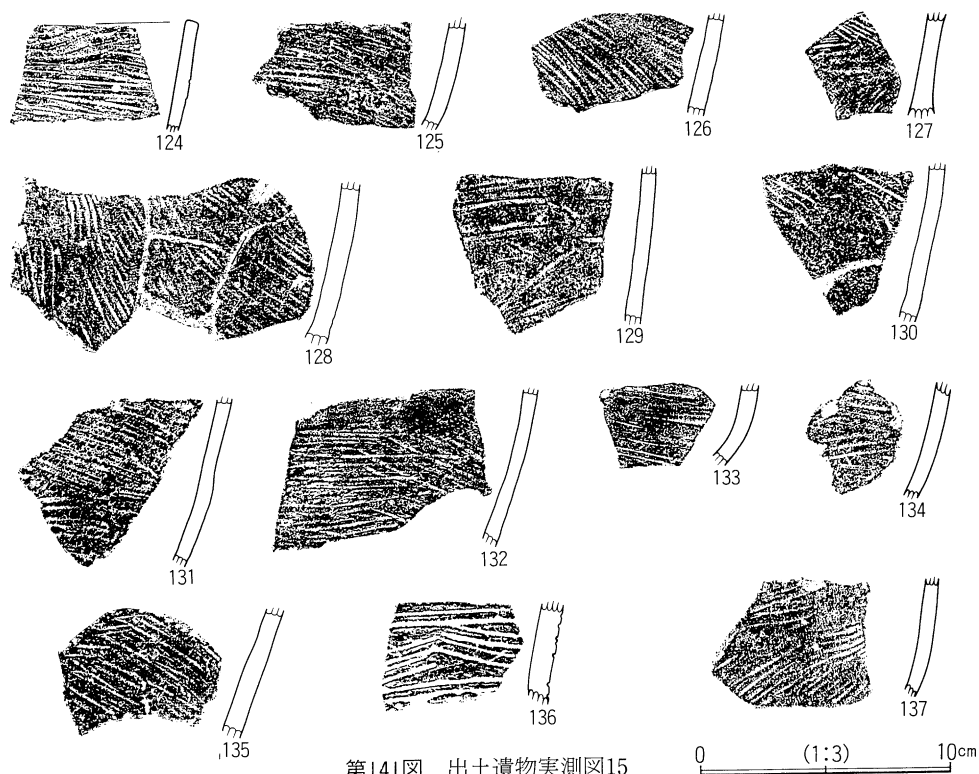
第138図 出土遺物実測図12



第139图 出土遺物実測図13



第140図 出土遺物実測図14



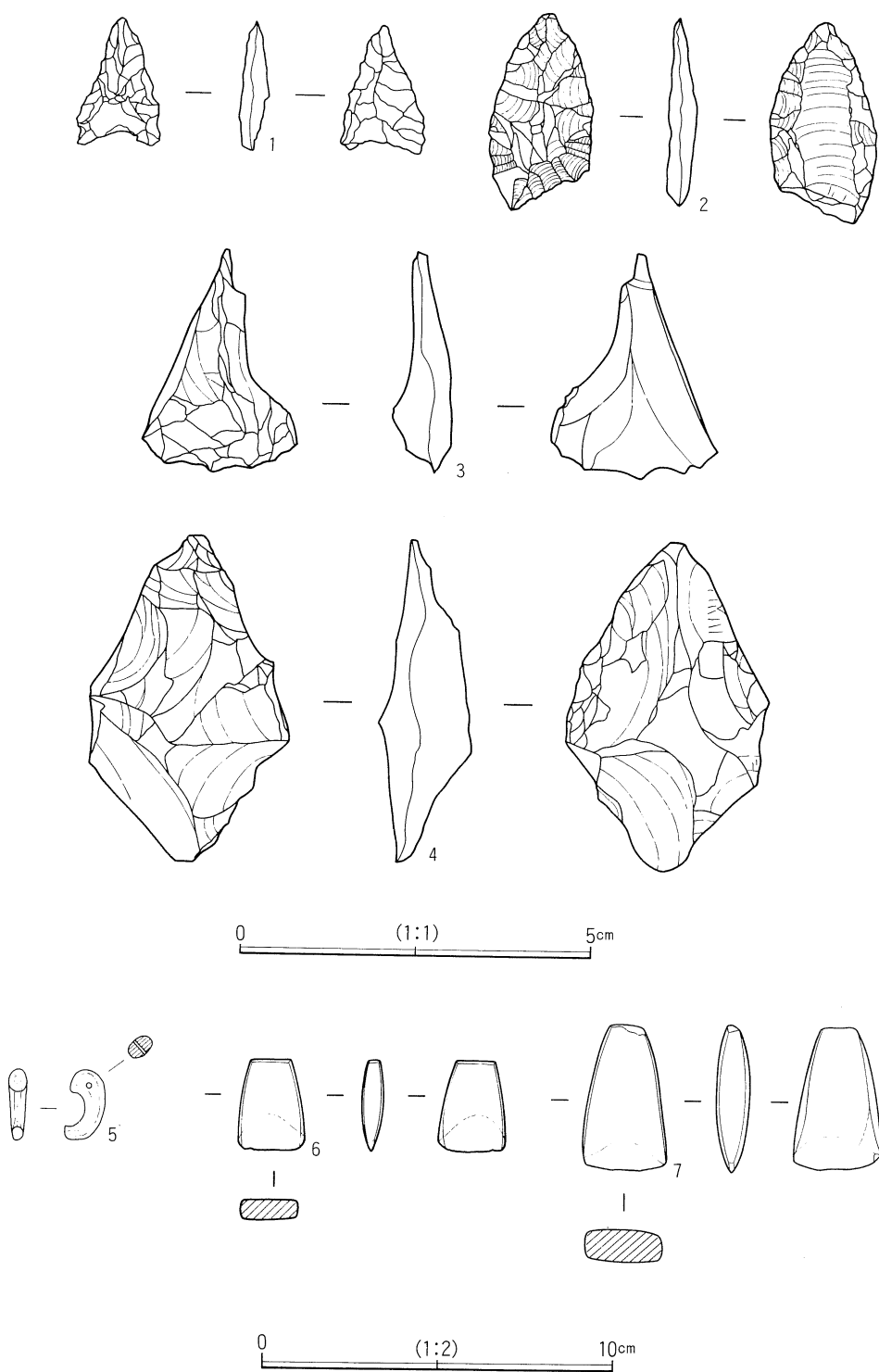
第141図 出土遺物実測図15

石 器

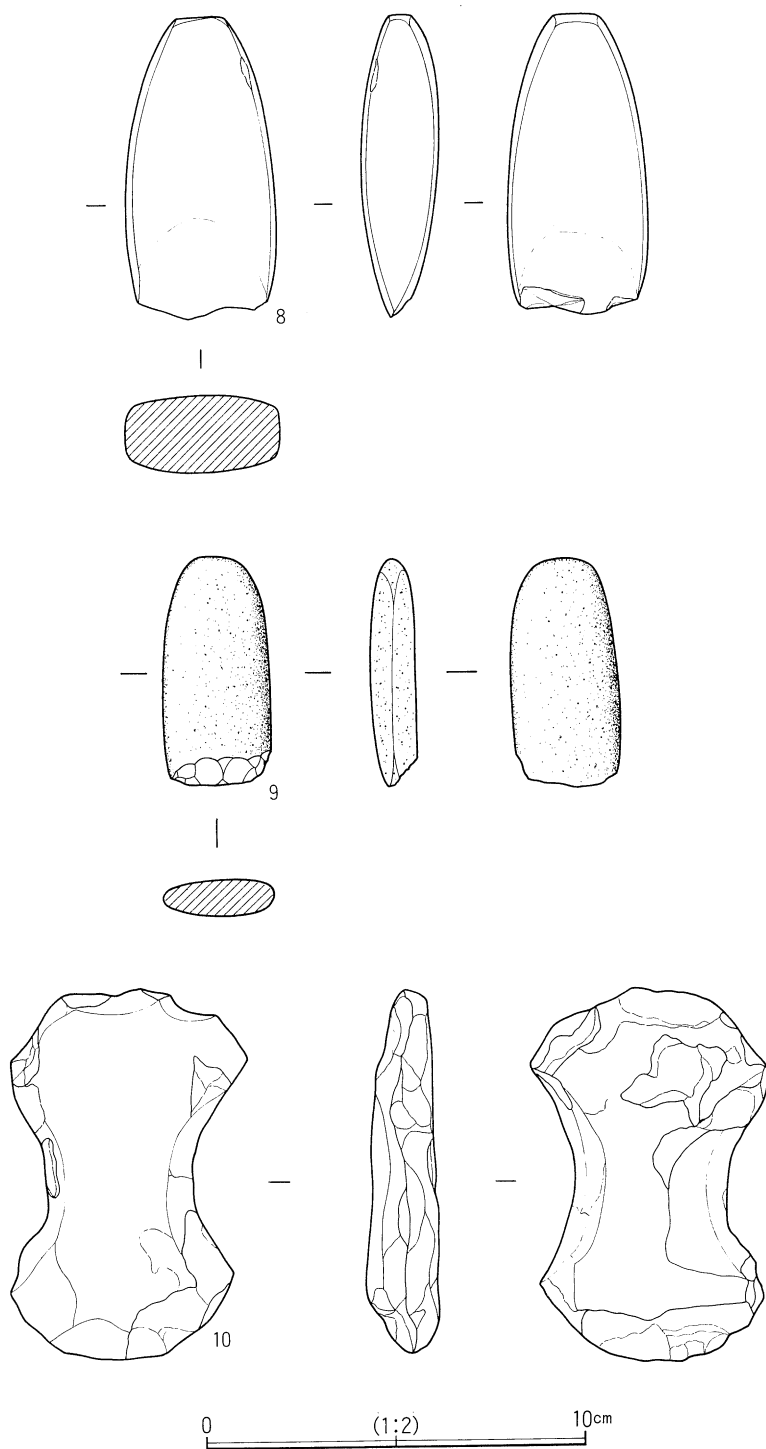
本遺跡から検出された石器を第142図以下にまとめた、総数124点のうち65%が石皿と磨石である。(石皿25点、磨石56点、石斧12点、石鏃2点、尖頭器1点、勾玉1点、砥石2点他) このうち24点を図示した。(図版39・40)

第13表 山見塚遺跡A地点検出石器一覧表

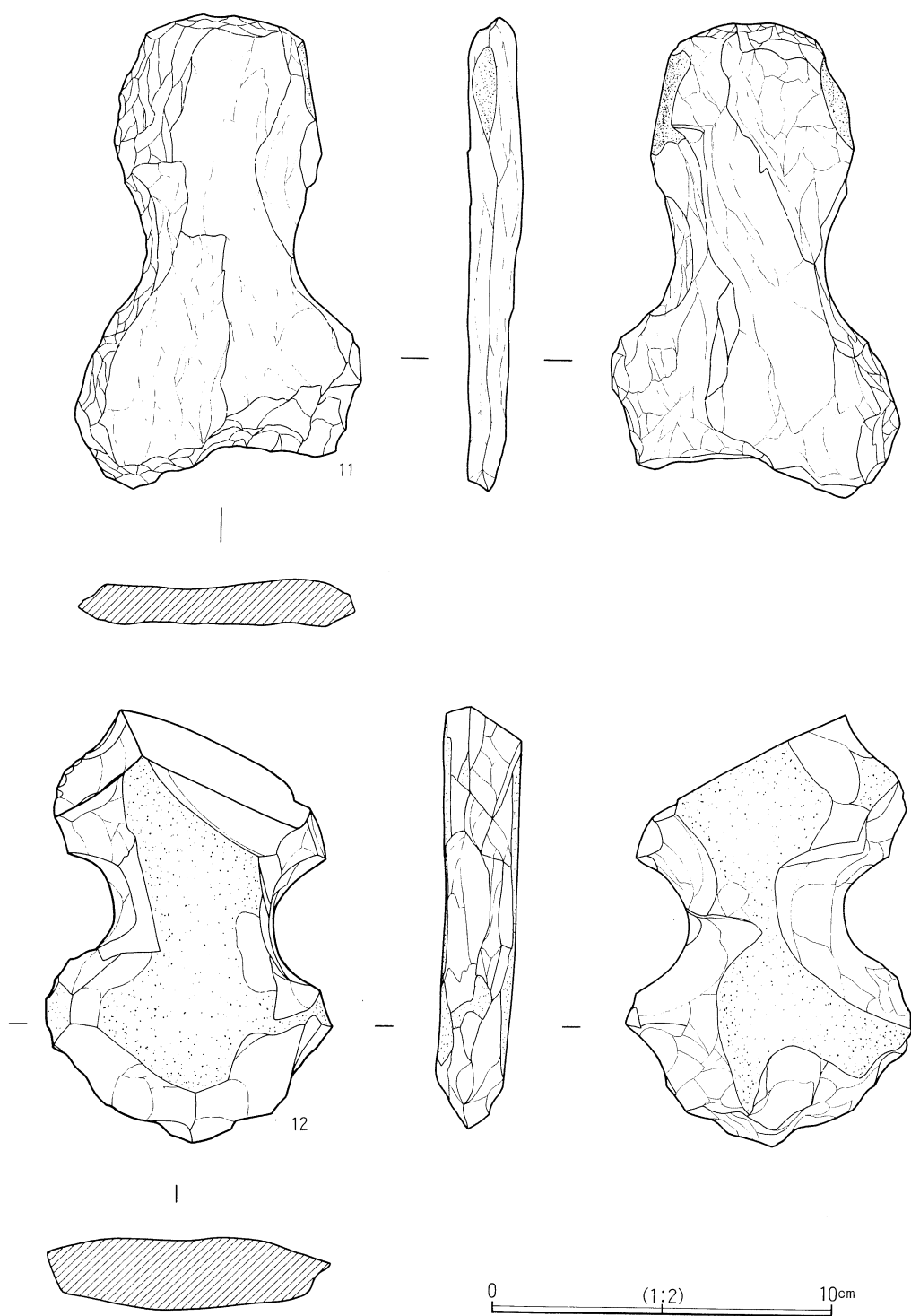
挿図No	名 称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	備 考	
1	石 鏃	無 茎	3トレ	355	18.0	12.0	3.0	0.030	チャート	
2	石 鏃	無 茎	5トレ	263	27.0	15.0	4.0	0.060	O	B
3	石 錐		3トレ	482	32.0	23.5	8.5	0.135	チャート	
4	尖 頭 器		2トレ	1200	46.5	28.0	13.0	0.405	ケイ質頁岩	(東北産)
5	勾 玉		36トレ	234	20.0	10.0	5.0	0.055	滑 石	
6	磨製石斧	定角式	36トレ	345	26.0	19.0	5.5	0.210	蛇 紋 岩	
7	磨製石斧	定角式	8トレ	19	42.0	25.0	9.0	0.585	蛇 紋 岩	
8	磨製石斧	定角式	3トレ	183	80.0	41.0	20.0	3.695	砂 岩	
9	磨製石斧	定角式	5トレ	144	61.0	29.0	10.0	1.190	砂 岩	
10	打製石斧	分銅形	3トレ	265	97.0	62.0	19.0	5.240	安 山 岩	
11	打製石斧	分銅形	6トレ	638	140.0	82.0	16.0	220	頁 岩	
12	打製石斧	分銅形	48トレ	4	125.0	84.0	21.0	356	砂 岩	
13	石 皿		49トレ	8	207.0	202.5	(最小) 9.0	2,070	安山岩(多孔質)	表裏に22ヶ所の凹
14	石 皿		6トレ	542	129.0	99.0	(最小) 9.0	760	安山岩(多孔質)	有足
15	石 皿		1トレ	443	114.0	108.0	(最小) 18.0	560	安山岩(多孔質)	
16	石 皿		79トレ	10	267.0	135.0	(最小) 15.0	1,260	安山岩(多孔質)	表裏に7ヶ所の凹
17	石 皿		29トレ	394	154.5	117.0	(最小) 9.0	690	安山岩(マサツ大)	表裏に11ヶ所の凹
18	石 皿		76トレ	21	123.0	133.5	(最小) 12.0	810	安山岩(多孔質)	裏面に10ヶ所の凹



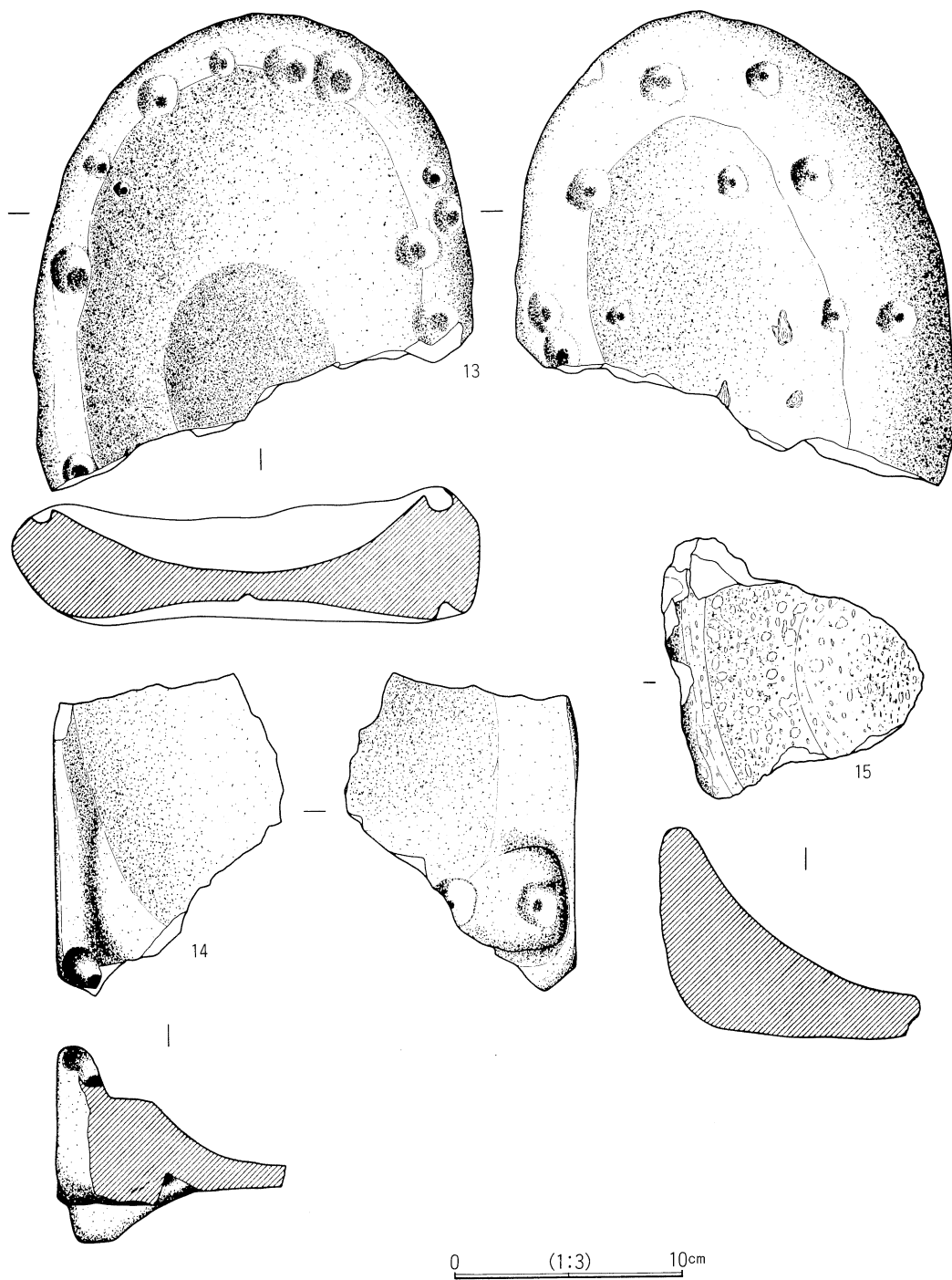
第142図 出土遺物実測図16



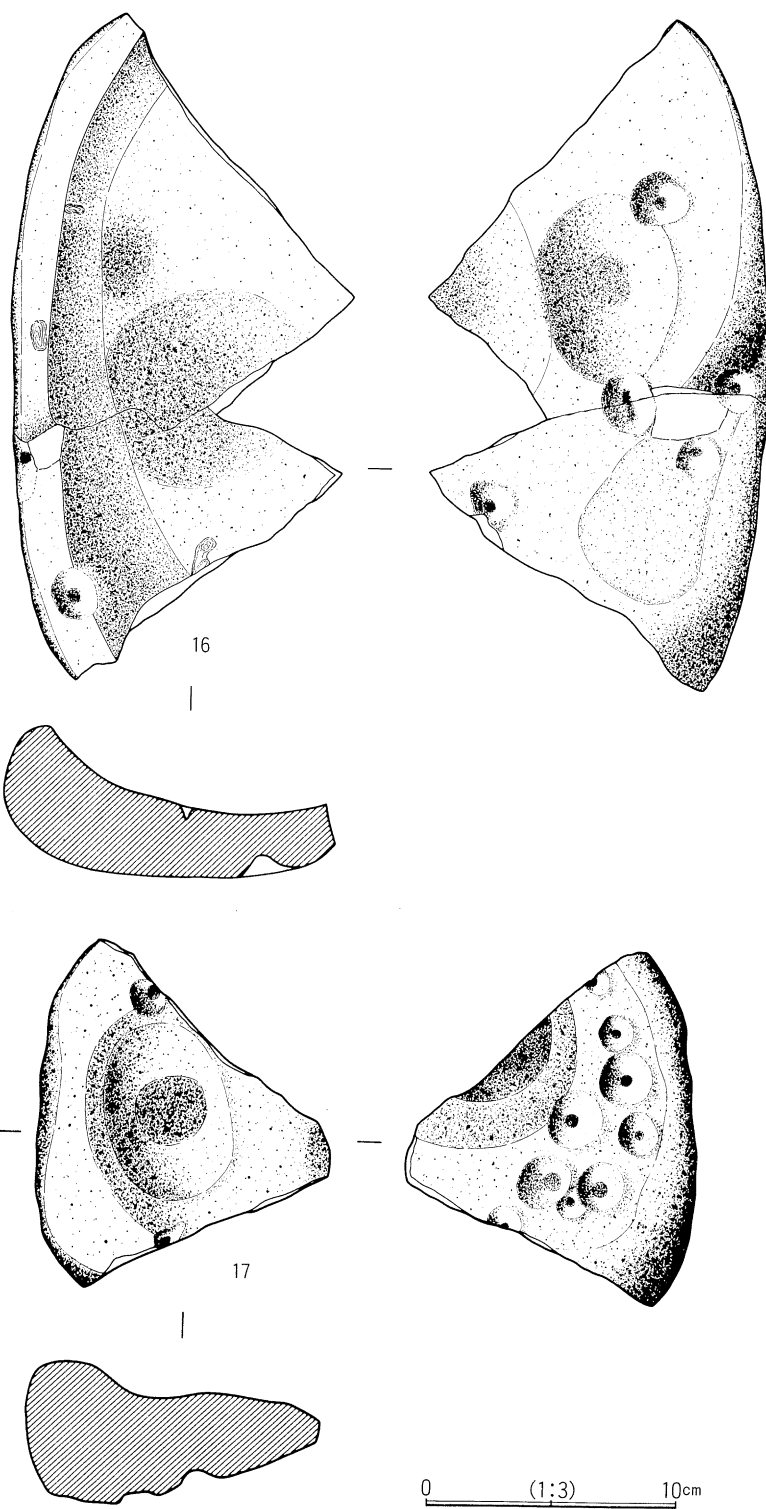
第143図 出土遺物実測図17



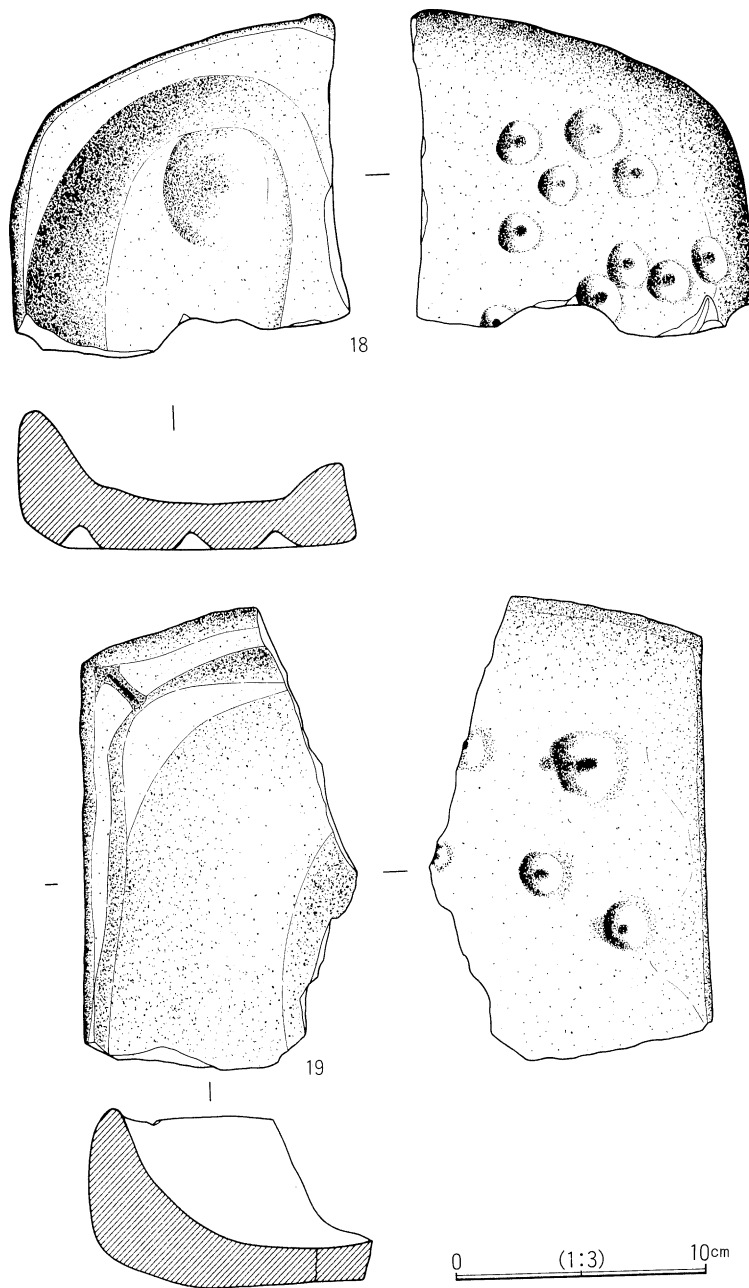
第144図 出土遺物実測図18



第145図 出土遺物実測図19

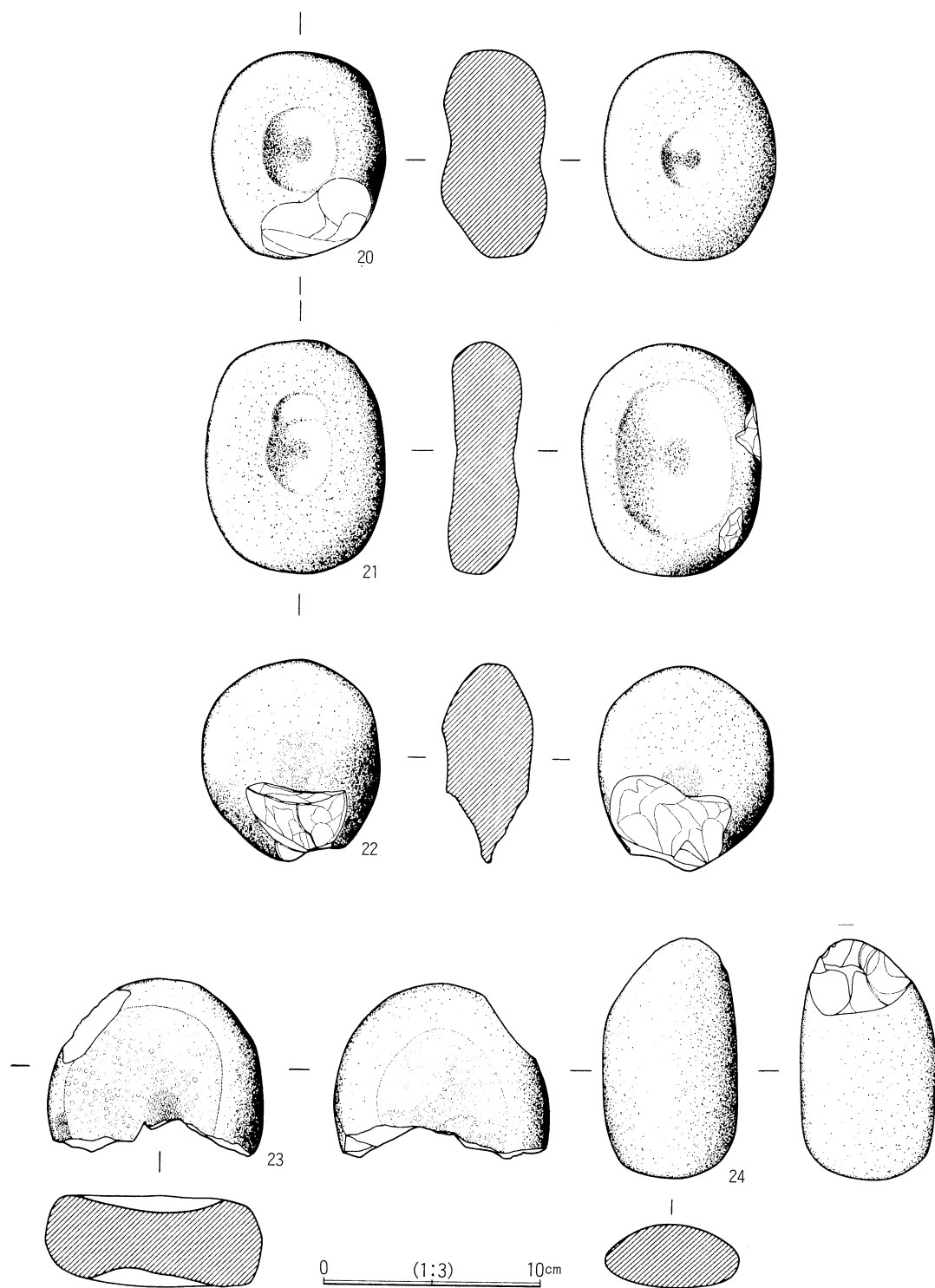


第146図 出土遺物実測図20

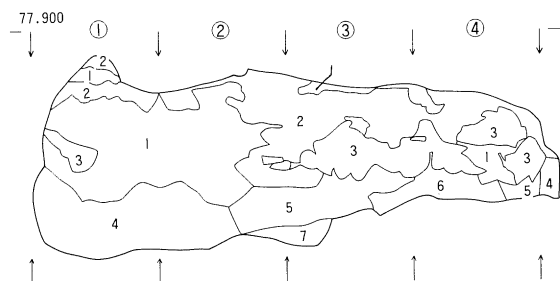


第147図 出土遺物実測図21

挿図No.	名 称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	備 考
19	石 皿		2トレ	667	177.0	108.0 (最小)12.0	1,110	安山岩(多孔岩)	片口状の凹部を有し、裏面に5ヶ所の凹
20	磨 石		61トレ	9	96.0	78.0 (最小)40.5	560	ア プ ラ イ ト	
21	磨 石		29トレ	495	105.0	81.0 (最小)39.6	540	安 山 岩	
22	磨 石		47トレ	16	93.0	81.0 39.0	351	安 山 岩	
23	磨 石		1トレ	540	66.0	99.0 (最小)27.0	423	安 山 岩	
24	磨 石		2トレ	26	111.0	60.0 28.5	275	砂 岩	



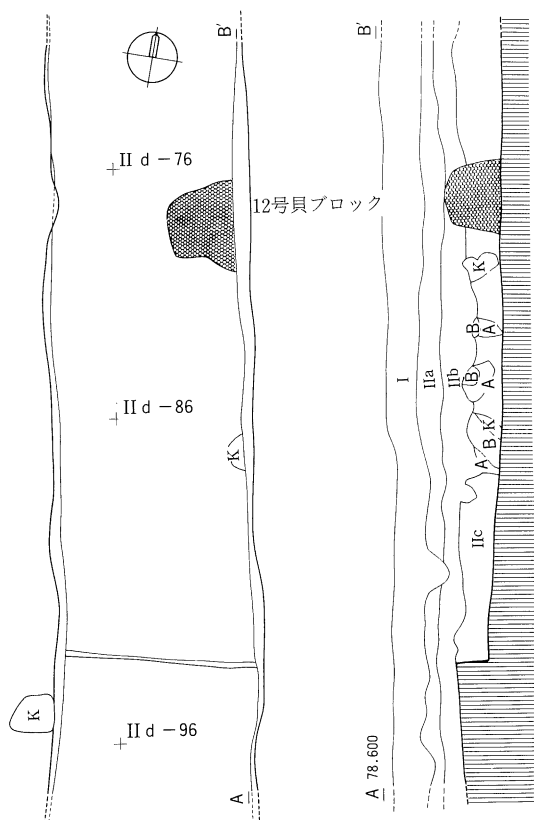
第148図 出土遺物実測図22



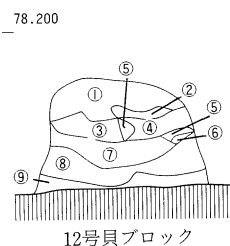
- 1 キサゴ 純貝層
 - 2 キサゴ 破碎貝層
 - 3 アサリ 純貝層
 - 4 アサリ、キサゴ含む混貝土層
 - キサゴ含む 混貝土層
 - 6 アサリ含む 混貝土層
 - 7 キサゴ含む 混貝土層
- ①～④は、トレンチ内に検出された
貝サンプリングNo
第14表以下参照

11号貝ブロック

0 (1:12) 40cm



- I 表土層
- IIa 黒褐色 有機質土層
- IIb 茶褐色 新期テフラ層
- IIc 黒褐色、有機質土層
- A 黒褐色 ローム B 若干含む有機質土
- B 貝ブロック



12号貝ブロック

0 (1:30) 1m

- ① ハマガリ、キサゴ主体の純貝層
 - ② シオフキ、キサゴ主体、キサゴはすべて破碎されている
 - ③ ハマガリ、キサゴ主体の混貝土層
 - ④ ハマガリ、アサリ、キサゴ主体の混貝土層
 - ⑤ アカニシ主体純貝層
 - ⑥ キサゴ主体混貝土層
 - ⑦ キサゴ破碎貝含む混貝土層
 - ⑧ 混貝土層 若干の貝を認める
 - ⑨ 混貝土層 ほとんど貝は認められない
- ①～⑨は、層位によって分けられた
貝サンプリングNo
第14表以下参照

第149図 A地点検出貝ブロック実測図

第14表 山見塚遺跡A地点検出貝ブロック分析一覧表

出土グリッド	出土位置	総重量		貝総重量		個	獣 魚 骨		土 器 片			排 土 量	
		g	%	g	%		g	(含まず%)	個	g	%	g	%
2 トレンチII d-36 (11号)	①	7,700	100	4,250	55.19	14	0.4	(0.005)	0			3,449.6	44.80
	②	4,200	100	1,259	29.98	0	0	0	0			2,941.0	70.02
	③	4,400	100	1,427	32.43	2	0	0	2	65	1.48	2,908.0	66.09
	④	4,250	100	1,111	26.14	1	0	0	0			3,139.0	73.86
	計	20,550	100	8,047	39.16	17	0.4	(0.002)	2	65	0.32	12,437.0	60.52
2 トレンチII d-76a (12号)	①	15,200	99.99	6,340	41.71	27	3.6	0.02	29	134	0.88	8,722.4	57.38
	②	810	100	486	60.00	1	0	0	3	8	0.99	316.0	39.01
	③	3,500	100	985	28.14	37	1.0	0.03	0			2,514.0	71.83
	④	2,900	99.99	1,379	47.55	9	1.0	0.03	0			1,520.0	52.41
	⑤	800	100	342	42.75	9	1.0	0.13	0			457.0	57.13
	⑥	2,500	100	387	15.36	1	0.1	(0.003)	0			2,132.9	84.64
	⑦	3,600	100	51	1.42	1	0.1	(0.002)	0			3,548.9	98.58
	⑧	5,400	100	35	0.62	0	0	0	0			5,365.0	99.35
	⑨	5,200	100	4	0.08	0	0	0	0			5,196.0	95.92
	③～⑥	1,000	100	571	57.10	4	0.1	0.01	2	39	3.90	389.9	38.99
	計	40,930	100	10,580	25.85	89	6.9	0.01	34	181	0.44	30,162.1	73.70
2 トレンチII d-76b	一括	600	100	151	25.17	2	0	0	0			449.0	74.83
2 トレンチII d-76c	一括	120	100	37	30.83	0	0	0	0			83.0	69.17
2 トレンチII d-86 (13号)	①層	3,400	99.99	751	22.09	16	0.3	(0.008)	0			2,648.7	77.90
	②層	2,500	100	716	28.68	2	0	0	0			1,784.0	71.36
	計	5,900	100	1,467	24.86	18	0.3	(0.005)	0			4,432.7	75.13
4 トレンチIII d-26～36 (39号)	①	6,150	100	2,581	41.97	27	1.5	0.02	8	112	1.82	3,455.5	56.19
	②	3,700	100	1,732	46.81	16	0.2	(0.005)	0			1,967.8	53.18
	③	3,150	100	914	29.02	10	1.0	0.03	4	12	0.40	2,230.0	70.56
	④	5,660	100	2,597	46.38	22	2.5	0.04	6	26	0.46	2,974.5	53.13
	⑤	4,000	100	1,408	35.20	9	0.0	0	4	20	0.50	2,572.0	64.30
	⑥	2,600	100	1,000	38.46	18	2.0	0.08	4	11	0.42	1,587.0	61.04
	⑦	4,600	99.99	1,816	39.48	16	0.4	(0.009)	0			2,783.6	60.51
	⑧	4,300	100	1,255	28.49	24	0.5	0.01	0			3,074.5	71.50
		34,100	99.99	13,273	38.92	142	8.1	0.02	26	181	0.53	20,637.9	60.52
		102,200	100	33,555	32.83	267	15.7	0.02	76	427	0.42	68,202.3	66.73

☆ 獣魚骨 () の表示は%に含まれていない。

☆ %について、1/100以下の数は四捨五入とする。

貝ブロック

山見塚遺跡A地点において14ヶ所の貝ブロックが検出された。確認調査ということもあって、このうちの6ヶ所の貝ブロックに対しサンプリングを行ない、このうち11・12号貝ブロックを図示した。

またサンプリングされた資料は、整理作業の過程において、細分・分類を行った結果、第14表～20表の成果を得ることができた。

第15表 山見塚遺跡A地点検出貝総重量における正貝、破碎貝割合一覧表

%小数点以下第3位四捨五入

グ リ ッ ド	層 位	貝 総 重 量		正 貝 総 重 量			破碎貝総重量	
		g	%	個	g	%	g	%
2 トレンチⅡ d -36 (11号貝ブロック)	①	4,250	100	4,280	2,948	69.36	1,302	30.64
	②	1,259	100	1,675	983	78.08	273	21.92
	③	1,427	100	1,725	1,029	72.11	396	27.90
	④	1,111	100	1,167	909	81.82	202	18.18
	計	8,047	100	8,853	5,869	72.93	2,178	27.07
2 トレンチⅡ d -76㉔ (12号貝ブロック)	①	6,340	100	4,223	4,862	76.69	1,478	23.31
	②	486	100	1,092	392	80.66	94	19.34
	③	985	100	1,214	777	78.88	208	21.12
	④	1,379	100	627	1,074	77.88	305	12.12
	⑤	342	100	56	327	95.61	15	4.39
	⑥	387	100	1,185	320	82.69	67	17.31
	⑦	51	100	93	46	90.20	5	9.80
	⑧	35	100	79	35	100.00	0	0.00
	⑨	4	100	13	3	75.00	1	25.00
	③～⑥	571	100	119	172	30.12	399	69.88
	計	10,580	100	8,700	8,008	75.69	2,572	24.31
2 トレンチⅡ d -76㉕	一括	151	100	272	102	67.55	49	32.45
2 トレンチⅡ d -76㉖	一括	37	100	31	22	59.46	15	40.55
2 トレンチⅡ d -86 (13号貝ブロック)	①	751	100	829	570	75.90	181	24.10
	②	716	100	423	442	61.73	274	38.27
	計	1,467	100	1,252	1,012	68.98	455	31.02
4 トレンチⅢ d -26～36 (39号貝ブロック)	①	2,581	100	5,726	2,112	81.83	469	18.17
	②	1,732	100	2,964	1,182	68.24	550	31.76
	③	914	100	334	594	64.99	320	35.01
	④	2,597	100	5,892	1,937	74.59	660	25.41
	⑤	1,408	100	3,236	1,155	80.03	253	17.97
	⑥	1,000	100	2,704	821	82.10	179	17.90
	⑦	1,816	100	3,768	1,411	77.70	405	22.30
	⑧	1,225	100	3,406	992	80.98	233	19.02
	計	13,273	100	28,030	10,204	76.88	3,069	23.12
合 計		33,555	100	47,139	25,217	75.15	8,338	24.85

検出された貝種は26種に及び(フジツボ含む)、3種の陸産貝と2種の汽水、淡水系貝が認められたが、大多数は海洋系の食用貝である。このうち最も多量に検出された貝は、イボキサゴであり、ハマグリ、アサリと続いている。

これらの検出された貝は、1個体として数えられるものを正貝とし、他を破碎貝として分類したものが第15表である。またそれによって得られた正貝における海洋系・淡水系の割合を第16表にまとめた。

また、貝ブロック中から検出された魚骨・獣骨を第17・18表にそれぞれまとめた。貝ブロックそのものが、あまり大型ではないにもかかわらず、表に記載された魚・獣骨が検出されてい

第16表 山見塚遺跡A地点検出正貝総重量における海水・淡水貝の割合

(汽水性貝は淡水系貝類に含む)

グ リ ッ ド	層位	正 貝 総 量			海 水 系			淡 水 系		
		個	g	%	個	g	%	個	g	%
2 トレンチⅡ d-36 (11号貝ブロック)	①	4,286	2,948	100	4,286	2,948	100			
	②	1,675	983	100	1,675	983	100	0		
	③	1,725	1,029	100	1,725	1,029	100	0		
	④	1,167	909	100	1,166	908	99.89	1	1	0.11
	計	8,853	5,869	100	8,852	5,868	99.89	1	1	0.02
2 トレンチⅡ d-76a (12号貝ブロック)	①	4,223	4,862	100	4,028	4,707	96.81	195	155	3.19
	②	1,092	392	100	188	389	99.23	4	3	0.77
	③	1,214	777	100	1,128	704	90.60	86	73	9.40
	④	627	1,074	100	576	1,024	95.34	51	50	4.66
	⑤	56	327	100	56	327	100	0		
	⑥	1,185	320	100	1,185	310	100	0		
	⑦	93	46	100	87	43	100	6	3	6.52
	⑧	79	35	100	78	35	100	1	0	
	⑨	12	3	100	12	3	100	0		
	③～⑥	119	172	100	110	116	99.89	9	6	3.49
	計	8,700	8,008	100	8,348	7,718	99.98	352	290	3.62
2 トレンチⅡ d-76b		273	102	100	273	102	100	0		
2 トレンチⅡ d-76c		31	22	100	31	22	100	0		
2 トレンチⅡ d-86 (13号貝ブロック)	①	829	570	100	827	570	100	0		
	②	423	442	100	420	441	99.77	3	1	0.23
	計	1,252	1,012	100	1,247	1,011	99.90	3	1	0.10
4 トレンチⅢ d-26～36 (39号貝ブロック)	①	5,726	2,112	100	5,724	2,112	100	2	0	0
	②	2,964	1,182	100	2,963	1,182	100	1	0	0
	③	334	595	100	333	594	100	1	0	0
	④	5,892	1,937	100	5,891	1,937	100	1	0	0
	⑤	3,236	1,155	100	3,236	1,155	100	0		
	⑥	2,704	821	100	2,707	821	100	0		
	⑦	3,768	1,411	100	3,764	1,408	99.79	4	3	0.21
	⑧	3,406	992	100	3,406	992	100	0		
	計	28,030	10,204	100	28,021	10,201	99.97	9	3	0.03
合 計		47,139	25,217	100	46,772	24,922	98.83	365	295	1.17

る。

第19表は、サンプリング中から得られた全貝種の層位ごとにおける割合の一覧表である。これによれば、イボキサゴ、アサリ、ハマグリ等が最も多く採集されている様子が窺われる。また、オカチョウジ等の陸産貝は、食用としていたものではなく、偶然に混入してしまったものであろう。また食用であるにもかかわらず、ヤマトシジミなどの検出例が極めて少ないことは注目すべきことであろう。

これらの検出された貝の生息環境を第20表にまとめた。いずれも比較的入手しやすい場所に

第17表 山見塚遺跡A地点検出魚骨一覧表

グ リ ッ ド	層位	# mm	魚 骨					魚骨計
			タイ類歯	鰭棘など	椎 骨	楯 鱗	その他(タイ類方骨片)	
2 トレンチ II d -36 (11号貝ブロック)	①	4		3				13
		2		10				
	③	1		2				2
	④	1		1				1
	計			16				16
2 トレンチ II d -76a (12号貝ブロック)	①	10			タイ尾骨 1		1	22
		4						
		2	タイ臼歯 2	4			3	
		1	犬歯状 1	6			4	
	②	2	タイ臼歯 1					1
	③	4		1			24	37
		2		5				
		1		7				
	④	2				アジゼンゴ1	2	8
		1		5				
計	⑤	2		6				9
		1		3				
	③ ~⑥	4			1			4
		1					3	
			4	37	2	1	37	81
2 トレンチ II d -76b		1	タイ臼歯 1	1				2
2 トレンチ II d -86 (13号貝ブロック)	①	2	犬歯状 2	11	ボラ類? 1			15
		1	臼歯状 1					
	②	2	臼歯状 1		イワシ類? 1			2
計			4	11	2			17
4 トレンチ III d -26~36 (39号貝ブロック)	①	2	臼歯 3	8				22
		1	臼歯 1	8	ボラ類? 1		1	
	②	4						15
		2			不明 1		6	
		1	2	6				
	③	4					クロダイ左前上顎 1	7
		2	臼歯 1	4	不明 1			
		1						
	④	4					クロダイ腎臓血管間棘 1	20
		2	犬歯状 2				3	
		1	臼歯状 1	12	不明 1			
	⑤	2		1				9
		1	犬歯 1	6				
			臼歯 1					
計	⑥	2		4			9	14
		1	臼歯 1					
	⑦	2		4				14
		1	臼歯 1	9				
	⑧	4					5	
合 計								241
			17	62	4		42	125
			26	127	8	1	79	241

第18表 山見塚遺跡A地点検出獣骨一覧表

グ リ ッ ド	層位	# mm	獣 骨			合計
			タヌキ後頭類	タヌキ 歯	イノシシ中節骨	不 明
2 トレンチ II d-36	①	4				不明 1 1
2 トレンチ II d-76a	①	10	1			イノシシ? 1 2
	④	10			1	1
	⑥	4				不明焼骨 1 1
	⑦	2				不明 1 1
	計		1		1	3 5
2 トレンチ II d-86	①	10				イノシシ? 1 1
4 トレンチ III d-26~36	①	10				不明焼骨 5 5
	②	4		1		1
	③	4				不明焼骨 3 3
	④	10				不明 2 2
	⑥	10				イノシシ? 指焼骨 1 シカ イノシシ? 破片 2 不明 1 4
	⑦	4				不明 2 2
	計			1		16 17
合 計			1	1	1	21 24

生息している貝類である。これら一連の表から、山見塚遺跡A地点北側に接して存在する山見塚貝塚も、本遺跡検出のサンプリング貝類と類似するものであろうということが推定されよう。

第20表 山見塚遺跡A地点検出貝類とその生息環境一覧表

No.	種 名	科	分 布	高度・深度	環境・棲処	食用	備 考
☆腹足綱 ☆前鰓亜綱							
原 始 腹 足 目							
1	ス ガ イ	リュウテンサザエ科	本州以南	潮線内外	外洋に面した岩礁	○	
17	イボキサゴ成	ニシキウズガイ科	北海道以南	潮間帯～10m	内湾中央部の細砂～砂底	○	
18	イボキサゴ幼	〃	〃	〃	〃		
中 腹 足 目							
2	タ マ キ ビ	タ マ キ ビ 科	日本各地	潮間帯の高潮線付近	岩礁底	○	
3	ウ ミ ニ ナ	ウ ミ ニ ナ 科	日本各地	潮間帯	内湾の砂底～岩上	○	
4	ツ メ タ ガ イ	タ マ ガ イ 科	北海道以南	潮間帯～10m	内湾の砂泥底	○	
26	カ ワ ニ ナ	カ ワ ニ ナ 科	北海道南部以南各地		河川、湖沼	○	
新 腹 足 目							
5	ア カ ニ シ	アツキガイ科	北海道以南	潮間帯～20m	内湾の砂泥底	○	
6	ア ラ ム シ ロ	ムシロガイ科	北海道南部以南	潮間帯～10m	内湾の砂泥底	○	
21	バ イ	エゾバイ科	北海道南部～九州	潮間帯10～20m	泥底、砂底	○	
☆斧足綱（2枚貝類）							
翼 形 目							
7	サルボウ	フネガイ科	東京湾以南	潮間帯下～10m	内湾の砂底	○	
8	マ ガ キ	イタボガキ科	日本各地	潮間帯	塩度の低い潮間帯	○	
異 歯 目							
9	カガミガイ	マルスグレガイ科	北海道以南	潮間帯～10m	砂泥底	○	
10	オキシジミ	マルスグレガイ科	本州以南	潮間帯	内湾、内湾奥の泥底	○	
11	アサリ	マルスグレガイ科	日本各地	潮間帯～10m	淡水の影響のある砂泥底	○	
12	ハマグリ	マルスグレガイ科	北海道南部～九州	潮間帯	内湾にいたる所の河口に近い泥底	○	
13	バカガイ	マルスグレガイ科	北海道以南	潮間帯下～10m	内湾の砂泥底	○	
14	シオフキ	マルスグレガイ科	房総半島以南	潮間帯	内湾の砂泥の干潟	○	
15	マテガイ	マテガイ科	北海道南部以南の各地	潮間帯	内海砂泥地に深い楕円形の穴の中	○	
23	ヤマトシジミ	シジミガイ科	日本各地	汽水	海水の影響のある河口	○	
無 面 目							
16	オオノ貝	オオノガイ科	日本各地	潮間帯	内湾、内湾奥の泥底	○	
20	ナミマガシワ	ナミマガシワ科	北海道以南	潮間帯	岩礁	○	
☆陸産貝							
直 輸 尿 管 亜 目							
22	キセルガイモドキ	キセルガイモドキ科	北海道以南		陸産貝	×	
屈 曲 輸 尿 管 亜 目							
24	ホソオカチョウジ	オカチキレガイ科	北海道以南		陸産貝（原野）	×	
25	オカチョウジ	オカチキレガイ科	日本各地		陸産貝（原野）		
☆甲殻類							
蔓 脚 目							
19	フジツボ	フジツボ科	日本各地		岩礁、船底	×	

第21表 山見塚遺跡出土遺物一覧表

トレンチNo (遺構No)	早期		前期	中期		後期		(後期) その他	計	石斧	石皿	石鏡	磨石	敲き石	剥片	礫	その他	計	合計
	燃系文系	条痕文系	黒浜式	諸磯式	阿玉台式	加曾利E式	堀之内式	加曾利B式											
1							952		1,521	2,473	1	1	1	1	2	209		1	2,688
2 (11, 12, 13, 42)							1,263		4,283	5,546	2	4	4	1	3	284	3 (性格不明)		5,843
3 (27, 28, 29, 54)							730		2,708	3,438	2	1	1		7	252		1	3,702
4 (21, 44, 45, 46, 47, 48)							2,368		5,521	7,889	2		6	13	7	416	3 (軽石)	3	8,339
5 (20, 22, 38, 40)							2,162		2,826	4,988	3	5	1	4	1	196			5,199
6 (18, 22, 23, 41)	2						503		1,180	1,685	1	1		1		98			1,786
7 (24, 25)				1			94		233	328	1	1	1		1	37			368
8 (25, 31)						4	15 (I・II)	3	62	84	1					18		19	103
9 (32)			2				11		2	15						3		3	18
10 (30)									11	11								0	11
11 (30, 34)								1	3	4					1	1	1	3	7
12										0							1	1	1
13	1				6			1	7	15			1	1		45		47	62
14										0						20		20	20
15					6		5		29	40						55		55	95
16									1	1						13		13	14
17				5	1		2	6	26	40	2				1	20		23	63
18 (14)		10	1		1	11	53		176	242						279	1	280	522
19	8			1		2	22		48	81					1			1	82
20					2		5		47	54						18		18	72
21			1			5	83		126	215						13		13	228
22					2		40		95	137						92		92	229

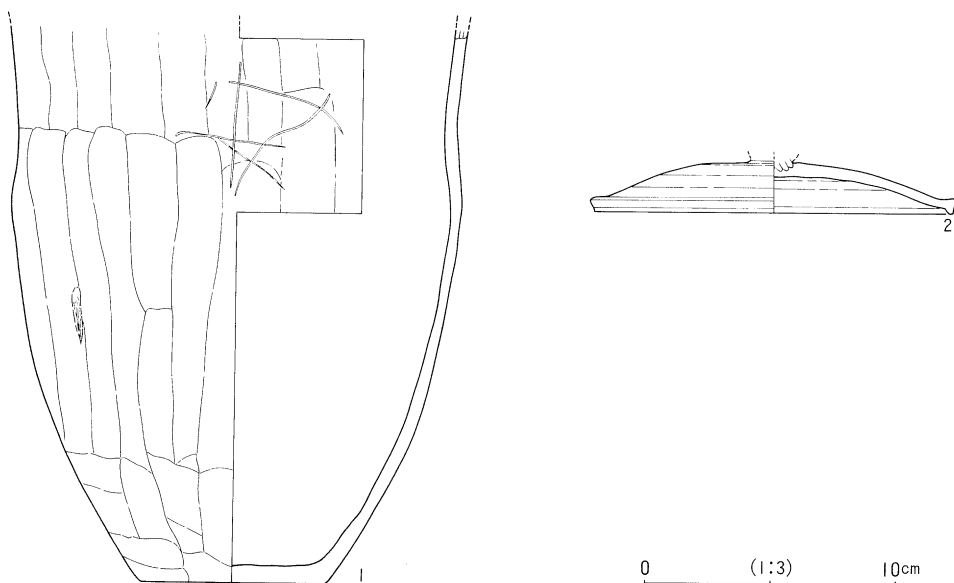
トレンチNo (遺構No)	早期		前期	中期		後期		(後期) その他	計	石斧	石皿	石鏃	磨石	敲き石	剥片	礫	その他	底石	計	合計
	撫糸文系	条痕文系	黒浜式	阿玉台式	加曽利E式	堀之内式	加曽利B式													
23				1		85		247	333							21			21	354
24				1	1	70		255	327										0	327
25 (10)	7					118		1,114	1,240				2		1	47	1		51	1,291
26 (15)						20		55	75							7			7	82
27 (16)						227		760	987							28			28	1,015
28 (17)								534	534							29			29	563
29 (19)						228		476	704	1	3	1				39			44	748
30 (43)	2					40		115	157							47			47	204
31 (2, 49abc)						345		811	1,156							97			97	1,253
32 (2)				2		110		1,004	1,116		1								1	1,117
33				1		168		987	1,156				1			82			83	1,239
34 (8)						144		1,148	1,292							53			53	1,345
35 (5)						104		580	684							31			31	715
36 (30)						257		896	1,153							173			173	1,326
37			1			180	2	524	707										0	707
38 (33)					1	40		85	126							26			26	152
39 (53)						394		1,035	1,433		1	1				90			92	1,525
40						89		182	271							33			33	304
41						89		280	369		1					23			24	393
42						45		111	156							21			21	177
43 (5)						20		115	135							27			27	162
44						13		46	59							4			4	63
45						26		129	155										0	155
46						39		116	155							27			27	182

トレンチ No (遺構No)	早期		前期	中期	後期	(晩期 その他)	計	石斧	石皿	石鏃	磨石	戴き石	剝片 (黒曜石)	礫 その他	砥石	計	合計
	燃糸文系	条根文系	黒浜式	阿玉台式	加曾利E式 堀之内式	加曾利B式											
47					155		865				2		1	79		82	947
48 (1)					82		490	2	2					50	1	55	545
49				2	320		1,937		1				1 (黒曜石)	213		215	2,475
50 (1)				1	38		289							28		28	356
51 (35)					131		570							69 (黒曜石)		70	771
52 (52)					165		222				1			54		55	442
53					72		174							19		19	265
54					12		32							2		2	46
55					12		32							3		3	47
56 (6)					25 (6)		79 (16)							9 (3)		9	113 (25)
57 (3)							0							1		1	1
58 (3)							5									0	5
59					32		132							11		11	175
60 (4)					4		11									0	15
61					38		117							12		12	167
62					44		107							9		9	160
63 (36)					104		279				1			23		24	407
64				1	170		432		1							1	615
65					201		489							37		37	727
66 (53)					590		1,199	1	1		3		1	52		58	1,847
67					6		14							1		1	21
68 (37)					54	18	83							26		26	181
69					21		49							10		10	80
70					71		128							13		13	212

トレンチ No (遺構No.)	早 期 撫糸文系	前 期 黒斑式	期 諸磯式	中 期 阿玉台式	後 期 加曾利E式	期 加曾利B式	晩期	(後期) その他	計	石斧	石皿	石鏃	磨石	敲き石	剥片	礫	その他	砥石	計	合 計	
71 (9)					116			411	527							20			20	547	
72					133			312	445							15			15	460	
73 (19)					72			120	192							3			3	195	
74 (16)					89			197	286	1									1	287	
75 (7、33)					81			319	400							45			45	445	
76					161			418	579	1						28			29	608	
77					2			1	3							3			3	6	
78					2			6	8							2			2	10	
79					3			9	12	1						1			2	14	
8遺構					8			22	30										0	30	
10遺構					10			44	54										0	54	
26遺構					8			30	38							3			3	41	
27遺構								1	1										0	1	
28遺構								3	3							3			3	6	
29遺構								1	1							1			1	2	
31遺構					1			2	3										0	3	
33遺構								1	1										0	1	
34遺構								7	7							2			2	9	
35遺構					12			39	51							2			2	53	
36遺構					5			23	28							9			9	37	
38遺構					1			1	1										0	1	
39遺構					65			86	151							5			5	156	
42遺構					17			11	28							5			5	33	
43遺構					7			9	16							2			2	18	
45遺構					6			16	22	1			1						2	24	
表採1								105	155							39			39	194	
表採2					6			27	39							3			3	42	
合 計	20	10	5	15	24	14,361	25	18	40,228	54,726	11	29	2	31	18	27	3,887	12	5	4,022	58,748

B地点

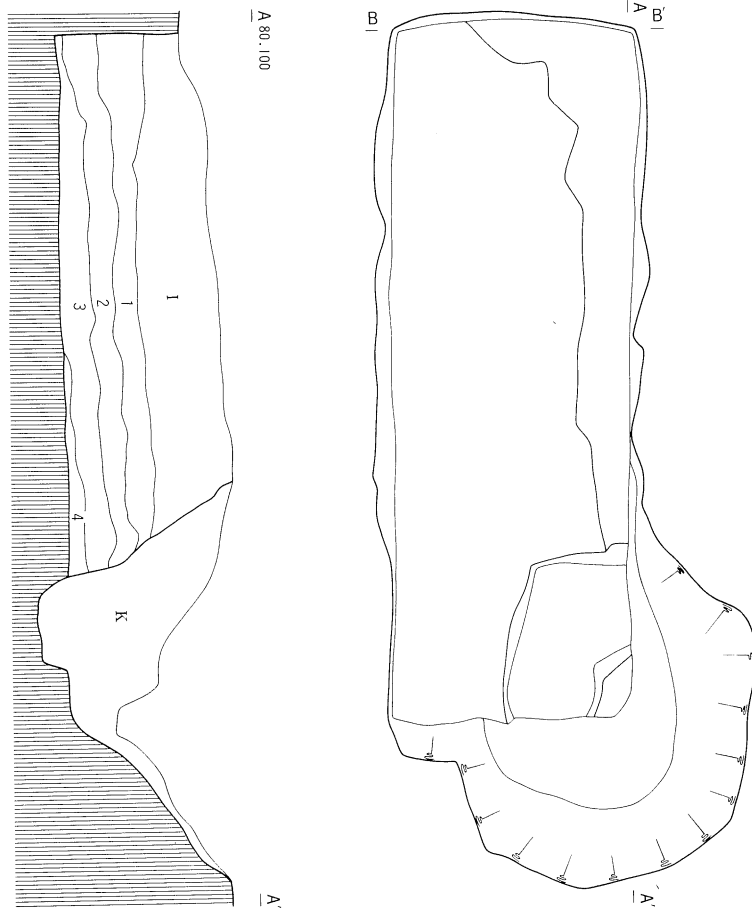
B地点より検出された改葬系区画墓を図示した。遺構は133トレンチの北・東側にL字状を呈して検出されている。トレンチ南側はソフトローム層中に達する攪乱により大きく陥没していた。この攪乱が最近のものであるということは、攪乱穴の周辺に山積みになった排土によって察知することができ、その排土中から検出された遺物が第150図1の土師器甕型土器と2の須恵器蓋である。1は胴部中央に意味不明の線刻が認められ、2の蓋と一緒に検出されていることから、本遺構周溝内に納められた蔵骨器であろうということが推定される。(図版40)



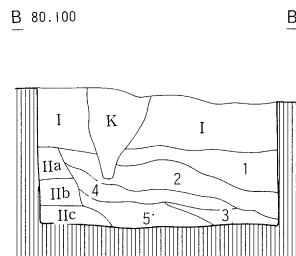
第150図 B地点133トレンチ付近出土遺物実測図

第22表 B地点133トレンチ付近出土遺物観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	土師器 甕 13	—	7.4	—	良好	茶褐色	密	外 ヘラケズリ後線刻 内 ヘラナデ	外面中央部に意味不明の線刻。胎土に茶褐色微砂粒含み、全体的に茶色味強い。
2	須恵器 蓋	14.3	—	—	良好	青灰色	密	ロクロ整形	紐部分のみ欠存している。胎土は永田・不入庵の製品に類似する。



- I 現表土
 IIa 黒褐色 有機質土層
 IIb 茶褐色 新期テフラ層
 IIc 極暗褐色 有機質土層
 1 暗褐色 茶褐色土を斑点状に含む
 2 極暗褐色 茶褐色土を斑点状に混入するが、有機質性強い
 3 暗褐色 ローム粒を少量含むが有機質性も強い
 4 黒褐色 有機質性が極めて強い
 5 暗褐色 新期テフラ崩壊土を部分的に含む
 6 黒褐色 ローム粒若干含むが有機質性も強いやや締る



0 (1:60) 2m

第151図 B地点133トレンチ実測図

第5章 ま と め

最後に外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡の調査によって得られた成果についてまとめておきたい。

外迎山遺跡

検出された遺構の大部分は、古墳時代終末～奈良・平安時代にかけての所謂「墳墓」群であり、また当期に比定される住居跡等の生活痕跡がまったく検出されなかったことは、この遺跡の存在する舌状台地の開墾時において、当初から墓域としての土地占有を目的としていたことを物語っている^(註1)。

古墳と改葬系区画墓の区別は、「古墳」そのものの概念を含めて、極めて大きな問題でもあるが、最近の発掘成果や諸氏の論考によって次第に明らかにされつつあるも、いまだ大きな問題を抱えている^(註2)。第2章IIの冒頭でもふれたこの問題について、以後若干の私見を述べる。

まず古墳として報告した10、11号遺構は、共に内部施設に木棺直葬の形態を採用している^(註3)。盛土の存在した10号遺構の墓壇構築は、封土をある程度盛った後に行なわれている^(註4)。また検出された遺物から、8世紀第1四半世紀前後の時期に位置づけられよう。また遺跡の所在する舌状台地のほぼ中央に位置していることから、当地の開墾に何らかの影響を与えている古墳、換言すれば、当地の開墾はこの古墳構築が主な起因ともなっているのではないかと考えられることが指摘されよう。

次に改葬系区画墓とした12～39号遺構のうち、12・13号遺構は火葬系施設と考えられる内部主体を伴っており^(註5)、また27号遺構は土壇墓^(註6)、14・18・22・24～28・30・36・37号遺構等にはそれぞれ小土壇を、また29号遺構にも小土壇が伴っていた可能性が考えられることから^(註7)、内部施設を検出できなかった他の改葬系区画墓も含めて、これら一連の遺構は古墳の主体たる埋葬施設を放棄し、新たな埋葬施設の採用へと推移しているものと考えられる^(註8)。

次に40号遺構以下に認められた火葬墓であるが、埋葬状況の復元は40号遺構説明の中ですでに報告している。これらの検出状況を考えあわせると、1の甕口辺部は意識的に打ち欠いて埋葬したものではなく、当初から復元図どおり埋葬されていたものと考えられる。また蔵骨器底面が掘り方底面に達していないことから、当初から木製等の外容器で覆われていた可能性が強く、おそらく1の甕型土器は外容器崩壊の際、上部から落下してきた土圧によって2の甕型土器底部付近に達してしまったものとする。したがって埋葬時の器高は約53cm前後に復元が可能であり、さらに外容器の寸法を加味した場合、推定60cm前後の器高となるであろう。また本

遺構が基本土層Ⅱ a 層下面より検出されたことから、Ⅱ a 層約20cm、現表土約20cmを加えても約20cm程度は現地表面でもある現表土層からはみ出してしまう。さらに当時の地表面は、およそ基本土層Ⅱ a 層最上面付近と考えられることから、確実に旧表土内には納まらなかったであろう。このことは、当遺構が少なくとも埋葬時においては封土が存在していたものと推定される論拠の一つとなるであろう。また掘り込み面も比較的浅く、一連の内部施設を検出することが出来なかった改葬系区画墓にも、この様に極めて旧表土に近い位置に埋葬施設が存在していた可能性が考えられる。また当遺跡より直線距離にして約500m北西の位置に存在する金出台遺跡より検出された火葬墓には、高さ2mに達する封土があったと報告されており^(註9)、おそらく当遺跡における他の火葬墓や、類似施設を伴っていたと考えられる改葬系区画墓にも、若干の盛土が存在していたものと考えられる。

時期的にはどうであろうか。40号遺構からは墓誌等に代表される絶対年代を決定すべく遺物は検出されなかった。しかし蔵骨器として使用された灰釉陶器と推定される埴より9世紀後葉前後の年代感が与えられよう。

以上のことをまとめると、外迎山遺跡は8世紀初頭～9世紀後葉における墓域として考えることができ、墳墓の変遷を考える上で極めて重要な遺跡であるといえよう。

唐沢遺跡

対象面積の10%における遺構確認調査のため、極めて全貌は不明瞭ながら、縄文時代晩期に比定される遺物が検出されたことは大きな成果であったと思われる。

これら晩期に比定される資料は、撚糸文系・条痕文系・沈線文系に大別されるものの、現地上面で表採されたものが大部分を占め、遺構に伴うものは皆無であったのが惜しまれる。おそらく最も多く採取されたⅠ19グリッド付近に、当期の集落等の存在が予想されよう。

山見塚遺跡

A地点における基本土層Ⅱ b 層以下の遺物包含層は、排土量よりも土器量の方が多いほど、極めて多量の遺物が検出された。これら包含層及び遺構覆土内から検出された遺物の大部分は、縄文時代後期堀之内期に比定される資料であり、当期の貝塚を伴う環状集落跡の検出は、縄文時代研究に新たな資料を提供したことと思われる。またA・B地点において検出された墳墓群は、外迎山遺跡検出例とあわせ、周辺地域における墳墓群のあり方をとらえる上で極めて重要なことである。

また、A地点5トレンチ北側に位置する20号遺構周溝内より須恵器甕型土器が、B地点133トレンチ56号遺構より蔵骨器としての使用されたと考えられる須恵器蓋と土師器の甕が検出され

ている。これら須恵器の年代は8世紀中葉以降を中心とした時期に比定されるものであり、またB地点検出の土師器甕には意味不明の線刻が施されていることなど、極めて検出遺物の少ない当期の墳墓群に新たな資料が付け加えられたことは、当期の墳墓研究にとって極めて重要なことである。

最後に

外迎山遺跡における古墳と所謂方形周溝状遺構の区別は、筆者の浅学菲才のため極めて不十分であり、研究者の多くは反論するところであろう。また方形周溝状遺構という名称を今回改葬系区画墓と仮称したが、よりふさわしい名称を現在模索中である。今後新たな資料が得られることによってこの問題が進展することを願い終稿とする。

註1 外迎山遺跡において検出された古墳時代後期～奈良・平安時代に該当する遺構のすべては、後述するa～cの論考等によって、すべて墳墓と考えられるものである。

後期群集墳や該当期集落跡を伴わずに、8世紀前半以降に突如として墳墓群を形成する現象は、当時の土地制度や墓制のあり方を考える上で極めて重要なことであろう。

a 清藤一順「佐倉市星谷津遺跡」千葉県文化財センター 1978

さらに後述註2 d₁・d₂等により、外迎山遺跡検出44号遺構は墓墳であることは明白である。

b 齊藤 忠「墳墓」『日本史小百科』近藤出版社 1978

同書P36～37の「埋葬・埋骨の際の砂の使用」により、外迎山遺跡検出45号遺構は墓墳であると考えられる。

c 後藤和民「千葉市すすき山遺跡発掘調査報告」『貝塚博物館紀要』5 加曽利貝塚博物館 1974

方形周溝状遺構という名称は同書によって初めて使用される。また「墓墳は伴わないものの、かつては低い墳丘をもち、その中に数体の遺体は浅く埋葬され、一般庶民の家族墓的な存在であった可能性がある。」としている。一般庶民の家族墓等は若干の問題があるにしても、早くも墓としての性格を明示していることは注目される。

d 栗本住弘「千葉市誉田県立コロニー内遺跡」千葉県文化財センター 1976

e 田川 良「生谷」生谷遺跡発掘調査団 1977

註2 「古墳」の概念については、所謂前方後円墳の出現以後に規定的な影響を与えて出現した墓制を「古墳」として理解する説(a)と、弥生時代終末期における首長墓たる墳丘墓も含めて「古墳」とする説(b)がある。しかし、両者とも主体たる埋葬施設は、木棺・石棺・墓壇・石室等を交互に組合わせた形態を採用し、仰臥伸展葬が可能な空間を有することに変わりはなく、歴史時代における終末期古墳の問題も含めることによって、これまでの土器型式論や時代区分論等を基底とする古墳概念論は崩壊しているものと考えている。私見における古墳とは、弥生時代終末期～歴史時代にいたる高塚墳墓のうち、主体たる埋葬施設に墓壇+木・石棺、竪穴式石室+木・石棺、横穴式石室+木・石棺や横口式石室など等に代表される様に、定形化された仰臥伸展葬の空間を有するものと考えている(c)。したがって弥生時代～歴史時代に及ぶ高塚墳墓に採用される埋葬施設の定形化が萌芽と崩壊する時、古墳と他の墓制を分離して考えるべきだと考えている(d)。

a₁ 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓一盾築遺跡をめぐって」『岡山大学法文学部学術紀要』38 1977

a₂ 同 「前方後円墳の成立」『考古論集』1977

a₃ 同 「前方後円墳の時代」岩波書店 1983

a₄ 同 「前方後円墳の成立をめぐる諸問題」『考古学研究』123 1984

a₅ 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』100 1979

a₆ 白石太一郎「墳丘と内部構造」『古墳の知識 I』東京美術考古学シリーズ19 1985

b₁ 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13 1977

- b₂ 石野博信「古墳の発生」『歴史公論』4-3 1978
- b₃ 田中新史「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』77 1984
- c 仰臥伸展葬の埋葬が可能な横穴墓（地下式横穴墓含む）については、古墳の横穴式石室との関連関係から、所謂「古墳」の範疇でとらえている。
- d 歴史時代の墳墓としてとらえられた方形周溝状遺構（改葬系区画墓）に関する論考を列挙する。
- 1 後藤和民 掲載註1 cに同じ
 - 2 金丸 誠「房総半島における方形・円形周溝について」『研究連絡誌』1 千葉県文化財センター 1982
 - 3 川岸良二「方形周溝状遺構研究序説（Ⅰ）」『研究紀要』2 東邦中学校 1982
 - 4 同 「方形周溝状遺構研究序説（Ⅱ）」『研究紀要』3 東邦中学校 1984
 - 5 渡辺修一「『群小区画墓』の終焉期—所謂『方形周溝遺構』をどう見るか—」『研究連絡誌』6 1983
 - 6 同 「『群小区画墓』の終焉期(2)—『方形周溝遺構』における埋葬施設の新例とその検討」『研究連絡誌』14 1985
 - 7 井口 崇「方形周溝状遺構について」『鼻欠遺跡』袖ヶ浦町教育委員会 1984
 - 8 田中新史 掲載註2 b₂に同じ
 - 9 田中新史「古墳時代終末期の地域色—東国の地下式系土壙を中心として」『古代探叢』II 1985
 - 10 浅利幸一「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報』1985

私見における方形周溝状遺構とは、火葬を含む再葬や土壙墓などを内部施設として採用している改葬系区画墓(e)である。ただし現状においてマウンドが検出されないことを根拠に、頭初からマウンドが存在していなかったとは解釈しておらず、大形、小形のものを含めてそれなりの墳丘が存在していたものと考えている(f)。また方台部内に内部施設が検出されないものが多く、大部分は旧表土上面や盛土中に何らかの施設が存在していたものと考えられるが、主体部を流失してしまった古墳との関係も考えて極めて不十分な説明であろう。しかし、古墳とされるコロニー内遺跡004号址は、方台部径7.4mと小形ながら横穴式石室の範疇とされる内部施設を有していることや、天神台遺跡(d₁₀)で浅利氏が指摘する様に、方台部径17m以上のものは埋葬施設棺底を盛土中や旧表中に置くのに対して、一辺15m以下のものは1m以上に達する地山掘り込み墓壙と共に木棺直葬内部施設を検出することなど、方墳の小形化するものに対して埋葬施設が認められる傾向がある。これは、方台部内盛土との関係が左右する現象であろう。すなわち古墳における低墳丘な古墳ほど地山掘り込み墓壙等を採用し、高墳丘な古墳ほど盛土内掘り込み墓壙等を採用しているためであろう。ひるがえって考えれば、これまで方形周溝状遺構とされてきた大型のものは、古墳の範疇に属する可能性があるのに対し(g)、方台部径6~7m程度の小形のものは(大部分の方形周溝状遺構と呼ばれるものはこの類に属する)もはや古墳系の内部施設を採用していないが為に埋葬施設が検出されないものと考えられる(h)。

- e 佐原 真「弥生時代の集落」『考古学研究』100 1979

区画墓の名称は同氏が弥生墳墓と他の墓制と区別するために使用した名称であるが、ここでの改葬系区画墓の名称は火葬を含む改葬を主体とする内部施設を採用する、8世紀前半代以降の墳墓に対する名称であり、弥生墳墓や古墳とは峻別されるものと考えている。

- f 外迎山遺跡、11・12号遺構は地元古老の話によれば重機によって削平される以前は低墳丘が存在していたと言う。

- g 外迎山遺跡12号遺構のごとく、大形のものでもかならずしも古墳の概念でとらえられない場合もある。

- h 浅利幸一氏の御教示によれば、諏訪台遺跡において方台部径6~7m程度のものに地下式改葬墓や地下式土壙墓及び木炭中に火葬骨を含む内部施設が検出されており、特に地下式改葬墓を内部施設として採用する方形周溝状遺構（改葬系区画墓）の最小規模は、方台部径4m以下のものがあるという。

註3 中村恵次「房総古墳論攷」故中村恵次氏著作集刊行会 1978

田中新史 前掲註2 d₉に同じ

両氏が指摘する様に7世紀前半以降を中心とする村田川北岸地域は、横穴式石室や箱式石棺を内部施設に採用する古墳が集中して構築されているのに対して、南岸地域における同タイプを採用する古墳群は、稲荷台・向原・南向原・西谷（北）・根田・諏訪台・山倉の7支群に存在するものの、西谷（北）支群の三基を最多例とする以外の古墳内部施設は、すべて木棺直葬形態であり、明瞭な分布色を示している。この村田川流域南岸に認められる木棺直葬系の内部施設を有する古墳は、さらに南の養老川流域まで及び、少なくともこの地域における古墳の内部施設の主体は木棺直葬系である。

註4 沼沢 豊「石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977

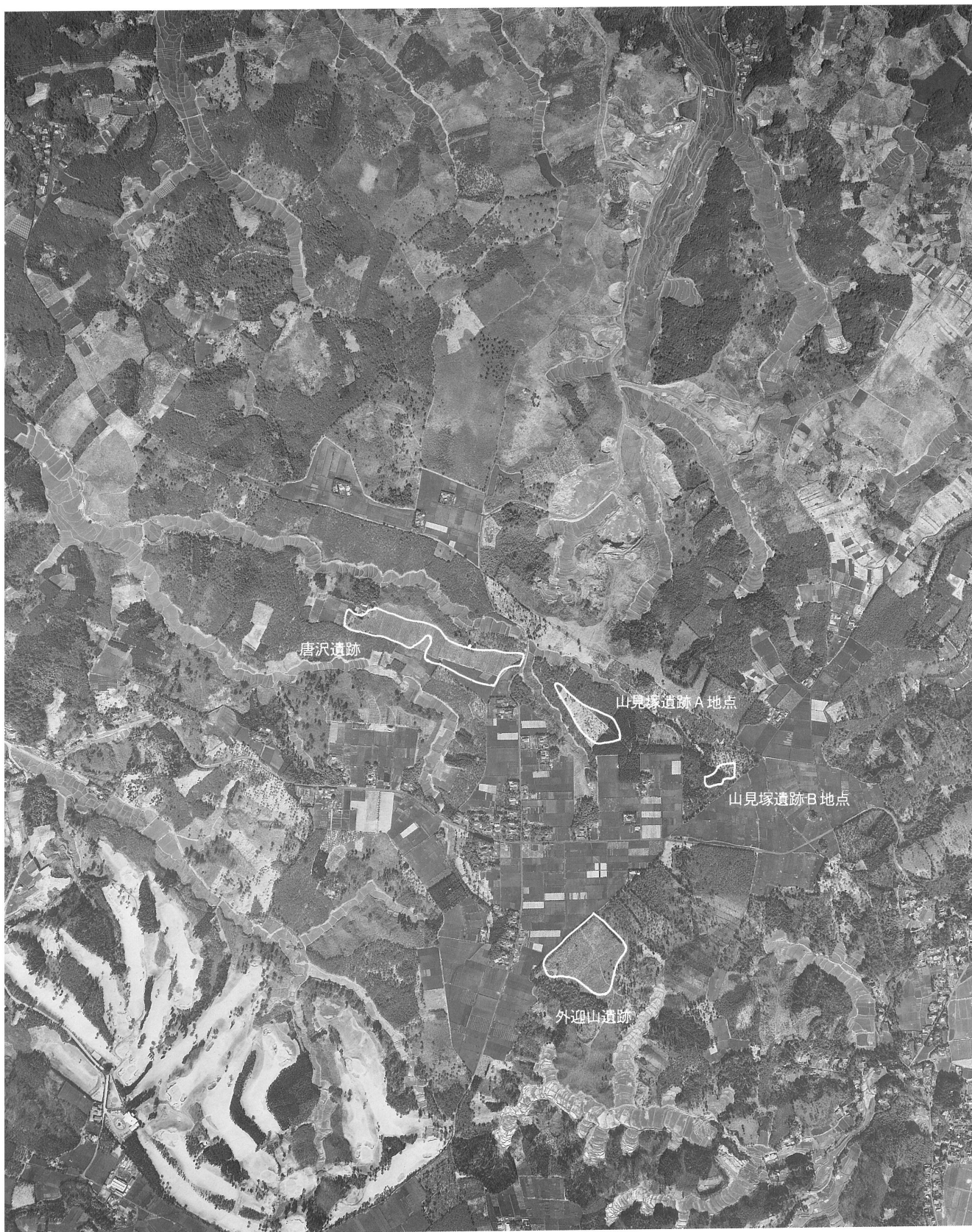
同書によれば、①盛土の途中で木棺を設置し、ひきつづき盛土していく方法として石神2号墳を、②

墳頂部から墓壙を掘り込んでいる例として小田部古墳等の例をあげている。外迎山10号遺構は盛土途中に墓壙を掘り込んでいるため③としておきたい。また②③については、高墳丘のため盛土内に墓壙が納まるものAと、低墳丘のため地山を掘り込んでしまうBタイプの2通りが考えられよう。さらに盛土以前に墓壙を掘り込む④のタイプも想定されよう。

- 註5 井口 崇 前掲註2 d₇に同じ
浅利幸一 前掲註2 d₁₀に同じ
井口 崇 「打越岱遺跡」『君津群市文化財センター年報』 1986
上記の遺跡において改葬系区画墓方台部内中央において火葬施設が検出されている。また打越岱遺跡・004号遺構は、一辺約20mを測る大型の改葬系区画墓である。
- 註6 田所 真「諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報』1985 P31
前掲註2 d₉P441において、改葬系区画墓中央施設として採用された地下式土壇墓は、諏訪台古墳群配置図西端に位置するものである。
- 註7 昭和61年度市原市文化財センターが調査を実施した上原台遺跡において、改葬系区画墓方台部内土壇より、完形の須恵器長頸壺が検出されている。また外迎山遺跡におけるこれら小土壇中より、焼土粒・炭化物・ロームブロックなどが検出されることから、火葬を含む改葬内部施設と考えられる。
- 註8 外迎山遺跡における一つの画期は、11号遺構と12号遺構の間に存在する。11号遺構は木棺直葬内部施設を有するのに対して、12号遺構は火葬施設と考えられる内部施設を有している。また両者は切り合い関係があったかと思われるほど接近して存在し、墳丘規模も近似していることから、12号遺構は11号遺構をかなり意識して構築されたものと考えられる。
- 註9 平野元三郎「上総姉崎町の火葬蔵骨器」『古代』29・30 1958

写真図版





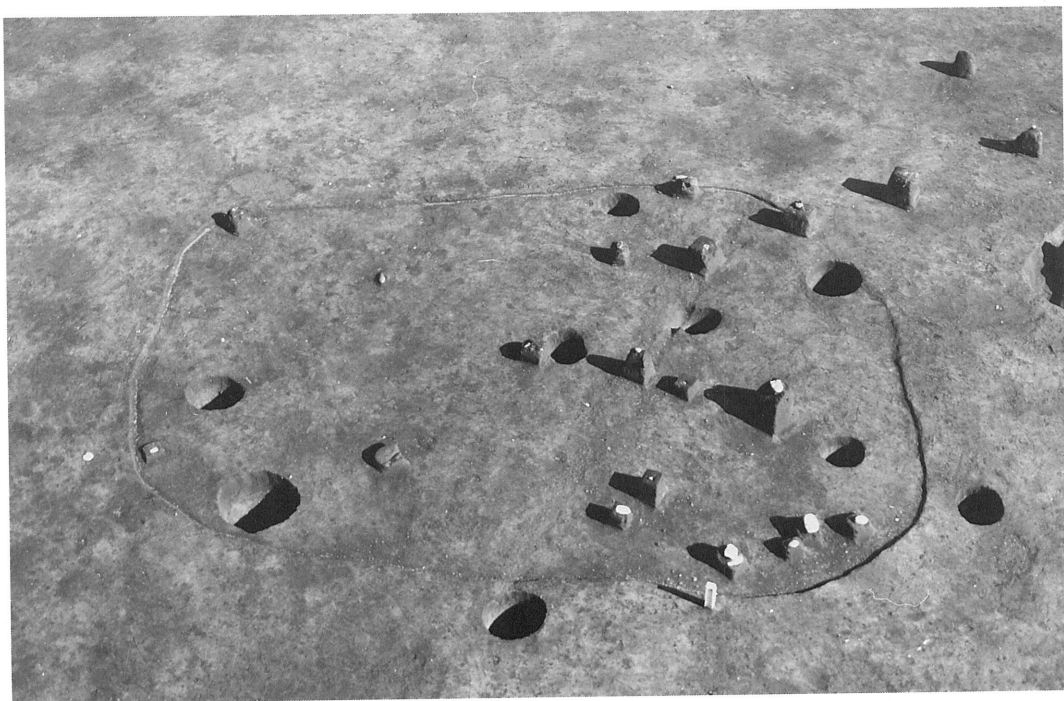
外迎山・唐沢・山見塚遺跡全景



外迎山遺跡全景



外迎山遺跡全景(西側より)



1号遺構全景



2号遺構全景



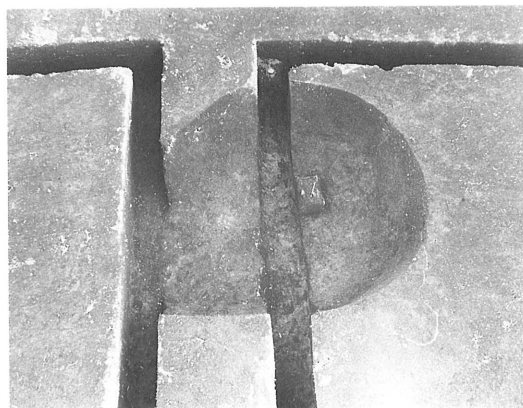
3号遺構全景



4号遺構全景



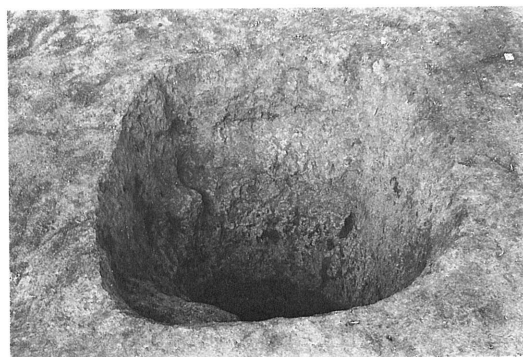
5号遺構全景



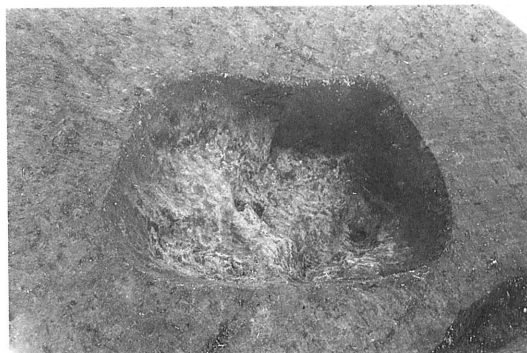
6号遺構全景



7号遺構全景



8号遺構全景



9号遺構全景



10号遺構全景(東側より)



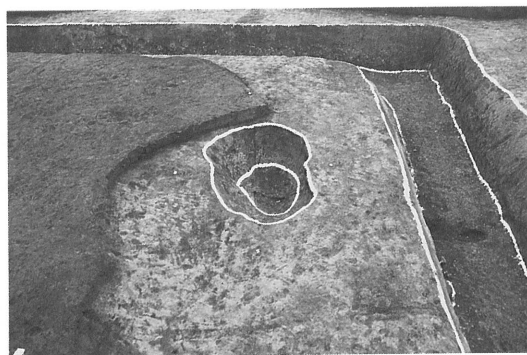
10号遺構主体部



11号遺構全景(南側より)



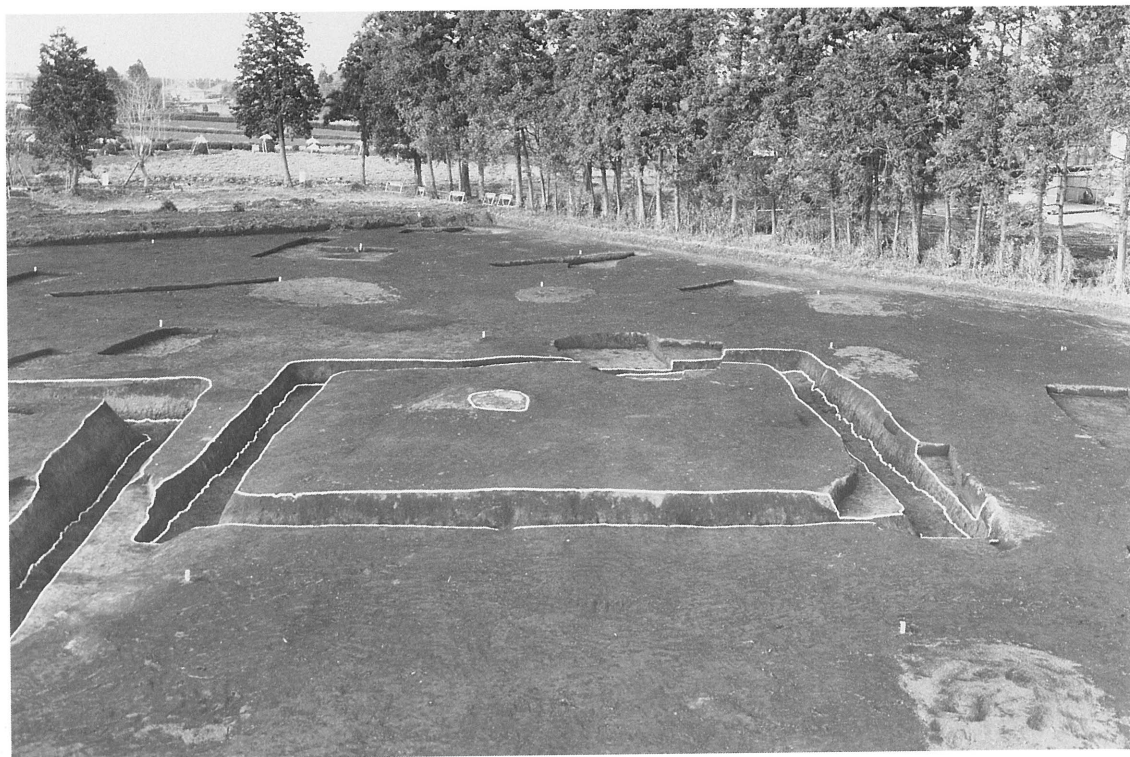
11号遺構主体部(南側より)



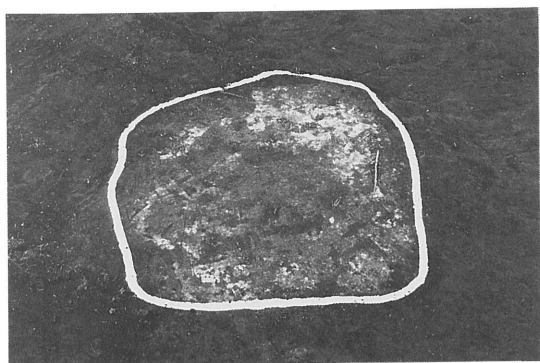
11号遺構内第2土壌(西側より)



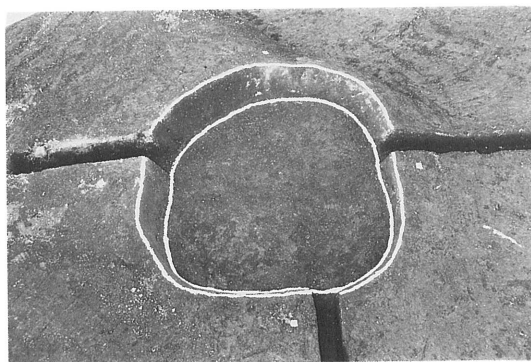
11号遺構主体部完掘状況



12号遺構全景(南側より)



12号遺構主体部検出状況



12号遺構主体部完掘状況



12号遺構東側周溝遺物出土状況



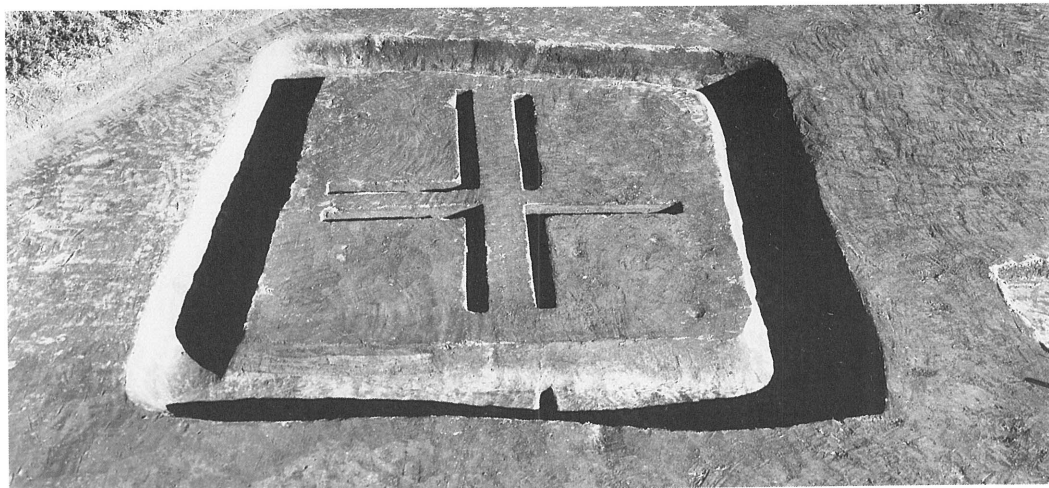
遺物を除去すると土壌が検出された



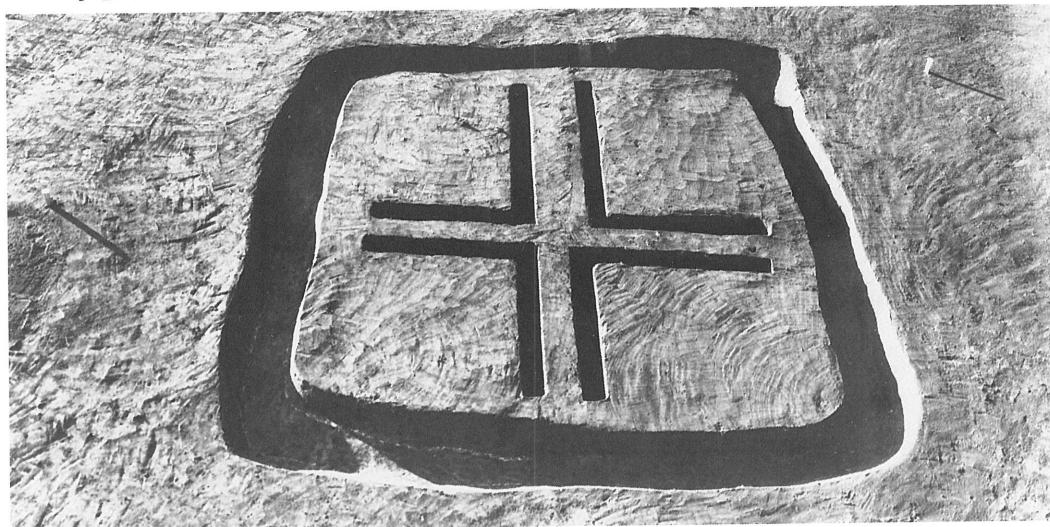
13号遺構全景(西側より)



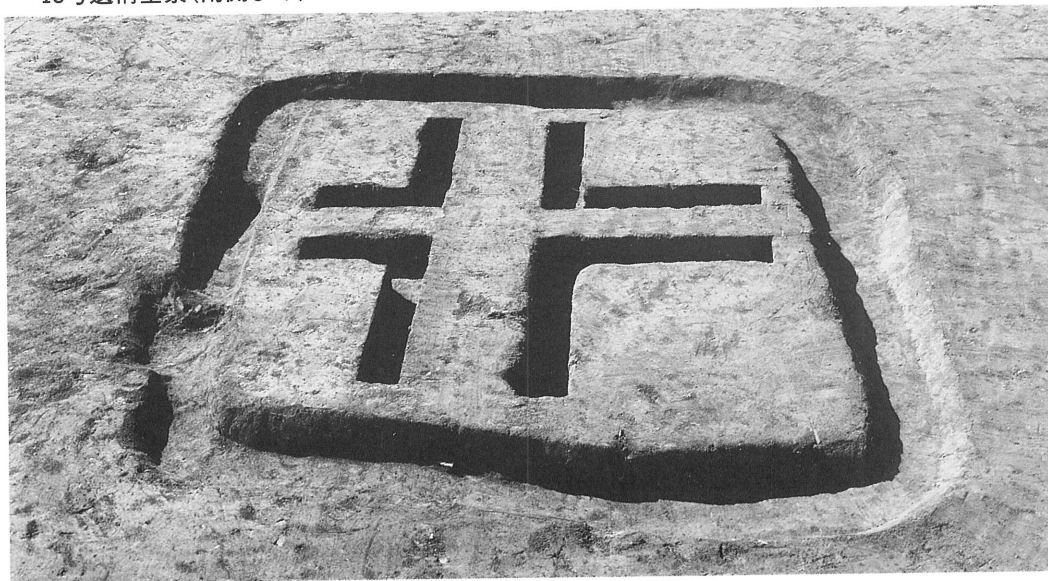
13号遺構主体部 須恵器甕形土器の破片が検出されている



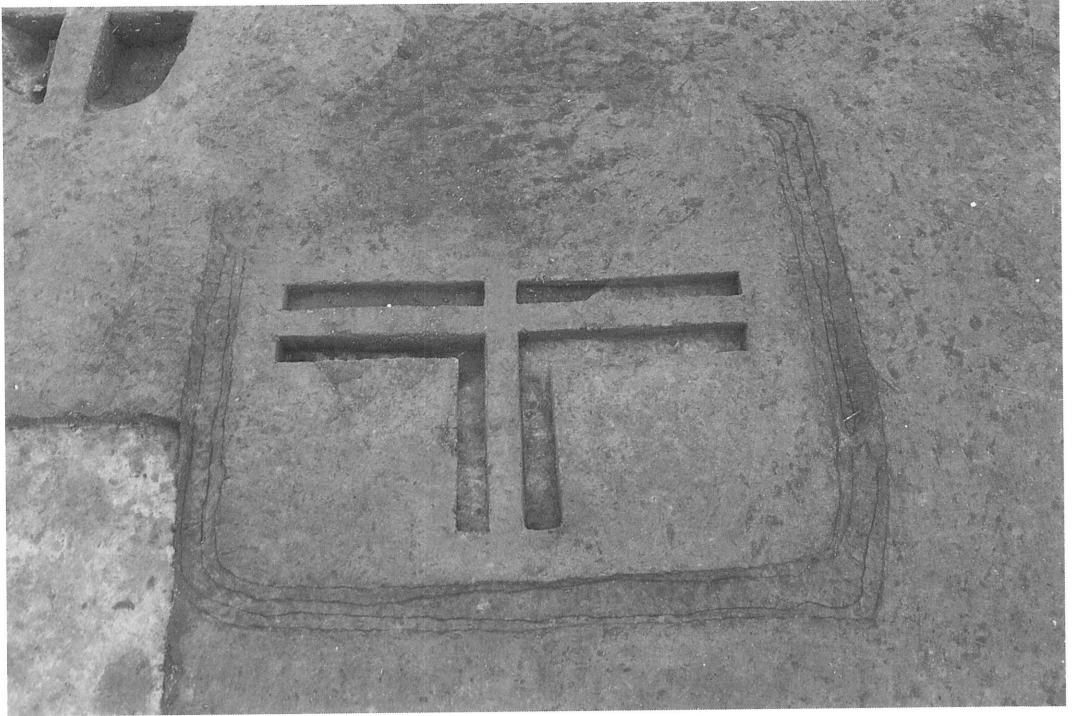
14号遺構全景(南側より) 北側周溝中央部に小土壠が検出されている



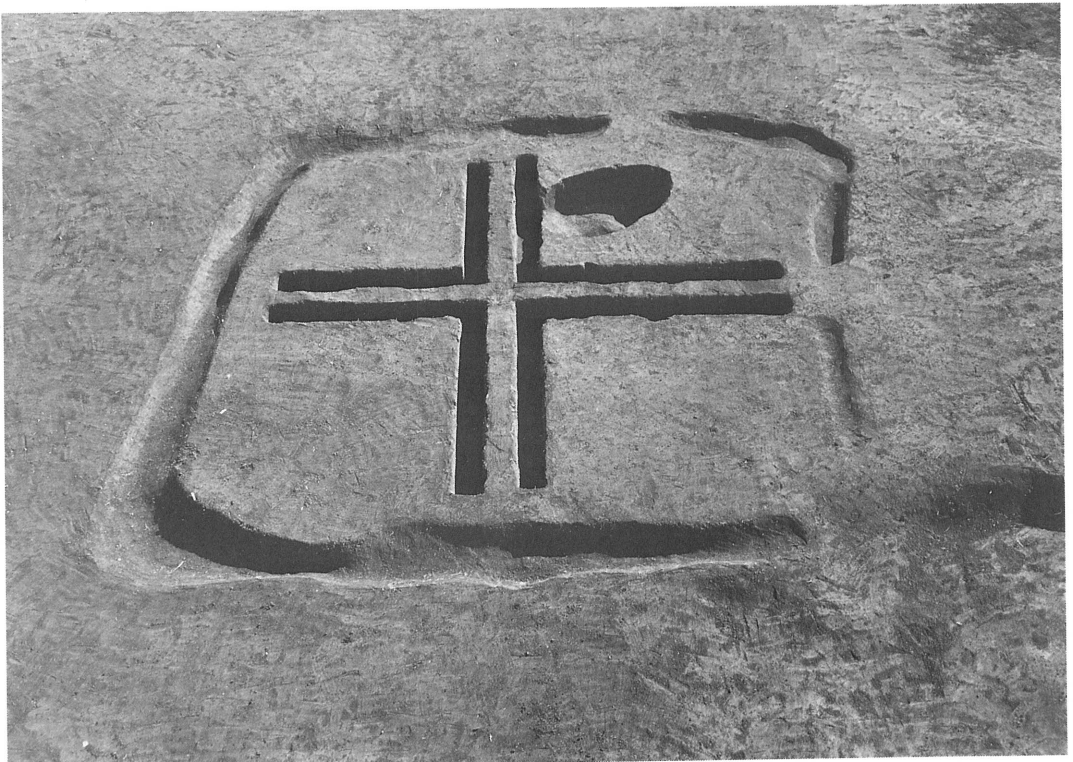
15号遺構全景(南側より)



16号遺構全景(南側より)



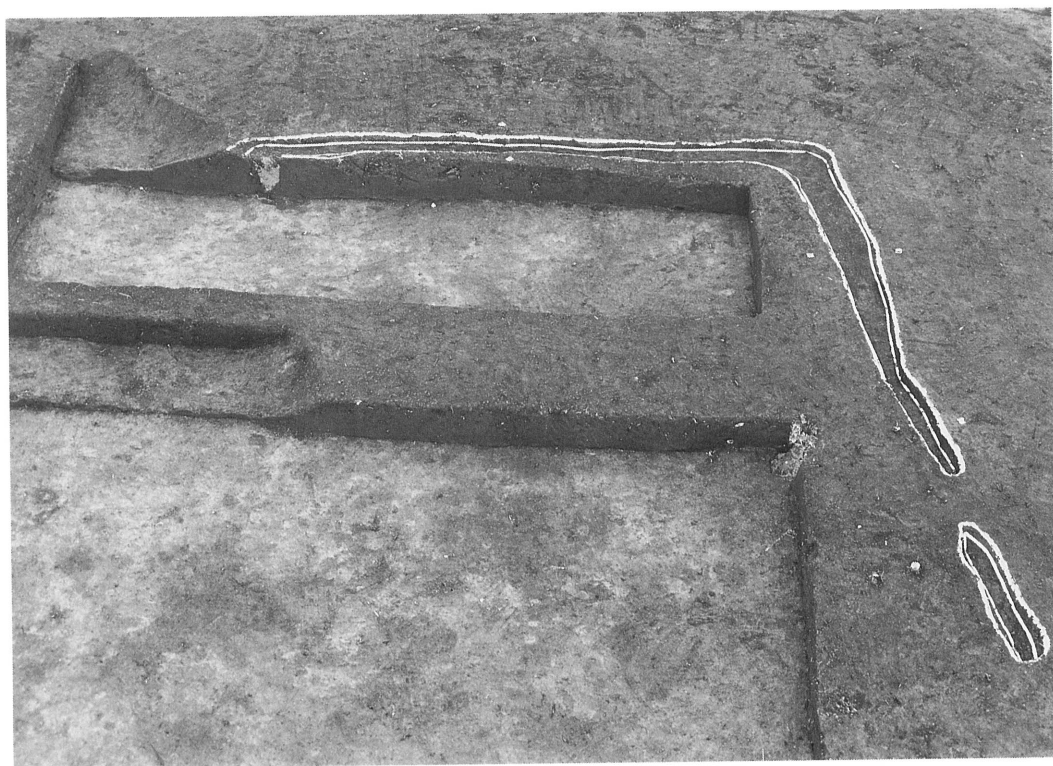
17号遺構全景(北側より)



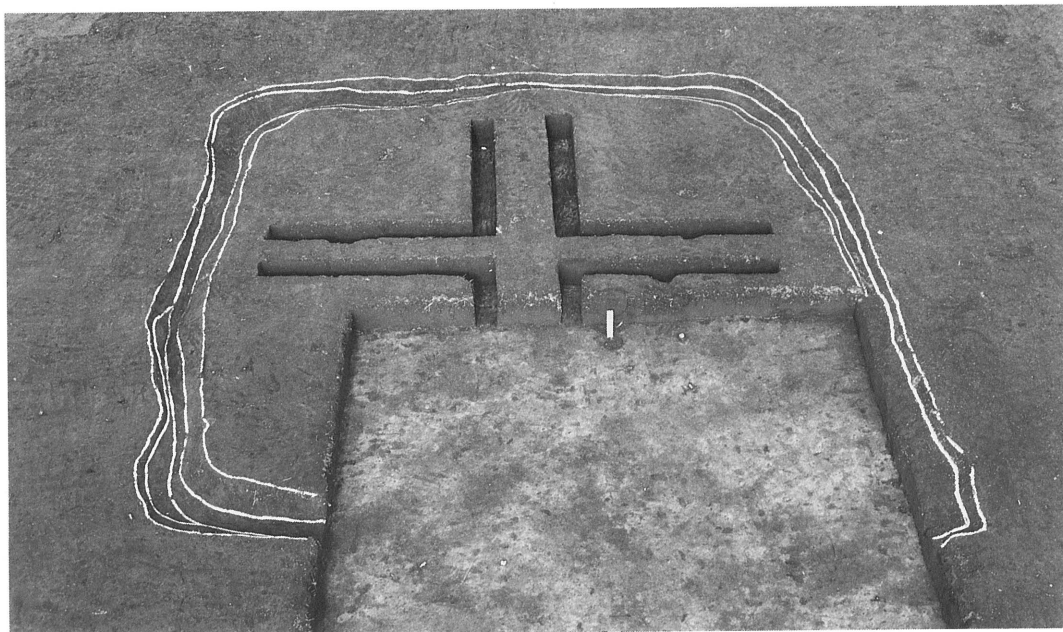
18号遺構全景(北側より) 方台部内に焼土粒を含む小土壌が検出されている



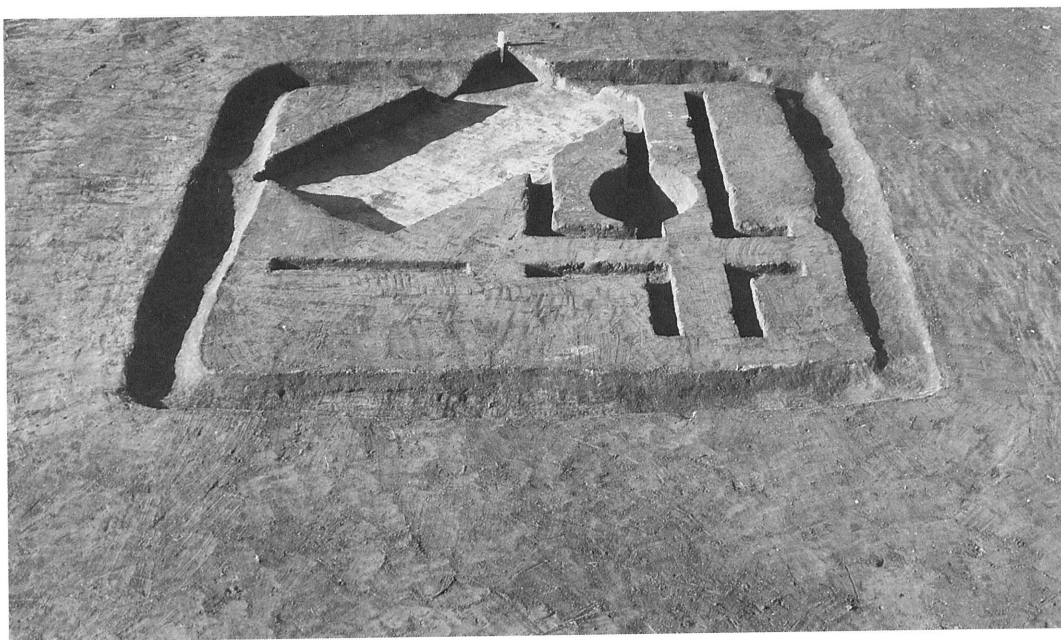
19号遺構全景(南側より) 46号遺構によって大部分は削平されている



20号遺構全景(南側より) 東側周溝は攪乱により削平されている。
またトレンチ底面はソフトローム上面である



21号遺構全景(南側より)



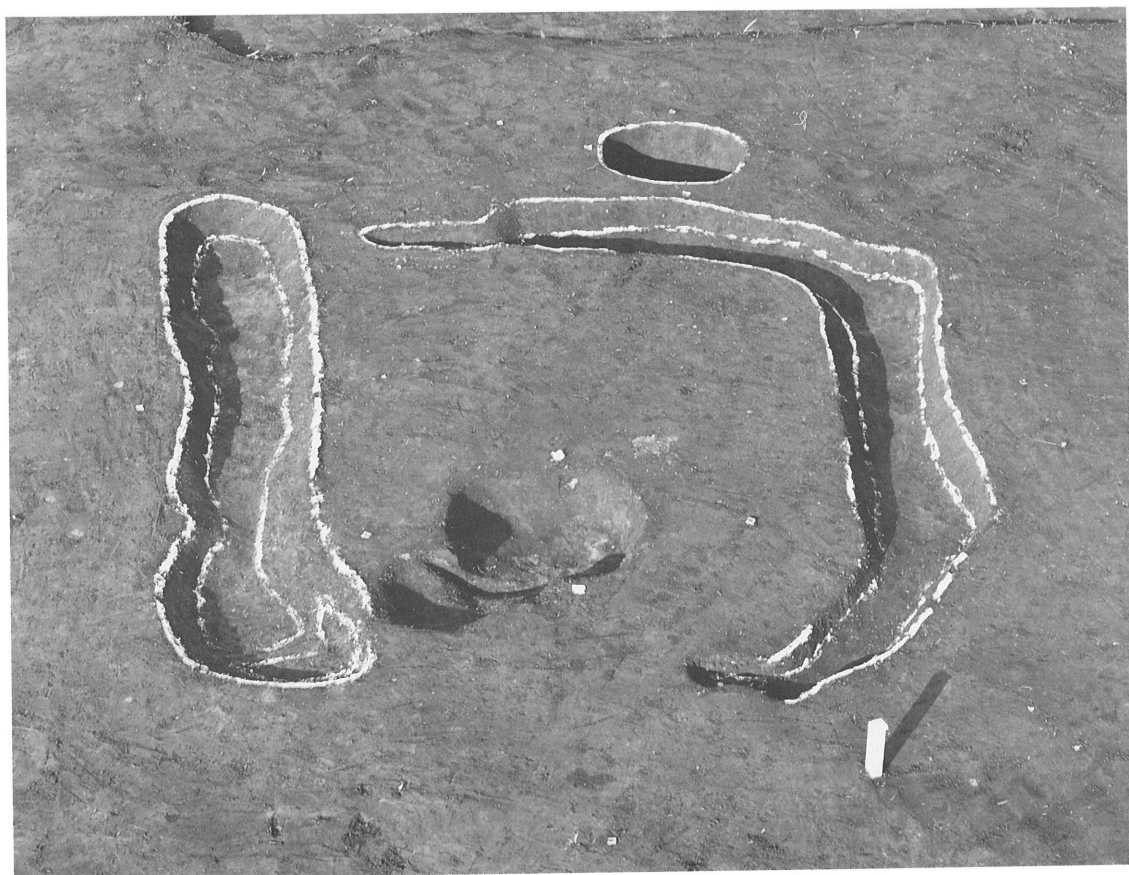
22号遺構全景(東側より)



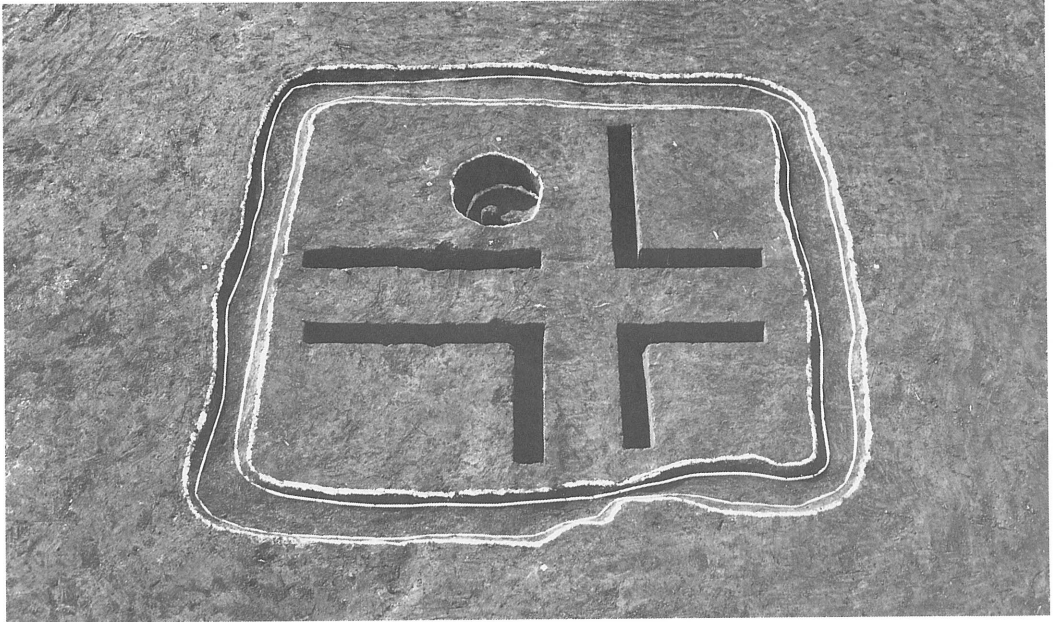
22号方台部内検出小土壠全景
ソフトローム層中まで掘り込まれている



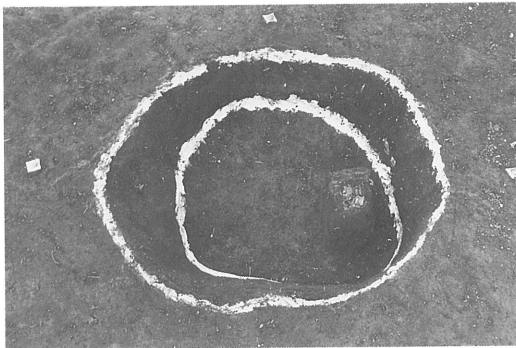
23号遺構全景(南側より) 中央部付近を46号遺構が走っている



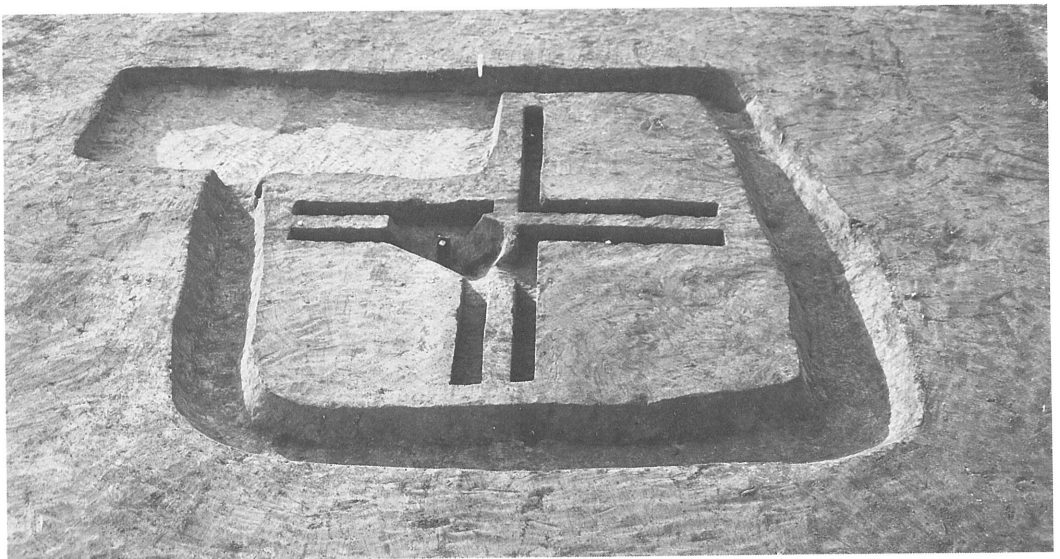
24号遺構全景(南側より) 方台部内に小土壇が検出されている



25号遺構全景(東側より)



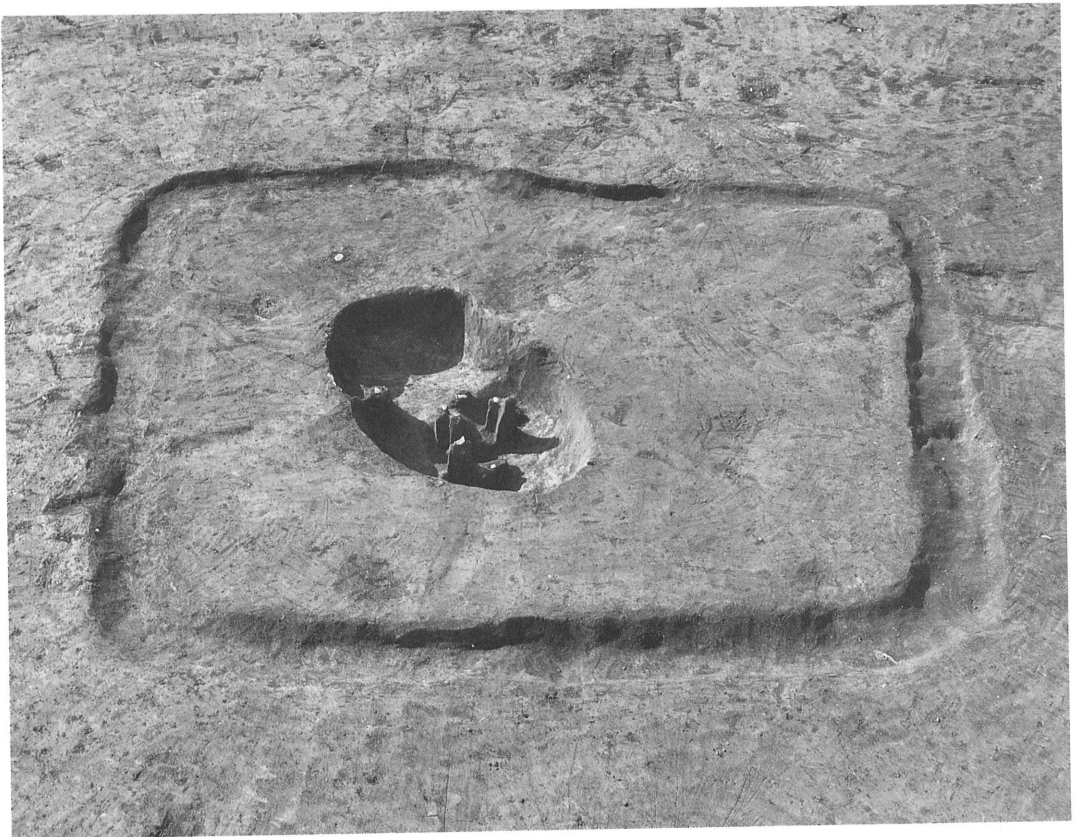
25号遺構方台部内小土壇全景
若干の炭化物が検出されている



26号遺構全景(東側より)



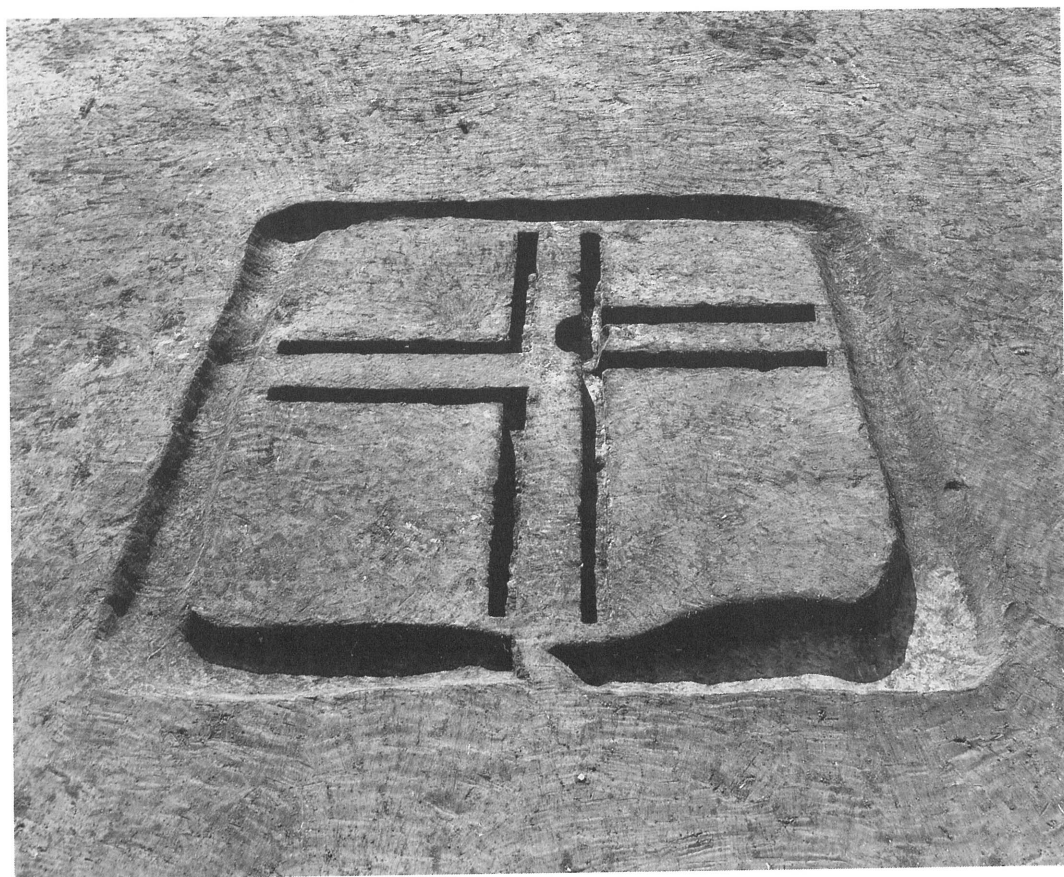
26号遺構方台部内小土壇全景 ロームブロックを主体とする層が検出されているが、遺物は自然礫2点のみの検出である



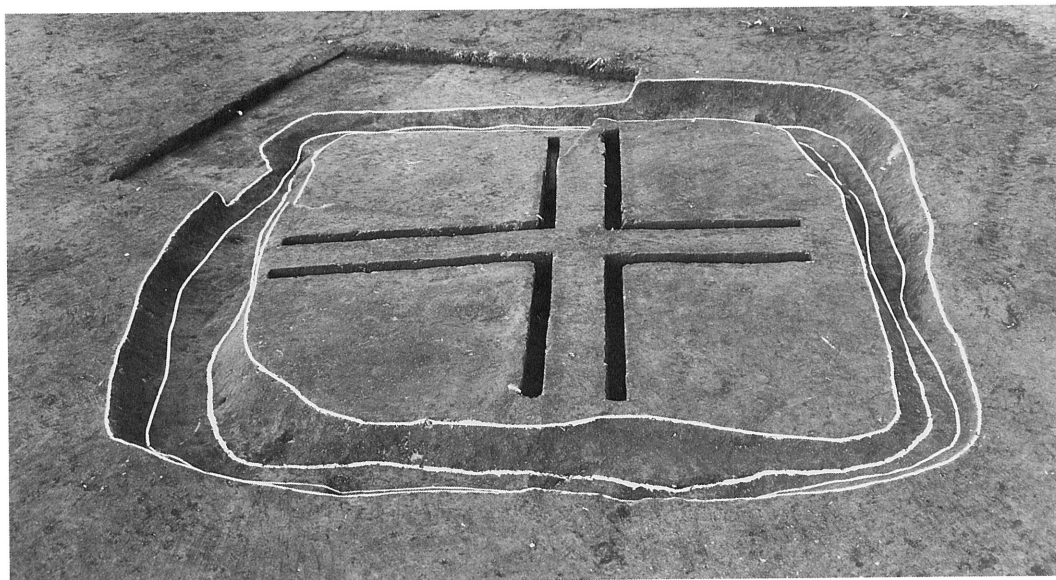
27号遺構全景(西側より) 方台部内中央に、土壇が検出されている



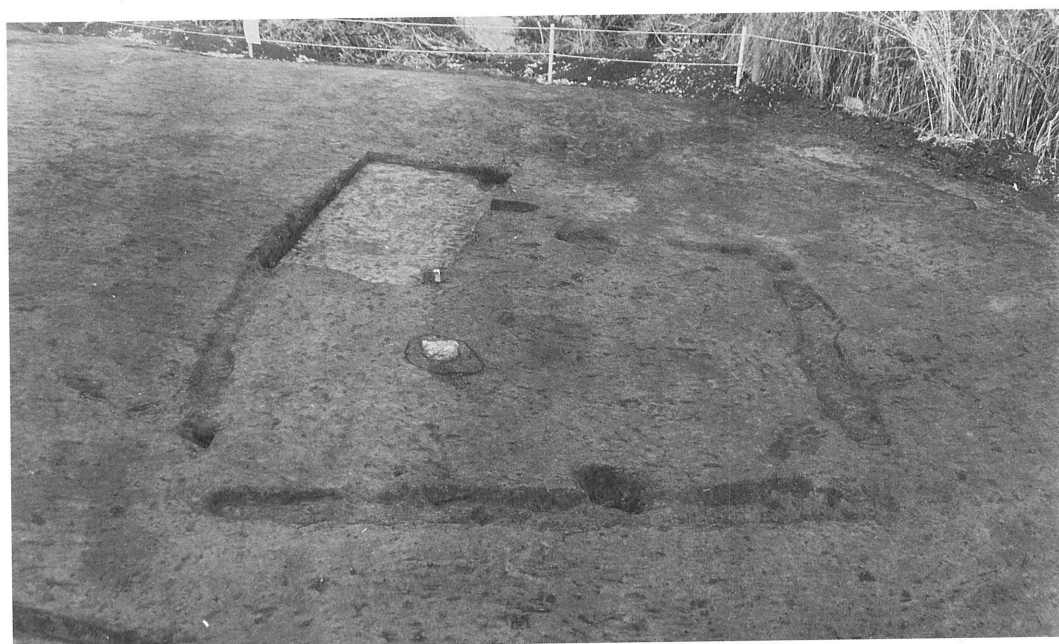
27号遺構主体部全景 須恵器が検出されている



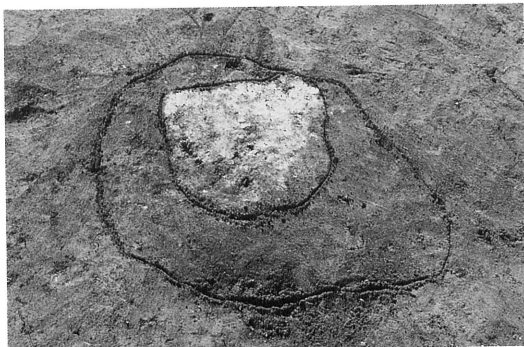
28号遺構全景(北側より) 北側周溝中央部は、ブリッジ状に掘り残される。
また、方台部内に炭化物を含んだ小土壌が検出されている



29号遺構全景(南側より) 方台部内中央部より須恵器破片が検出されている



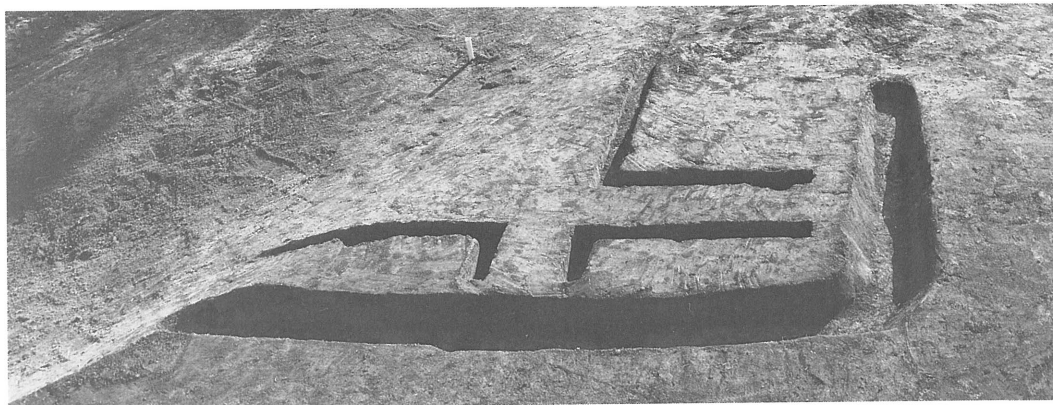
30号遺構全景(北側より) 方台部内に粘土を伴う小土壙が検出されている



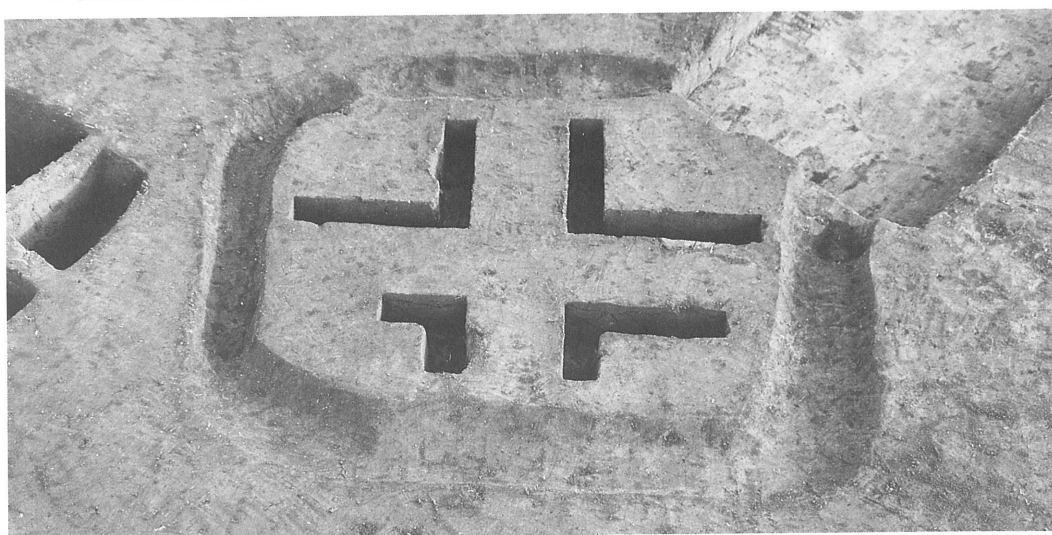
同小土壙検出状況



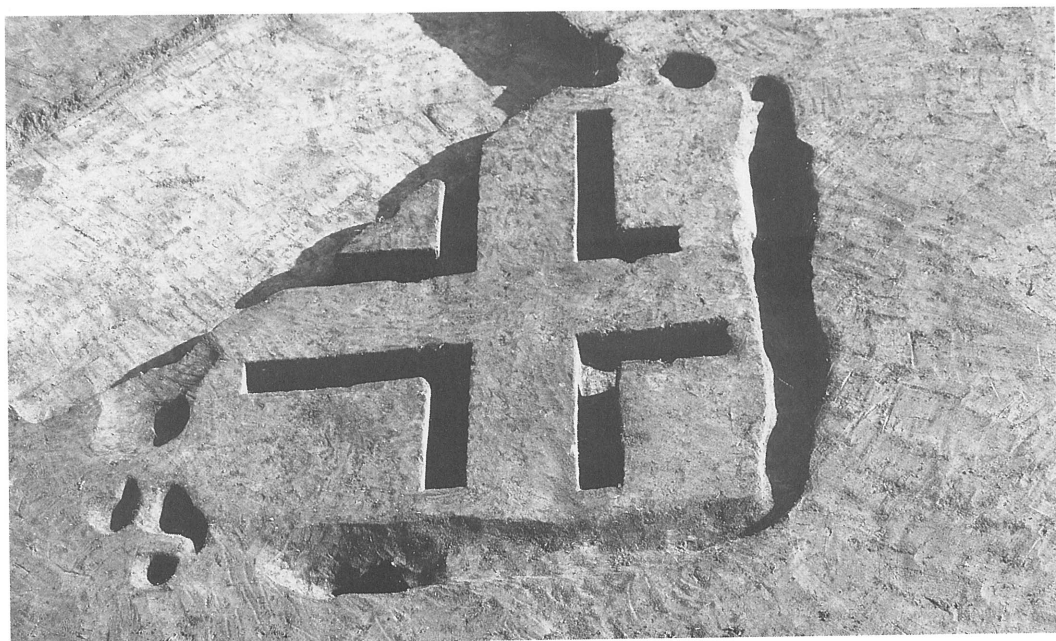
同完掘状況



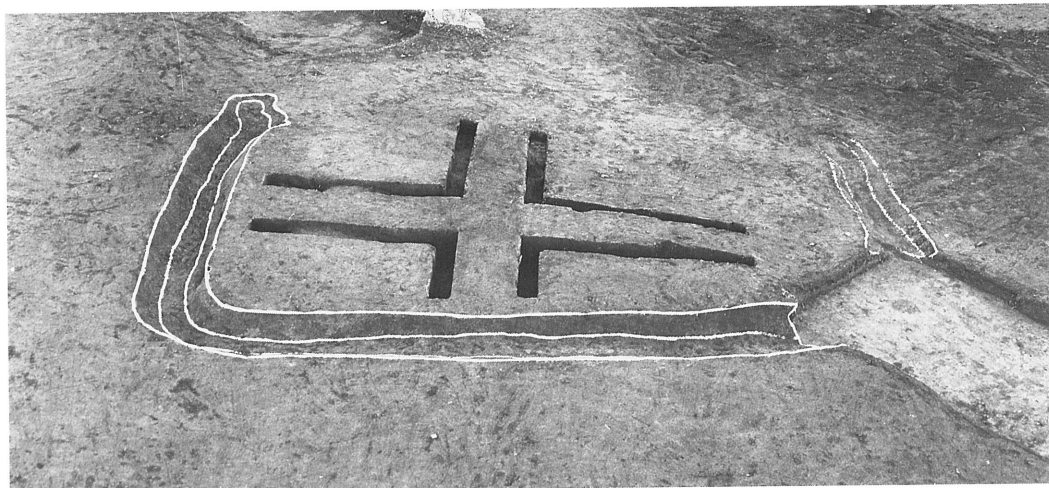
31号遺構全景(北側より)



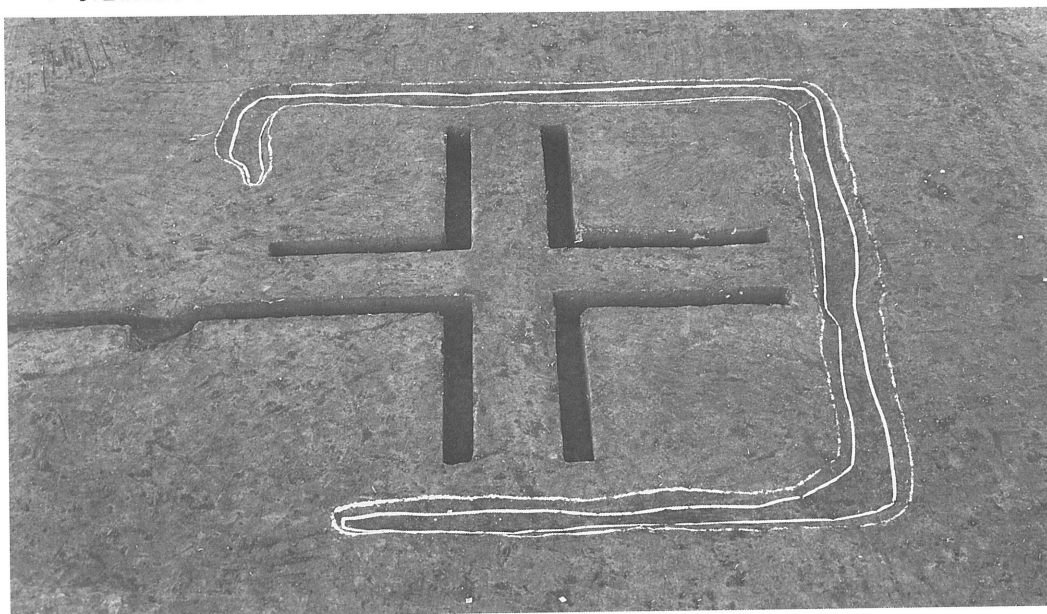
32号遺構全景(北側より)



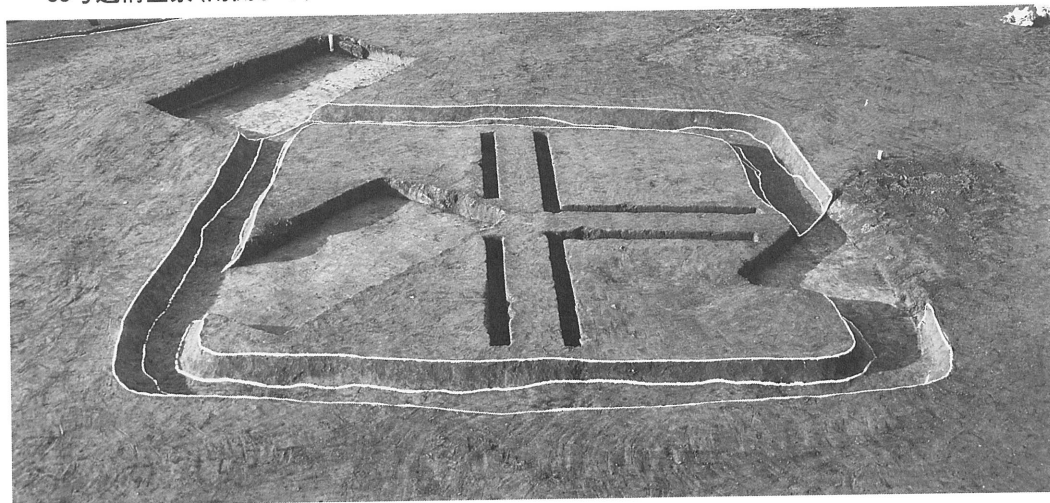
33号遺構全景(北側より)



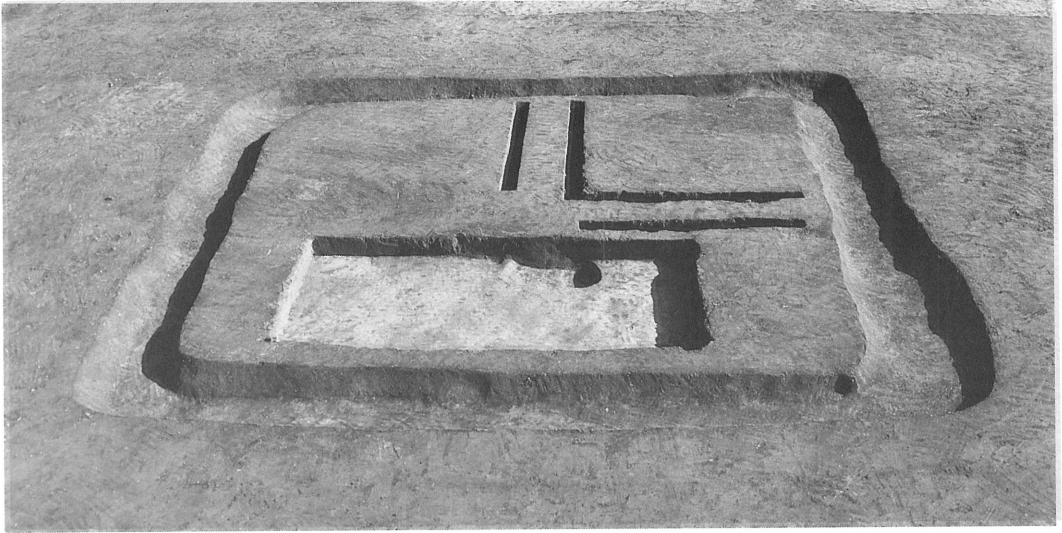
34号遺構全景(北側より)



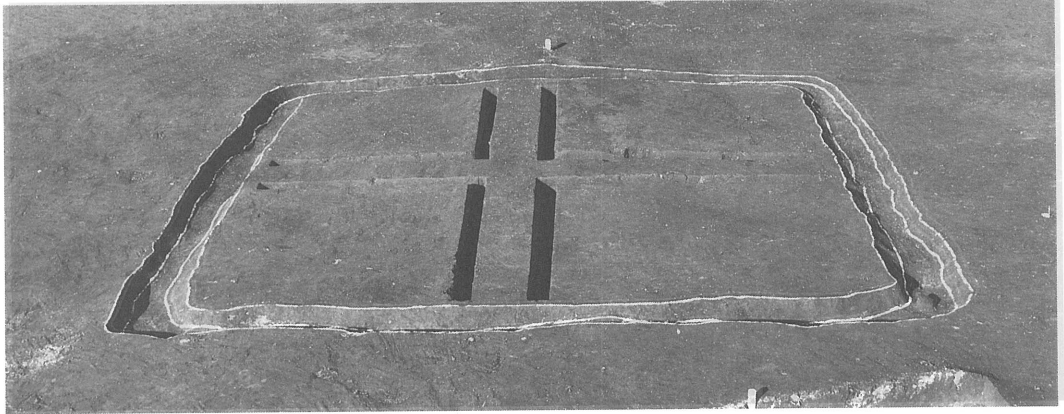
35号遺構全景(南側より)



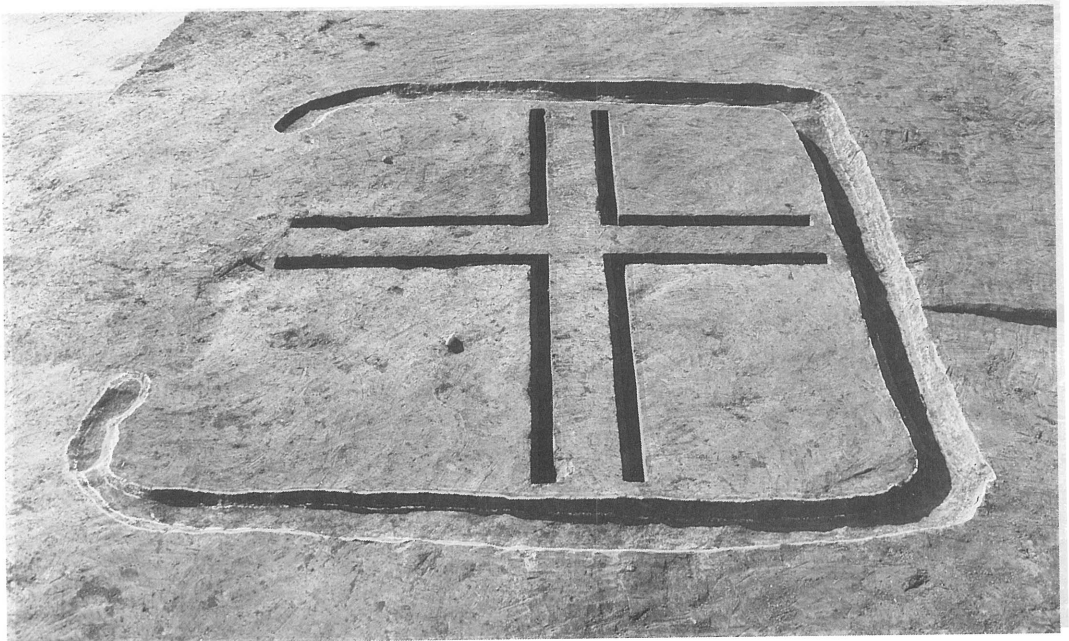
36号遺構全景(南側より)



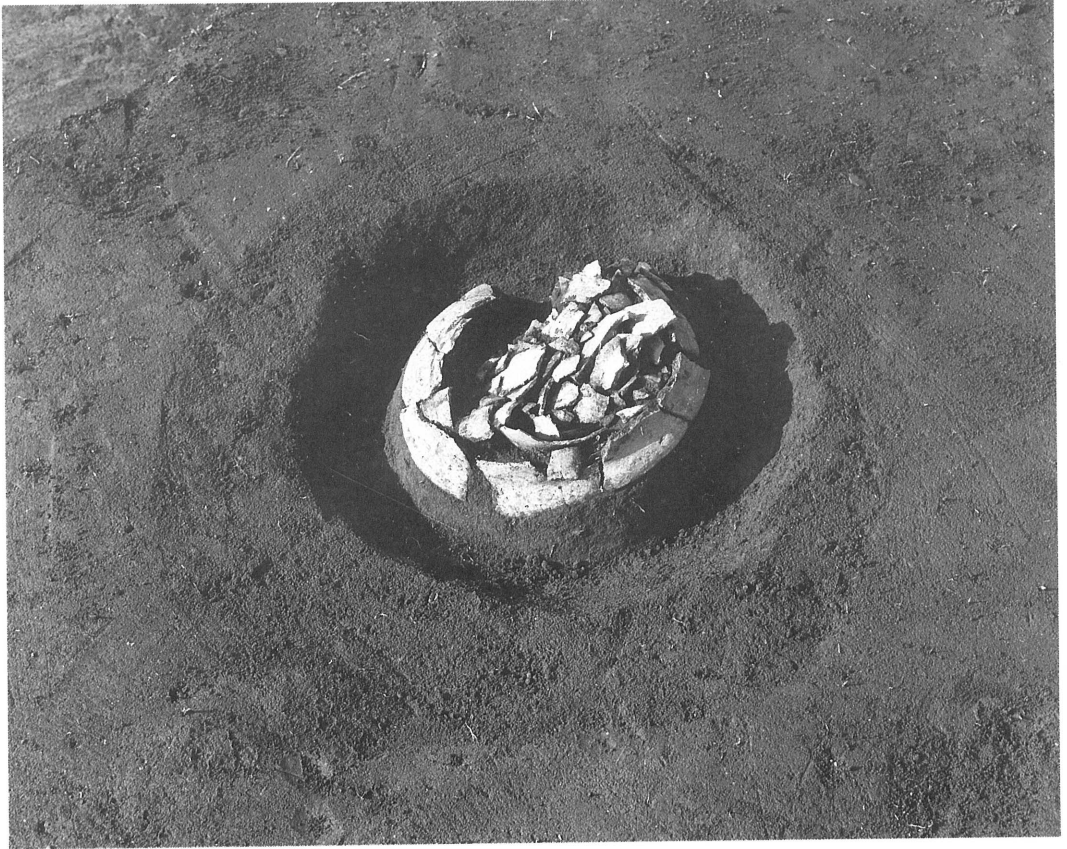
37号遺構全景(西側より) 確認調査時より検出された小土壌はII a層中より掘り込まれていた



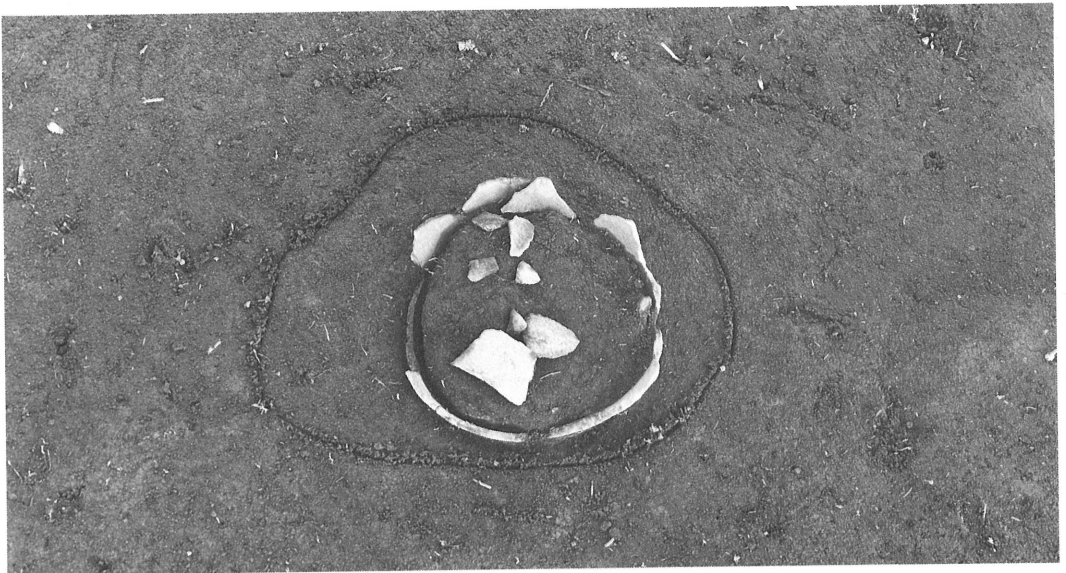
38号遺構全景(南側より)



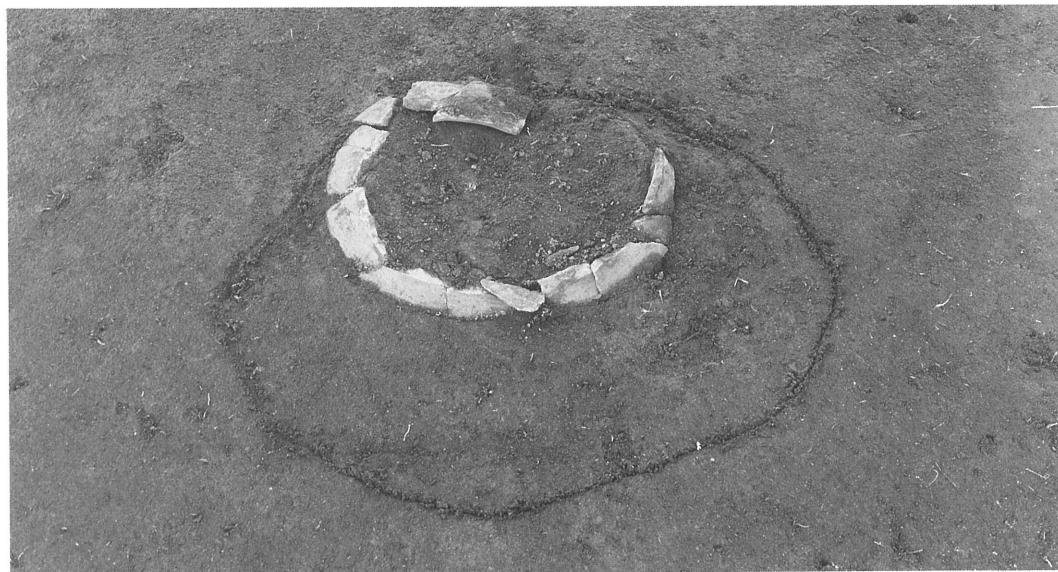
39号遺構全景(東側より)



40号遺構遺物検出状況



41号遺構遺物検出状況



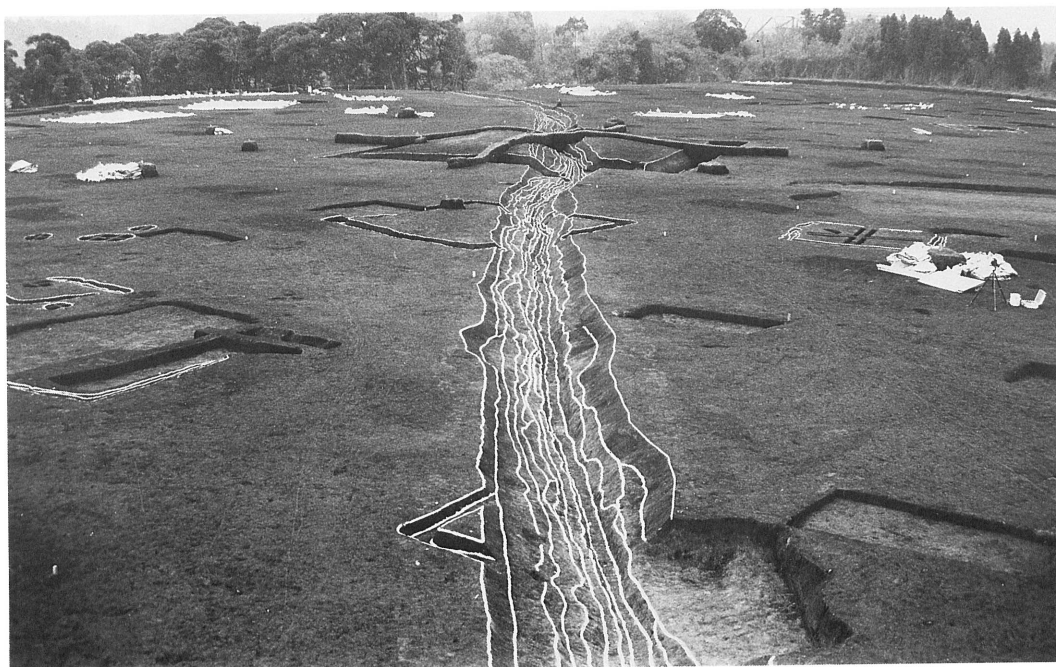
42号遺構遺物検出状況



44号遺構土層断面



45号遺構



46号遺構



47号遺構



No. 1 トレンチ土層断面



10-1



10-4



13-1



13-2



27-1



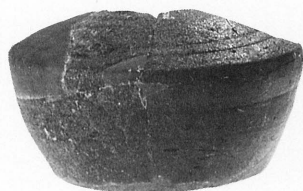
40-2



41-2



41-1



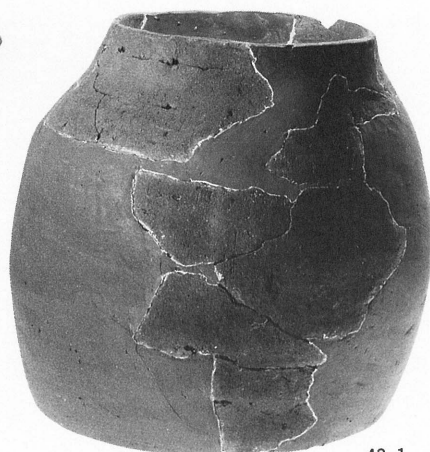
29-2



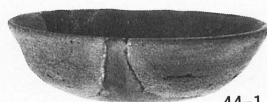
40-3



40-1



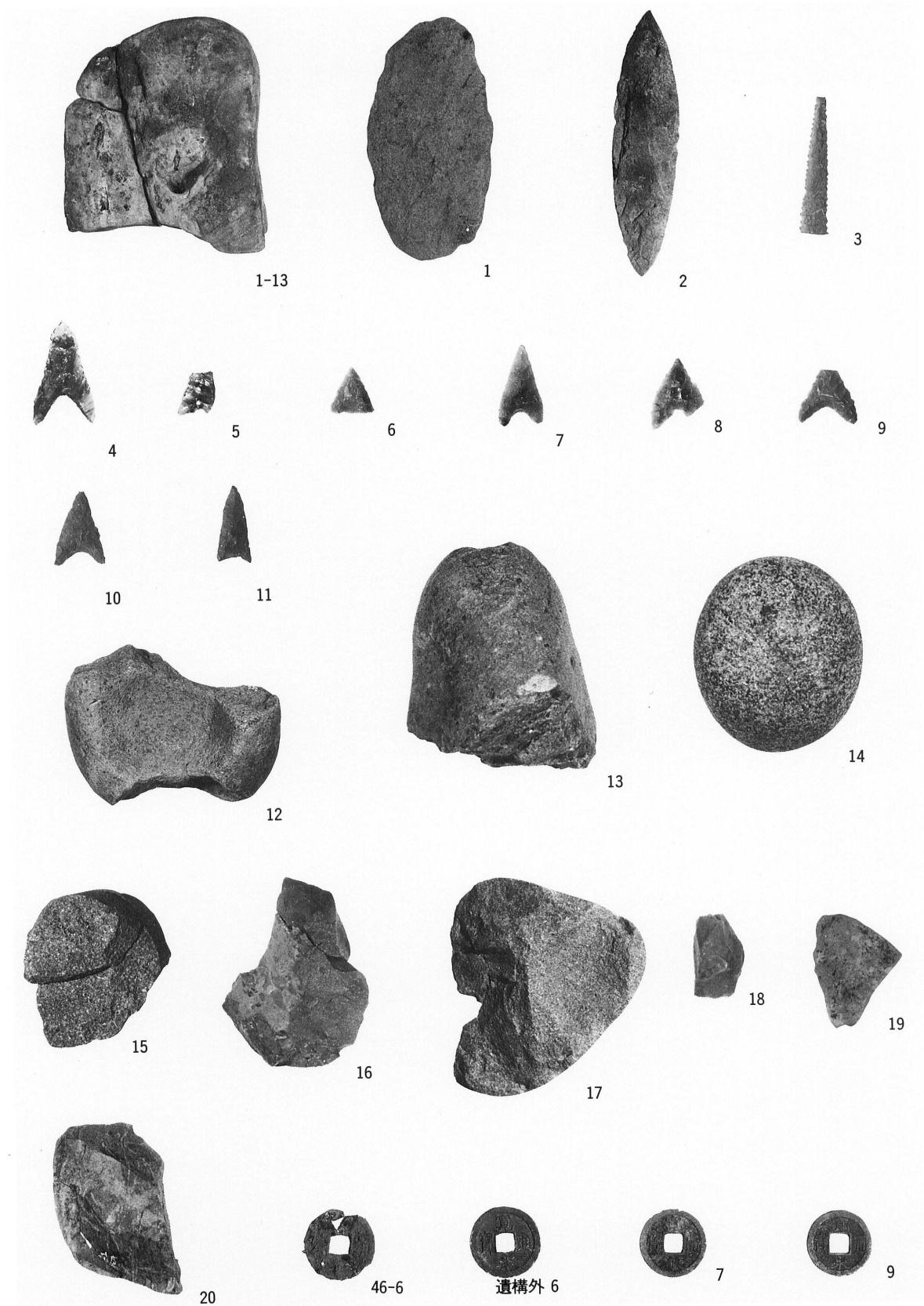
43-1



44-1



47-2





唐沢遺跡近景（調査前）



22トレンチ9号遺構検出状況



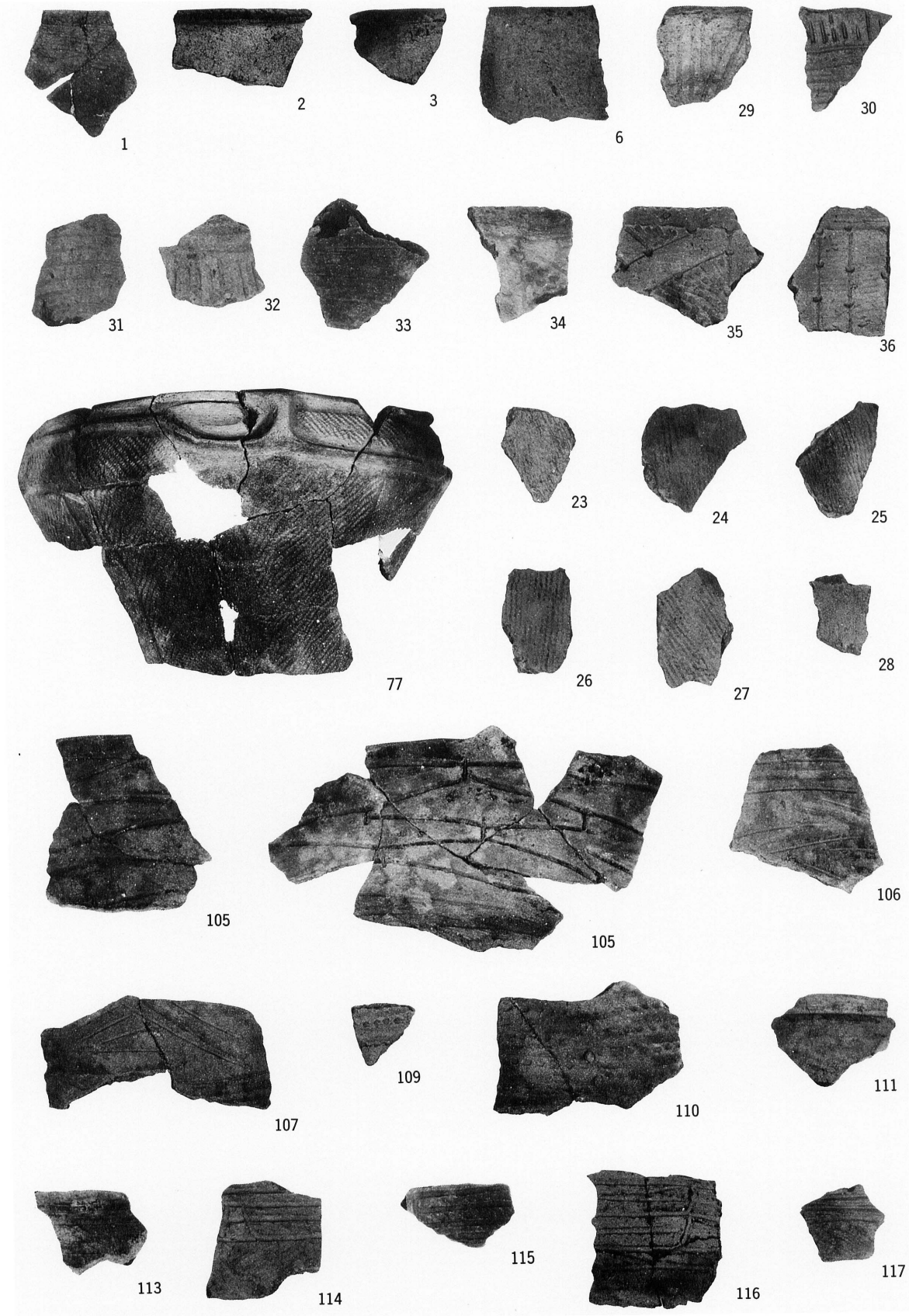
24トレンチ10号遺構検出状況



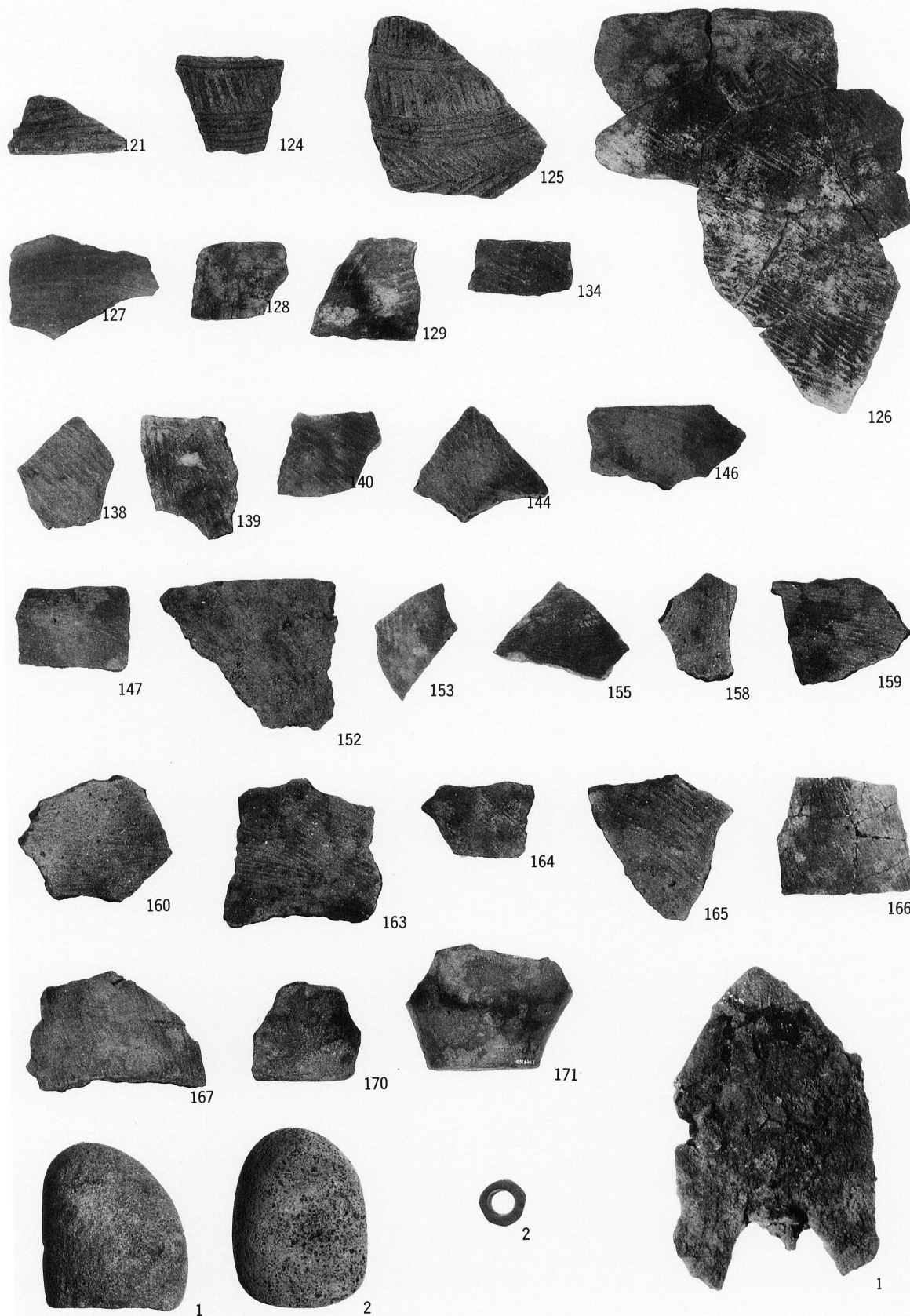
151トレンチ101号遺構検出状況



166トレンチ109号遺構検出状況



出土遺物 1

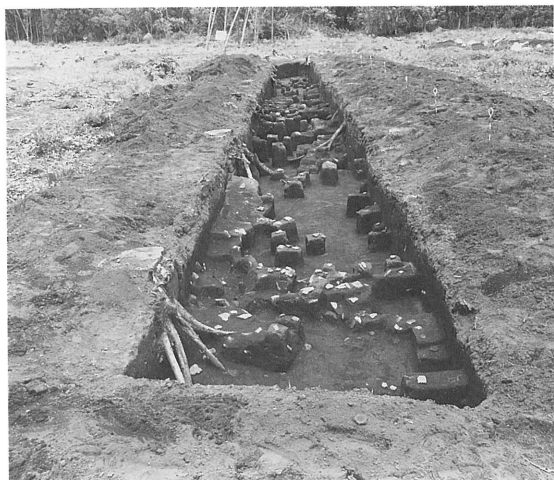




A地点近景（西から）



B地点近景（南から）



2トレンチ遺物出土状況



2トレンチ42号遺構覆土内11号貝ブロック
検出状況



4トレンチ北側遺物出土状況



5トレンチ北側遺物出土状況



6トレンチ南側22号遺構検出状況



18トレンチ遺物出土状況



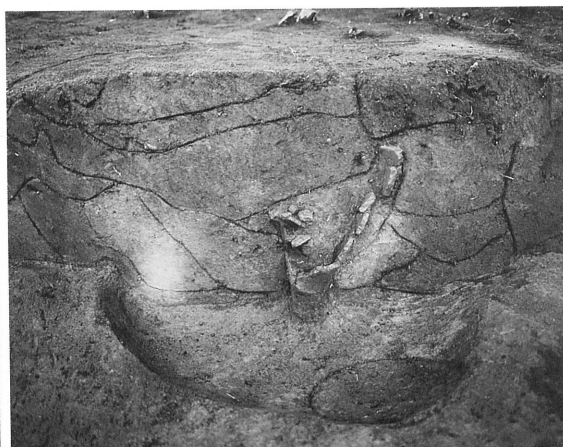
27トレンチ16号遺構検出状況



29トレンチ19号遺構遺物出土状況



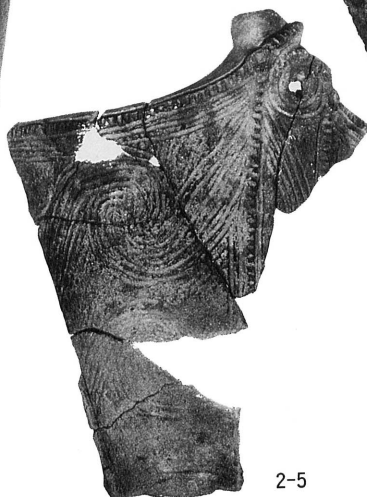
53トレンチ 6 号遺構遺物出土状況



66トレンチ53号遺構炉内遺物出土状況



2-2



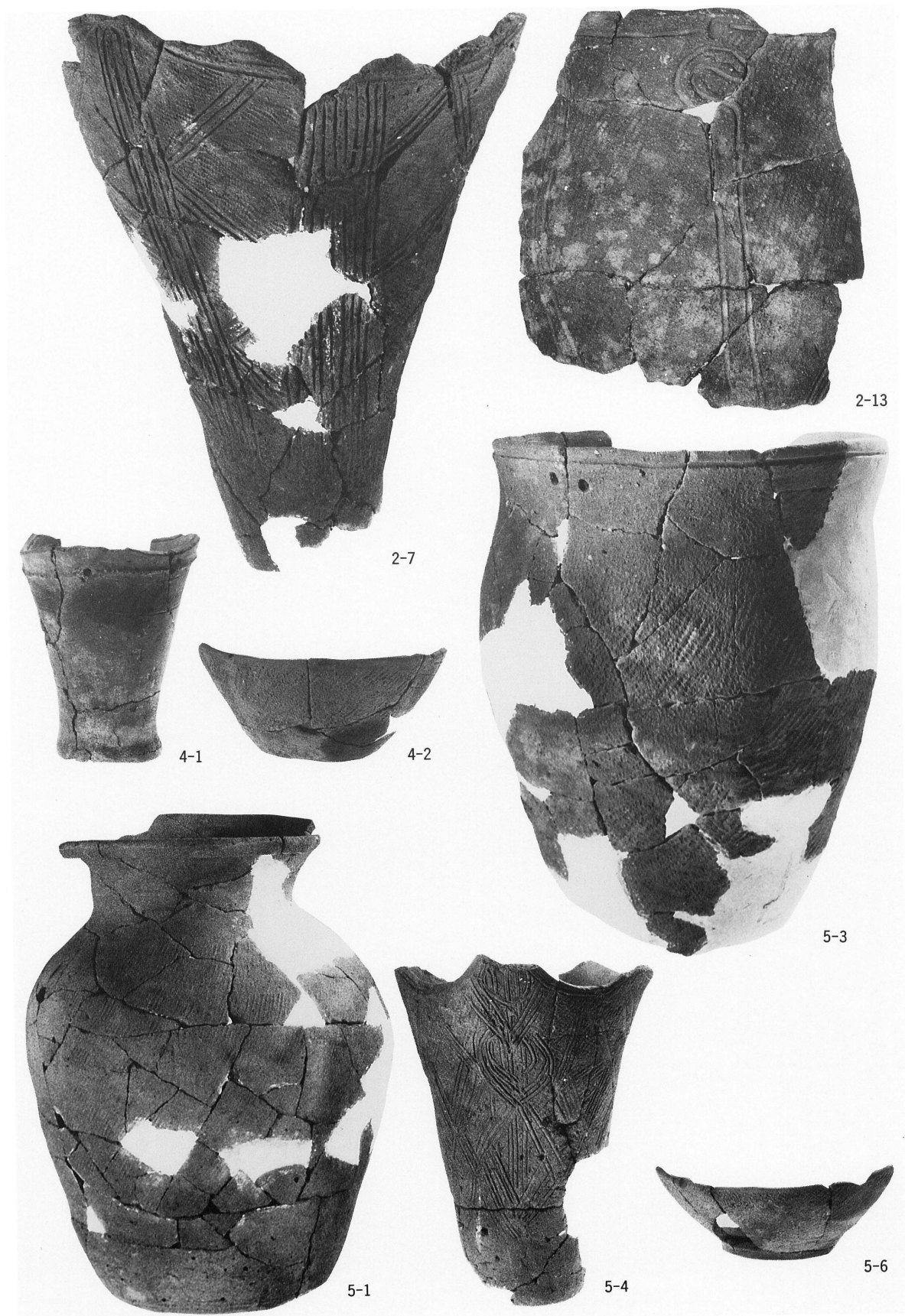
2-5

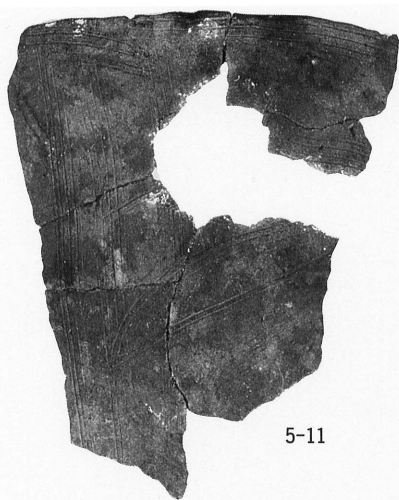


2-4



2-6

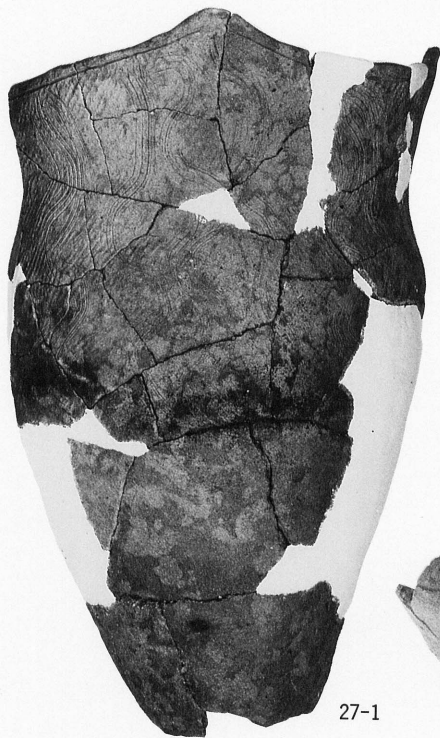




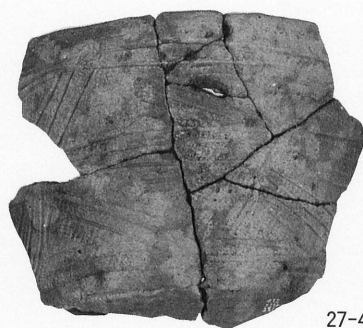
5-11



27-3



27-1



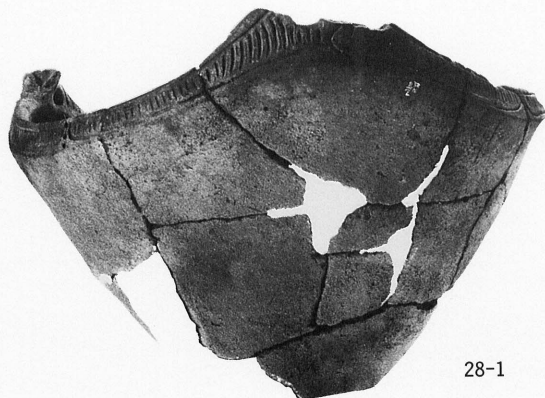
27-4



27-2



27-6



28-1



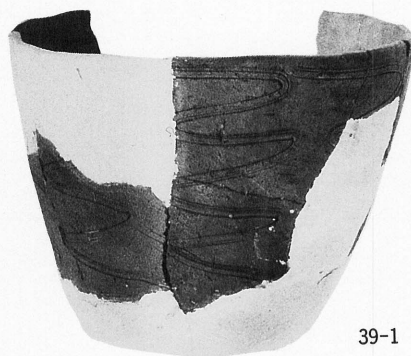
28-2



29-4



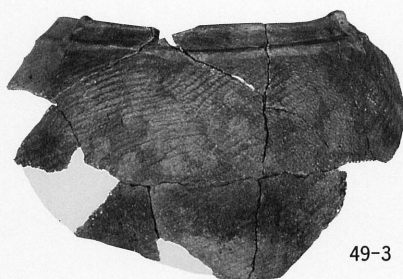
49-1



39-1



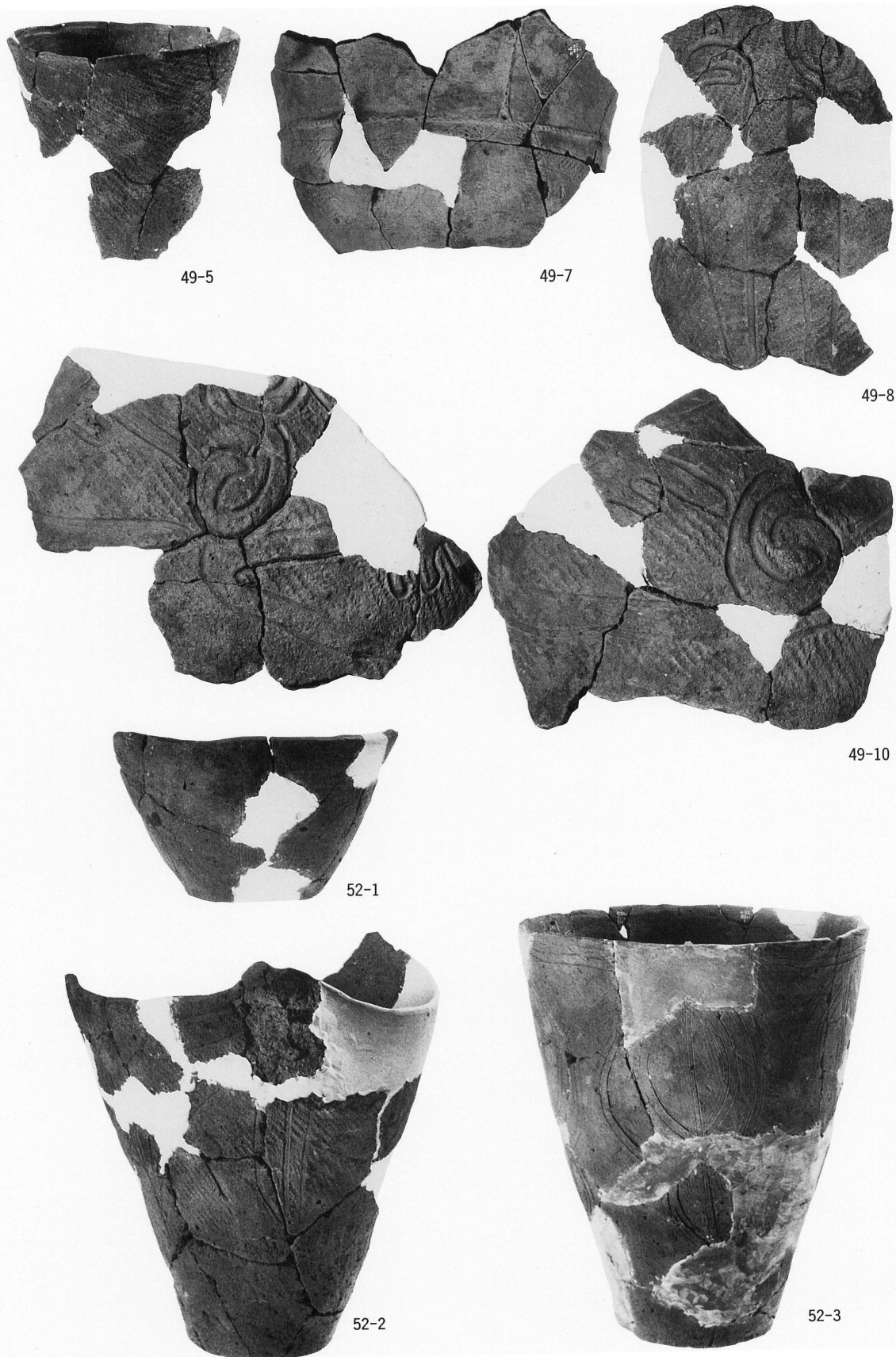
49-2

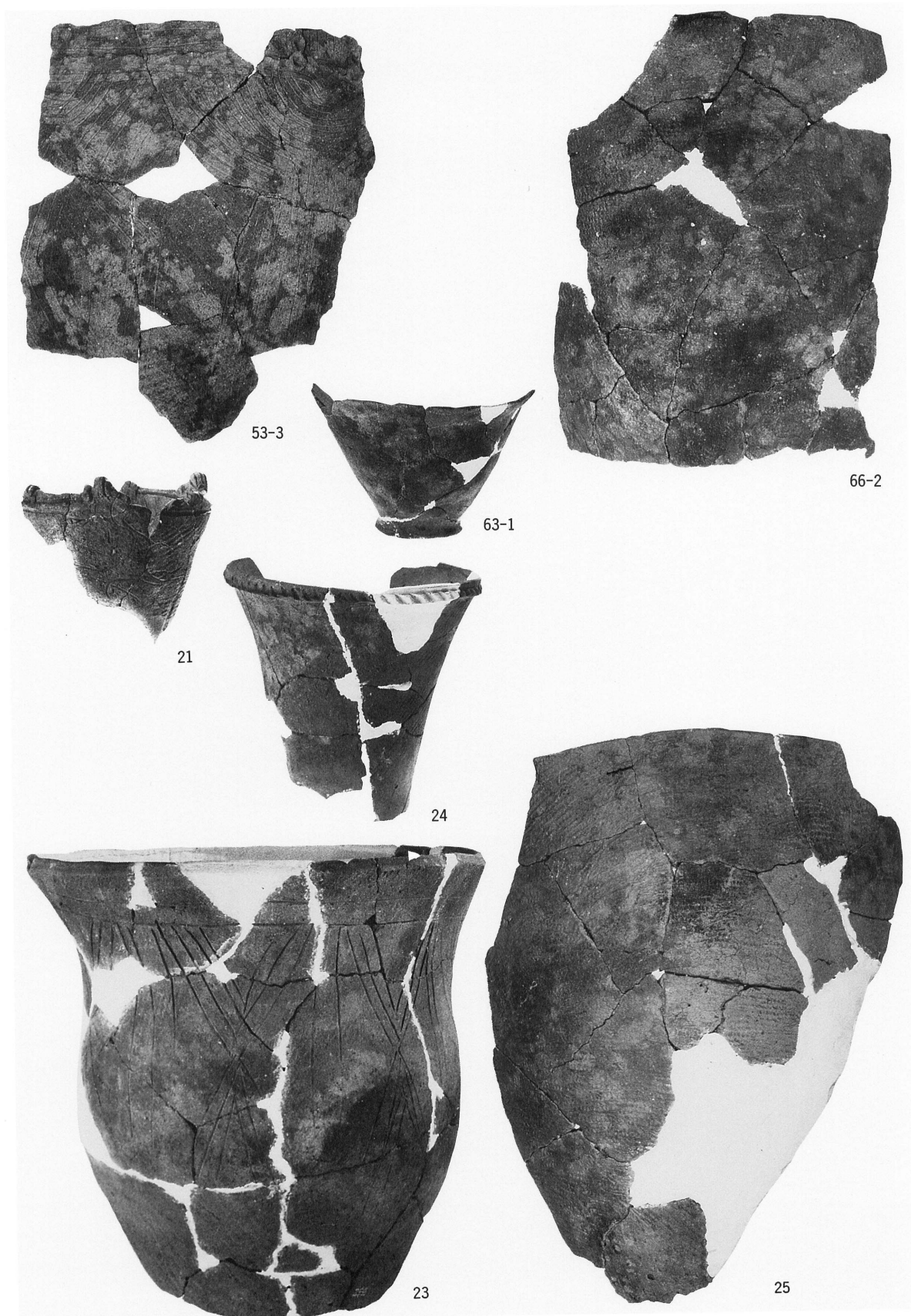


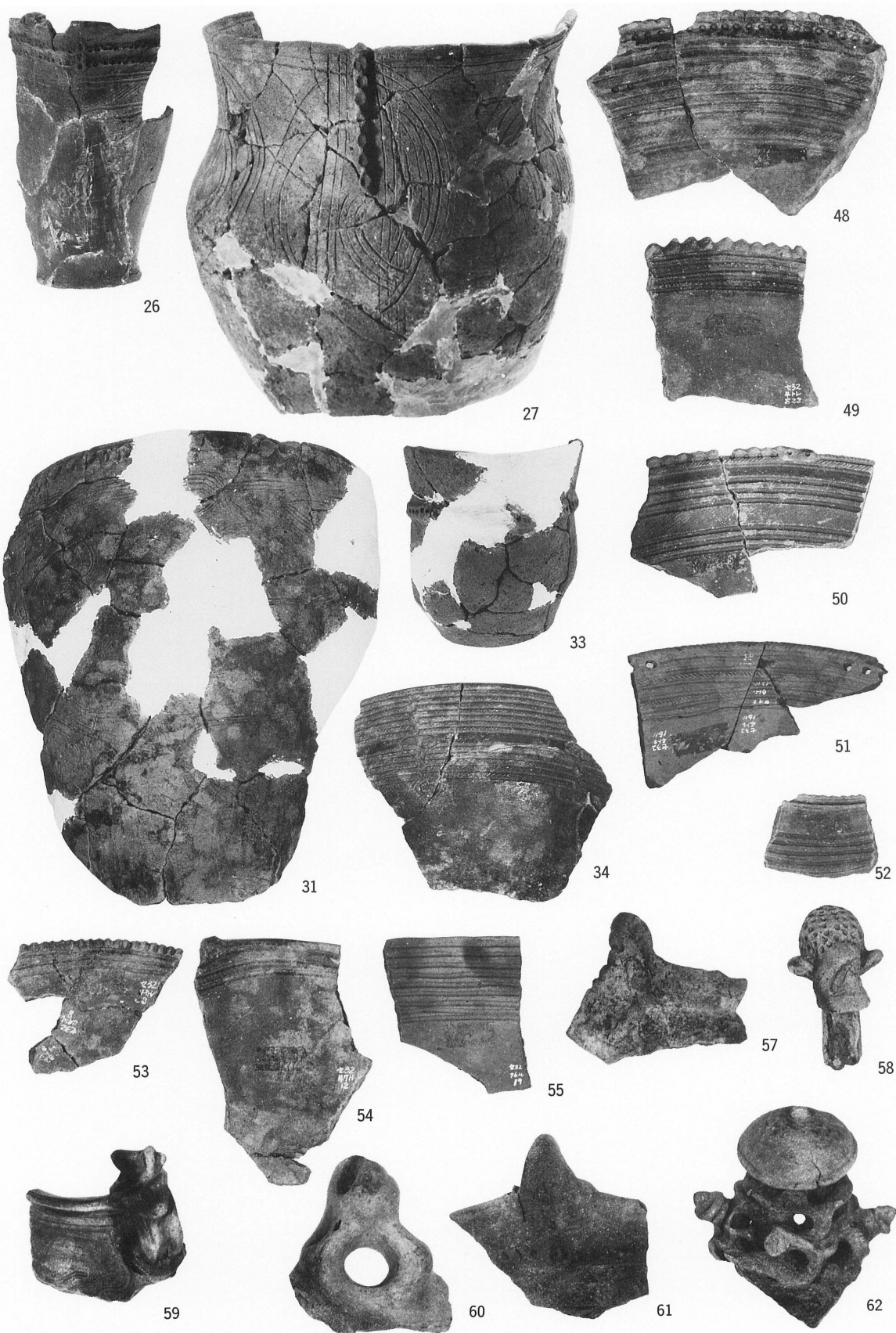
49-3

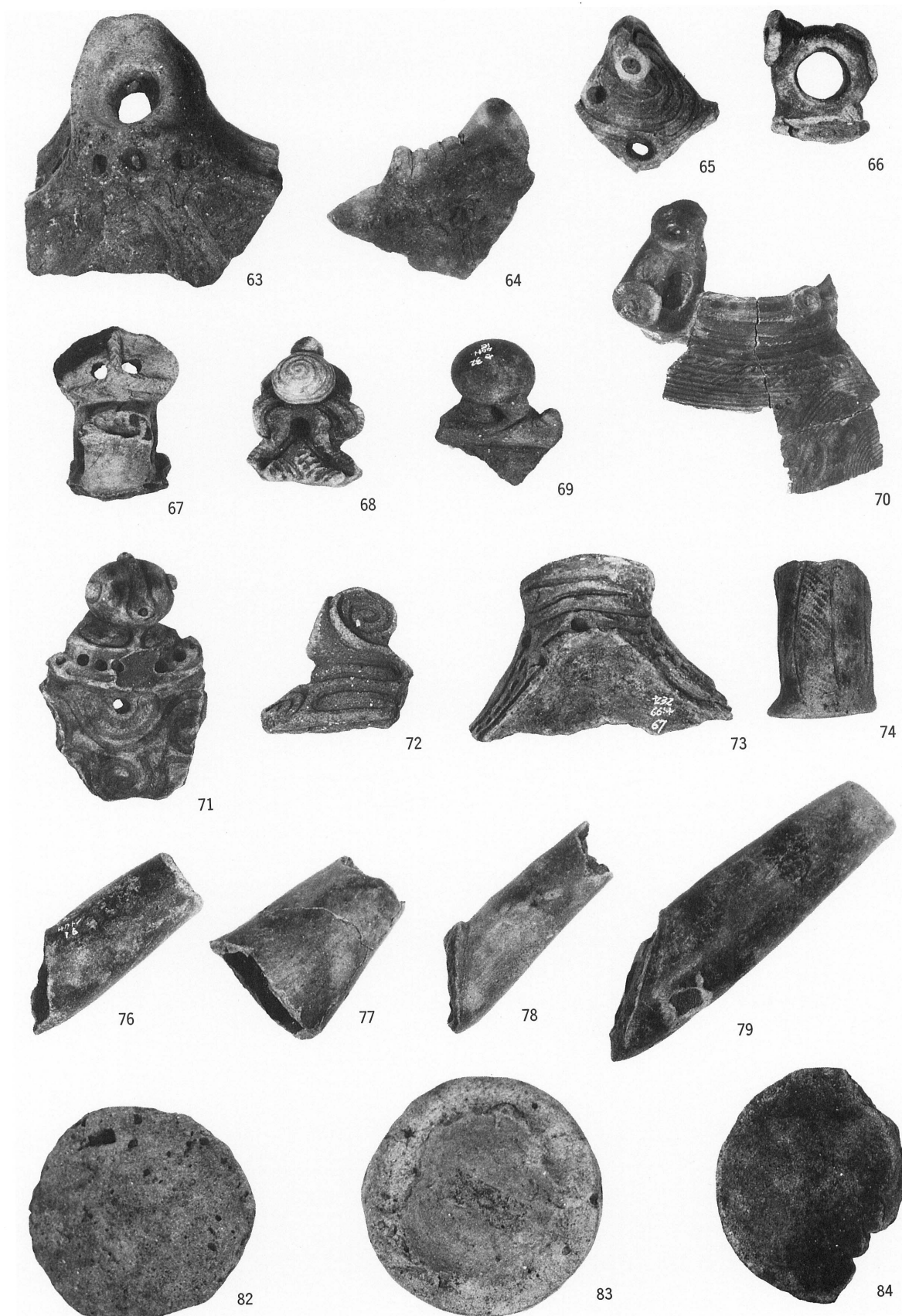


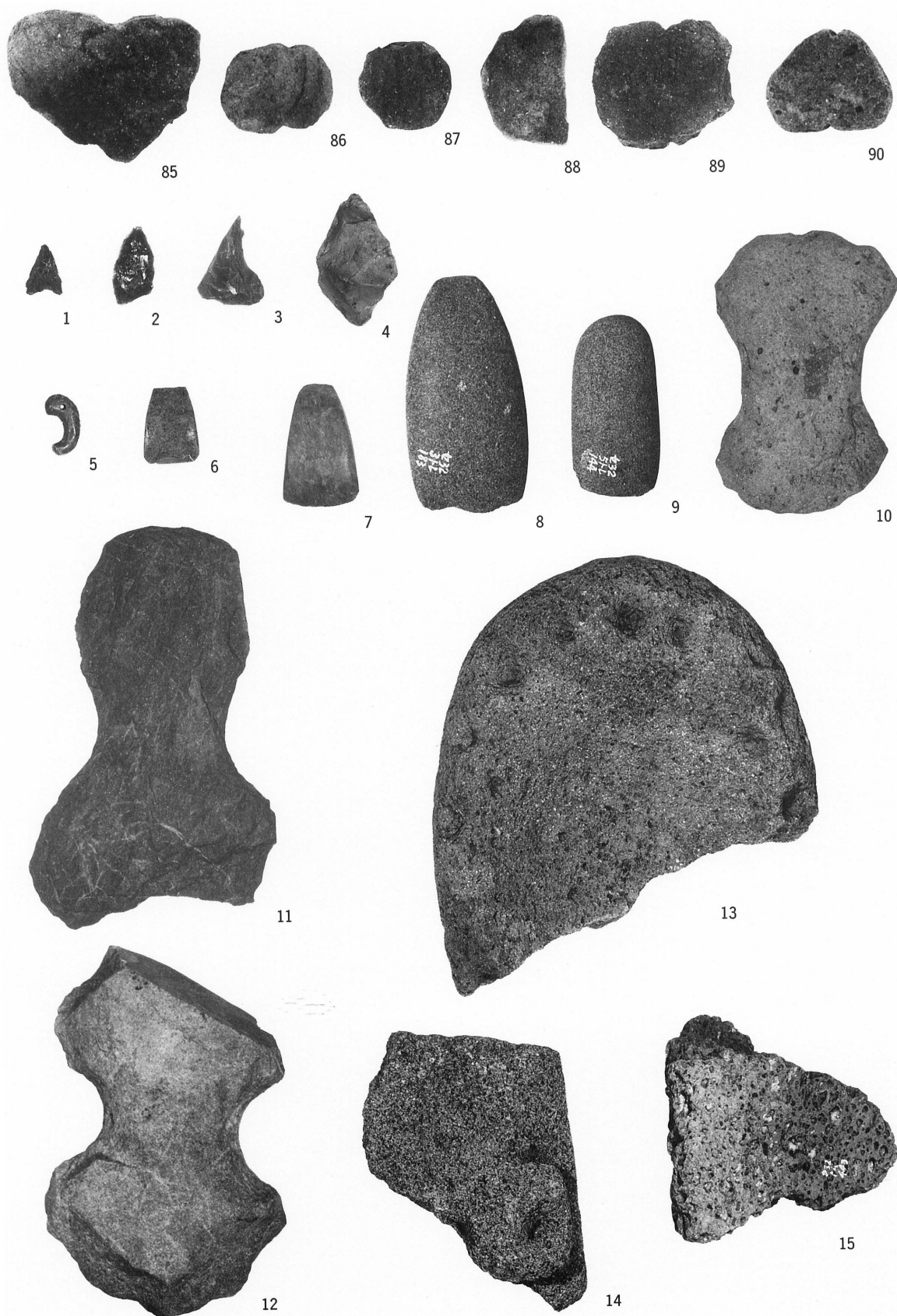
49-4

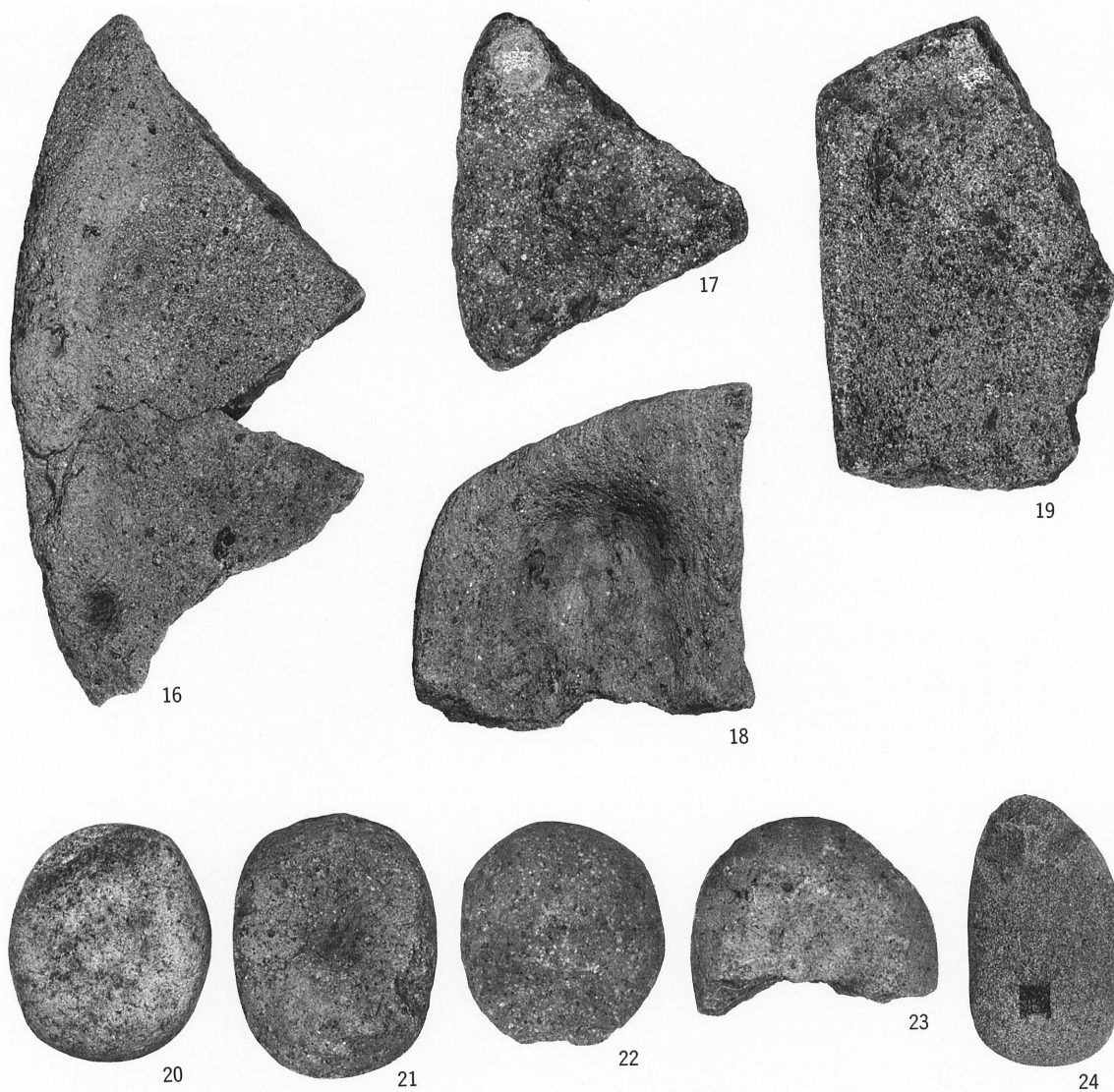




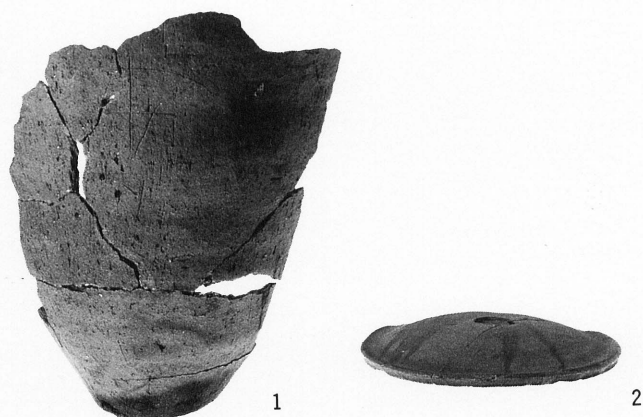








山見塚遺跡B地点



財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第20集

外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 平和農産工業株式会社

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市馬立817番地

TEL 0436(95)2755

印刷 株式会社 弘文社

千葉県市川市市川南2-7-2

TEL 0473(24)5977